鳥取県教育文化財団調査報告書　80

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県東伯郡東伯町

井図地頭遺跡
井図地中ソネ遺跡

2003

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書80
一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
『井図地頭遺跡　井図地中ソネ遺跡』

正　誤　表

お手数ですが、以下のとおり訂正の上、ご活用ください。

頁　　行	誤	正
挿図目次	第207図…171	第207図…172
	第214図…180	第214図…181
	第215図…180	第215図…181
挿表目次	第105表…180	第105表…181
p66　1行	PL33・57・58・79	PL33・57・58・60・79
p83　1行	PL36・37・64・65・79	PL36・37・64・65
PL.39	1.SI11遺物出土状況	2.SI11遺物出土状況
PL.66	109	110

誤　P86 第44表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL
S8	SI9 床面上	第114図 PL.79

正

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL
S8	SI9 床面上	第114図

誤　P108 第61表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL
S11	SX8 直上	第143図 PL.79

正

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL
S11	SX8 直上	第143図

誤　P91 第46表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL
109	SI11 床面上	第118図 PL.66
110	SI11 埋土中	第118図

正

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL
109	SI11 床面上	第118図
110	SI11 埋土中	第118図 PL.66

鳥取県教育文化財団調査報告書　80

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

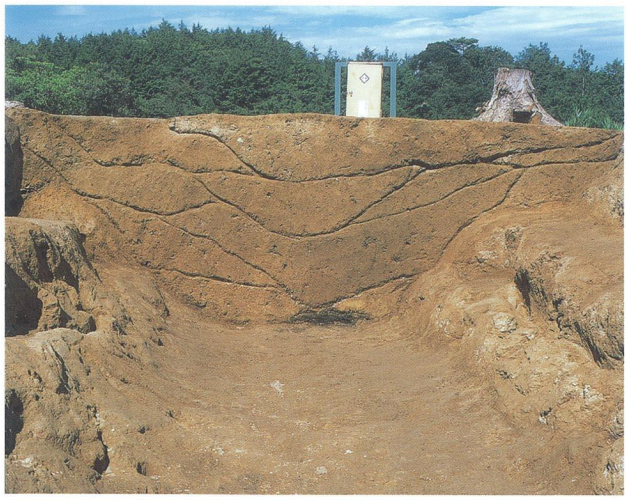
鳥取県東伯郡東伯町

井図地頭遺跡
井図地中ソネ遺跡

2003

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉工事事務所

１．方形区画（北西から）



２．方形区画（SD8）土層断面（東から）

３．方形区画（SD10）土層断面（南から）

巻頭図版２　井図地中ソネ遺跡

１．土壙墓群完掘状況（南から）

２．SK1出土炭化米

１．SI9炭化材等検出状況（南から）

２．竪穴建物跡出土土器

巻頭図版４　井図地中ソネ遺跡

土壙墓群上面出土供献土器

序

東伯町は、北に日本海を望み南に秀峰大山を仰ぐ、風光明媚な自然に恵まれた町であるとともに、鳥取県中部では倉吉市に次ぎ農・商工業の盛んな町であります。また、山陰では唯一の国の特別史跡である斎尾廃寺など、古くからの歴史遺産に恵まれた町でもあります。

さて、県内においては、現在山陰自動車道の整備が着々と進められているところですが、当財団では、国土交通省の委託を受け、この事業に関係した、一般国道９号（東伯中山道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

そのうち、井図地頭遺跡では古代末から中世の大規模な建物に伴う堀と考えられるもの、井図地中ソネ遺跡では弥生時代から古墳時代の集落や墳墓など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認し、今回、調査成果を報告書としてまとめることができました。

本書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解や認識がより深まることを期待します。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉工事事務所、東伯町教育委員会ならびに調査に参加していただきました地元の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人鳥取県教育文化財団
理事長　有田博充

序　文

一般国道9号は、京都市を起点として京都府福知山市を経由し兵庫県から鳥取県に入り、日本海に沿って西走し、島根県益田市から中国山地を越えて山口市、下関市に至る総延長約691kmの幹線道路であり、西日本の日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉工事事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

こうしたなか東伯中山道路は、東伯郡東伯町から西伯郡中山町にかけての国道9号の渋滞等混雑の緩和、冬季の交通障害等の解消、県内の安全かつ円滑な東西交通ルートの確保、また災害時の緊急輸送の代替道路確保を目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成14年度は、「井図地頭遺跡」、「井図地中ソネ遺跡」、「笠見第3遺跡」の3遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書は、上記の「井図地頭遺跡」、「井図地中ソネ遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いに存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成15年3月

国土交通省　倉吉工事事務所
所　長　矢田光夫

例　言

1．本書は、平成14年度に行った国土交通省一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業による、井図地頭遺跡、井図地中ソネ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は以下のとおりである。

井図地頭遺跡：東伯郡東伯町大字田越字井図地頭103－189・190・191、大字三保字下滝峯平ル673・674・678・679

井図地中ソネ遺跡：東伯郡東伯町大字田越字井図地中ゾネ80・81・86・88・89・90、字五輪谷91・93・94－１・２

3．本報告書で示す標高は、３級基準点H10－３－10、H10－３－11を基点とする標高地を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、座標北に対し磁北は6°27′25″西偏、真北は0°22′35″東偏する。X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。

4．本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「伯耆浦安」、東伯町地形図1/5,000「新農業構造改善事業（東伯地区）№1」を使用した。

5．本報告にあたり、出土石製品の石材鑑定を赤木三郎氏に、井図地中ソネ遺跡の現地指導を浅川滋男氏に依頼した。また、井図地頭遺跡出土黒曜石の産地同定を白石　純氏に、井図地中ソネ遺跡出土炭化米の分析を和佐野喜久生氏に、同遺跡出土炭化材の樹種同定を古川郁夫氏に依頼し、玉稿を賜った。

6．本報告書の執筆は、調査員君嶋俊行、大野哲二、岩井美枝、坂本嘉和、小谷郁夫が分担し、目次と各文末に文責を記した。編集は君嶋・大野が行った。

7．本報告書に使用した遺構・遺物写真は、航空写真を除いて調査員が撮影した。

8．本報告にあたり、井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡の調査前・調査後航空写真撮影、調査前地形測量、井図地中ソネ遺跡の調査後地形測量、及び自然科学分析の一部を業者に委託した。

9．出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10．現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に御指導、御協力いただいた。記して謝意を表する次第である。

赤澤徳明、上田　睦、大賀靖浩、小都　隆、澤田秀実、中四国中世城館検討会、錦織　勤、根鈴輝雄、森岡秀人、山上雅弘、山崎真治　（五十音順、敬称略）

凡　例

1．本報告書で用いた遺構・遺物の略号は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴建物跡、ＳＫ：土坑・土壙、ＳＤ：溝状遺構、Ｐ：柱穴、ＳＸ：埋葬施設

F：鉄製品　S：石製品　C：銅製品　（記号のないものは土器・土製品・陶器）

2．遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーン及び記号は、特に説明がない限り以下のものを表す。

地山　焼土　炭混土　　貼床　硬化面　黒色土・黒褐色土　赤彩範囲

●、■、▲、✸・・・遺物出土ポイント（左から土器・土製品、石器・石製品、鉄製品、炭化種子）

3．遺物実測図において、須恵器は断面黒塗り、それ以外の土器・土製品は白抜きで表現した。

4．法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

5．本報告書における土器類の編年・年代観は基本的に以下の文献に拠る。

清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編、木耳社

牧本哲雄　1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

足立克己・丹羽野裕　1984「第６章　まとめ　（３）遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会

目　次

序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯 …… （君嶋） 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過と方法 …… 2
第３節　調査体制 …… 4

第２章　位置と環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… （小谷） 5
第２節　歴史的環境 …… （坂本） 6

第３章　井図地頭遺跡の調査 …… 9
第１節　遺跡の立地と層序 …… （君嶋） 9
第２節　第１遺構面の調査 …… （君嶋） 14
（１）概要 …… 14
（２）溝状遺構 …… 14
（３）土坑 …… 16
第３節　第２遺構面の調査 …… 19
（１）概要 …… （君嶋） 19
（２）方形区画 …… （君嶋） 19
（３）道状硬化面 …… （坂本） 20
（４）竪穴建物跡 …… （君嶋・坂本） 22
（５）溝状遺構 …… （君嶋・坂本） 28
（６）土坑 …… （君嶋・坂本） 33
（７）その他の遺構 …… （坂本） 41
（８）ピット群 …… （坂本） 42
第４節　遺構外出土の遺物 …… （君嶋・坂本） 44

第４章　井図地中ソネ遺跡の調査 …… 55
第１節　遺跡の立地と層序 …… （大野） 59
第２節　A区の調査 …… 62
（１）概要 …… （大野） 62
（２）竪穴建物跡 …… （大野・岩井） 62
（３）土壙墓 …… （大野・岩井） 98
（４）土坑 …… （大野・岩井） 113
（５）その他の遺構 …… （岩井） 122
（６）遺構外出土遺物 …… （岩井） 125

第３節　B区の調査 …… 137
（１）概要 …… （大野）137
（２）溝状遺構 …… （岩井）137
（３）遺物包含層 …… （岩井）137
（４）出土遺物 …… （岩井）138
第４節　C区の調査 …… 140
（１）概要 …… （大野）140
（２）竪穴建物跡 …… （岩井）140
（３）土坑 …… （岩井）142
（４）その他の遺構 …… （岩井）143
（５）遺構外出土遺物 …… （岩井）144

第５章　自然科学分析の成果 …… 147
第１節　井図地頭遺跡土坑内埋土のリン酸カルシウム分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社 147
第２節　井図地頭遺跡出土黒曜石の産地同定 ……白石　純 149
第３節　井図地中ソネ遺跡焼失住居跡出土炭化材の樹種同定 ……古川郁夫・船橋晃 151
第４節　井図地中ソネ遺跡焼失住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定 ……株式会社古環境研究所 154
第５節　井図地中ソネ遺跡出土炭化米のDNA分析 ……佐藤洋一郎・株式会社ジェネテック 156
第６節　井図地中ソネ遺跡の炭化米粒特性と稲作起源 ……和佐野喜久生・二位純代・大野哲二・岩井美枝 159
第７節　井図地中ソネ遺跡の花粉分析・種子同定・リン酸カルシウム分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社 163

第６章　考察 …… 167
第１節　井図地頭遺跡の方形区画遺構について …… （君嶋）167
第２節　井図地頭遺跡における７世紀代の集落について …… （君嶋）171
第３節　鳥取県内出土の石錘について …… （坂本）173
第４節　井図地中ソネ遺跡土壙墓群について …… （大野）176
第５節　井図地中ソネ遺跡の竪穴建物について …… （岩井）179

第７章　まとめ …… （君嶋・大野・岩井・坂本）182
写真図版

挿図目次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 5
第３図　周辺遺跡分布図 …… 7
井図地頭遺跡
第４図　調査前地形測量図 …… 9
第５図　A区南側層序模式図 …… 10
第６図　B区土層断面図（１） …… 10
第７図　B区土層断面図（２） …… 11
第８図　第１遺構面全体図 …… 12
第９図　第２遺構面全体図 …… 13
第10図　SD４・SK28・SK34 …… 14
第11図　SD４出土遺物 …… 15
第12図　SK32 …… 16
第13図　SK33 …… 16
第14図　SK32・33・34出土遺物 …… 17
第15図　SK17 …… 17
第16図　SK25 …… 17
第17図　方形区画・道状硬化面 …… 20
第18図　方形区画出土遺物 …… 21
第19図　SI１ …… 23

第20図　SI１出土遺物 …… 23
第21図　SI２ …… 24
第22図　SI２出土遺物 …… 24
第23図　SI３ …… 25
第24図　SI３出土遺物 …… 26
第25図　SI４ …… 27
第26図　SI４出土遺物 …… 27
第27図　SD１ …… 28
第28図　SD２・３ …… 28
第29図　SD１出土遺物 …… 28
第30図　SD２出土遺物 …… 29
第31図　SD５・６ …… 30
第32図　SD７ …… 31
第33図　SD９ …… 31
第34図　SD７出土遺物 …… 31
第35図　SD11・12 …… 32
第36図　SD９出土遺物 …… 32
第37図　SD13 …… 32
第38図　SK１ …… 33
第39図　SK３ …… 33
第40図　SK２ …… 33
第41図　SK３出土遺物 …… 34
第42図　SK４ …… 34
第43図　SK５ …… 34
第44図　SK５出土遺物 …… 35
第45図　SK６ …… 35
第46図　SK８ …… 35
第47図　SK７ …… 35
第48図　SK９ …… 36
第49図　SK10 …… 36
第50図　SK11 …… 36
第51図　SK12 …… 36
第52図　SK14 …… 37
第53図　SK13 …… 37
第54図　SK15 …… 37
第55図　SK16 …… 37
第56図　SK18 …… 37
第57図　SK19 …… 38
第58図　SK19出土遺物 …… 38
第59図　SK20 …… 38
第60図　SK21 …… 38
第61図　SK21出土遺物 …… 39
第62図　SK22 …… 39
第63図　SK23 …… 40
第64図　SK26 …… 40
第65図　SK24・35 …… 40
第66図　SK27 …… 40
第67図　SK29・31 …… 41
第68図　SK30 …… 41
第69図　集石 …… 41
第70図　地床炉状硬化遺構 …… 41
第71図　A区ピット群分布図 …… 42
第72図　B区ピット群分布図 …… 43
第73図　ピット出土遺物 …… 44
第74図　包含層出土土器（１） …… 45
第75図　包含層出土土器（２） …… 46
第76図　表土・撹乱土出土遺物（１） …… 47
第77図　A区包含層遺物出土ポイント図 …… 48
第78図　B区包含層遺物出土ポイント図 …… 48
第79図　表土・撹乱土出土遺物（２） …… 49
第80図　遺構外出土石器（１） …… 51
第81図　遺構外出土石器（２） …… 52
第82図　遺構外出土石器（３） …… 53

井図地中ソネ遺跡

第83図　調査前地形測量図 …… 55・56
第84図　調査後地形測量図 …… 57・58
第85図　基本層序柱状図 …… 59
第86図　A区遺構配置図 …… 60
第87図　C区遺構配置図 …… 61
第88図　SI１ …… 62
第89図　SI１出土遺物 …… 63
第90図　SI７ …… 64
第91図　SI７出土遺物 …… 64
第92図　SI２ …… 65
第93図　SI２出土遺物（１） …… 66
第94図　SI２出土遺物（２） …… 66
第95図　SI３・８・14（１） …… 68
第96図　SI３・８・14（２） …… 69
第97図　SI３・８・14模式図 …… 69
第98図　SI３・８・14出土遺物 …… 70
第99図　SI４ …… 72
第100図　SI４遺物出土状況図 …… 72
第101図　SI４出土遺物 …… 73
第102図　SI５ …… 75

第103図　SI５出土遺物…… 76
第104図　SI６…… 77
第105図　SI６出土遺物（１）…… 78
第106図　SI６出土遺物（２）…… 79
第107図　SI15出土遺物（１）…… 81
第108図　SI15…… 82
第109図　SI15出土遺物（２）…… 82
第110図　SI９…… 83
第111図　SI９炭化材出土状況図…… 84
第112図　SI９出土炭化材№…… 85
第113図　SI９焼土検出状況図…… 85
第114図　SI９出土遺物…… 85
第115図　SI10…… 87
第116図　SI10出土遺物…… 88
第117図　SI11…… 90
第118図　SI11出土遺物…… 91
第119図　SI12…… 92
第120図　SI12出土遺物（１）…… 93
第121図　SI12出土遺物（２）…… 93
第122図　SI13…… 94
第123図　SI13出土遺物…… 94
第124図　SI16…… 96
第125図　SI16出土遺物…… 96
第126図　SI17…… 97
第127図　SI17出土遺物…… 97
第128図　土壙墓群全体図 …… 98
第129図　SX１ …… 99
第130図　SX１出土遺物 …… 99
第131図　SX２ …… 99
第132図　SX３ …… 100
第133図　SX３出土遺物…… 101
第134図　SX４ …… 102
第135図　SX４出土遺物…… 102
第136図　SX５ …… 103
第137図　SX５出土遺物…… 104
第138図　SX６ …… 105
第139図　SX６出土遺物…… 105
第140図　SX７ …… 106
第141図　SX７出土遺物…… 106
第142図　SX８ …… 107
第143図　SX８出土遺物（１）…… 107
第144図　SX８出土遺物（２）…… 107
第145図　SX９ …… 109
第146図　SK15…… 109
第147図　SK15出土遺物…… 110
第148図　SK24…… 111
第149図　SK28…… 111
第150図　SK24・28出土遺物…… 111
第151図　SD35…… 112
第152図　SD35出土遺物…… 112
第153図　SD36…… 112
第154図　SK１ …… 113
第155図　SK２ …… 113
第156図　SK３ …… 113
第157図　SK４ …… 114
第158図　SK５ …… 114
第159図　SK２・３・４出土遺物…… 114
第160図　SK６ …… 115
第161図　SK７ …… 115
第162図　SK７出土遺物…… 115
第163図　SK８ …… 116
第164図　SK９ …… 116
第165図　SK10…… 116
第166図　SK12…… 117
第167図　SK11…… 117
第168図　SK12出土遺物…… 118
第169図　SK13…… 118
第170図　SK16…… 118
第171図　SK17…… 118
第172図　SK14…… 119
第173図　SK14出土遺物…… 119
第174図　SK18…… 120
第175図　SK18出土遺物（１）…… 121
第176図　SK18出土遺物（２）…… 121
第177図　SK19…… 121
第178図　SK26…… 121
第179図　SD１～27出土遺物…… 122
第180図　溝状遺構配置図 …… 124
第181図　ピット配置図 …… 126
第182図　A区北側遺構外出土遺物 …… 127
第183図　A区中央部遺構外出土遺物 …… 129
第184図　A区南側遺構外出土遺物 …… 131
第185図　B区全体図 …… 137
第186図　B区南側土層断面図 …… 138

第187図　B区北側土層断面図 …… 138
第188図　B区遺構外出土遺物 …… 139
第189図　SI18 …… 140
第190図　SI18出土遺物 …… 141
第191図　SK20 …… 142
第192図　SK21 …… 142
第193図　SK22 …… 142
第194図　SK25 …… 142
第195図　SK27 …… 142
第196図　SK23 …… 142
第197図　C区溝状遺構・ピット全体図 …… 144
第198図　C区遺構外出土遺物 …… 145
第199図　井図地頭遺跡出土黒曜石石器の石材産地（Fe/Ti-K/Ca） …… 150
第200図　井図地頭遺跡出土黒曜石石器の石材産地（Fe/Ti-K/Ca） …… 150
第201図　炭化米DNAのPS－10領域の塩基配列 …… 158
第202図　井図地中ソネ遺跡位置図 …… 159
第203図　比較基準遺跡及び井図地中ソネ遺跡の炭化米粒の長幅平均値の分布図 …… 160
第204図　井図地中ソネ遺跡の炭化米粒長の度数分布図 …… 161
第205図　方形区画遺構の類例 …… 169
第206図　調査地周辺の小字名 …… 170
第207図　遺構・遺物の変遷 …… 171
第208図　7世紀代の竪穴建物跡（東伯・大栄町域） …… 172
第209図　石錘の各類型 …… 173
第210図　石錘重量比較 …… 173
第211図　鳥取県内石錘出土遺跡分布 …… 174
第212図　井図地中ソネ遺跡周辺土壙墓群 …… 177
第213図　SK15付近出土石器 …… 177
第214図　床溝分類図 …… 180
第215図　床溝を持つ竪穴建物 …… 180

挿表目次

井図地頭遺跡

第１表　SD４出土遺物観察表 …… 16
第２表　SK32・33・34出土遺物観察表 …… 17
第３表　方形区画出土遺物観察表 …… 21
第４表　SI１ピット計測表 …… 23
第５表　SI２ピット計測表 …… 23
第６表　SI１出土遺物観察表 …… 23
第７表　SI２出土遺物観察表 …… 24
第８表　SI３ピット計測表 …… 25
第９表　SI３出土遺物観察表 …… 26
第10表　SI４出土遺物観察表 …… 27
第11表　SD１出土遺物観察表 …… 28
第12表　SD２出土遺物観察表 …… 29
第13表　SD７・９出土遺物観察表 …… 30
第14表　SK３出土遺物観察表 …… 34
第15表　SK５出土遺物観察表 …… 35
第16表　SK19出土遺物観察表 …… 38
第17表　SK21出土遺物観察表 …… 39
第18表　ピット計測表（１） …… 43
第19表　ピット計測表（２） …… 44
第20表　ピット出土遺物観察表 …… 44
第21表　包含層出土土器観察表（１） …… 45
第22表　包含層出土土器観察表（２） …… 47
第23表　表土・撹乱土出土土器観察表 …… 50
第24表　遺構外出土石器観察表 …… 54

井図地中ソネ遺跡

第25表　グリッド座標一覧表 …… 59
第26表　SI１出土土器観察表 …… 63
第27表　SI１出土鉄関連遺物観察表 …… 63
第28表　SI７出土土器観察表 …… 65
第29表　SI２出土土器観察表 …… 67
第30表　SI２出土鉄関連遺物観察表 …… 67
第31表　SI３・８・14出土土器観察表 …… 70
第32表　SI３出土石器観察表 …… 70
第33表　SI４出土土器観察表 …… 74
第34表　SI５出土土器観察表 …… 76
第35表　SI５出土鉄関連遺物観察表 …… 77
第36表　SI５出土石器観察表 …… 77
第37表　SI６出土土器観察表（１） …… 80
第38表　SI６出土土器観察表（２） …… 81
第39表　SI６出土鉄関連遺物観察表 …… 81
第40表　SI６出土石器観察表 …… 81
第41表　SI15出土石器観察表 …… 81
第42表　SI15出土土器観察表 …… 82
第43表　SI９出土土器観察表 …… 86
第44表　SI９出土石器観察表 …… 86
第45表　SI10出土土器観察表 …… 89
第46表　SI11出土土器観察表 …… 91

第47表　SI11出土石器観察表 …… 91
第48表　SI12出土土器観察表 …… 93
第49表　SI12出土石器観察表 …… 93
第50表　SI13出土土器観察表 …… 95
第51表　SI16出土土器観察表 …… 96
第52表　SI16出土鉄関連遺物観察表 …… 96
第53表　SI17出土土器観察表 …… 97
第54表　SX１出土土器観察表 …… 99
第55表　SX３出土土器観察表 …… 101
第56表　SX４出土土器観察表 …… 102
第57表　SX５出土土器観察表 …… 104
第58表　SX６出土土器観察表 …… 105
第59表　SX７出土土器観察表 …… 106
第60表　SX８出土土器観察表 …… 108
第61表　SX８出土石器観察表 …… 108
第62表　SK15出土土器観察表 …… 110
第63表　SK15出土鉄関連遺物観察表 …… 110
第64表　SK24・28出土土器観察表 …… 111
第65表　SD35出土土器観察表 …… 112
第66表　SK２・３・４出土土器観察表 …… 114
第67表　SK７出土土器観察表 …… 116
第68表　SK12出土土器観察表 …… 118
第69表　SK12出土鉄関連遺物観察表 …… 118
第70表　SK14出土土器観察表 …… 119
第71表　SK18出土土器観察表 …… 120
第72表　SK18出土鉄関連遺物観察表 …… 120
第73表　SD出土土器観察表 …… 123
第74表　SD出土鉄関連遺物観察表 …… 123
第75表　A区北側遺構外出土土器観察表 …… 128
第76表　A区北側遺構外出土石器観察表 …… 128
第77表　A区中央部遺構外出土土器観察表 …… 130
第78表　A区中央部遺構外出土石器観察表 …… 130
第79表　A区南側遺構外出土土器観察表 …… 132
第80表　A区南側遺構外出土石器観察表 …… 132
第81表　A区竪穴建物計測表 …… 133
第82表　土壙墓計測表 …… 133
第83表　A区土坑計測表 …… 134
第84表　A区溝状遺構計測表 …… 134
第85表　A区ピット計測表（１） …… 135
第86表　A区ピット計測表（２） …… 136
第87表　B区遺構外出土土器観察表 …… 138
第88表　B区遺構外出土鉄関連遺物観察表 …… 138
第89表　B区溝状遺構計測表 …… 139
第90表　SI18出土土器観察表 …… 141
第91表　C区土坑計測表 …… 145
第92表　C区遺構外出土土器観察表 …… 146
第93表　C区ピット計測表 …… 146
第94表　C区溝状遺構計測表 …… 146
第95表　リン酸・カルシウム分析結果 …… 147
第96表　井図地頭遺跡出土黒曜石製石器の分析値（%） …… 149
第97表　井図地中ソネ遺跡SI９（弥生時代後期）出土炭化材の樹種 …… 153
第98表　サンプルリスト …… 156
第99表　比較基準遺跡及び井図地中ソネ遺跡の炭化米粒の粒型分布表 …… 160
第100表　比較基準遺跡及び井図地中ソネ遺跡の炭化米粒特性表 …… 161
第101表　リン酸・カルシウム分析結果 …… 165
第102表　方形区画遺構属性表 …… 169
第103表　鳥取県内の石錘出土遺跡一覧 …… 174
第104表　SK15付近出土石器観察表 …… 178
第105表　竪穴建物計測表及び平面プラン規模別表 …… 180

写真目次

井図地頭遺跡

写真１　A区調査前状況 …… 18
写真２　B区調査前状況 …… 18
写真３　C区遠景 …… 18
写真４　方形区画　遺物（32）出土状況 …… 22
写真５　方形区画　転落礫 …… 22
写真６　SD７砂利敷面 …… 31

井図地中ソネ遺跡

写真７　作業風景 …… 67
写真８　作業風景 …… 67
写真９　SI８遺物出土状況 …… 71
写真10　SI14遺物出土状況 …… 71
写真11　SI９・10遺構検出状況（北から） …… 86
写真12　調査前状況（北から） …… 101
写真13　SX４完掘状況（南から） …… 108
写真14　考古学実習（鳥取短期大学） …… 119
写真15　SD21と調査区西側植林状況（東から） …… 123
写真16　DNA増幅した泳道写真（上）とサザンハイブリダイゼーションのXrayフィルム（下） …… 157
写真17　サザンハイブリダイゼーションのXrayフィルム …… 157

写真図版目次

PL.1　1．遺跡周辺の地形（北から）
　　2．遺跡周辺の地形（南から）
PL.2　1．井図地頭遺跡調査前全景（北西から）
　　2．井図地中ソネ遺跡調査前全景（北西から）

井図地頭遺跡

PL.3　1．SD４（北東から）
　　2．SD４遺物出土状況①（北西から）
　　3．SD４遺物出土状況②（北西から）
PL.4　1．SK17（南から）
　　2．SK25（北から）
　　3．SK28・34（北東から）
　　4．SK32（東から）
　　5．SK33（北東から）
　　6．SK33遺物出土状況（西から）
PL.5　1．B区黒褐色土堆積状況（南東から）
　　2．B区第１遺構面検出状況（南西から）
PL.6　1．方形区画（SD８）①（北西から）
　　2．方形区画（SD８）②（北東から）
　　3．方形区画（SD８）③（西から）
PL.7　1．方形区画（SD８）④（東から）
　　2．方形区画（SD10）⑤礫出土状況（北から）
　　3．道状硬化面（北から）
PL.8　1．方形区画（SD８）土層断面①（東から）
　　2．方形区画（SD８）土層断面②（西から）
　　3．方形区画（SD10）土層断面（南から）
PL.9　1．SI１（南から）
　　2．SI１　貼床除去後完掘状況（南から）
　　3．SI１　遺物（34）出土状況（南から）
PL.10　1．SI２（北から）
　　2．SI２　貼床除去後完掘状況（北から）
　　3．SI３（東から）
PL.11　1．SI３　遺物（40・45）出土状況（東から）
　　2．SI４（西から）
　　3．SI４遺物出土状況（西から）
PL.12　1．SD１（南から）
　　2．SD２・３（南から）
　　3．SD５・６（北東から）
PL.13　1．SD７（南から）
　　2．SD９（東から）
　　3．SD11・12（北から）
　　4．SD13（南から）
PL.14　1．SK２（南から）
　　2．SK３（北から）
　　3．SK９（南西から）
　　4．SK10（南から）
　　5．SK４（北西から）
　　6．SK５（西から）
PL.15　1．SK１（南西から）
　　2．SK７（東から）
　　3．SK６（北から）
　　4．SK８（東から）
PL.16　1．SK11（南西から）
　　2．SK12（北から）
　　3．SK13（西から）
　　4．SK14（南西から）
　　5．SK15（北東から）
　　6．SK16（西から）
PL.17　1．SK18（西から）
　　2．SK27（東から）
　　3．SK22（西から）
　　4．SK23（南から）
　　5．SK26（南から）
　　6．SK29・31（北から）
PL.18　1．SK19（西から）
　　2．SK24・35（東から）
　　3．SK21（北から）
　　4．SK21遺物出土状況（北から）
　　5．SK20（西から）
　　6．SK30（北から）
PL.19　1．A・B区完掘状況（上が北）
　　2．方形区画完掘状況（上が北）
PL.20　第１遺構面出土遺物
PL.21　1．SK33出土遺物
　　2．SD４出土遺物
PL.22　1．方形区画（SD８・10）出土遺物
　　2．方形区画（SD８）出土遺物
　　3．SI１出土遺物
PL.23　1．SI３出土遺物
　　2．SD１出土遺物
　　3．SK３出土遺物

PL.24　SI・SK・SD出土遺物
PL.25　包含層出土遺物（1）
PL.26　1．包含層出土遺物（2）
　　2．包含層出土遺物（3）
　　3．表土・撹乱土出土遺物（1）
PL.27　表土・撹乱土出土遺物（2）
PL.28　表土・撹乱土出土遺物（3）
PL.29　石錘
PL.30　1．石鏃・剥片石器
　　2．石鍬
　　3．礫石器・凹み石

井図地中ソネ遺跡

PL.31　1．SI1（西から）
　　2．SI1遺物出土状況（南から）
　　3．SI1・7全景（西から）
PL.32　1．SI7床面検出状況（西から）
　　2．SI7南西隅遺物出土状況（南から）
　　3．SI7西壁付近遺物出土状況（西から）
PL.33　1．SI2（西から）
　　2．SI2南西隅遺物出土状況（南から）
　　3．SI3・8・14（北から）
PL.34　1．SI4（北から）
　　2．SI4遺物出土状況（北から）
　　3．SI5（東から）
PL.35　1．SI6（東から）
　　2．SI6遺物出土状況（南から）
　　3．SI15（北から）
PL.36　1．SI9炭化材（垂木）出土状況（東から）
　　2．SI9炭化材№1・2出土状況（東から）
　　3．SI9炭化材№67出土状況（南から）
PL.37　1．SI9遺物出土状況（東から）
　　2．SI9茅材出土状況
　　3．SI9（南から）
PL.38　1．SI10（西から）
　　2．SI10遺物出土状況（西から）
　　3．SI10東壁遺物出土状況（南から）
PL.39　1．SI11（南から）
　　2．SI11遺物出土状況（南西から）
　　3．SI11ピット確認状況（南から）
　　4．SI11中央ピット土層断面（北から）
PL.40　1．SI12（北から）
　　2．SI12床面炭混土検出状況（南から）
　　3．SI12内土坑遺物出土状況（北から）
PL.41　1．SI13（西から）
　　2．SI16（北から）
　　3．SI17（西から）
PL.42　1．SX1（東から）
　　2．SX1蓋部出土状況（南から）
　　3．SX1掘方（東から）
PL.43　1．SX2（南から）
　　2．SX3（南から）
　　3．SX3土層断面（西から）
PL.44　1．SX3・5、SK28（南から）
　　2．SX3・5、SK28直上遺物出土状況（南から）
　　3．SX3直上遺物出土状況（南から）
　　4．SK28直上遺物出土状況（北から）
PL.45　1．SX4（南から）
　　2．SX4直上遺物出土状況（南から）
　　3．SX6直上遺物出土状況（北から）
　　4．SX6、SK24（南から）
PL.46　1．SX7（北から）
　　2．SX7直上遺物出土状況（南から）
　　3．SX8（南から）
　　4．SX8直上遺物出土状況（南から）
PL.47　1．SX9（北から）
　　2．SK15（東から）
　　3．SK15直上遺物出土状況（東から）
PL.48　1．SK1
　　2．SK4
　　3．SK5
　　4．SK16
PL.49　1．SK3（北から）
　　2．SK6（東から）
　　3．SK7（東から）
PL.50　1．SK12（南から）
　　2．SK14（東から）
　　3．SK17（東から）
PL.51　1．SK18（北東から）
　　2．SK26上礫群出土状況（南から）
　　3．SK26（南から）
PL.52　1．SD1（東から）
　　2．SD21（西から）
　　3．SD22～29（南から）
　　4．A区南側SD完掘状況（北から）

PL.53　1．A区竪穴建物跡群（北から）
　　2．B区北側土層断面（南から）
　　3．B区包含層遺物出土状況（北から）
PL.54　1．SI18（北から）
　　2．SI18遺物出土状況（北から）
　　3．SK25（南から）
PL.55　1．現地説明会風景
　　2．A区竪穴建物跡群（上が北）
　　3．調査後航空撮影（南から）
PL.56　1．調査地全景（上が北）
　　2．調査後航空撮影（東から）
PL.57　1．SI７出土土器
　　2．SI２出土土器
　　3．SI８出土土器
PL.58　1．竪穴建物出土土器（１）（SI１・２・４・７・８・14）
PL.59　SI４出土土器
PL.60　竪穴建物出土土器（２）（SI２・４・５）
PL.61　1．SI５出土土器
　　2．SI６出土土器（１）
PL.62　1．SI６出土土器（２）
　　2．SI15出土土器
PL.63　竪穴建物出土土器（３）（SI６・15）
PL.64　1．SI９出土土器
　　2．SI10出土土器（１）
PL.65　1．SI10出土土器（２）
　　2．竪穴建物出土土器（４）（SI９・10）
PL.66　1．SI11出土土器
　　2．SI12出土土器
　　3．SI13出土土器
PL.67　1．竪穴建物出土土器（５）（SI11～13・16・17）
　　2．SX１出土土器・棺蓋装着状況
PL.68　1．SX３出土土器
　　2．SX５出土土器
　　3．SX８出土土器
　　4．SK15出土土器
PL.69　1．SK28出土土器・底部穿孔
　　2．SD35出土土器
PL.70　土壙墓出土土器（１）（SX３・５・６・８）
PL.71　1．土壙墓出土土器（２）（SX３～８、SK24）
　　2．SK７出土土器
　　3．SK18出土土器
PL.72　A区土坑内出土土器
PL.73　1．A区溝状遺構出土土器
　　2．A区遺構外出土土器（１）
PL.74　A区遺構外出土土器（２）
PL.75　A区遺構外出土土器（３）
PL.76　A区遺構外出土土器（４）
PL.77　1．B区遺構外出土土器（１）
　　2．B区遺構外出土土器（２）
　　3．C区遺構外出土土器
PL.78　C区出土土器（SI18：286・288・289）
PL.79　1．鉄関連遺物
　　2．石製品
PL.80　出土木材顕微鏡写真１
PL.81　出土木材顕微鏡写真２
PL.82　出土木材顕微鏡写真３
PL.83　サンプルデジタル顕微鏡写真
PL.84　井図地中ソネ遺跡の炭化米粒の接写写真
PL.85　花粉分析プレパラートの状況写真・種実遺体

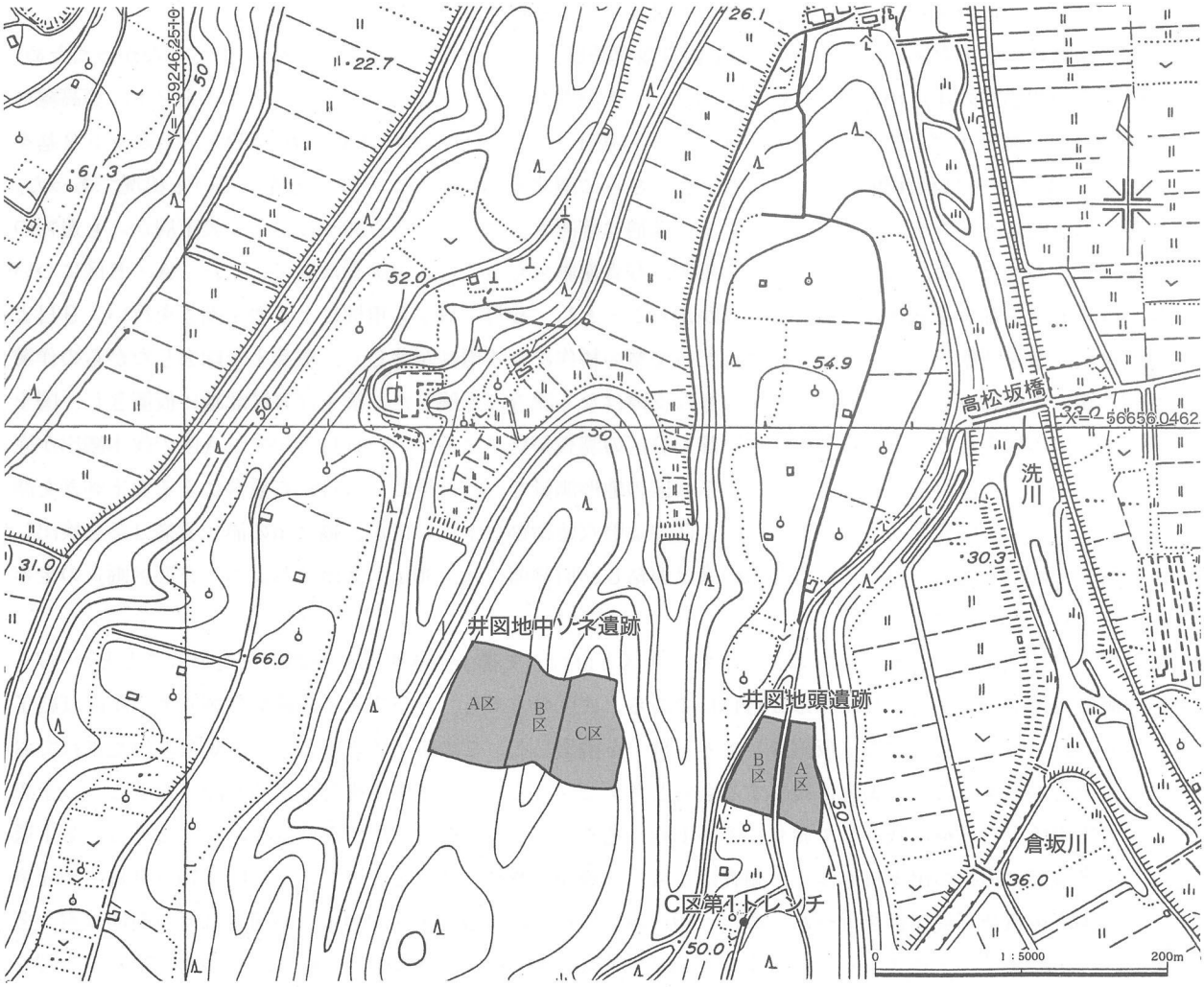
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道９号線東伯中山道路の改築を原因とし、東伯町内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。

山陰地方では、国道９号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。東伯中山道路の計画地内である東伯町田越地内及びその周辺では、過去に銅鐸や銅剣が出土したのをはじめとして、多数の遺跡が所在している。これら計画地内の遺跡及び遺構の広がりを確認するため、建設に先立ち、東伯町教育委員会による試掘調査が行われた。井図地中ソネ遺跡は平成12年度の調査により新規発見された遺跡である。また、分布調査によりその東隣に存在が知られていた遺跡は井図地頭遺跡と命名された。

この結果を受け、国土交通省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の３に基づく発掘通知を行った上で、鳥取県教育委員会教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、県教育長から発掘調査実施の指示を受け、中部埋蔵文化財東伯調査事務所が平成14年度の発掘調査を担当することとなった。井図地頭遺跡、井図地中ソネ遺跡の発掘調査は平成13年度事業として行うこととなった。調査面積は、井図地頭遺跡が6,000㎡、井図地中ソネ遺跡が12,000㎡である。　（君嶋）



第１図　調査地位置図

第２節　調査の経過と方法

（１）調査区の名称と調査方法

井図地頭遺跡の調査地は、南北に走る農道によって東西に二分されており、農道の東側をＡ区、西側をＢ区と呼称した。この農道は付近の営農者が頻繁に利用するため迂回・撤去が困難であり、今回は農道下の調査は行えなかった。また、本道への取り付け道路の用地として、この農道を50mほど南へ登った西側の斜面地が調査対象地となっており、これをＣ区とした。

井図地中ソネ遺跡の調査地は、南北方向にのびる二つの尾根と、それらに挟まれた谷からなっている。これらのうち、西側の尾根部をＡ区、東側の尾根部をＣ区、谷部をＢ区と呼称した。

両遺跡とも、表土剥ぎはすべて重機で行った。また、井図地頭遺跡では、Ａ区・Ｂ区北端の撹乱土の除去に重機を用いた。表土剥ぎ終了後、公共座標第Ｖ系に基づく10m間隔の基準杭を設定した。これらの杭には、南北軸には算用数字を、東西軸にはアルファベットを付し、「Ａ１杭」のように呼称した。なお、これら基準杭の名称は両遺跡でそれぞれ別個につけたものである。また、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとってグリッド名とした。

検出した遺構・遺物の記録には、平板及び光波トランシットを用いた。出土遺物のうち、時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構もしくはグリッド毎に一括して取り上げた。写真撮影には35㎜版と６×７版を用いたが、井図地頭遺跡の方形区画完掘状況（巻頭図版１－１）のみ４×５版で撮影した。

（２）調査の経過

調査開始に先立ち、両遺跡の調査前航空写真撮影および地形測量・基準点測量を業者に委託した。航空写真撮影は４月22日に、地形測量は４月23日から４月30日にかけてそれぞれ行った。

井図地頭遺跡の各調査区のうち、Ｃ区には東伯町教育委員会による試掘トレンチが設けられていなかったため、本格的な調査開始前の４月10日・11日にＣ区のトレンチ調査を行った。10m×２mのトレンチを２本、等高線に平行に設定して掘り下げた結果、高い方のトレンチ（第１トレンチ）で溝状遺構１条（SD１）とピット２基を検出した。SD１からは唐津焼の碗が１点出土し、さらに南北両端がトレンチ外へと続いている状況であった。しかし、低所側のトレンチ（第２トレンチ）では遺構は確認されず、また厚さ30㎝におよぶ表土層からも遺物の出土は皆無であったため、第１トレンチ内の実測・写真撮影をもってＣ区の調査は終了とした。Ａ・Ｂ区については、伐木搬出の都合上Ｂ区から調査にとりかかることとし、５月７日から重機による表土剥ぎを行い、９日より遺構検出作業を開始した。Ｂ区は全域にわたって梨の耕作による撹乱が著しく、撹乱土を除去しながらの作業となったが、天候に恵まれたこともあって大きな支障はなく調査は進展した。排土はＢ区北端に仮置きし、国土交通省が場外へ搬出した。この排土置き場を除くＢ区の調査が終了に近づいた６月下旬に、Ａ区の伐木搬出が完了した。そのため、６月20日に委託業者によるＡ区の地形測量を行った後に、21日から重機による表土剥ぎを開始、26日より遺構検出作業にとりかかった。Ａ区では竪穴建物跡や土坑のほか、幅２mの溝状遺構２条を検出した。酷暑のなか掘り進めるうちにこの２条の溝は連結し、旧盆前には、30m×30mにおよぶ「方形区画」の全容が明らかになった。

旧盆後、Ｂ区北端の排土搬出が終了したので、Ａ区と併行して排土置き場部分の調査を進めることとなった。Ｂ区の調査後地形測量が終了したのは９月13日である。Ａ区の方でも、９月末までに遺構の掘り下げがほぼ終了したため、10月上旬、Ａ区北端に仮置きしていた排土を搬出した。この排土置き場の下は大規模に撹乱されており、撹乱土を除去することで調査は終了するものと考えた。ところが、重機で撹乱土を取り除いたところ、予想に反して黒褐色土の堆積が残存しており、その上面で遺構のプランや遺物の出土が確認された。これら「第１遺構面」の各遺構は遺物の出土量も多く、調査にさらに３週間を費やすこととなった。この間、10月９日に委託業者による調査後航空写真撮影を行った。また、10月19日に井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡合同の現地説明会を開催した。あいにくの天候であったにもかかわらず、町の内外から50人を越える方々に足を運んでいただいた。10月25日、井図地頭遺跡の現地での調査を終了した。

井図地中ソネ遺跡では、４月30日に重機による表土剥ぎを開始した。各調査区のうち、試掘調査のデータより遺構密度が最も高いと予想されたＡ区から調査を始めることにし、５月９日から遺構検出作業にとりかかった。排土はＢ区南端に仮置きし、国土交通省が場外へ搬出したが、11月以降は鳥取県教育文化財団が搬出し、井図地頭遺跡の埋め戻しに用いた。調査区はヒノキ植林地で、遺構掘り下げに加えて切株の除去にも労力を割くこととなった。さらに、焼失竪穴建物跡、炭化米、土壙墓群など重要な発見が相次いだため、当初の予定以上の時間を費やさざるを得なくなった。９月初旬にいたってＣ区の調査にとりかかったが、Ｃ区で検出された遺構は予想よりも少なく、限られた期間内で調査を終えることができた。

Ｂ区は、試掘調査の結果包含層の堆積が確認されていたが、遺構は極めて少ないものと予想された。斜面部については、９月下旬より遺構検出作業を行い、Ａ区から連続する溝状遺構以外に遺構の無いことを確認した。谷底部の南端はＡ区の排土置き場として利用したため、Ａ区の調査終了後、排土を搬出したうえで本格的な調査に着手する計画であった。しかし前述の理由でＡ区の調査に時間がかかったうえに、11月になってからは雨天が続き、重機による排土搬出が滞る事態となった。そのため調査終盤は厳しい日程での作業となったが、最後まで残ったＡ区北端の土壙墓群とＢ区谷底部の調査を12月３日に終了することができた。その後、12月５日に委託業者による調査後航空写真撮影を行い、その後、12月９日から12月24日まで、委託業者による調査後地形測量を行った。

発掘調査報告書の作成にともなう遺物の整理作業は、井図地頭遺跡の分は東伯調査事務所で、井図地中ソネ遺跡の分は鳥取県埋蔵文化財センターで行った。整理作業および報告書の作成は現地調査と併行して進め、平成14年度末をもって終了した。

（君嶋）

〈調査日誌抄（平成14年度）〉

東伯調査事務所

4/1　東伯事務所開設

6/7　鳥取県教育委員会事務局文化課長来跡

7/31　新事務所へ移転

9/27　定例業務連絡会議　笠見第３遺跡・井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡の現地検討会

10/17　東伯町教育委員会教育長・次長来跡

10/19　井図地頭・井図地中ソネ遺跡現地説明会

10/25　東伯中学校１・２年生遺跡見学

井図地頭遺跡

4/10・11　Ｃ区トレンチ調査

4/22　調査前空撮（業者委託）

4/30　Ｂ区調査前測量（業者委託）

5/7　Ｂ区　重機による表土剥ぎ開始

5/9　Ｂ区　遺構検出作業開始

5/30　SD２から石鏃出土

6/4　SI１の床面近くから須恵器坏出土

6/20　Ａ区調査前測量（業者委託）

6/21　Ａ区　重機による表土剥ぎ開始

7/29　SD８掘り下げ開始

8/5　SD10掘り下げ開始

8/6　SD８・SD10が連結することを確認、以後「方形区画」と呼称

8/27　方形区画　ほぼ完掘

9/18　SI３の床面から土師器甕・須恵器坏身出土

10/9　調査後空撮（業者委託）
第１遺構面でSD４検出

10/18　錦織勤氏（鳥取大学）来跡

10/25　調査終了

井図地中ソネ遺跡

4/22　調査前空撮（業者委託）

4/23　調査前測量開始（業者委託）

4/30　重機による表土剥ぎ開始

5/9　Ａ区遺構検出作業開始

5/24　Ａ区、溝・竪穴建物跡群検出

5/30　炭化米を埋土に含むSK１検出

6/21　SI９が焼失建物跡であると確認

7/15　浅川滋男氏（鳥取環境大学）現地指導

7/31　鳥取短期大学学生　考古学実習

8/29　Ａ区北側で土器溜り検出

9/9　土器溜り西側より土器棺墓検出

9/10　Ｃ区遺構検出作業開始

9/20　Ｂ区遺構検出作業開始

10/4　Ａ区北側で土壙墓検出

10/24　Ｃ区　SI18検出

10/28　Ａ区北側土器溜り下部より土壙墓２基検出

11/12～12/2　土壙墓群の調査進む

12/3　調査終了

12/5　調査後空撮（業者委託）

12/9～24　調査後地形測量（業者委託）

第３節　調査体制

調査は、下記の体制で実施した。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長		有田　博充
常務理事		川口　一彦（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長		下田　弘人

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長		田中　弘道（県埋蔵文化財センター所長）
次　　長		竹内　　茂
		加藤　隆昭
調査研究課	課　　長(兼)	加藤　隆昭
企画調整班	班　　長	松田　　潔（８月異動）
	文化財主事	原田　雅弘
庶　務　課	課　　長(兼)	竹内　　茂
	主任事務職員	矢部　美恵
	事務職員	小林　順子

○調査担当　第一調査班　中部埋蔵文化財東伯調査事務所

所　　長	佐治　孝弐
班　　長	牧本　哲雄（笠見第３遺跡担当）
調　査　員	君嶋　俊行、坂本　嘉和（井図地頭遺跡担当）
	大野　哲二、岩井　美枝（井図地中ソネ遺跡担当）
	家塚　英詞、小谷　郁夫、小山　浩和（笠見第３遺跡担当）
調査補助員	山根　雅美、河本いづみ、吉田由香里
事務補助員	大田　直子

○調査指導　鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　国土交通省中国地方建設局倉吉工事事務所、東伯町、東伯町教育委員会、

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

今回調査が行われた東伯町は、鳥取県中部（東伯者）の西側に位置する。大山連峰の烏ヶ山（1381m）と野田ヶ山を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北16.8km、総面積は約82.2km²で県面積の約2.3％を占めている。人口は約12500人（平成14年末）で少子高齢化の進展で昭和期に比して漸減傾向にある。昭和29年の５町村合併に際して、「東伯者」を意味する現町名「東伯」となった。

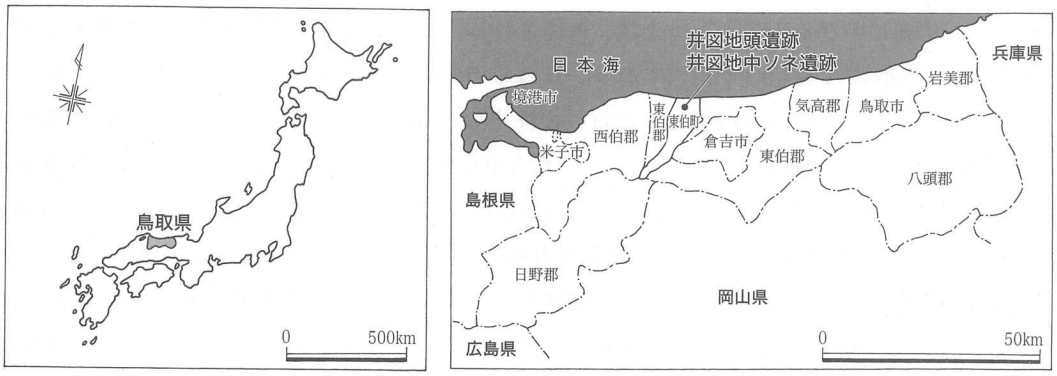
本町の南西部には大山（1729m）が存在し、最後の噴火が約１万数千年前に認められている。加勢蛇川は洗川とともにその下流域で沖積平野を形成している。平野部は黒ボク地帯であり、西側丘陵地は大山凝灰角礫岩や火山灰土の堆積した台地状地形を呈している。町内には大山に源を発する大小合計５本の川が日本海に注いでいる。中世以前の遺跡は槻下、金屋地区など加勢蛇川下流域東岸のなだらかな低丘陵地と、田越、笠見、八橋、倉坂、山田地区など洗川西岸の丘陵台地とその山裾付近、加勢蛇川中流域の法万、杉地地区周辺に比較的多く集まっている。両河川に挟まれた扇状地には徳万地区など律令時代の条里制が旧地名や地割りに残る地域もあるが、加勢蛇川は近世まで氾濫を繰り返した県内屈指の荒れ川であり、概ね残りがよいとは言い難い。一方、洗川の西側には３本の小河川があり、水田耕作が可能な低湿地は広くはないが安定的で初期の稲作に適していたといえる。最も東を流れる加勢蛇川の東岸地域は、火山扇状地性台地である金屋、杉下、森藤地区に大小の農業用ため池がみられ、荘園が発達した平安中期ごろよりそれらから導水し現大栄町域へも広がる稲作・畑作地帯を形成したものと考えられる。

最大の河川である加勢蛇川の最上流域には大山滝があり、そこから地獄谷～大休峠付近～大山町の川床を経て大山博労座に通じる急峻な山道は江戸時代から明治にかけて、東伯者地方から市の立つ大山へ牛馬を運ぶ重要な短絡ルートであった。また、海岸沿いの八橋地区は古代から伯者の東と西をつなぐ交通の要衝として古代山陰道の清水駅、中世以降は丘陵北端部に八橋城が築かれるなど、交流及び戦略的な活動が繰り広げられた。

大山の伏流水である清涼な地下水を利用した酒造業は、明治中期から活発に生産が行われ、県内総生産量の約40％を生産しているため、この地は「山陰の灘」と呼ばれている。また、酪農も県内の約70％の生乳を集める大山乳業農協が「白バラ」の名で、県内のみならず関西から福岡県まで西日本全域に及ぶ販売事業を展開している。その他、竹輪・製菓などの食品、弱電部品・繊維製品、段ボールなどの製造業も概ね活発である。昭和20年代中期より盛んになり、北米や香港・シンガポールなどにも輸出される二十世紀梨生産は本県東郷町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による果樹園の廃園が目立っている。調査地内にも梨栽培による撹乱が見られる箇所もある。また、水稲とともに芝、ブロイラー・和牛などの畜産も主要な農業分野である。

中山間地及び山間地では農牧業と併せ林業とそれに伴う炭焼きなどが江戸時代以降の主産業の１つであった。本町総面積の約６割を山林が占め、その内人工林の比率は約50％に達し、戦前戦後の植林事業の進展を調査地付近から知ることができる。海岸部近くを東西に走る国道９号線沿線には、近年商業および公共施設が急速に立地し、工場群とともに都市機能を形成している。

（小谷）



第２図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

旧石器時代

本遺跡周辺に限らず、鳥取県において遺構を伴う旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上では関金町野津三、倉吉市和田、上神、鋤、国府、中尾の各遺跡でいくつかの旧石器が見つかっている。

縄文時代

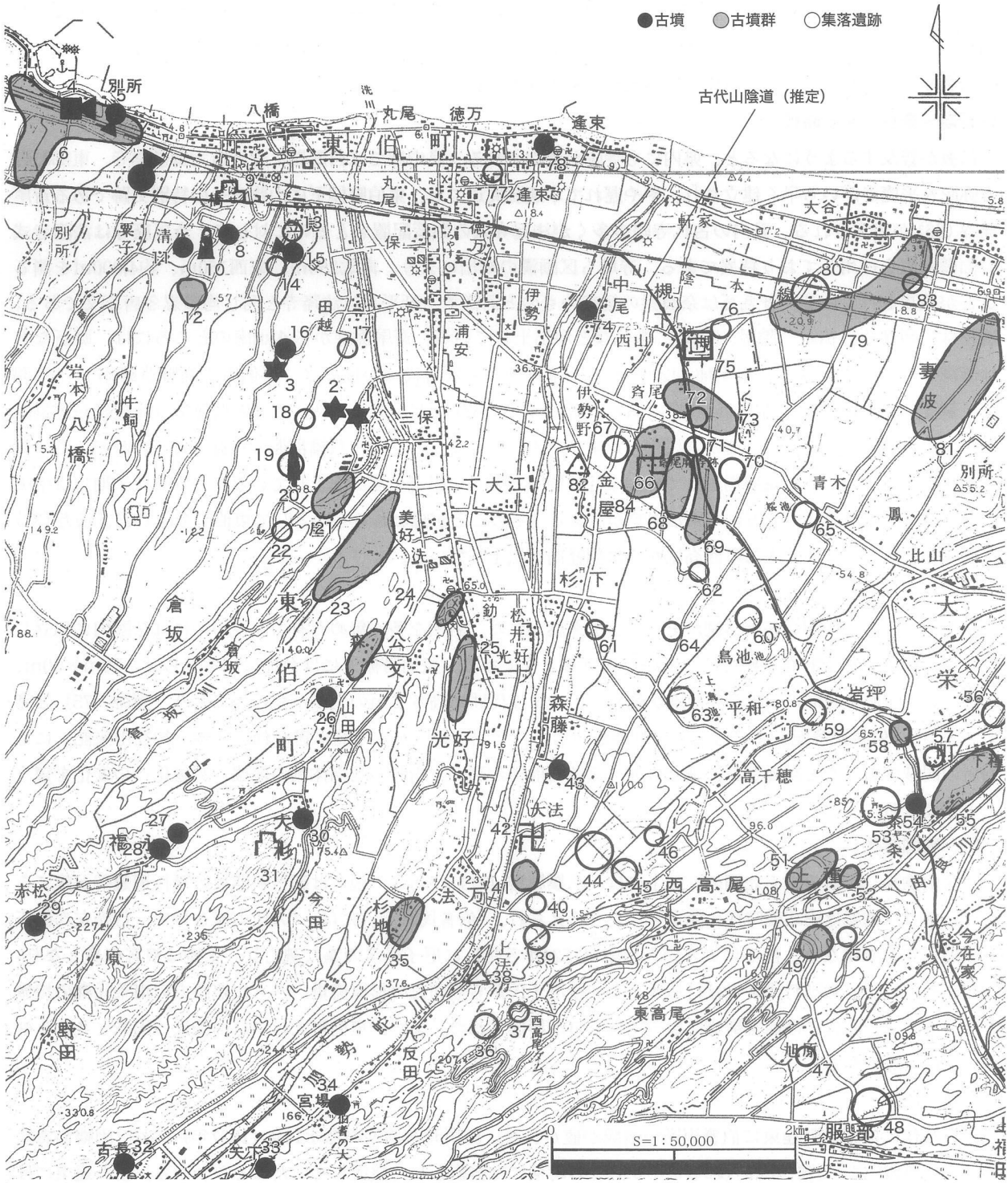
鳥取県内において草創期に遡る土器は、今のところ出土例はないが、石器類は大山山麓の丘陵上でいくつか確認されている。本遺跡周辺では、大栄町穂波、東伯町槻下で有茎尖頭器が見つかっている。早期に入ると、大栄町西高尾谷奥遺跡 (37) で、押型文の土器とともに住居跡の可能性がある竪穴状遺構が検出されている。また、赤碕町松ヶ丘遺跡、大栄町築山遺跡 (83)、東伯町森藤第２遺跡 (44)、大法３号墳 (41) の墳丘盛土や周溝埋土内でこの時期の土器が見つかっている。前期は気候の温暖化が進み、いわゆる縄文海進がピークに達する。それにより形成された潟湖の周囲に遺跡が見られるようになり、北条町島遺跡などが知られる。中期では遺跡の検出例は少なく、県中部では倉吉市平ル林遺跡、北条町船渡遺跡、羽合町南谷ヒジリ遺跡などが確認されているにすぎない。後期に入ると遺跡数は増加し、東伯町森藤第２遺跡 (44) では、中央に石組みの炉をもつ住居跡が検出され、住居内から土器片を利用して作られた錘(土器片錘)や土偶が見つかっている。晩期は弥生時代前期へと継続する遺跡が多く、倉吉市松ヶ坪遺跡、羽合町長瀬高浜遺跡、北条町北尾遺跡、大栄町後ろ谷遺跡などがある。なかでも、松ヶ坪遺跡では配石墓、土器棺墓、土壙が検出されており、当時の墓制を知るうえで重要な資料となる。

弥生時代

大陸から伝播した稲作は短期間のうちに列島各地へ波及していったと考えられ、県内おいても前期には、米子市目久美遺跡で水田跡が確認されている。本遺跡周辺では前期に遡る集落跡は確認されていないが、大栄町青木第１遺跡 (65)、後ろ谷遺跡で土壙墓が見つかっている。中期になると、県中部では倉吉市後中尾遺跡で環濠集落が出現する。本遺跡周辺では大栄町西高江遺跡、青木第２遺跡 (65) などがある。西高江遺跡では玉造工房跡が検出され、水晶の破片とともに鉄製工具も出土している。また、赤碕町墓ノ上遺跡では木棺墓が検出されている。中期後葉から後期、そして古墳時代初頭にかけて遺跡数は大幅に増加する。東伯町森藤第１・２遺跡 (44)、水溜り・駕籠据場遺跡 (70)、大峰遺跡 (45)、田越遺跡群 (17・18・19) などがある。水溜り・駕籠据場遺跡では竪穴住居23棟、掘立柱建物17棟が検出され、鉄鏃・刀子・鉄斧・鉋などの鉄製品が出土している。また、竪穴住居のうち５棟が焼失した住居で、大峰遺跡でも確認されている。県中部では６遺跡７口の銅鐸が見つかっている。本遺跡周辺では、東伯町八橋の南方丘陵上 (10) で扁平鈕式の銅鐸が１口見つかっている。また、正確な出土状況は明らかではないが、東伯町田越の丘陵上 (20) では、中細型銅剣が３口、八橋南方丘陵で銅矛が１口出土している。

古墳時代

古墳時代に入ると各地に大型の前方後円墳が出現する。県中部では、東郷湖周辺で全長100mを誇る羽合町橋津（馬ノ山）４号墳、東郷町宮内狐塚古墳 (全長90m)、野花北山１号墳 (全長110m) と大型前方後円墳が累々と築造される。本遺跡周辺では、全長62mを誇る東伯町八橋狐塚古墳 (７)、笠見１号墳 (15)、赤碕町別所２号墳 (５) が大山から日本海にのびる山麓台地の先端に築造される。また、別所２号墳と近接した場所では全長52mの前方後方墳である笠取塚古墳 (４) が造営される。これらの古墳は日本海を見下ろし、東西をも視野に入れた要衝の地に築造されており、この地域における首長の性格の一端を知ることができる。中期、後期になると、中・小規模の円墳が群集して築かれるようになる。これら中小規模の円墳では、従来の竪穴系の埋葬施設に替わって横穴式石室が採用されるが、大法３号墳 (41) や三保６号墳 (21)、大栄町上種東３号墳、14号墳 (49) は竪穴系横口式石室とよばれる特異な構造をとる。八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性を持っており、県内では本遺跡周辺に限ってみられることから、この地域が県内でも地域色の濃い地域であったことを示している。中期の古墳群としては大栄町妻波古墳群 (81)、瀬戸古墳群、西穂波古墳群などが知られている。後期では、東伯町槻下古墳群 (73)、塚本古墳群 (68)、大高野古墳群 (69)、斎尾古墳群 (84) が見られる。大高野３号墳には



1.井図地頭遺跡　2.井図地中ソネ遺跡　3.笠見第３遺跡　4.笠取塚古墳　5.別所２号墳　6.別所古墳群　7.八橋狐塚古墳　8.八橋１号墳　9.八橋城跡　10.八橋銅鐸出土地　11.塚の下遺跡　12.八橋２・３・４号墳　13.笠見第１遺跡　14.笠見第２遺跡　15.笠見１号墳　16.笠見２号墳　17.田越第１遺跡　18.田越第２遺跡　19.田越第３・４遺跡　20.田越銅剣出土地　21.三保古墳群　22.三保遺跡群　23.竜ヶ崎古墳群　24.公文古墳群　25.光好古墳群　26.山田１・２号墳　27.福永１号墳　28.福永２号墳　29.福永３号墳　30.大杉１・２号墳　31.妙見山城跡　32.古長古墳　33.矢下古墳　34.宮場古墳　35.杉地古墳群　36.上法万第３遺跡　37.西高尾谷奥遺跡　38.法万経塚　39.西高尾柏谷口遺跡　40.三塚谷遺跡　41.大法古墳群　42.古瓦出土地　43.森藤１・２号古墳　44.森藤遺跡群　45.大峰遺跡　46.八橋野ノ内上大ナル遺跡　47.東高尾東野遺跡　48.服部遺跡群　49.上種東古墳群　50.東峯遺跡　51.上種西古墳群　52.上種中央古墳群　53.上種第１・５遺跡　54.宮尾古墳　55.下種古墳群　56.亀谷遺跡　57.下種第１遺跡　58.野田古墳群　59.高千穂遺跡　60.下鳥池遺跡群　61.下大門遺跡群　62.小高野遺跡　63.上鳥池遺跡群　64.大高台遺跡　65.青木遺跡群　66.斎尾廃寺跡　67.伊勢野第１・２遺跡　68.塚本古墳群　69.大高野古墳群　70.水溜り・駕籠据場遺跡　71.大高野遺跡　72.鐘鋳場遺跡　73.槻下古墳群　74.中尾古墳　75.槻下豪族居館　76.向山遺跡　77.逢東第２遺跡　78.逢東１・２号墳　79.大谷古墳群　80.大谷遺跡群　81.妻波古墳群　82.金屋経塚　83.築山遺跡　84.斎尾古墳群

第３図　周辺遺跡分布図

横穴式石室の中に金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下５号墳（代々１号墳）には金環、鉄刀などが副葬されていた。山田２号墳(26)では丹塗りされた切石石室がみられ、終末期の様相を示すと考えられる。古墳は数多くみられるが、この時期の集落遺跡はあまり多く見つかっていない。

白鳳期～奈良・平安時代

仏教が普及するようになると、県内にも寺院が建立される。県中部では白鳳期に倉吉市大御堂廃寺、東郷町野方弥陀ヶ平廃寺がいち早く建立され、やや遅れて本遺跡周辺でも、東伯町槻下に山陰唯一の特別史跡である斎尾廃寺(66)が造営される。県内の古代寺院の多くが法起寺式の伽藍配置をとるのに対して、斎尾廃寺は法隆寺式の伽藍配置を採用しており特異である。寺域も区画溝の検出により、南北250m、東西160m、約4,000㎡を測ることが確認されている。軒丸瓦は奈良県の紀寺のものと同様で、軒平瓦は法隆寺と同じ均整忍冬唐草文である。遺物は、塑像片、仏頭、鴟尾、鬼瓦、塼仏などが出土している。斎尾廃寺から４㎞南のところには、礎石などは確認されていないが古瓦出土地(42)がある。奈良から平安時代にかけては、東伯町大高野遺跡(71)、水溜り・駕籠据場遺跡(70)、森藤第１遺跡(44)、伊勢野遺跡(67)などがある。特に大高野遺跡では総柱礎石建物跡９棟が検出され、その礎石周辺から炭化した米が出土していることから、八橋郡衙の正倉と考えられている。森藤第１遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡では掘立柱建物跡とともに墨書土器が出土している。平安時代末期には中央の貴族社会のみならず、地方にも末法思想が広まる。そのことが窺われるものとして東伯町金屋(82)、法万(38)には経塚があり、金屋と大栄町西高尾からは銅経筒が出土している。

鎌倉時代

平安時代から古代的な荘園体制がそのまま引き継がれた。名田を多く集めた有力名主の中には荘園内に孤立した荘宅を構え、武士的な性格を持つものが現れるようになる。東伯町槻下には台地に堀を巡らせた50m×30m、50m×40mと並ぶ方形の一段高い敷地が残り、一つには周囲に高さ２mの土塁が築かれており、館跡（75）と考えられる。『伯耆民談記』によると「岩野弾正坊居す」と記され、安永年間に書かれた『槻下神社由来記』にも同者の居城であったと記述され、地頭の館である可能性が高い。当時の荘園体制の崩壊、封建化への変化を窺うことができる。

室町～戦国時代

ＪＲ山陰線八橋駅のすぐ北側の丘陵上には、八橋城跡（９）がある。現在は朝日新聞社の飛行遭難碑が建てられている。八橋城は南北朝時代に築造されたと伝えられ、『伯耆民談記』には、「大江の城と号す。行松左兵衛正盛入道累代の家城なり。然るに大永の五月崩（1524年５月）に尼子経久の為に滅亡し、正盛は浪客の身となり」と記されている。戦国時代までは行松氏、その後尼子氏から毛利方の杉原盛重、さらに豊臣方の南条元継の持城となった。江戸時代には伯耆街道に沿って城下町が形成された。また、東伯町大杉には南条氏の出城とされる妙見山城跡（31）がある。

江戸時代以降

江戸時代には東伯町逢東に伯耆街道の宿駅が置かれた。江戸時代前期の寛永14年(1637年)6月の「因幡伯耆駄賃銀宿賃書付」に「大塚」がみられることからこの時期には宿駅として機能していたことがわかる。また逢東には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれていた。蔵屋敷の規模は東西109m、南北54mで、敷地内には倉庫６棟、官舎２棟、計り小屋１棟が建てられていたと伝えられている。現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。幕末の文久３年(1863年)には外国に対する海岸防備のための砲台が設置された。鳥取県には由良、橋津、赤碕、淀江、境など８箇所に台場が築かれ、海岸防備に当たった。大栄町由良の台場は現在もその原形を留めており、近代史を考える上で重要な資料となっている。東伯町宮場にある井手跡は「反射井手」と呼ばれ、大砲鋳造に必要な水が摂取されたとされている。

（坂本）

注）第３図の古代山陰道のルートは日野尚志1990「伯耆国の駅路について」『佐賀大学教育学部研究論文集』38－2による。

第３章　井図地頭遺跡の調査

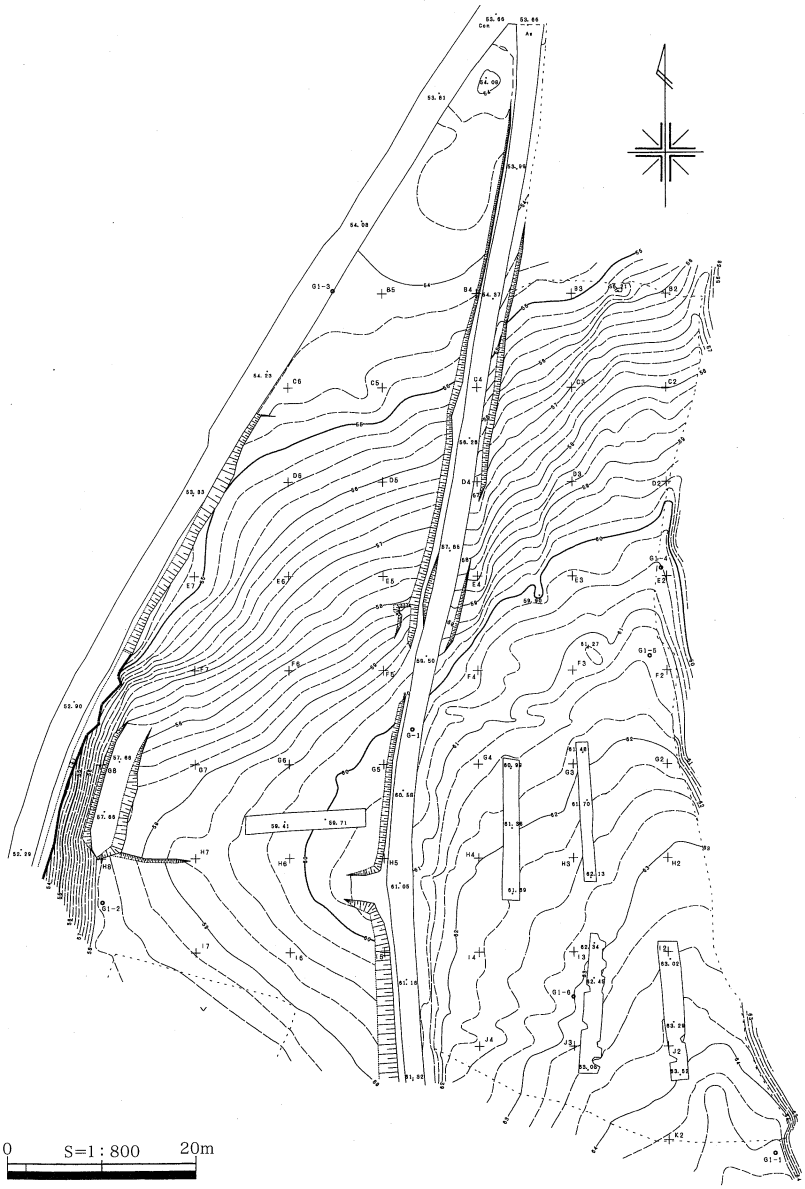
第１節　遺跡の立地と層序

井図地頭遺跡は、東伯町のほぼ中央部を北流する洗川の左岸に位置し、南北にのびる丘陵上に立地している。東伯町から赤碕町にかけては、大山の裾野からのびた台地が海岸近くにまで達し、大山より放射状に流下する中小河川によって尾根状に分断されている。井図地頭遺跡はこの丘陵地の最東端に位置し、調査地からは東方の沖積平野を一望できる。調査地の東辺は河川の浸食によって急崖となっており、崖下に洗川の支流である倉坂川が流れている。調査地と水田面との比高は約20mである。調査地の西側には、幅約70mの小谷を隔てて井図地中ソネ遺跡が立地する。両遺跡は互いを視認できる指呼の間にある。

調査地の標高は約53～64mで、南が高く北へ向けて傾斜している。調査前の地目は、Ａ区が植林地、Ｂ・Ｃ区は畑地である。ただしＢ区はかつて果樹園として利用されていたため、ほぼ全域にわたって、梨の株痕による著しい撹乱がおよんでいた。こうした理由から、調査地内の大部分では、表土及び撹乱土の直下がただちに地山面となっている。

ただし、部分的に包含層が堆積していた箇所もある。A区南側の農道寄りでは、表土・撹乱土の下に暗褐色土が堆積していた（第５、77図）。縄文土器から須恵器まで時期差のある遺物を包含しており、堆積した時期は特定できない。この層の上面では遺構を確認できなかったが、土層断面の検討により、SD９はこの層の上面から掘り込まれていることが判明した。暗褐色土の下には、黄褐色土層が堆積している。地山であるソフトロームに極めて似ているが、色調がやや暗い。この層も縄文時代から中世初頭までの土器を包含している。黄褐色土の分布範囲は、方形区画（SD８、10）の内側（南側）にほぼ相当する。

B区のHグリッドライン以南は、畑地の造成のため大きく削平されて平坦となっており、遺構もまったく検出されなかった。Ｂ区北西斜面上のＥ６・Ｆ６グリッド付近では、表土下に暗黄褐色土が堆積していた(第６図)。縄文時代～７世紀代の遺物を包含している。土質はローム土と似ており、高所から流出した地山土が堆積したものかもしれない。Ｂ区北側のＤグリッドライン以北で



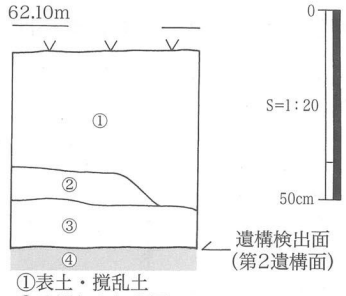
第４図　調査前地形測量図

は、表土以下撹乱土、茶褐色土、黒褐色土、黒色土、地山土の順に堆積している（第７図）。茶褐色土上面では果樹の株痕を検出したが、遺構は確認されなかった。この茶褐色土と撹乱土からは、７世紀代の土師器・須恵器が大量に出土した。これらのなかには、Ａ区の遺構から出土した破片と接合したものもある。したがってこれらの土は、７世紀代の遺構密度が高いＡ区南端付近に存在していたものが、削平や流出などによってＢ区南端に移動したものであろう。

黒褐色土・黒色土は、大山北麓に広く分布するいわゆる「黒ボク土」に相当すると思われる。土層断面の検討から、SK17・SK25がこの層の上面から掘り込まれていることがわかった。また、A区北端のB３・C３グリッドでは、撹乱土の除去後にB区と一連の堆積と思われる黒褐色土層を検出した。この層の上面ではSD４などの遺構を面的に確認したため、黒褐色土上面を第１遺構面、地山面を第２遺構面とした。また、同様の黒褐色土・黒色土はB区E６・E７グリッドにも堆積している。このように、黒褐色土・黒色土は調査区内の標高の低い箇所に堆積していたものであるが、比較的標高の高いA・B両区南側の遺構にも、黒褐色土を埋土とするものがあることから、本来は調査区全体に存在していた可能性もある。なお、黒褐色土・黒色土はその土量に比して包含する遺物は非常に少なく、須恵器や支脚の破片など数点が出土したに過ぎない。

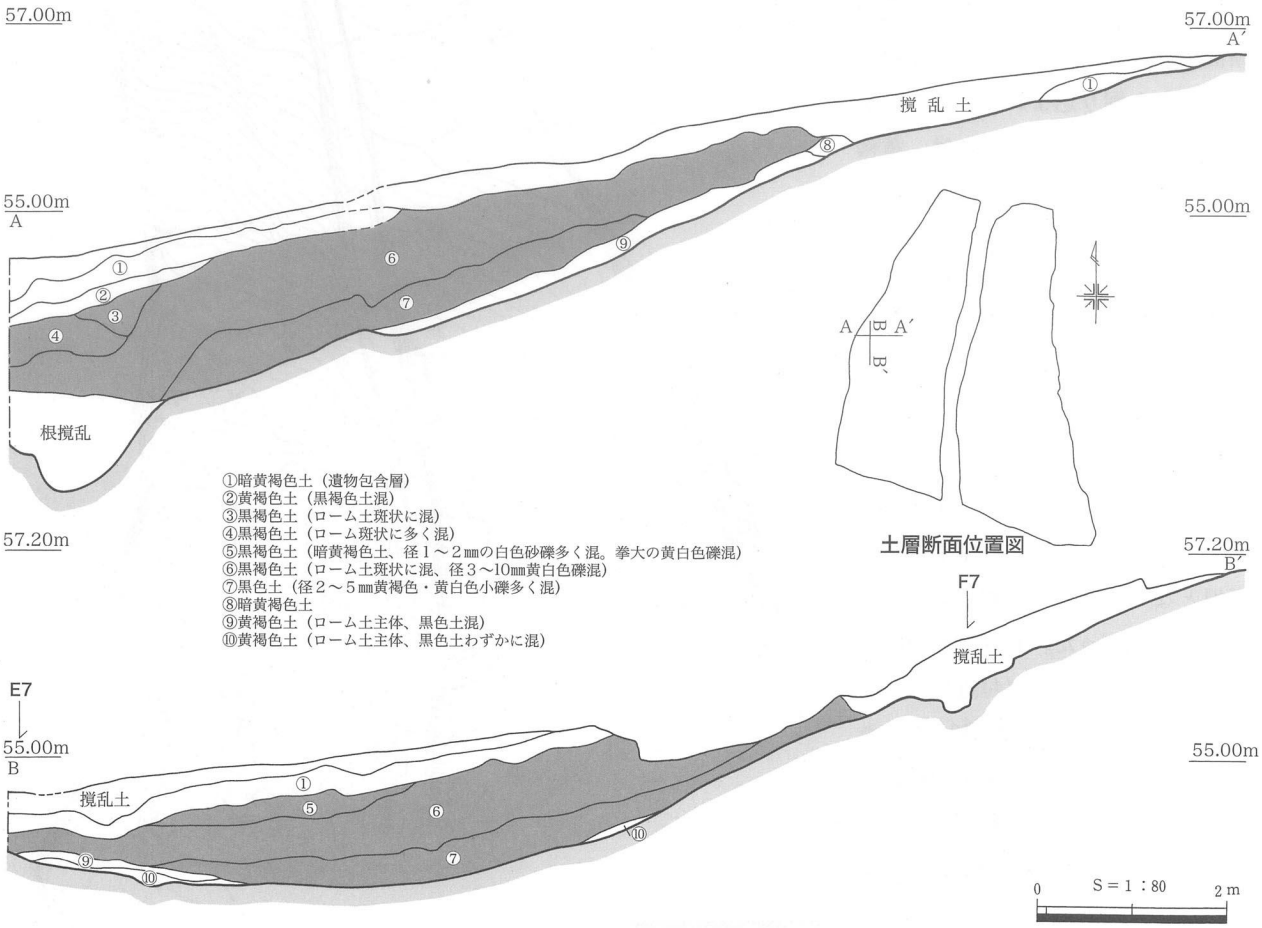
調査地内の基盤層（地山）は基本的に黄褐色のソフトローム土であるが、A区北側ではローム土の削平・流出のためホーキ層が確認面となった（第85図）。B区北端では、ソフトローム上に大山倉吉軽石（以下DKP、約45,000年前）の堆積がみられ、この上面が確認面となった。DKPは本来、姶良火山灰層（ＡＴ層）よりも下位の層順であることから、ここでみられた堆積は二次的なものであろう。

（君嶋）

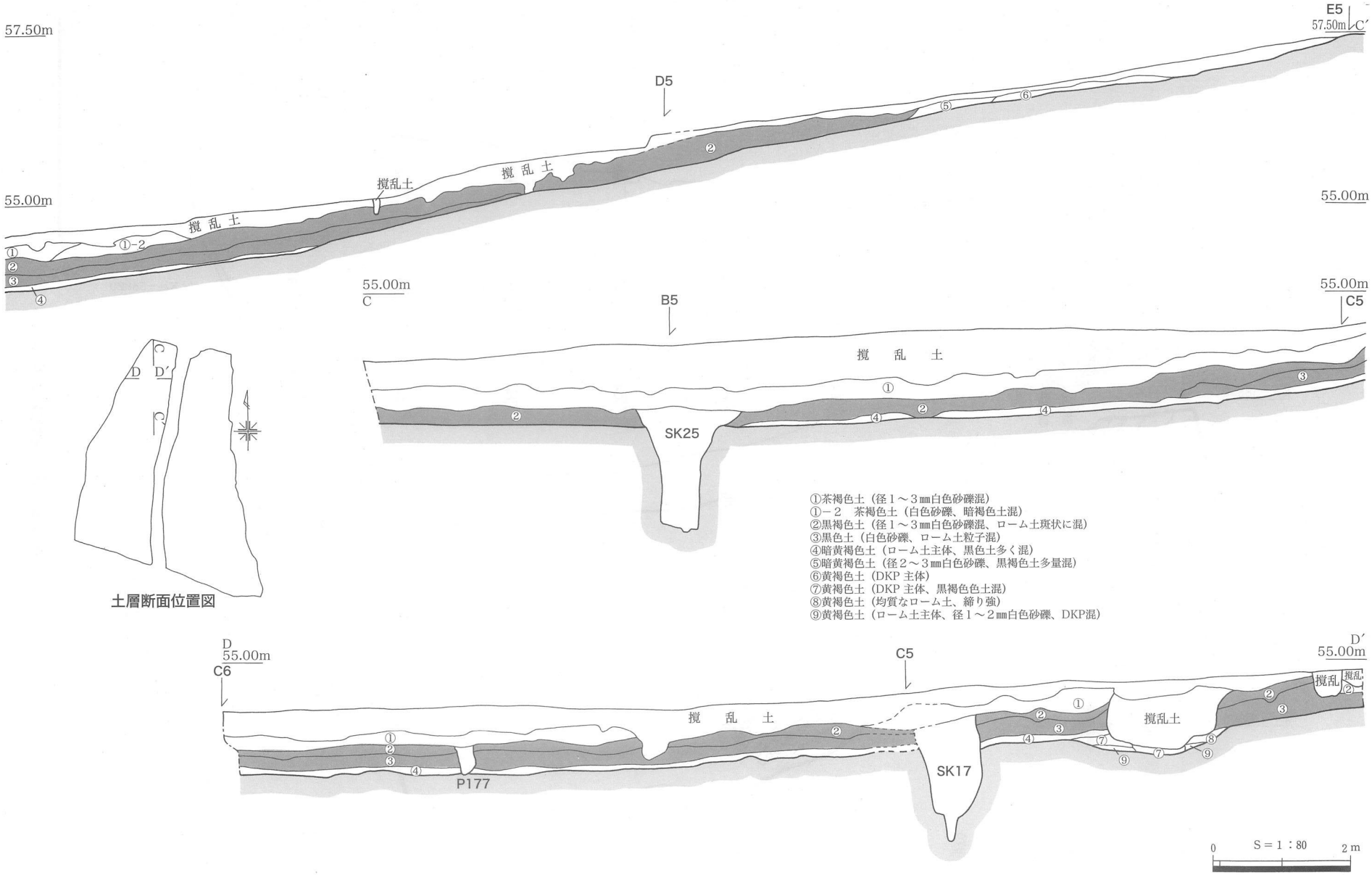


①表土・撹乱土
②暗褐色土包含層
③黄褐色土包含層
④黄褐色土（ソフトローム）

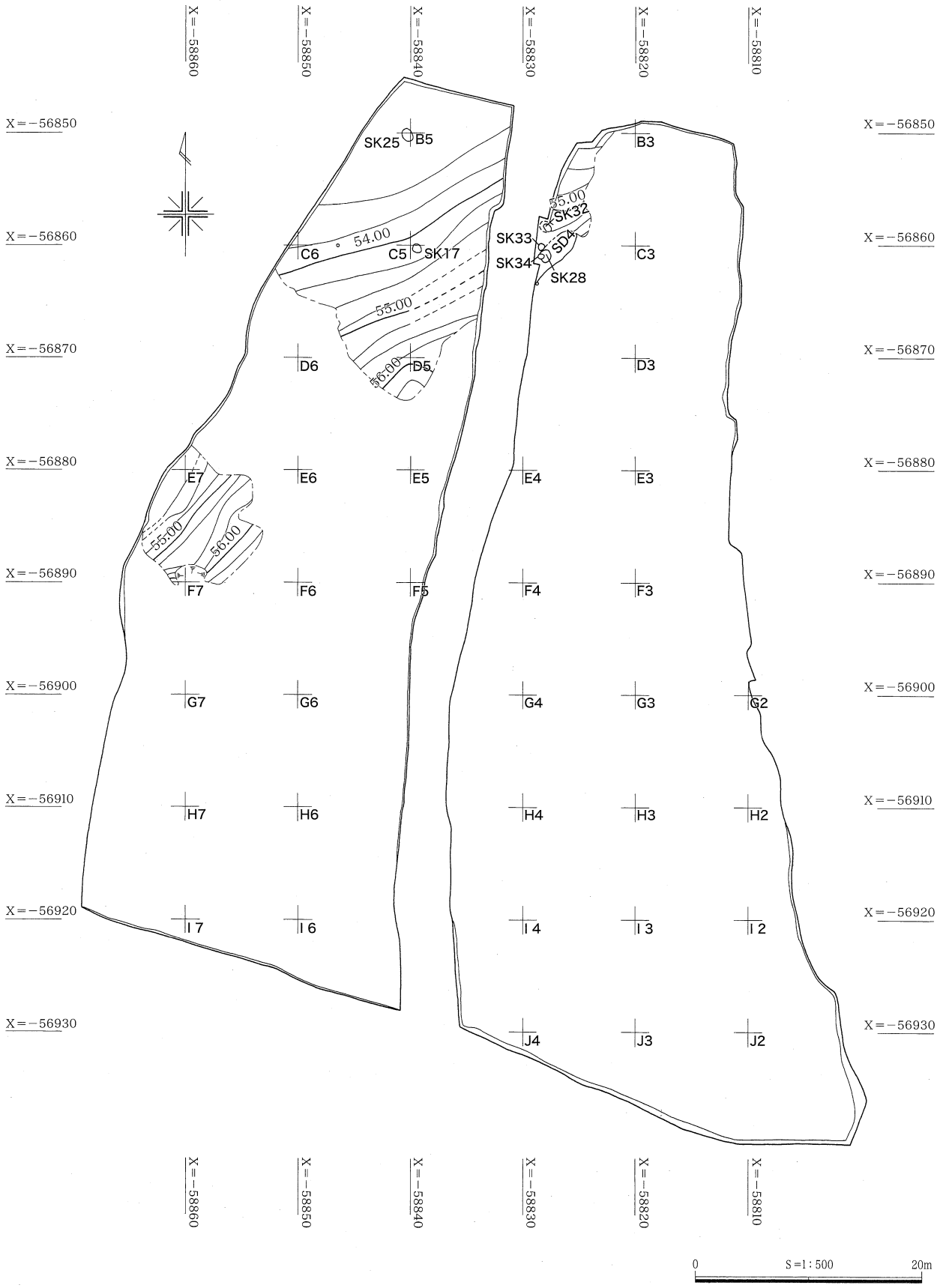
第５図　Ａ区南側層序模式図



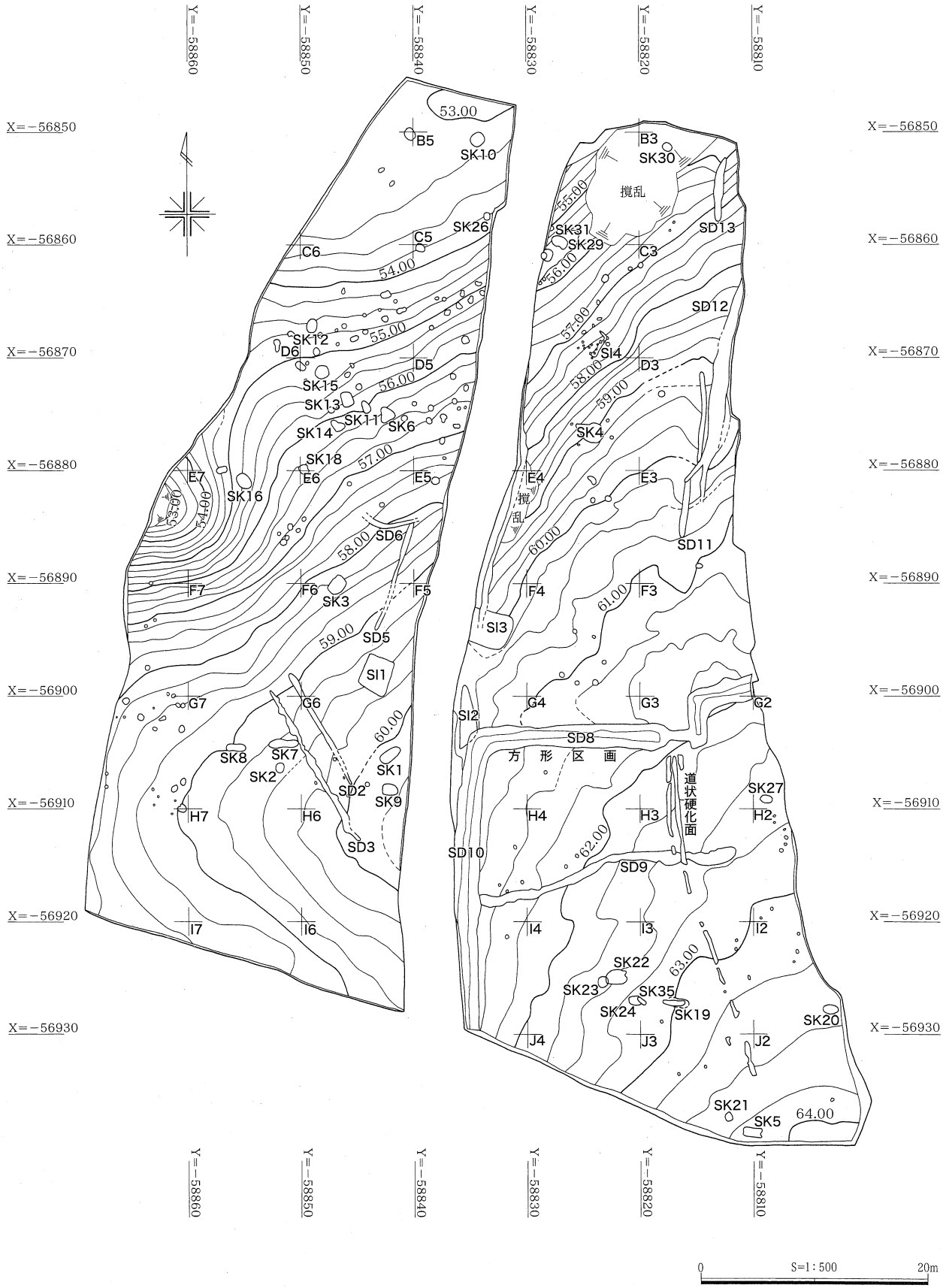
第６図　Ｂ区土層断面図（１）


57.50m
55.00m
E5
57.50m
C′
D5
撹乱土
撹乱土
①-2
①
②
③
④
⑤
⑥
55.00m
C
B5
55.00m
C5
撹　乱　土
SK25
①
②
③
④
D
D′
C
C′
土層断面位置図
①茶褐色土（径１～３㎜白色砂礫混）
①－２　茶褐色土（白色砂礫、暗褐色土混）
②黒褐色土（径１～３㎜白色砂礫混、ローム土斑状に混）
③黒色土（白色砂礫、ローム土粒子混）
④暗黄褐色土（ローム土主体、黒色土多く混）
⑤暗黄褐色土（径２～３㎜白色砂礫、黒褐色土多量混）
⑥黄褐色土（DKP 主体）
⑦黄褐色土（DKP 主体、黒褐色色土混）
⑧黄褐色土（均質なローム土、締り強）
⑨黄褐色土（ローム土主体、径１～２㎜白色砂礫、DKP混）
D
55.00m
C6
C5
D′
55.00m
撹　乱　土
撹乱土
撹乱
P177
SK17
①
②
③
④
⑦
⑧
⑨
0
S＝1：80
2 m

第７図　Ｂ区土層断面（２）



第８図　第１遺構面全体図



第９図　第２遺構面全体図

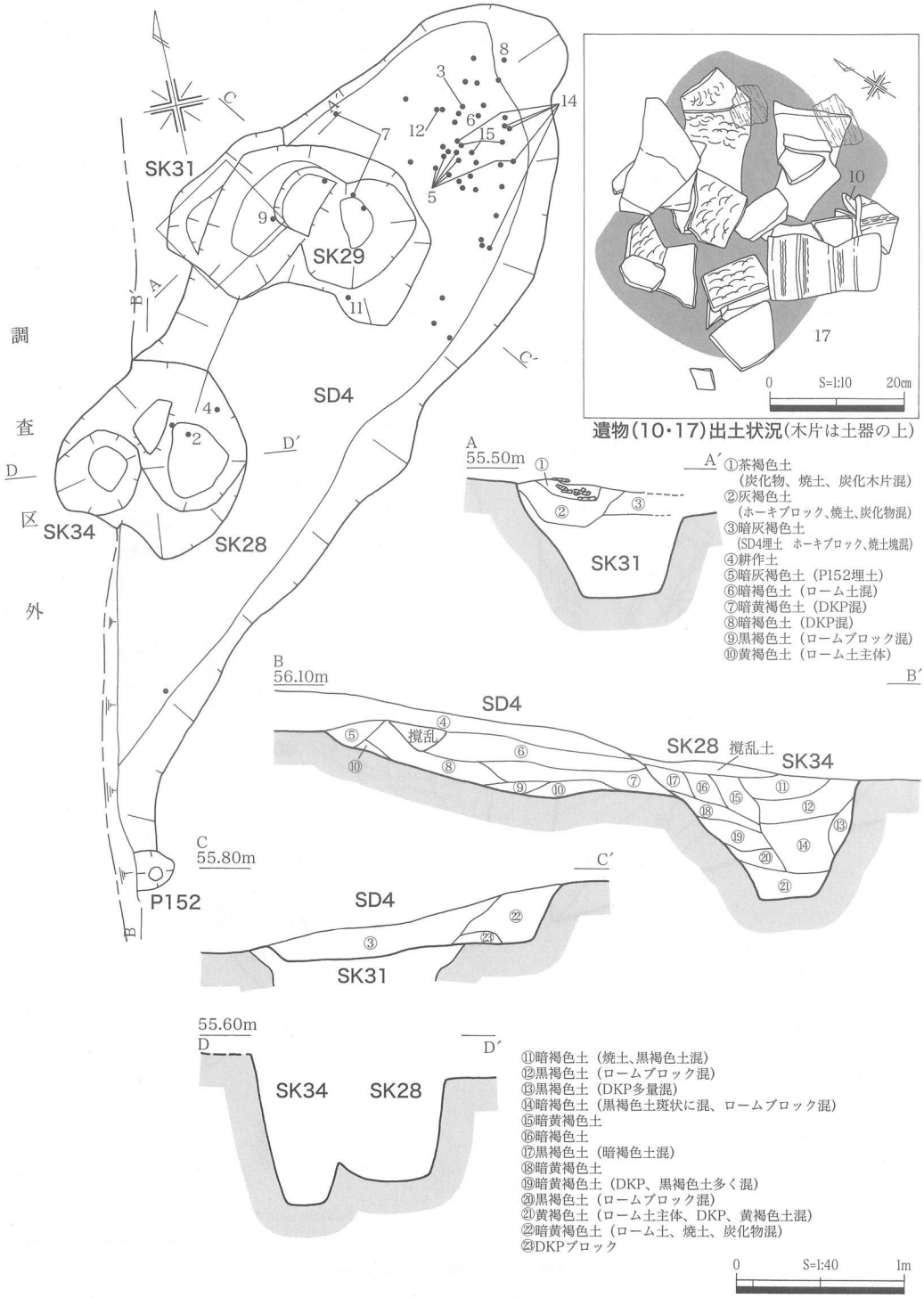
第２節　第１遺構面の調査

（１）概要

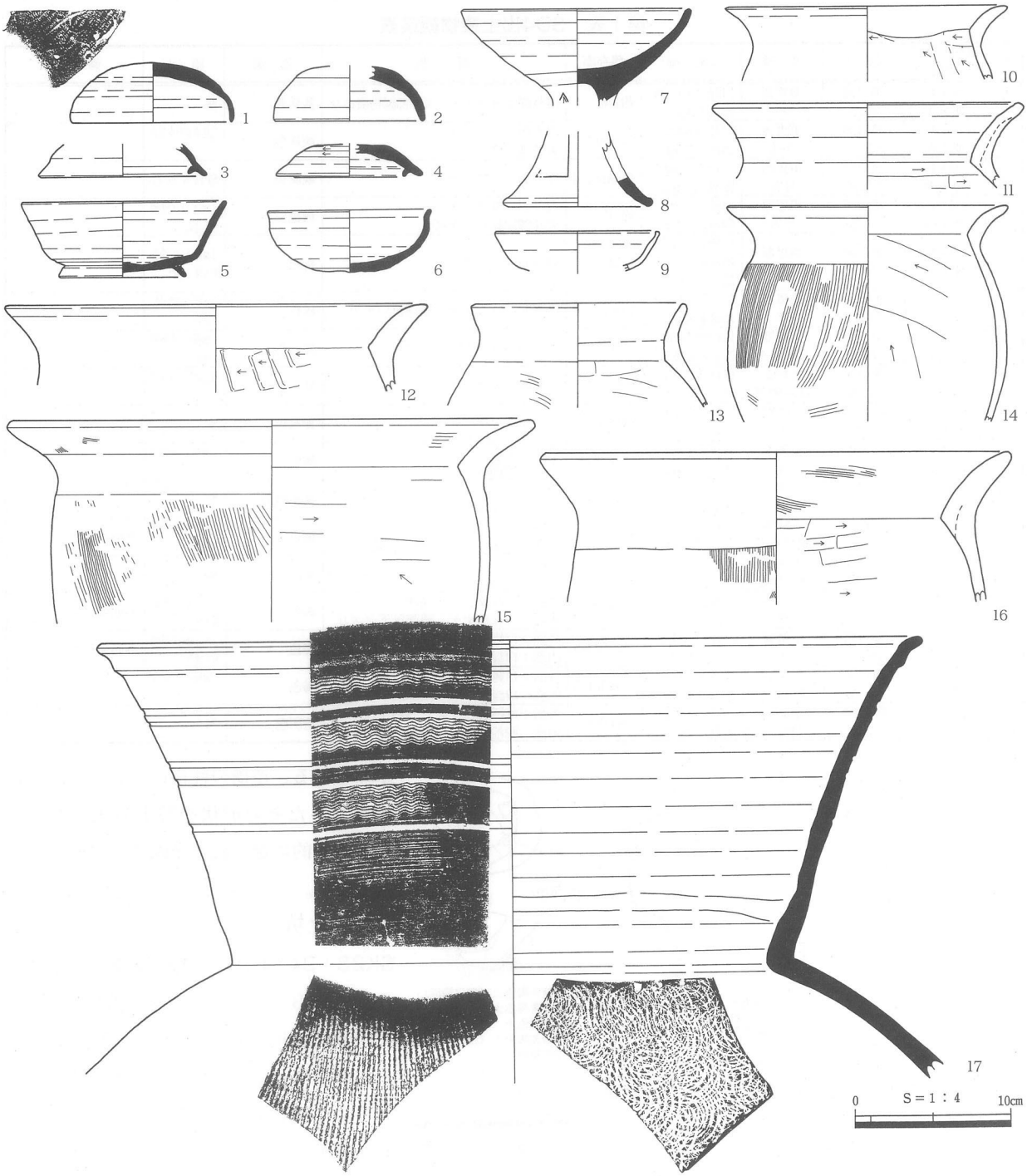
黒褐色土上面である第１遺構面では、溝状遺構１、土坑６、ピット２を検出した。これらは、暗褐色土系の埋土をもつもの（SD４、SK28・32・33・34）と、黒褐色土系の埋土をもつもの（SK17・26）とに大別できる。前者はA区B３・C３グリッドに集中し、７世紀代を中心とする遺物が出土している。一方で後者からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（２）溝状遺構

SD４（第10・11図、第１表、PL.３）



第10図　SD４・SK28・SK34

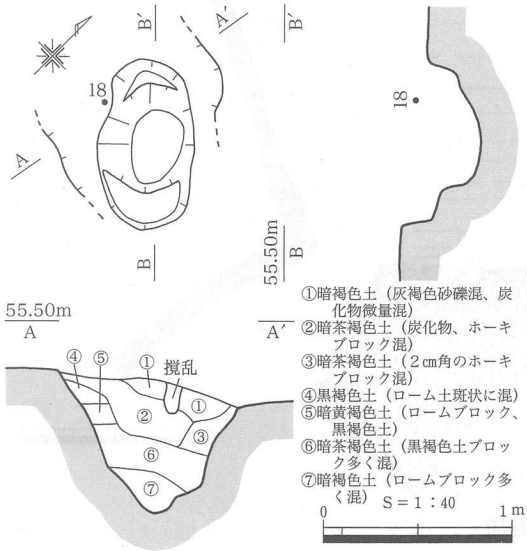


第11図　SD４出土遺物

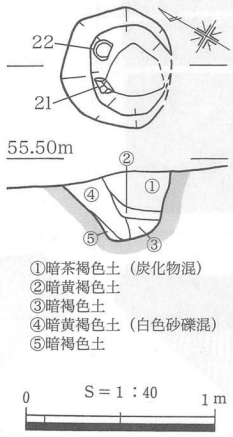
Ａ区Ｂ３・Ｃ３グリッド、標高55.3～55.8mの緩斜面に位置する。SK28・29・31・34と重複しているが、その先後関係は、土層の観察よりSK29→SK31→SD４→SK28→SK34となる。北東―南西方向に主軸をとり、南西側は調査区外へのびている。検出した規模は、長さ5.2m、幅1.6～1.7m、検出面からの深さ35㎝である。底面はおおむね平坦で、南西側より北東側がわずかに低い。埋土は暗褐色土を主体とし、砂礫の混入など流水の痕跡は窺えない。遺物は埋土中から土器片が多量に出土した。出土位置は特に北東端に集中しており、ほとんどが小片である。これらのうち１～４の蓋類は高広編年ⅡB期、６はⅢA期頃に位置づけられる。また、SK31の直上にあたる位置で須恵器大型甕の破片17が出土した。土層断面（A－A′）の観察によれば、③層堆積後に径60㎝程度の穴が掘り込まれ、①層・②層の土とともに投棄されたものとみられる。①層は土壌化した炭化物を主体とし、焼土及び炭化木片を含む。したがって17は、廃棄の時期は北東端埋土中の一群より遅れるが、編年上はやや古く位置づけられる。以上のように出土遺物の時期には幅があるが、埋没時期の上限はⅢA期（７世紀中葉～末葉）頃に

第１表　SD4出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
1	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	須恵器 坏	口径※10.1cm 器高3.9cm	約1/6	内外面：ヨコナデ　天井部編物痕あり	淡灰色	密	
2	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	須恵器 坏蓋	口径※8.6cm 器高△3.5cm	口縁部1/7	内外面：ヨコナデ 天井部ナデ	淡灰色	白色砂粒を少量含む	
3	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	須恵器 坏蓋	口径※8.4cm 器高△2.1cm	口縁部1/4	内外面：ヨコナデ	淡灰色	砂粒を含む	
4	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	須恵器 坏蓋	口径※７cm 器高△2.1cm	約1/2	内外面：ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	灰色	1mm以下の白色砂粒を含む	
5	SD４ 埋土中	第11図 PL.21	須恵器 高台坏	口径※13.0cm 器高4.9cm 底径8.0cm	口縁約3/5	内外面：ヨコナデ	灰色	2mm以下の白色砂粒を多く含む	
6	SD４ 埋土中	第11図 PL.21	須恵器 坏	口径※10.3cm 器高4.0cm	約3/5	内外面：ヨコナデ　底部粗いナデ	灰色	1mm程の白色砂粒を含む	
7	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	須恵器 高坏坏部	口径※14.4cm 器高△6.2cm	坏部1/3	内外面：ヨコナデ	灰白色	1mm程の白色砂粒を含む	
8	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	須恵器 高坏脚部	底径※9.0cm 器高△4.8cm	約1/2	内外面：ヨコナデ	灰白色	白色砂粒を少量含む	
9	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	土師器 坏	口径※10.3cm 器高△2.5cm	口縁部1/5	内外面：ナデ	赤褐色	密	
10	SD４ 埋土中	第11図	土師器 甕	口径※17.7cm 器高△4.7cm	口縁部1/5	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	1mm程の白色砂粒を含む	
11	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	土師器 甕	口径※19.4cm 器高△5.4cm	約1/5	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	淡赤褐色	密	
12	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	土師器 甕口縁部	口径※27.2cm 器高△5.6cm	約1/5	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ(工具痕あり)	褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面煤付着
13	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	土師器 甕口縁部	口径※13.2cm 器高△8.7cm	口縁部1/6	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	細砂を多く含む	
14	SD４ 埋土中	第11図 PL.21	土師器 甕	口径※17.8cm 器高△13.8cm	口縁部1/4	外面：口縁部ナデ　胴部ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	褐色	2～3mmの白色砂粒を含む	外面煤付着
15	SD４ 埋土中	第11図 PL.21	土師器 甕	口径※33.2cm 器高△13cm	口縁部3/5	外面：口縁部ナデ　胴部ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	褐色	2～3mmの白色砂粒を含む	外面煤付着
16	SD４ 埋土中	第11図 PL.20	土師器 甕口縁部	口径※29.6cm 器高△9.6cm	口縁部1/3	外面：口縁部ナデ　胴部ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	褐色	2mm程の白色砂粒を含む	
17	SD４ 埋土中	第11図 PL.21	須恵器 大型甕口縁部	口径※53.0cm 器高△28.3cm	口縁部1/5	外面：頸部波状文を施す　胴部平行タタキ 内面：胴部同心円状の当具痕	暗灰色	密	



第12図　SK32



第13図　SK33

求められる。遺構の性格については、直線的で整ったその形状や埋土の状況などから、人為的に掘られた区画溝の可能性が考えられる。（君嶋）

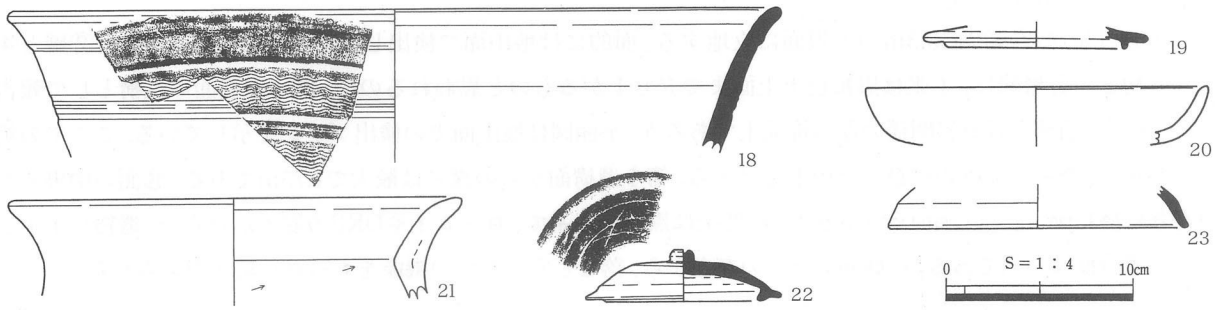
（３）土坑

SK28・34（第10・14図、第２表、PL.４）

Ａ区Ｂ３・Ｃ３グリッド、標高約55.5mの緩斜面に位置し、SD４と重複する。両土坑は全体として長径1.2m、短径1.15mのいびつな円形を呈する。東西方向に並列して底面をもち、検出面からの深さはSK28が60cm、SK34が90cmである。SK28はSD４の埋土に掘り込まれており、SD４に後出する。またSK34はSK28を切っており、⑪～⑭層がその埋土に相当する。埋土はともに暗褐色土系の土を主体とし、黒褐色土が混じる。遺物は、SK34の埋土中から須恵器坏蓋23が出土した。遺物の特徴およびSD４に後出することから、７世紀末葉～８世紀初頭頃に埋没した遺構と考えられる。（君嶋）

SK32（第12・14図、第２表、PL.４）

Ａ区Ｂ３グリッドの調査区際、標高55.3mの緩斜面に位置する。北西・南東方向の両端が撹乱で破壊されているため全体の形状及び規模は不明であるが、本来は北西―南東方向に主軸をとる楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大で80cmである。主軸に沿って、底面より高い位置にテラス状の平坦面をもつ。埋土は暗褐色土系で、①・②層には炭化物が混じる。遺物は、埋土中より土器片が十数点出土した。須恵器蓋19は高広ⅡB期（７世紀前半～中葉）以降の特徴をもつことから、埋没時期の上限は７世紀代と考えられる。（君嶋）



第14図　SK32・33・34 出土遺物

第２表　SK32・33・34出土遺物観察

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
18	SK32 埋土中	第14図 PL.20	須恵器 大型甕口縁部	口径※40.6cm 器高△7.8cm	口縁部1/3	外面：波状文	暗灰色	密	
19	SK32 埋土中	第14図 PL.20	須恵器 坏蓋	口径※9.4cm 器高△1.1cm	口縁部1/3	内外面：ヨコナデ	黄灰色	密	
20	SK32 埋土中	第14図 PL.20	土師器 坏	口径※18.2cm 器高△3.1cm	口縁部1/3	内外面：ナデ	赤褐色	1㎜以下の白色砂粒を含む	
21	SK33 検出面	第14図 PL.20	土師器 甕	口径※24.2cm 器高△5.4cm	口縁部1/3	外面：口縁部ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	1～2㎜の砂粒を含む	
22	SK33 検出面	第14図 PL.21	須恵器 坏蓋	口径※8.1cm 器高△2.8cm	約4/5	内外面：ヨコナデ　天井部回転ヘラケズリ	淡灰色	1㎜程の白色砂粒を微量に含む	天井部ヘラ記号あり
23	SK34 埋土中	第14図 PL.20	須恵器 坏	口径※15.6cm 器高△1.2cm	口縁部1/3	内外面：ヨコナデ	灰色	1㎜以下の白色砂粒を含む	

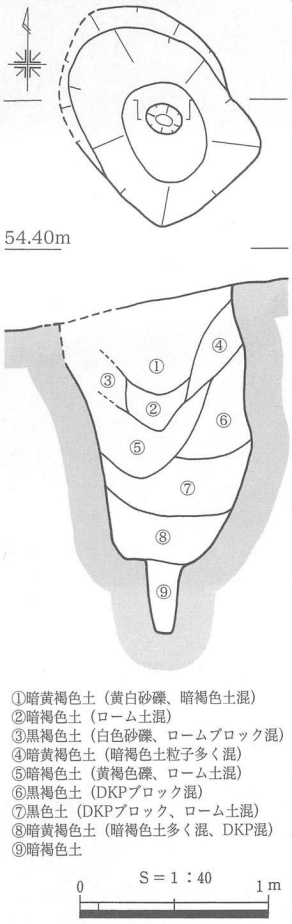
SK33（第13・14図、第２表、PL.４）

Ａ区Ｃ３グリッドの調査区際、標高55.35～55.45mの緩斜面に位置し、SD４の北辺に隣接する。長径65cm、短径60cmの円形を呈する。検出面からの深さは最大で35cmである。埋土は暗褐色土系で、①層には炭化物が混じる。遺物は、埋土中より土師器・須恵器片が十数点出土した。小片が殆どであるが、図化し得た土師器甕21、須恵器坏蓋22はともに検出面上での出土である。22は高広ⅡB期に位置づけられ、７世紀代に埋没した遺構と考えられる。

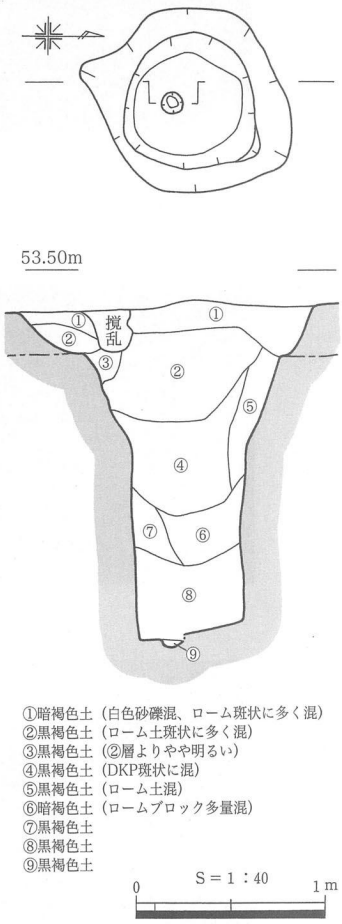
以上、SD４の周辺で検出したSK28・32・33・34の４基の土坑は、いずれも７世紀代に埋没した遺構と考えられる。その性格については明確にしがたいが、土器片の出土や、埋土に焼土や炭化物が混じるなどの共通点から、廃棄土坑の可能性が考えられる。　（君嶋）

SK17（第15図、PL.４）

Ｂ区Ｃ４グリッド、標高54.0～54.2mの緩斜面に位置する。面的には地山面で検出したが、土層断面の検討から黒褐色土上面（第１遺構面）より掘り込まれていることがわかった。平面図では、北半分が黒褐色土上面、南半分が地山面でのプランを示している。図上で規模を求めると長径1.17m、短径0.85mのいびつな楕円形となる。黒褐色土上面からの深さは最大で1.5mである。底面の中央やや北寄りには、長径20cm、短径15cm、深さ37cmのピットをもつ。埋土は黒褐色土系で、①層～⑤層にかけては掘り返されたような堆積である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、底面ピットの存在から、落とし穴としての機能をもった土坑と考えられる。　（君嶋）



第15図　SK17



第16図　SK25

SK25（第16図、PL.４）

Ｂ区Ｂ５杭周辺、標高53.3mの平坦面に立地する。面的には地山面で検出したが、土層断面における②層と④層・⑤層との分層線は、本来は黒褐色土上面まで立ち上がるものと思われるので、第１遺構面の遺構として報告する。①層は遺構とは直接関係のない撹乱土であろう。平面図は地山面での検出プランを示している。ここでの規模と形状は、径90～95cmのいびつな円形を呈する。第１遺構面からの深さは最大で1.75mである。底面の中央やや南寄りに径12cm、深さ４cmのピットをもつ。埋土は黒褐色土系で、ローム土やDKPの混入が目立つ。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、底面ピットの存在から、落とし穴としての機能をもった土坑と考えられる。

（君嶋）

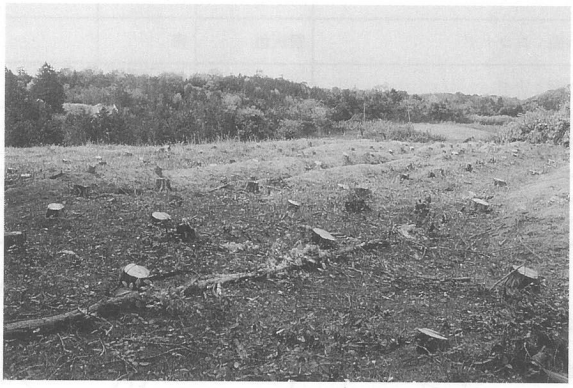


写真１　Ａ区調査前状況（南東から）

写真２　Ｂ区調査前状況（北西から）

写真３　Ｃ区遠景（北西から）

第３節　第２遺構面の調査

（１）概要

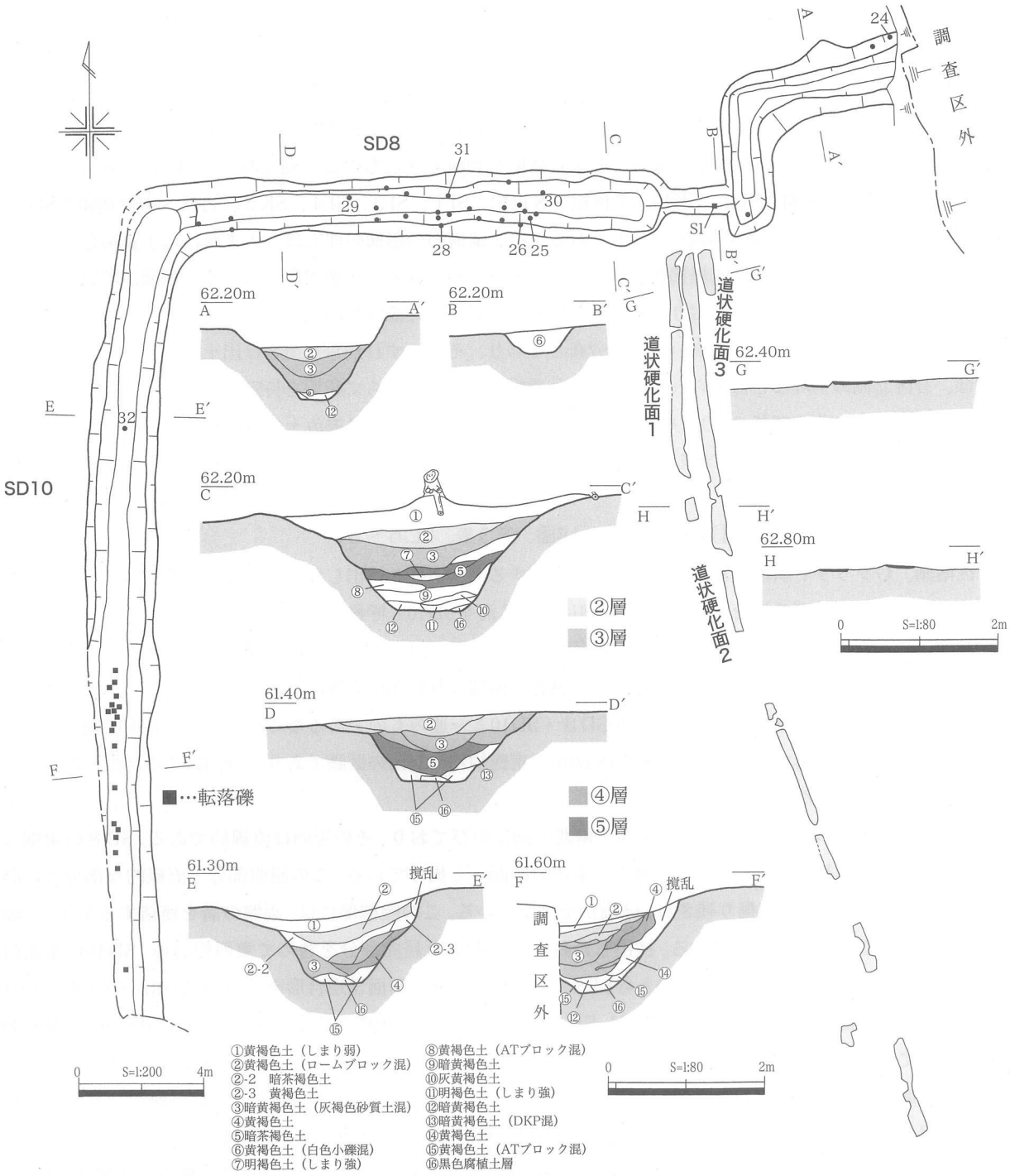
地山面上である第２遺構面では、方形区画、道状硬化面３条、竪穴建物跡４、溝状遺構10、土坑29、ピット175を検出した。これらのうち、出土遺物などから時期を判断できたものは、縄文時代：SK５、SK21、弥生時代：SD２、古墳時代前期：SI２、SK19、７世紀～８世紀：SI１、SI３、SI４、SK３、古代～中世初頭：SD９、方形区画（SD８・SD10）、近世初頭：SD１である。第２遺構面の遺構の埋土は、大まかには①黄褐色土系、②暗黄褐色土系、③茶褐色土系、④黒褐色土系に分類することができる。①黄褐色土は、やや色調が暗いものの地山であるソフトロームに酷似しており、埋土と遺構壁面・底面との識別が困難なほどであった。この土を埋土とする遺構はＡ・Ｂ区南側の標高の高い区域に分布しており、そのいずれからも遺物は出土していない。②暗黄褐色土は、Ｂ区北側の土坑などにみられるが、やはり遺物が出土しておらず時期を特定できない。③茶褐色土を埋土とする遺構には、弥生時代のSD２や８世紀代のSK３などがある。④黒褐色土は、古墳時代前期のSI２、７世紀後半のSI１のほか、落とし穴と考えられる土坑の埋土となっている。（君嶋）

（２）方形区画（SD８・SD10）（第17・18図、第３表、PL.６～８）

Ａ区南側、Ｇグリッド以南において、Ｌ字状に屈曲する溝状遺構を検出した。当初は２条の別個の溝と認識したため、東西方向にのびる溝をSD８、南北方向にのびる溝をSD10と呼称した。そして、SD８によって北辺を、SD10によって西辺を画された区画全体を「方形区画」と呼ぶことにした。SD10の南端は調査区外へとのびていくため、調査区南側の植林地を踏査したところ、調査区南端より約30m南側に、東西方向にのびる溝状の落ち込みが現存していることを確認した。この溝がSD８・SD10と一連のものであるならば、この「方形区画」は北・西・南を「コ」字状の溝で囲まれた南北約50～60m、東西約25～34mの区画であり、今回はこの区画のおよそ北半分を調査したことになる。

SD８・SD10は、それぞれほぼ正確に東西・南北方向にのびており、その走向は直線的である。SD８の東端は４mほど北側へ張り出し、直角に折れて調査区東辺の崖面へと抜けている。この屈曲部分と直線的な部分との間は、約２mにわたって地山が掘り残され、陸橋状を呈している。この陸橋部には、両側の溝を連結するように、幅80cm、深さ35cmの細い溝が通っている。検出した長さは、SD８は屈曲部分を含めて東西約24m、SD10は南北約26.5mである。検出面での幅はSD８・10とも1.5～2.3mである。溝の断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.1～1.5mである。底面はおおむね平坦であるが、SD８とSD10が交わる箇所に段差があり、SD８の底面の方が約30cm高くなっている。埋土は黄褐色・暗黄褐色のローム土を主体とし、帯水していた様相は窺えない。ただし、最下層には黒色腐植土層が溝に平行して帯状に堆積している。また、埋土が区画の内側もしくは外側の一方から流れ込んだ状況、すなわち土塁の存在を示唆するような堆積も明瞭には認められない。遺物は、埋土中より土器・石器が数十点出土しているが、土量の割に点数は少なく、散漫な出土状況である。また、縄文時代晩期の突帯文深鉢24、古墳時代の土師器25～29、７世紀代の須恵器30、31など、非常に幅広い時期の土器が出土している。それらの中で、最も時期の下るものはSD10出土の土師質坏形土器32で、溝底より5cmほど浮いて出土した。底外面に回転糸切痕をもち、八峠　興の編年[註]では平安４期（11世紀末～12世紀初頭）に位置づけられる。これに近い時期の土器は方形区画内に堆積した黄褐色土包含層からも数点出土しており（第77図98～100）、これらより新しい中世の遺物はまったく出土していないことから、SD８・10の埋没時期は中世初頭（11世紀末～12世紀初頭）と考えたい。

この方形区画の性格、すなわちSD８・SD10が何を区画していたものであるかについては、建物を構成する柱穴が検出されておらず不明である。ただし、SD10のＦ－Ｆ′ライン付近の埋土中から、人頭大の扁平な川原石が多数出土しており、また区画内の黄褐色土包含層からも同程度の石が何個か検出された。このことから、これらの石を礎石として用いた簡略な建物が存在していた可能性は考え得る。また当然のことながら、建物・施設の有無に関しては、区画内の南側半分を占める未調査地の存在を考慮しなければならない。



第17図　方形区画・道状硬化面

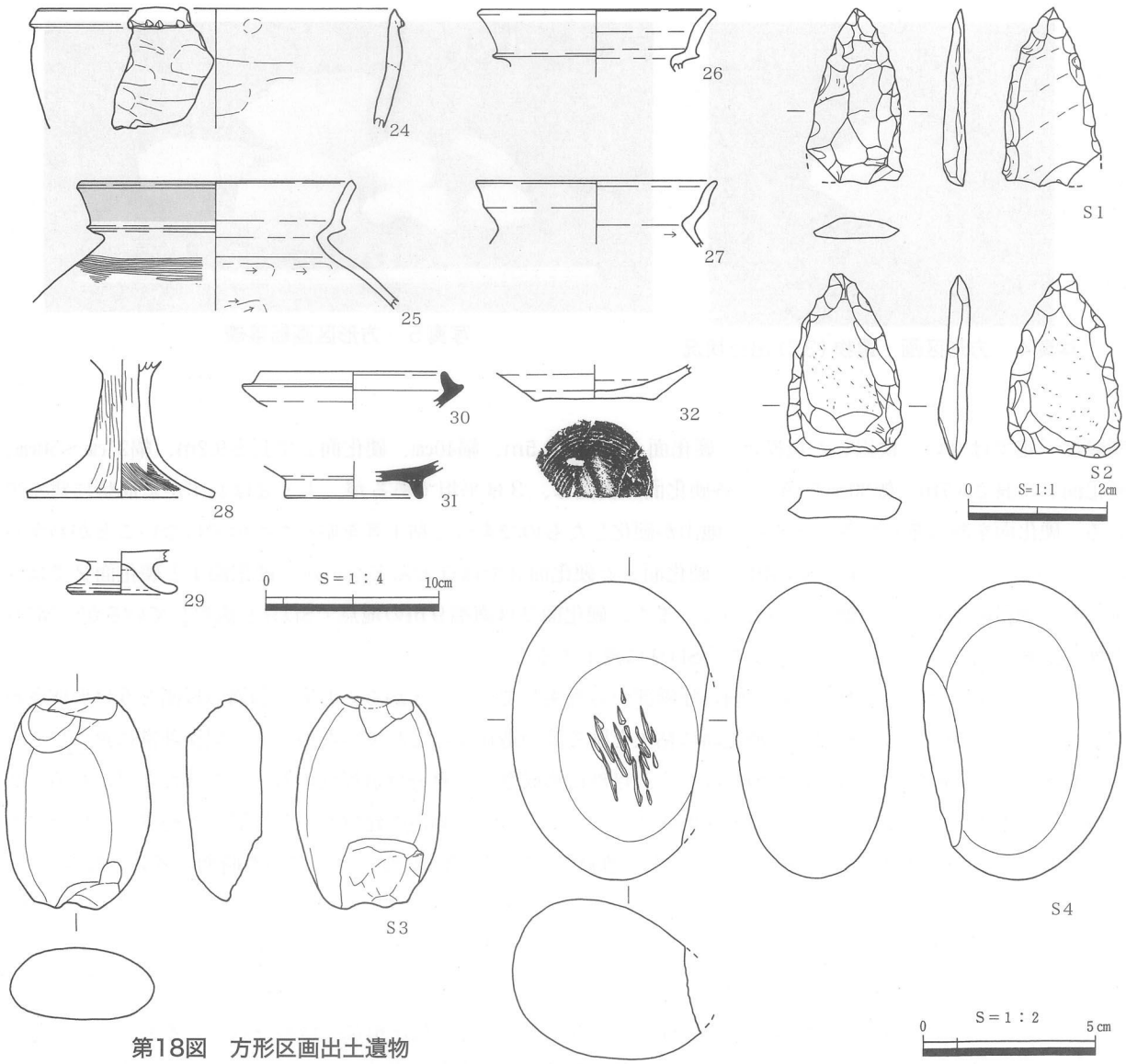
このように、方形区画の性格を明らかにするには材料不足であるが、この点については第６章第１節で補足する。

（君嶋）

註）　八峠　興　2000　「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ、日本中世土器研究会

（３）道状硬化面（第17図、PL.7）

A区Ｇ３～J1・２グリッドにあり、標高63.5m～62.0mに位置する。北西へなだらかに下る緩斜面上にある。方形区画内にあり、方形区画(SD８)の陸橋部1.2m南の地点から３本の硬化面が南に向かってのびる。硬化面２は南東に向かってやや弧を描きながらのびており、引き続き調査区外へとのびていく可能性は高い。硬化面は断続的に検出されたが、一連のものとして考えられる。硬化面３は本来、硬化面２に沿ってのびると思われるが、



第18図　方形区画出土遺物

第３表　方形区画出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
24	SD8 埋土上層	第18図 PL.22	縄文突帯文 深鉢口縁部	口径※20.6cm 器高△7.0cm	口縁部1/10 以下	外面：粗いナデ 内面：ナデ	淡褐色	1～2㎜の白色砂 粒を多く含む	
25	SD８ 埋土中	第18図 PL.22	土師器 甕口縁部	口径※15.6cm 器高△7.4cm	口縁部1/10 以下	外面：ナデ　肩部平行沈線を施す 内面：頸部以下ケズリ	褐色	密	口縁外面に赤彩
26	SD８ 埋土中層	第18図 PL.22	土師器 甕口縁部	口径※13.2cm 器高△3.4cm	口縁部1/7	内外面：ナデ	淡褐色	密	外面煤付着
27	SD８ 埋土中	第18図 PL.22	土師器 甕口縁部	口径※14cm 器高△3.8cm	口縁部1/10 以下	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	密	
28	SD８ 埋土上層	第18図 PL.22	土師器 高坏　脚部	底径※10.8cm 器高△8.5cm	脚部1/5	外面：ミガキ 内面：ハケ	淡褐色	密	
29	SD８ 埋土中層	第18図 PL.22	土師器 低脚坏　脚部	底径※5.6cm 器高△2.6cm	底部約3/5	内外面：ナデ	淡褐色	１㎜程の白色砂 粒を含む	
30	SD8 埋土下層	第18図 PL.22	須恵器 坏	口径※10.6cm 器高△2.1cm	口部1/4	内外面：ヨコナデ	黄灰色	密	
31	SD８ 埋土中層	第18図 PL.22	須恵器 高台坏底部	底径※7.5cm 器高△2.1cm	底部1/6	内外面：ヨコナデ	灰色	密	
32	SD10 埋土最下層	第18図 PL.22	土師質土器 坏	底径※7.0cm 器高△2.0cm	底部3/5	内外面：ナデ 底部外面回転糸切り	淡褐色	密	

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	短軸 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S1	SD８ 埋土中	第18図 P.L30	石鏃	平基式	2.55	1.4	0.3	1.2	ガラス質安 山岩	
S2	SD８ 埋土中	第18図 P.L30	石鏃	平基式	2.65	1.65	0.4	1.8	ガラス質安 山岩	
S3	ＳD10 埋土中	第18図 P.L.29	石錘	円礫の長軸方向の両端を打ち 欠く	6.2	4.2	2.2	64	石英安山岩	
S4	SD８ 埋土中	第18図 P.L30	礫石器	表面中央に断面V字状の掻痕跡 がみられる	12.8	8.2	6.2	1000	安山岩質 凝灰角礫岩	

写真４　方形区画　遺物（32）出土状況

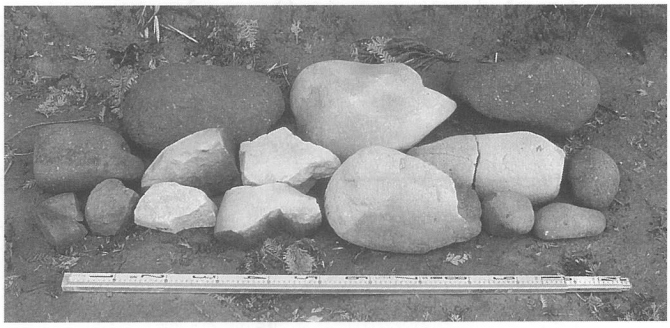


写真５　方形区画転落礫

間隔は一定ではない。検出した規模は、硬化面１で長さ1.5m、幅40㎝、硬化面２で長さ9.2m、幅25㎝～50㎝、硬化面３で長さ8.7m、幅30㎝を測る。各硬化面の表面は、３は平坦であるが、１・２はわずかに皿状に窪んでいる。硬化面を断ち割ってみたところ、地山が硬化したものであって粘土等を貼ったものではないことがわかった。G－G′ラインにおけるレベル差は、硬化面２と硬化面３ではほとんどないが、硬化面１と硬化面２では４㎝あり、硬化面１のほうが低くなっている。また、硬化面２は南端９mの地点でSD９と重複しているが、SD９の埋土が硬化面を形成していることから、SD９に後出する。

これらの硬化面は、いずれも方形区画の陸橋部から派生していることから、方形区画溝の規制をうけ形成された道であると考えられる。ただし、硬化面に粘土を貼る等の造作がなされていないこと、幅が非常に狭いことから判断すると、計画的に作られたものではなく、自然に形成された草分け道程度のものであったと思われる。以上のことを考え合わせると、これらの道が形成されたのは、方形区画内の建物ないし施設が廃絶されて以降であり、なおかつSD８・10が完全に埋没しておらず、通過点がなお陸橋部に限定されていた時期と考えられる。

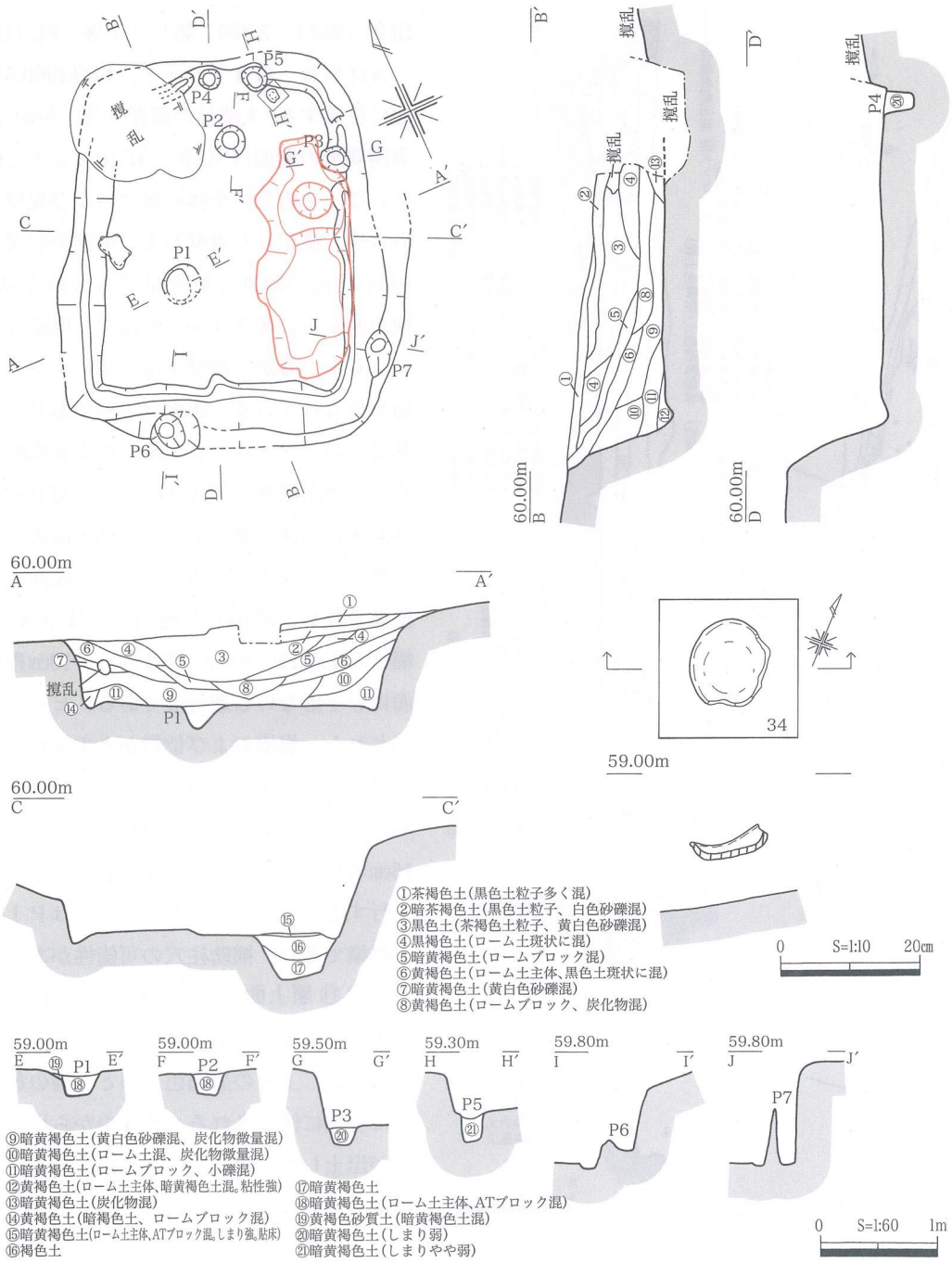
（坂本）

（４）竪穴建物跡

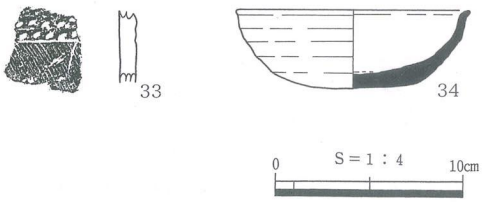
SI１（第19・20図、第４・６表、PL.９）

Ｂ区Ｆ５グリッド、標高59.3～59.7mの緩斜面に位置する。北西隅角が撹乱で破壊されているものの、遺存状況は比較的良好である。南北3.35m、東西3.0mの長方形を呈し、主軸を北東―南西方向にとる。検出面からの深さは、最も残りのよい東壁際で約85㎝である。壁面は、床面より外側へやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で全体的に硬化している。おおむねＡＴ層をそのまま床面としているが、東壁に沿った長軸2.1m、短軸0.8mほどの範囲では、ローム土とＡＴブロックによる貼床が施されていた。この貼床の下は深さ40㎝ほどの不整形の落ち込みとなっており、径35㎝、深さ12㎝のピットをともなっている。この落ち込みおよびピットからは遺物は出土しておらず、性格は不明である。床面の四周には壁溝を伴う。ただし全周せず、東壁際のＰ３付近、そして北壁際のＰ４・Ｐ５の間で途切れている。幅は西壁際で20㎝前後、それ以外では10㎝前後、深さは６～8㎝で断面Ｕ字形である。ピットは貼床下のものを除くと７基検出された。しかし位置的に主柱穴としてふさわしいものは見あたらない。Ｐ１～Ｐ５は形状・規模とも似通っており、埋土は暗黄褐色土の単層である。壁面斜面で検出されたＰ６・Ｐ７は、埋土は他のピットと共通するものの、西壁・北壁の対応する位置にピットが認められず、建物を構成する柱穴であったかは不明である。本遺構の埋土は中央にむかって流れ込んでおり、自然堆積と考えられる。①～⑥層までの上層は黒褐色土系、⑦層以下の下層はローム土に由来する黄褐色土系で、両者の違いは明瞭である。遺物は埋土中から土器片数十点が出土した。弥生土器から須恵器まで幅広い時期の遺物を含む。これらのうち須恵器坏身34は、北壁際Ｐ５付近において床面から６㎝ほど浮いて出土した。口唇部の特徴から高広編年のⅢA期（７世紀中葉～末葉）に位置づけられる。出土遺物の中では最も新相を示し、遺構の埋没時期を示すと考えられる。33は弥生時代前期の刺突文をもつ甕形土器胴部片で、混入遺物である。また、西壁際の床面直上からは人頭大の扁平な石が出土した。

（君嶋）



第19図　SI1



第20図　SI1出土遺物

第4表　SI1 ピット計測表

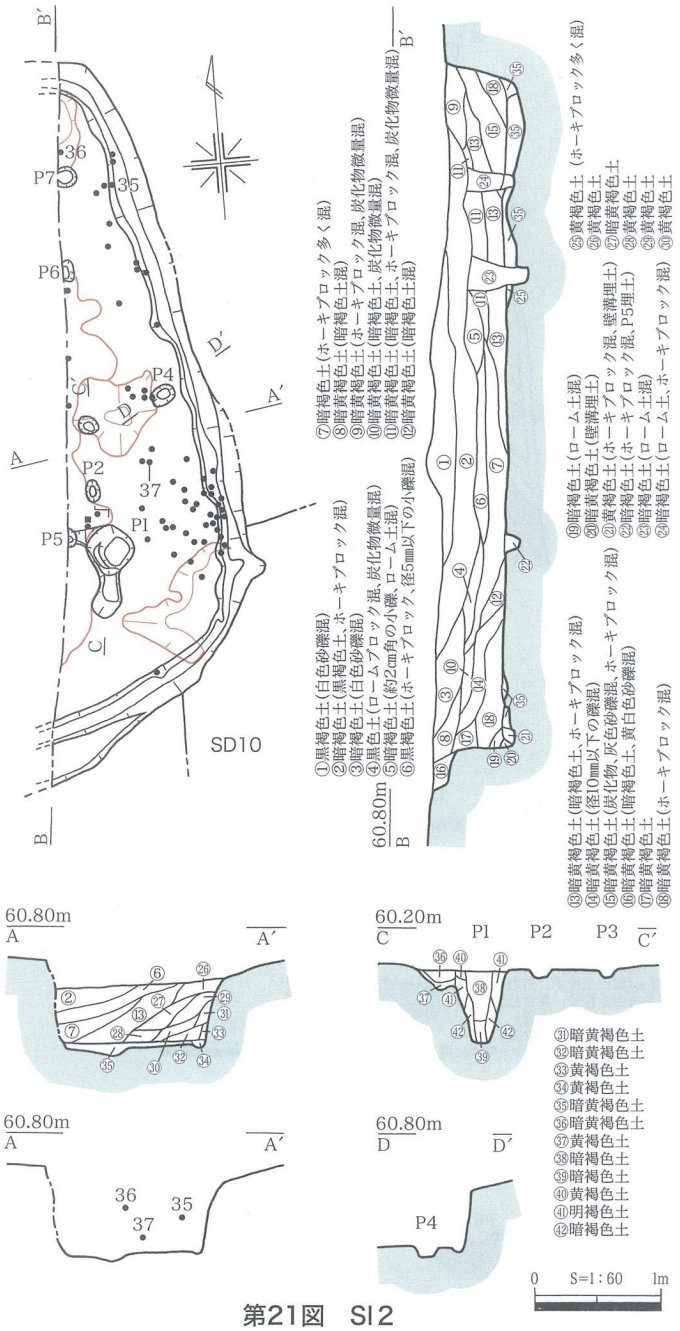
No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P1	34	32	20
P2	26	27	18
P3	26	22	16
P4	19	18	28
P5	22	20	24
P6	44	38	54
P7	40	22	78

第５表　SI2 ピット計測表

No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P1	40	38	56
P2	18	10	6
P3	16	14	6
P4	18	14	8
P5	16	−	12
P6	16	−	48
P7	−	16	37

第６表　SI1出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
33	SI1 埋土下層	第20図 PL.24	弥生土器 甕　肩部	器高△3.8cm	1/10以下	外面：ハケ 楕円形の刺突文を２列施す	褐色	1mm程の白色砂粒を含む	弥生時代前期
34	SI1 埋土下層	第20図 PL.22	須恵器 坏	口径※12.5cm 器高4.2cm 底径5.5cm	約9/10	内外面：ヨコナデ 底部粗いナデ、ハケ	灰白色	1mm程の白色砂粒を含む	

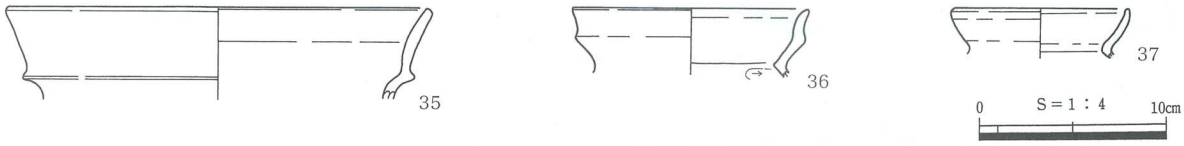


第21図　SI2

SI2（第21・22図、第５・７表、PL.10）

Ａ区Ｇ３・Ｇ４グリッド、標高約60.5mの平坦面に位置する。大部分が調査区外にかかっており、東南隅角の壁面はSD８・SD10によって破壊されている。そのため全体の形状および規模は不明であるが、検出した東壁および南壁の状況から、一辺約4.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは50～65cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁では一部にテラス状の平坦面が作られている。床面は平坦であり、基本的に基盤土のソフトローム土をそのまま床面としているが、東南隅角や調査区際など、部分的に厚さ10cm前後の貼床を施している。貼床除去後の掘方は不整形で、深さも均等ではない。床面の周囲には壁溝を伴い、検出した範囲内では全周している。幅はおよそ12～20cm、深さは６～10cm程度で、断面はＵ字形ないし逆台形である。ピットは７基検出された。規模および位置から主柱穴とみられるのはＰ１である。埋土のうち㊳・㊴層は柱痕とみられる。Ｐ１からは、幅16cm、長さ34cm、深さ16cmの短い溝が南へ伸びているが、これはＰ１に先行するものである。Ｐ２～Ｐ５はＰ１に比べて小規模であり、補助柱穴の可能性がある。Ｐ６・Ｐ７は⑪層上面から掘り込まれており、本遺構に直接ともなうものではない。

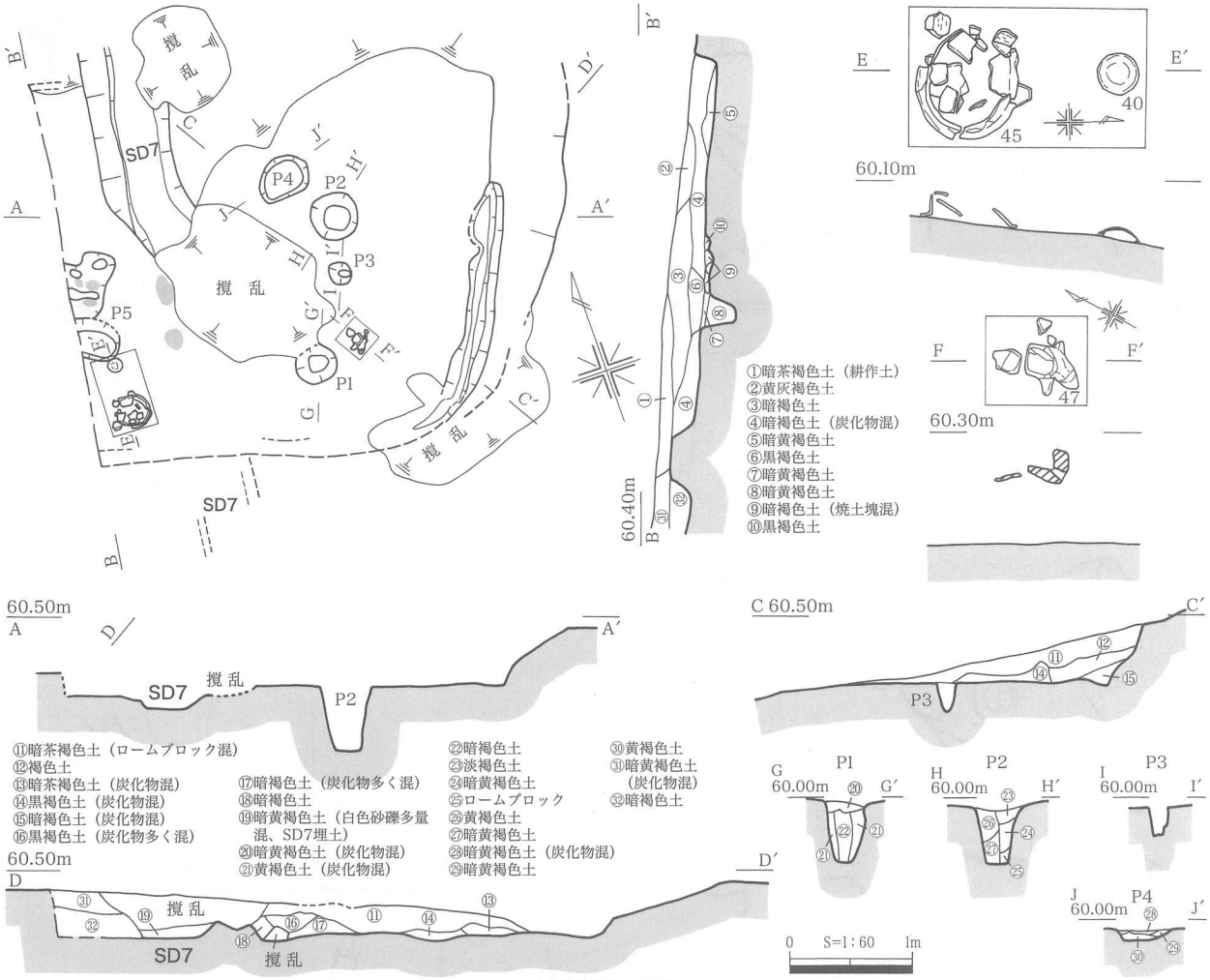
埋土は、上層の黒褐色土系と下層の黄褐色土系とに明瞭に区分される。埋土中からは土器片数十点が出土した。ほとんどが小破片であり、須恵器は含んでいない。35は天神川Ⅱ～Ⅲ期、37は近畿系（布留系）の甕形土器で、いずれも古墳時代前期に位置づけられる。床面直上からも、小片で図化できなかったが同時期の甕形土器が出土しており、本遺構の時期を示すものと思われる。36は天神川編年Ⅸ～Ⅹ期（古墳時代中期末～後期初頭）に位置づけられる混入遺物である。（君嶋）



第22図　SI2 出土遺物

第７表　SI2出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
35	SI2 埋土上層	第22図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径22.3cm 器高△4.8cm	口縁部1/10 以下	内外面：ナデ	淡褐色	密	
36	SI2 埋土中	第22図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※12.4cm 器高△3.6cm	口縁部1/10 以下	外面：ナデ 内面：頸以下ケズリ	淡褐色	密	外面煤付着
37	SI2 埋土中	第22図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※9.2cm 器高2.6cm	口縁部1/5	内外面：ナデ 口唇部内面肥厚	淡褐色	密	内面煤付着



第23図　SI３

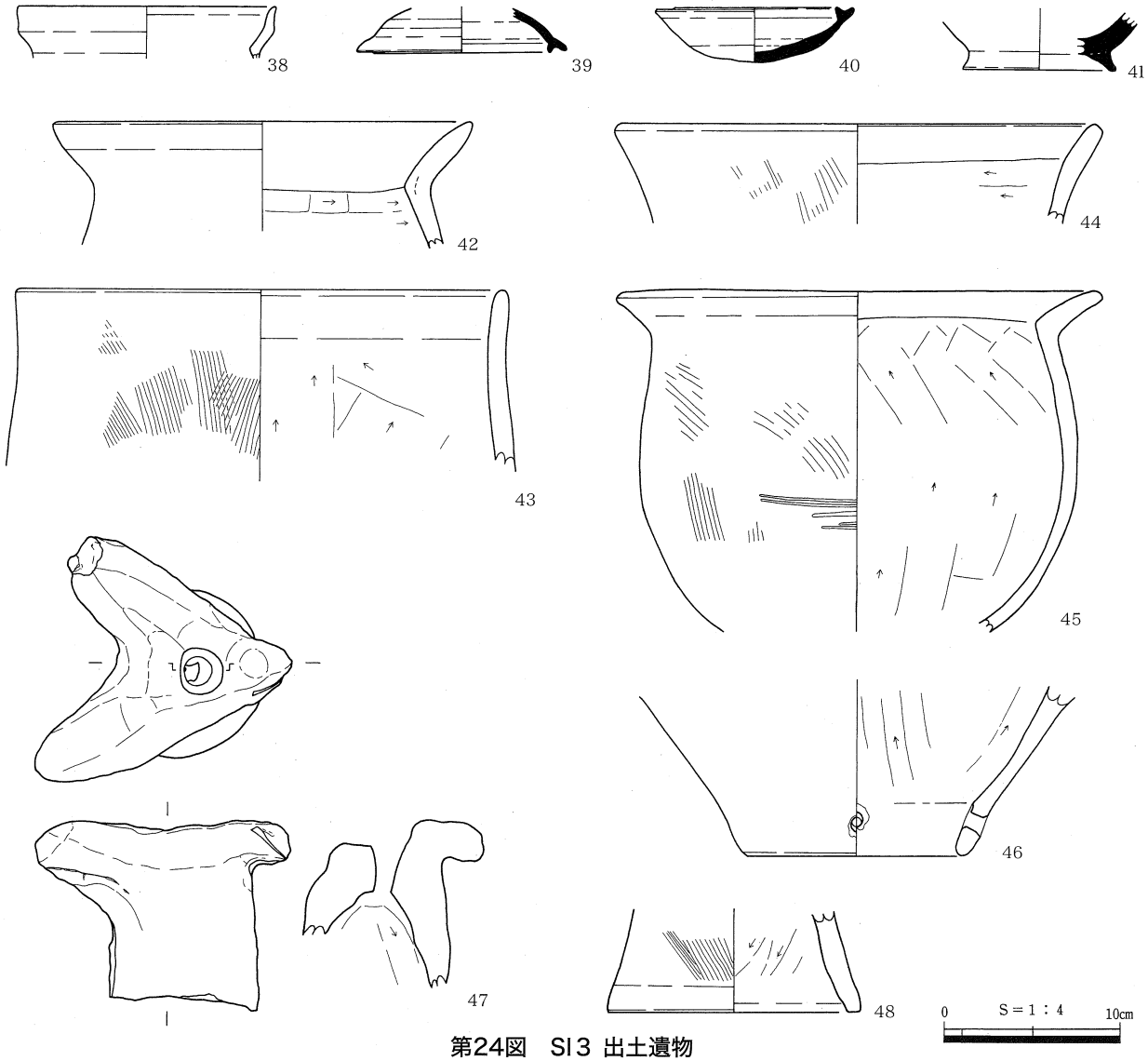
SI３（第23・24図、第８・９表、PL.10・11）

第8表　SI３ ピット計測表

No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P1	34	30	50
P2	40	40	54
P3	18	17	24
P4	44	32	8
P5	−	32	26

Ａ区Ｆ４グリッド、標高60.0〜60.4mの緩斜面に位置する。西側が調査区外にかかっているほか、木根による撹乱、削平、SD７との切り合いなどのため、遺存状況は非常に悪い。遺存した東側壁溝や、土層断面に表れた壁面の立ち上がりなどから規模を復元すると南北約3.2m、東西は3.6m以上となり、主軸を北西―南東方向にとる長方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは、最も遺存状況のよい東壁際で約50cmである。壁面は、Ｃ－Ｃ′ラインでみると外側へ傾斜して立ち上がっている。ただし、Ａ－Ａ′でみられる傾斜角は削平によるものであろう。床面は平坦であるが、南から北へ向けて傾斜している。基盤土であるホーキ層を床面としており、貼床は見られない。東壁際から南東隅角にかけて壁溝が遺存している。幅14〜20cm、深さ４〜６cmである。ピットは５基検出された。位置及び規模から主柱穴と考えられるのはＰ１、Ｐ２である。Ｐ１には柱痕が認められる。Ｐ１とＰ２との芯々距離は1.2mである。Ｐ３は補助柱穴の可能性がある。Ｐ４は柱穴とするには浅く、用途は不明である。Ｐ５は④層上面から掘り込まれており、本遺構には直接伴わない。Ｐ５の北側に接して、不整形の落ち込みが検出された。これには焼土の堆積と被熱による硬化が認められることから、地床炉の可能性が高い。この他にも、床面上で２ヶ所の焼土面を検出した。埋土は暗褐色土系で、⑯、⑰層には土壌化した炭化物を多量に含む。なお、SD７との切り合い関係は土層断面には表れていないが、SD７が本遺構の床面を破壊していることから、SD７が本遺構に後出する。また㉛、㉜層からは時期不明の土器片が出土した。包含層もしくは遺構埋土の可能性があるが、その広がりを面的には把握できなかった。

遺物は、埋土中および床面直上から土師器・須恵器片が多量に出土した。床面出土のものは39・40・42・45で、それらのうち須恵器坏身40 と土師器甕45 は、Ｐ５の南側で伏せた状態で出土した。また、土製獣形支脚47は検



第24図　SI３ 出土遺物

第９表　SI３出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
38	SI３ 埋土上層	第24図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※14.8cm 器高△2.9cm	口縁部1/6	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	白色砂粒を含む	摩滅が著しい
39	SI３ 床面直上	第24図 PL.24	須恵器 坏蓋	口径※12.0cm 器高△3.5cm	口縁部1/6	内外面：ヨコナデ	灰色	白色砂粒を微量に含む	
40	SI３ 床面直上	第24図 PL.23	須恵器 坏	口径9.3cm 器高3.1cm	完形	内外面：ヨコナデ 底部：粗いナデ	淡灰色	密	
41	SI３ 埋土中	第24図 PL.24	須恵器 高台付底部	底径※8.6cm 器高3.3cm	底部1/3	内外面：ヨコナデ	灰色	密	
42	SI３ 床面直上	第24図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径23.4cm 器高△7.3cm	口縁部1/5	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	1～3㎜の白色砂粒を含む	
43	SI３ 埋土上層	第24図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※27.3cm 器高△10.3cm	口縁部1/6	外面：ナデ・ハケ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	1～3㎜の白色砂粒を含む	
44	SI３ 埋土中	第24図	土師器 甕口縁部	口径26.9cm 器高△5.7cm	口縁部1/5	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	1～2㎜の砂粒を含む	
45	SI３ 床面直上	第24図 PL.23	土師器 甕	口径※26.9cm 器高△19.5	約1/2	外面：ハケ後ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	1～3㎜の白色砂粒を含む	
46	SI３ 埋土上層	第24図 PL.24	土師器 甑底部	底径※12.4cm 器高△9.7cm	底部1/4	外面：ナデ 内面：ケズリ　底面端部はナデ	褐色	1㎜程の白色砂粒を含む	焼成後穿孔
47	SI３ 検出面	第24図 PL.23	土製支脚	器高△10.8cm	脚部1/2	外面：ナデ　支部は指オサエ 内面：ケズリ	褐色	1～2㎜の白色砂粒を含む	
48	SI３ 検出面	第24図 PL.24	土製支脚 底部	底径14.3cm 器高△5.8cm	底部1/2	外面：ハケ 内面：ケズリ	淡褐色	2㎜程の白色砂粒を含む	

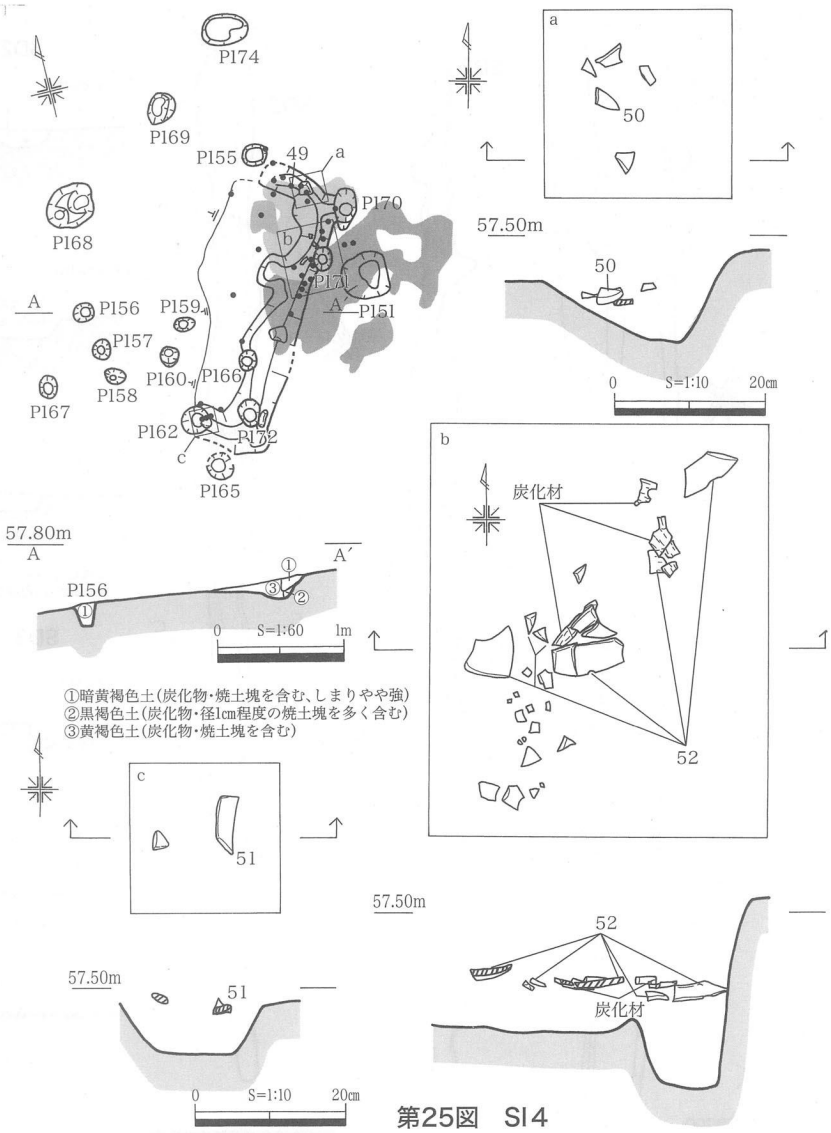
出面での出土である。46は甑形土器か。48は土製支脚の脚部と思われる。38は古墳時代後期の甕形土器で、混入遺物である。

本遺構の時期は、床面出土遺物から高広ⅡB期（７世紀前葉～中葉）と考えられる。　（君嶋）

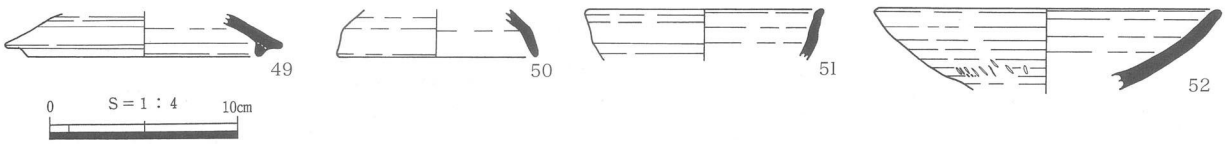
SI4（第25・26図、第10表、PL.11）

Ａ区Ｃ３グリッド、標高57.60～57.20mの緩斜面に位置する。西側の大部分が削平され、遺存状態は非常に悪い。遺存した南東側壁溝及び床面の検出状況から規模を復元すると南北2.1m、東西1.4m以上の方形もしくは長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは、最も遺存状態のよい南東壁際で25cmを測る。壁面はＡ－Ａ′ラインでみると外側へ傾斜して立ち上がっている。南東壁際および南西辺・北東辺で壁溝を検出した。南西辺ではＰ162との重複により収束し、北東辺では木根の撹乱により収束している。壁溝に囲まれた範囲で床面を検出したが、貼床は見られない。また、北東隅の床面で焼土面が確認されたほか、北東隅の検出面で焼土の広がりがみられ、その南側に土壌化した炭化物が広がっていた。炭化物が壁面の外へ広がっている状況は後世の削平によるものと思われる。さらに、壁溝内の埋土は３層に分けられ、いずれの層にも炭化物と焼土が含まれていたほか、Ｐ171周辺の壁溝内からはわずかではあるが炭化材が検出された。これらのことから本遺構は焼失した建物の可能性がある。ピットは壁溝内とその周囲から18基検出された。P156～162、P166～168、P170～172は埋土に炭化物、焼土が含まれており、柱穴である可能性はあるが、柱痕は認められない。P168は規模、埋土、位置などから主柱穴と考えられるが、対応する柱穴は検出されていない。遺物は壁溝底面よりやや浮いた状態で須恵器が出土している。これらの出土遺物から本遺構の埋没時期は高広ⅡB～ⅢA期（７世紀代）と推定される。

（坂本）



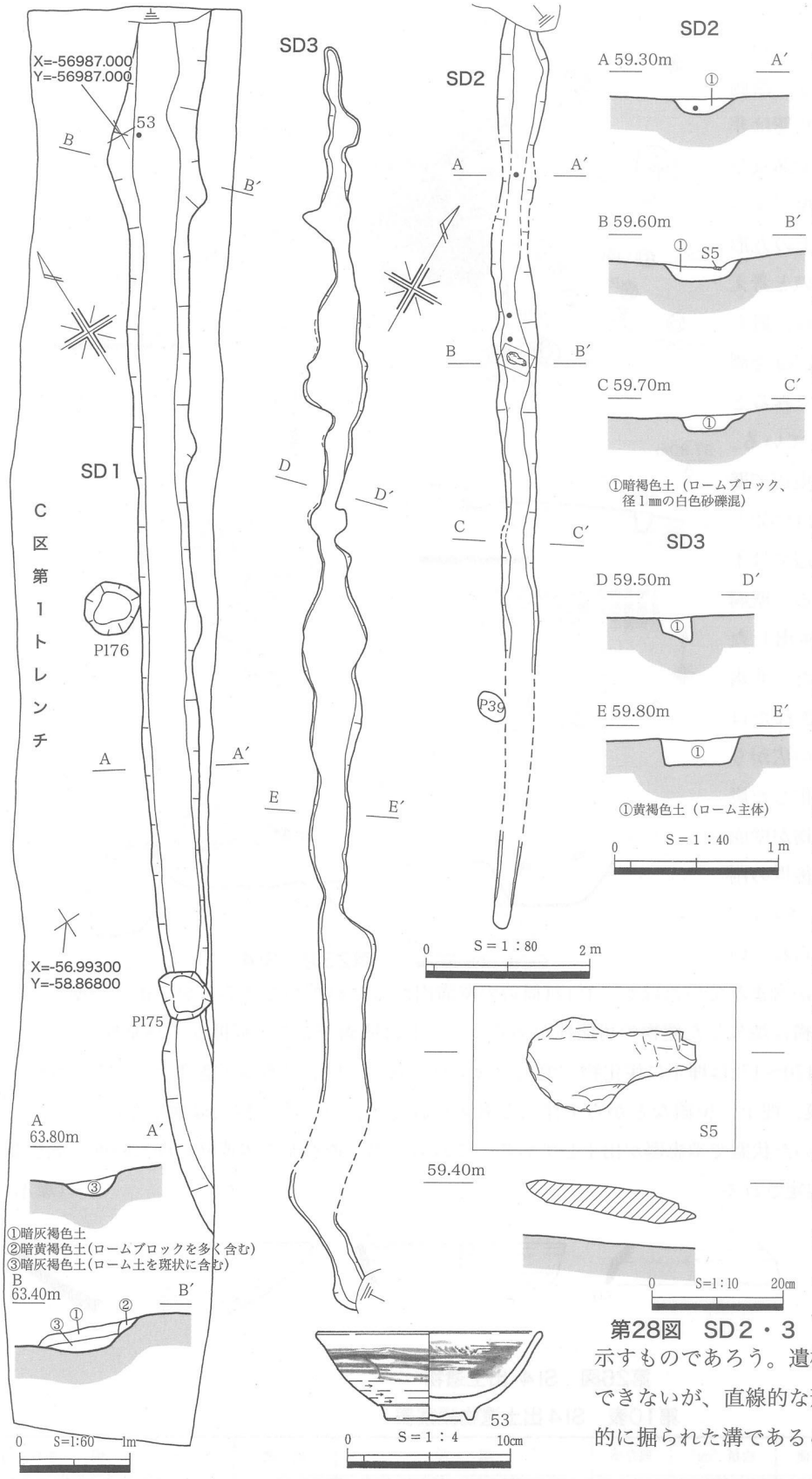
第25図　SI4



第26図　SI4 出土遺物

第10表　SI4出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
49	SI4 埋土下層	第26図 PL.24	須恵器 坏蓋	口径※12.2cm 器高△2.3cm	口縁部1/7	内外面：ヨコナデ	淡灰色	1mm程の白色砂粒を含む	
50	SI4 埋土下層	第26図 PL.24	須恵器 坏蓋	口径※10.5cm 器高2.5cm	口縁部1/8	内外面：ナデ	淡灰色	1mm程の砂粒を含む	
51	SI4 埋土下層	第26図 PL.24	須恵器 坏	口径※12.4cm 器高△2.7cm	口縁部1/5	内外面：ヨコナデ	灰色	密	
52	SI4 埋土下層	第26図 PL.24	須恵器 高坏坏部	口径※18.1cm 器高△4.3cm	口縁部1/2	内外面：ヨコナデ　外面工具痕あり	灰白色	1mm程の白色砂粒を含む	



第27図　SD１

第29図　SD１ 出土遺物

第28図　SD２・３

（５）溝状遺構

SD１（第27・29図、第11表、PL.12）

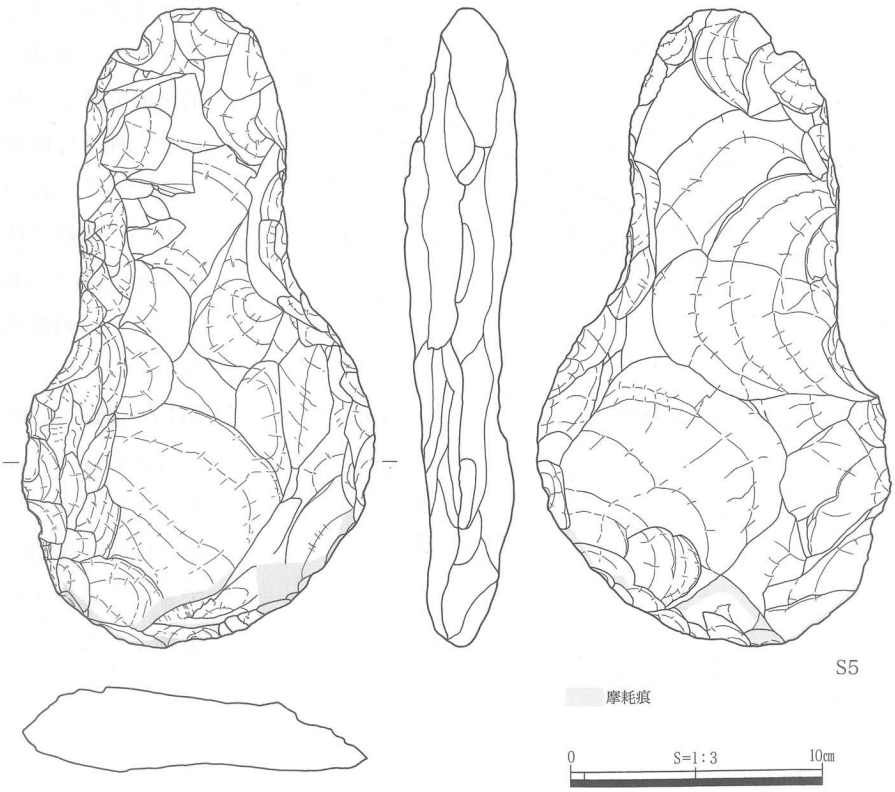
Ｃ区第１トレンチで検出した溝状遺構である。標高約63.0～63.5mの斜面上に位置する。検出した長さは10.5mで、北東一南西方向に主軸をとる。北東端は撹乱によって破壊されており、南西端ではトレンチ外へのびている。その走行は直線的で、斜面の等高線に対して平行である。幅はおおむね50～60㎝で、Ｂ－Ｂ′ライン付近では局所的に広く80㎝ほどである。検出面からの深さは20～30㎝で、断面形はＵ字状を呈する。底面の標高は南西端で約63.5m、北東端で約62.9mであり、北東端の方が60㎝ほど低い。埋土は暗灰褐色土で、下層にはローム土が斑状に混じる。砂礫の混入など、流水の痕跡は窺えない。出土した遺物は、唐津焼碗53の１点のみである。北東端に近いＢ－Ｂ′ライン付近において、①層から出土した。溝底面からは10㎝ほど浮いた状態である。17世紀の後半頃に位置づけられ、溝の埋没時期を示すものであろう。遺構の性格については明確にできないが、直線的な形状や埋土の状況から人為的に掘られた溝であることが想定できる。（君嶋）

第11表　SD１出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
53	SD１ 埋土中	第29図 PL.23	唐津焼 碗	口径※13.6cm 器高5.4cm	約3/5	内外面：ヨコナデ　薄く施釉 外面下半ヘラケズリ	緑灰白色	密	

SD２（第28・30図、第12表、PL.12）

Ｂ区Ｆ６・Ｇ５グリッド、標高約59.0～60.0ｍの緩斜面に位置する。約２ｍ西側にはSD３が位置し、両者はほぼ平行している。検出した長さは11.1ｍで、北西ー南東方向に直線的にのびている。北西端は撹乱によって破壊され、南東端は削平によって収束している。幅は20～60㎝で、北西側の方が幅広い。検出面からの深さは約10㎝で、断面形は逆台形である。底面の標高は南東端で約59.9ｍ、北西端で約58.8ｍであり、北西端の方が１ｍほど低い。埋土は茶褐色土の単層で、砂礫の混入など流水の痕跡は窺えない。ただし拳大の自然礫が数個含まれていた。遺物は、埋土中から土器片数点と、石鏃Ｓ５が出土した。Ｓ５はほぼ正置された状態で、溝底より４㎝ほど浮いて出土した。土器片はすべて小片であり図化に耐えず、時期も特定しがたいが、縄文土器や須恵器は含まれていない。山陰地方においては、Ｓ５のような大型の石鏃は弥生時代前期中葉～中期にかけて見られるとされ[註]、出土した土器の様相はこの年代観に矛盾しない。したがって、本遺構の埋没時期は弥生時代前期～中期と考えることができる。（君嶋）



第30図　SD２ 出土遺物

註）松井一明 2002 「弥生時代の石鏃について―中・四国地域を中心として―」『環瀬戸内海の考古学』上巻、古代吉備研究会

SD３（第28図、PL.12）

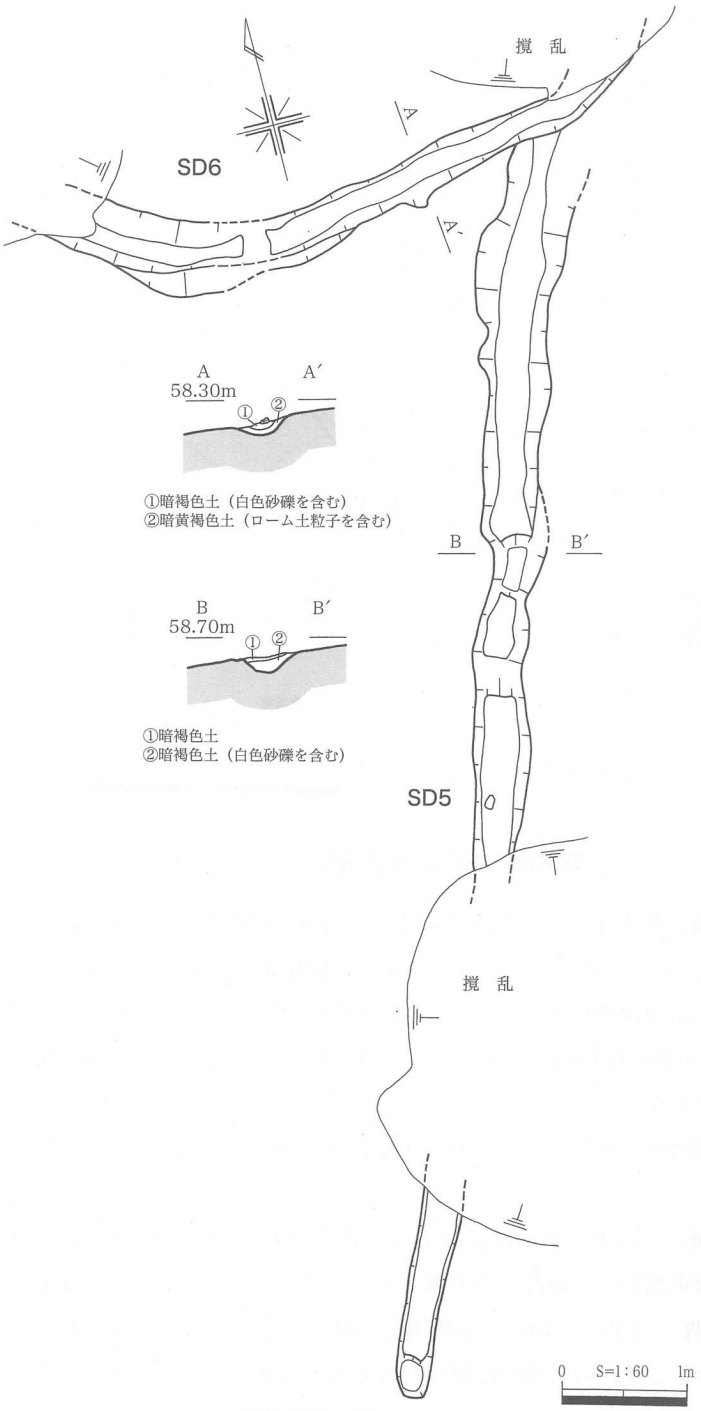
Ｆ６～Ｈ５グリッドにあり、南東から北西に緩やかに下る斜面に位置する。SD２と約２ｍの間隔をあけ平行し、南東から北西に向かって直線状に延びる。南東端が若干撹乱により壊されているが、長さ約15.5ｍ、幅最大で0.75ｍ、検出面からの深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土は地山と類似する黄褐色のローム土が主体となる。断面や底面とも不整形で凹凸が多いことや幅が一定でないことから人為的に掘られたものとは考えにくい。遺物は出土していないため、時期は不明である。（坂本）

SD５・６（第31図、PL.12）

Ｅ５・Ｆ５グリッド、標高57.75～59.1ｍの斜面に位置する。両遺構は、SD５南西端から10ｍの地点で重複しているが、先後関係は明らかではない。SD５は、検出した長さは10.1ｍで、南西－北東方向に直線状にのびる。北東端は撹乱により収束している。幅は30～60㎝で、北東側の方が広い。検出面からの深さは10㎝で、断面は浅い皿状を呈する。底面の標高は南西端で59.05ｍ、北東側で58.15ｍを測り、北東側が90㎝低い。SD６は、検出した長さ4.3ｍで、東から西に向かってやや弧状にのびる。東西の両端を撹乱により破壊されている。幅は最大で

第12表　SD２出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長軸 〔㎝〕	短軸 〔㎝〕	厚さ 〔㎝〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S5	SD２ 埋土中	第30図 PL.30	石鏃	表裏とも刃部に磨耗痕がみられる	25.4	14.0	3.7	1450	板状安山岩	



第31図　SD５・６

60cmを測る。深さは約12cmで、断面は浅い皿状を呈する。底面の標高は東側で58.1m、西側で57.6mを測り、西側のほうが約50cm低い。両遺構とも埋土は暗褐色土系で２層に分かれ、拳大の礫がいくつか含まれていた。遺物は出土していない。時期は特定できないが、埋土から判断するとSD５との間に大きな時期差があるとは考えにくい。両遺構の性格については明らかではない。（坂本）

SD７（第32・34図、第13表、PL.13）

Ａ区Ｄ４・Ｅ４・Ｆ４グリッドの農道際に位置する。南端ではSI３と重複しており、土層断面の位置（第23図のD—D′ライン）までは確認できるものの、撹乱等のためそれより南側へは追跡できなかった。南端からはごく緩やかな弧を描きつつ北東方向へのび、Ｅ４杭付近で北方向へ屈曲して、調査区外へと続いていく。面的に検出した長さは24mである。北東方向へのびる南半部においては、幅は30～50cm、検出面からの深さは15～20cmほどで、断面は逆台形を呈する。底面は平坦である。屈曲部に至る手前3.5mほどは撹乱により形状が不明瞭となっているが、北方向へ向きを変える北半部では、幅はやや広がって50～80cmほど、深さは15cm以下となる。ただし、北半部では付近の基盤土の削平・流出が著しく、形状や規模は大きく損なわれているものと思われる。底面の標高は、南端近くのＢ－Ｂ′ラインで約59.7m、北端の調査区際で約56.8mであり、高低差は2.9mである。埋土は全体的にロームブロックの混じった暗黄褐色土の単層であり、砂礫の混入など流水の痕跡は窺えない。ただし、SI３の土層断面（第23図のD—D′ライン）においては、この暗黄褐色土の上面が硬化している状況が認められる。また、Ａ—Ａ′ライン付近では、長さ2.8mにわたって、底面に細かい砂利が２cmほどの厚さで敷かれていた（写真６）。遺物は、おもに南端部分の埋土中から、土師器・須恵器が十数点出土した。殆どは小片であり図化に耐えない。図示した須恵器坏蓋54は高広ⅡB期（７世紀前～中葉）に位置づけられ、SI３とほぼ同時期のものである。ただし、切り合い関

第13表　SD７・９出土遺物観察表

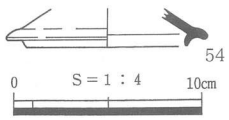
No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
54	SD７埋土中	第34図 PL.24	須恵器坏蓋	口径※8.6cm 器高△2.0cm	口縁部1/5	内外面：ヨコナデ	灰色	2mmの白色砂粒を微量に含む	

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長軸〔cm〕	短軸〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	石　材	備　考
S6	SD９埋土中	第36図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	8.1	6.2	1.9	126	石英安山岩	

係から、本遺構はSI３に後出することが明らかである。したがって、本遺構はSI３の廃絶後まもなく作られ、短期間のうちに埋没したものと思われる。その性格については、硬化面や砂利面の存在から道状遺構の可能性が想起されるものの、50㎝程度の幅しかない点は疑問である。あるいは、流路等が埋め戻され、再利用された可能性なども考慮すべきなのかもしれない。　（君嶋）

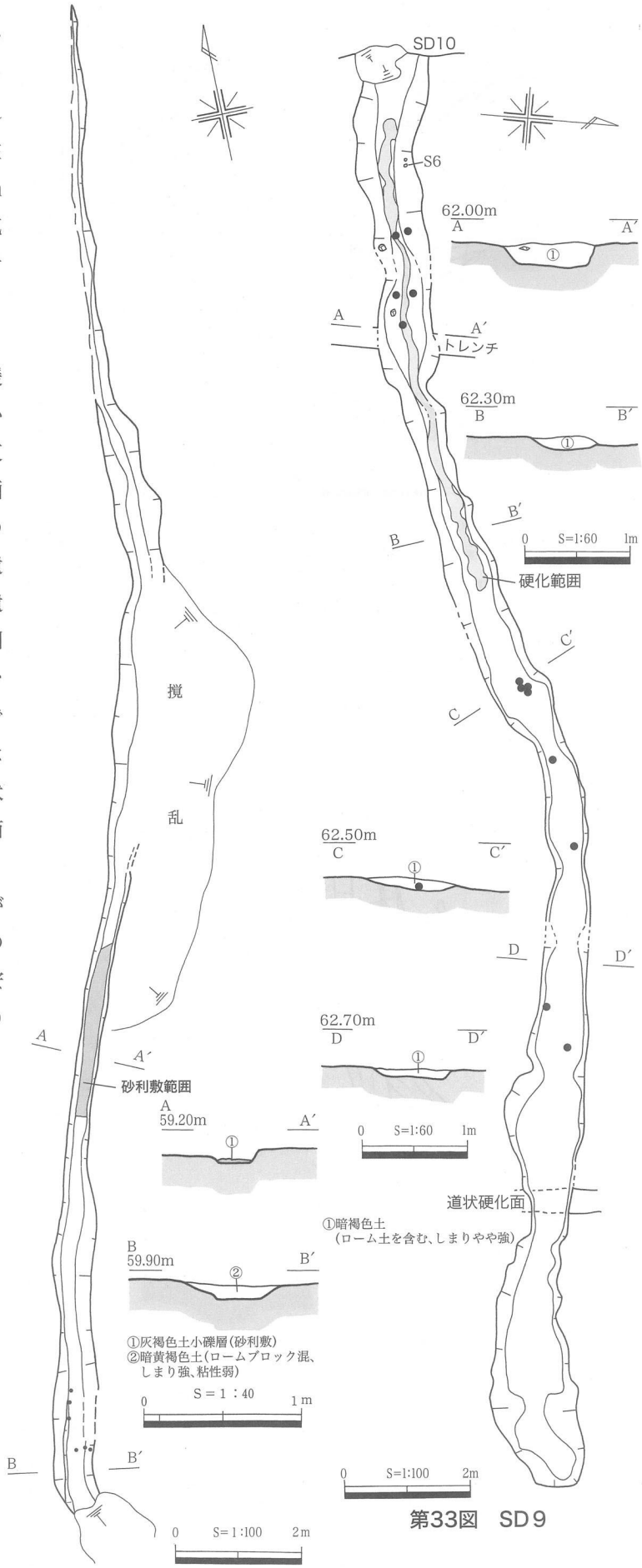
SD９（第33・36図、第13表、PL.13）

Ｈ２～Ｈ４グリッド、標高61.25～62.75mの緩斜面に位置する。検出した長さは23mで、東端から11.5mの地点付近で南側にやや屈曲するが、東西方向にほぼ直線状にのびる。西端では方形区画（SD10）に切られている。また、東端から4.3mの地点で道状硬化面２とほぼ直交しているが、本遺構の埋土が硬化面を形成していることから、本遺構が道状硬化面に先行する。幅は最大1.3mを測る。検出面からの深さは10～20㎝で、断面は逆台形を呈する。底面の標高は東端で62.4m、西端で61.0mを測り、西端が1.4m低い。また、西半では長さ7.7m、幅0.2mにわたって底面が硬化した状況が見られた。埋土は暗褐色土の単層であり、西側では拳大の礫がいくつか含まれていた。遺物は、埋土中から須恵器・土師器片のほか、石錘Ｓ６が出土した。須恵器には平安時代頃と思われる甕の胴部片を含むことから、本遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。　（坂本）



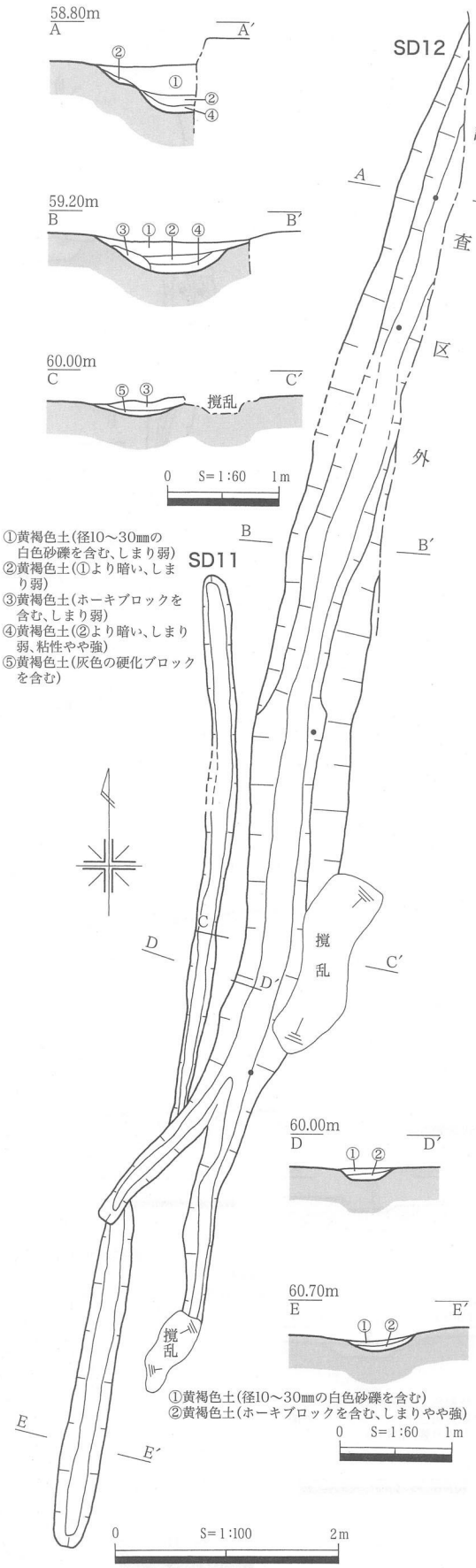
第34図　SD７ 出土遺物

写真６　SD７砂利敷面（南から）

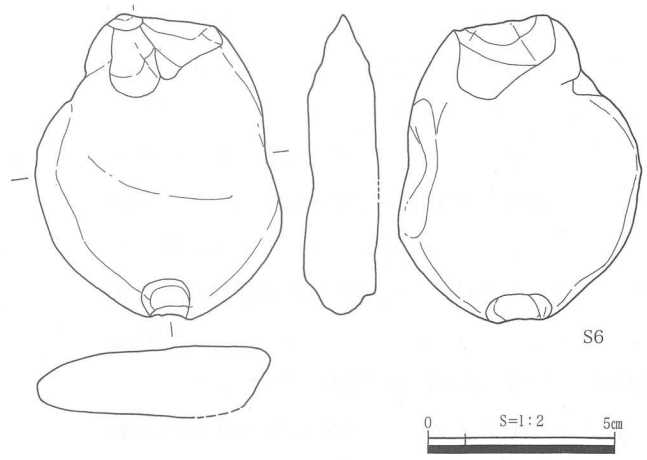


第33図　SD９

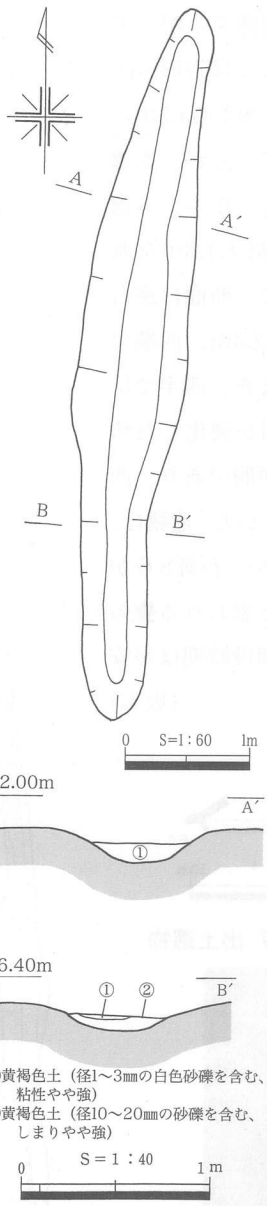
第32図　SD７



第35図　SD11・12



第36図　SD９ 出土遺物



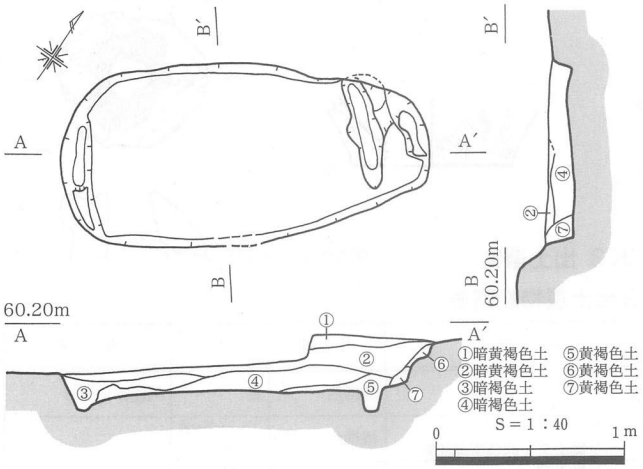
第37図　SD13

SD11・12（第35図、PL.13）

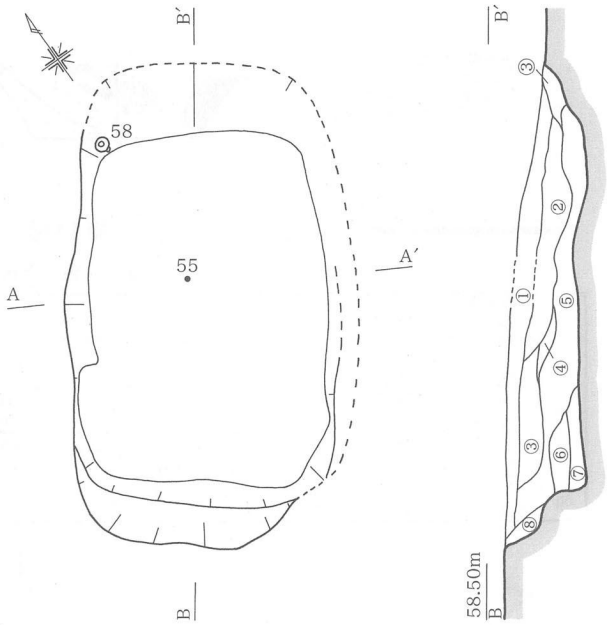
Ｃ２・D2・Ｅ２グリッドの斜面に位置する。SD11は、南北方向にほぼ直線状にのびる。検出した長さは14.2mで、南端から５ｍの地点で斜交する浅い溝によって分断される。最大幅は60㎝を測る。検出面からの深さは10㎝で、断面は逆台形状ないし皿状を呈する。底面は北端側が約1.6m低い。遺物は出土せず、時期は不明である。SD12は南から北東へほぼ直線状にのびており、SD11とほぼ平行する。検出した長さは約20mで、南端は攪乱により壊され、北側は調査区外へとのびる。幅は0.3～1.7mで北側が広い。検出面からの深さは北端で40㎝である。底面は北端側が約２ｍ低い。埋土中から土器片が出土したが、小片のため図化できず、詳細な時期も特定できない。両遺構とも埋土は黄褐色のローム土で、流水の痕跡は窺えず、性格は不明である。　（坂本）

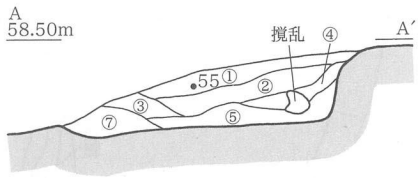
SD13（第37図、PL.13）

Ｂ２グリッドの斜面に位置する。南北方向に直線状にのび、長さ5.7m、最大幅0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は黄褐色土である。遺物は埋土中から土師器片が４点出土したが、図化できなかった。時期は不明である。　（坂本）



第38図　SK１





①暗黄褐色土（径1mm程度の白色砂礫やや多く混）
②暗褐色土（径1～2mmの白色砂礫、ロームブロック混、炭化物微量混）
③暗茶褐色土（径1mm程度の白色砂砂礫、炭化物微量混）
④暗黄褐色土（径2～3mmの白色砂礫混）
⑤暗茶褐色土（径2～3mmの白色砂礫、径約5mmの黄白色砂礫混、炭化物微量混）
⑥黄褐色土（茶褐色土粒子、暗褐色土ブロック混、径2～3mmの白色砂礫多く混）
⑦黄褐色土（ローム土主体、暗褐色土粒子混）

0　S=1：40　1m

第39図　SK３

（６）土坑

SK１（第38図、PL.15）

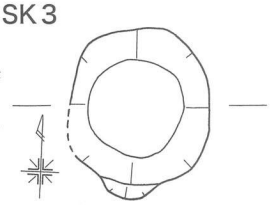
B区Ｇ５グリッド、標高約60.0mの平坦面に位置する。長軸1.95m、短軸0.95mの長方形を呈し、東北―南西方向に主軸をとる。検出面からの深さは、最も深い北東側で約28cmである。底面は、根撹乱などの影響のためか凹凸が著しい。また、埋土は地山土と極めて似通った黄褐色土系のローム土を主体とし、底面の識別にも困難を伴った。東北側・南西側の両端には、主軸と直交する溝状の落ち込みがあり、土壙墓の小口板の痕跡である可能性もあるが、上記の理由から断定はできない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。　（君嶋）

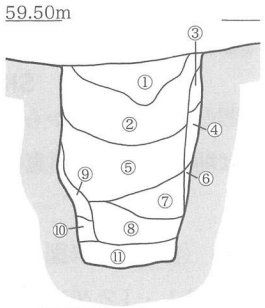
SK２（第40図、PL.14）

B区Ｇ６グリッド、標高約59.3mの平坦面に位置する。長径約85cm、短径約75cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは約108cmで、底面は平坦である。埋土は黒褐色土系で、自然に埋没したものと考えられる。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、その形態から、落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。　（君嶋）

SK３（第39・41図、第14表、PL.14）

B区Ｅ５・Ｆ５グリッド、標高約58.0～58.4mの緩やかな斜面上に位置する。北東～南東側にかけて削平・撹乱を受けており、全体の形状は不明確であるが、北東―南西方向に主軸をとる長方形を呈するものと思われる。規模は長軸約2.55m、短軸約1.55mである。検出面からの深さは約40cmで、底面は平坦である。壁面は北東辺を除いて垂直に近く立ち上がっており、南西辺では二段に掘り込まれているように見受けられる。埋土は茶褐色土系で、自然に埋没したものと考えられる。遺物は、土器片が数十点出土した。小片が多く、縄文土器・須恵器は含まれていない。55の蓋は埋土中からの出土で、８世紀代のものと思われる。58は鞴の羽口で、北側隅角付近の坑底に接して出土した。ただし、鉄関連の遺物はこの１点のみであり、遺構内にも被熱等の痕跡は認められず、羽口と遺構との直接的な関係は窺えない。出土状況から判断すると、遺構の埋没時期を示すのは58であり、55と同時期の８世紀代と考えられる。56・57は弥生時代中期前葉の甕底部で、混入遺物と判断される。遺構の性格は不明である。　（君嶋）

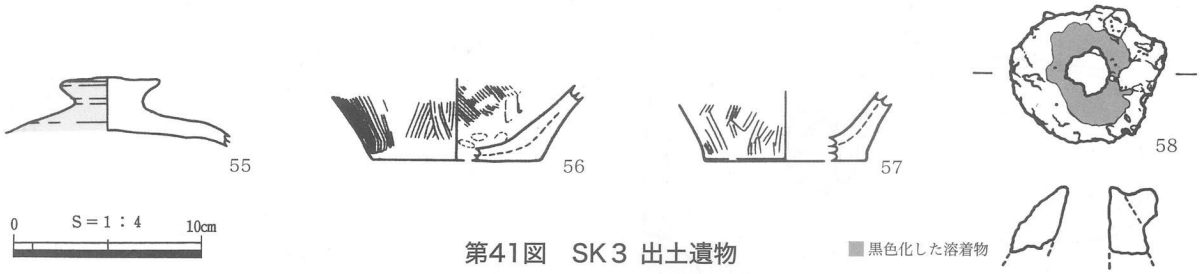




①黒褐色土
②暗褐色土（ロームブロック混）
③暗黄褐色土
④暗黄褐色土（黒褐色土混）
⑤暗褐色土（黒褐色土多く混）
⑥暗褐色土（ローム土多く混）
⑦黒褐色土（ロームブロック混）
⑧暗褐色土（ロームブロック混）
⑨暗黄褐色土
⑩暗黄褐色土（暗褐色土粒子混）
⑪暗褐色土

0　S＝1：40　1m

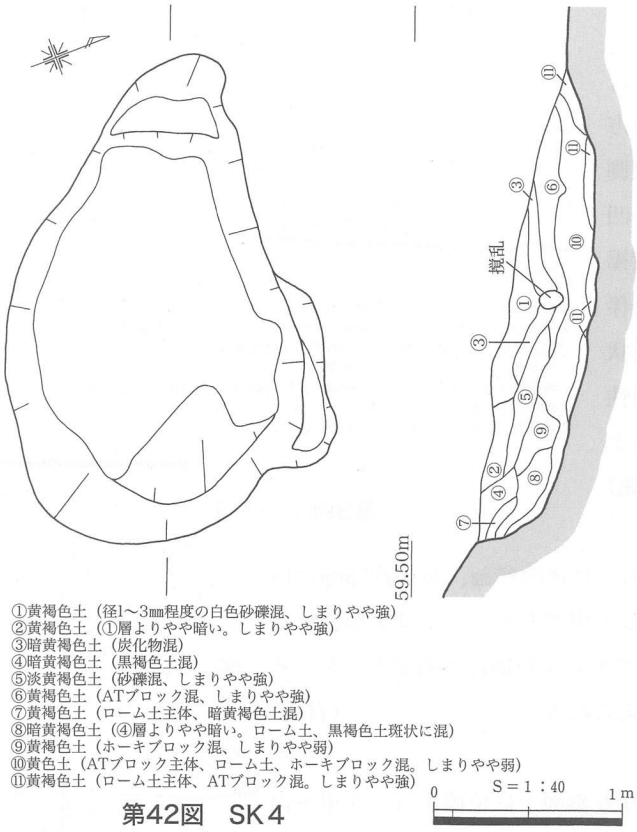
第40図　SK２



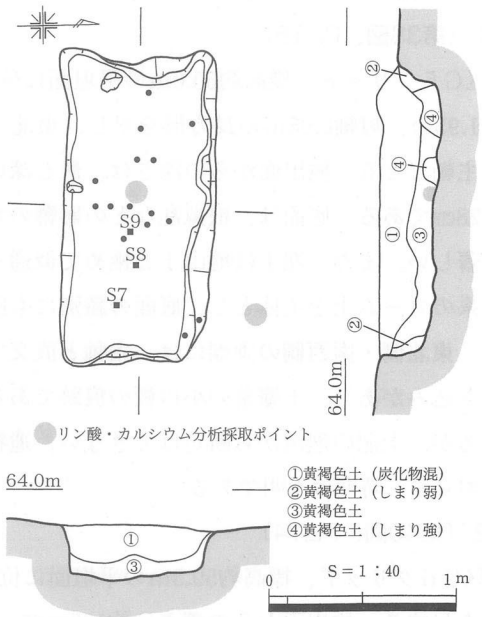
第41図　SK３ 出土遺物

第14表　SK３出土遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
55	SK３ 埋土中	第41図 PL.23	土師器 蓋	器高△3.7cm	約4/5	内外面：ナデ	赤褐色	密	外面赤色塗彩
56	SK３ 検出面	第41図 PL.24	弥生土器 底部	底径※9.0cm 器高△4.0cm	底部1/3	外面：ハケ 内面：ハケ後ナデ　底部指頭圧痕	淡褐色	1～3mm程の砂粒を含む	
57	SK３ 埋土中	第41図 PL.24	弥生土器 底部	底径※8.4cm 器高△3.7cm	底部1/3	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ	褐色	2mm程の白色砂粒を含む	外面煤が付着
58	SK３ 坑底直上	第41図 PL.24	鞴　羽口	長さ△3.5cm 通風孔径2.2cm	先端部のみ	不明	暗黄褐色	1mmの白色砂粒を含む	被熱著しい　外面全体に溶着物付着



第42図　SK４



第43図　SK５

SK４（第42図、PL.14）

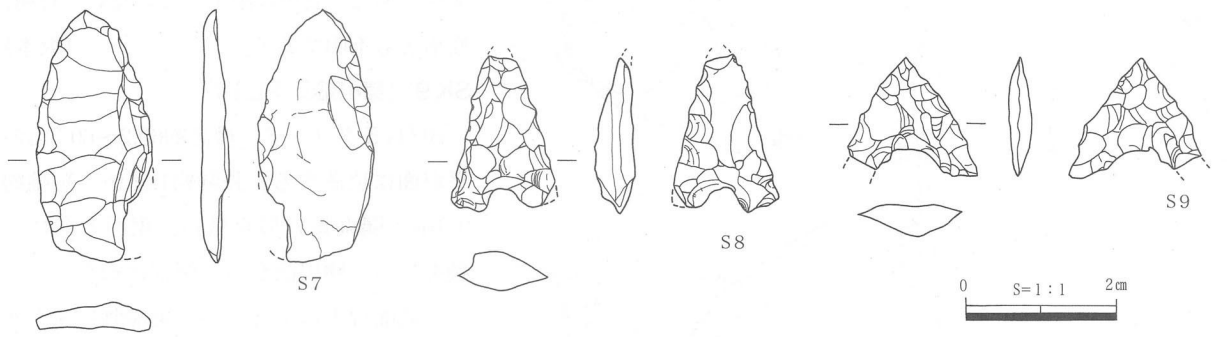
A区Ｄ３グリッド、標高58.75～59.25mの斜面に位置する。長軸2.55m、短軸1.68mの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは0.5mを測る。底面は不整形で凹凸が多く、東から西へ傾斜している。埋土は不整な堆積状況を示し、自然に堆積したとは考えられない。遺物は埋土中より、須恵器片、土師器片が出土したが図化できず、遺構の時期も限定できない。性格は不明である。

（坂本）

SK５（第43・44図、第15表、PL.14）

A区Ｊ１・Ｊ２グリッド、63.80mの平坦地に位置する。近接するSK21とは長軸が直交する。長軸1.57m、短軸0.81mの長方形を呈する。検出面からの深さは29cmを測る。断面は逆台形状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は多少凹凸があるがほぼ平坦である。埋土は地山に近似する黄褐色のローム土が主体であり、①層には炭化物を含む。遺物は、埋土中より石鏃（S７～S９）、縄文土器片が数点出土した。したがって縄文時代の遺構と考えられるが、土器片はいずれも細片のため、詳細な時期は特定できない。遺構の形態や出土遺物から土壙墓の可能性が考えられたため、土壙中央の下層埋土を採取しリン酸・カルシウム分析を行ったが、埋葬を示唆する結果は得られなかった（第５章第１節参照）。

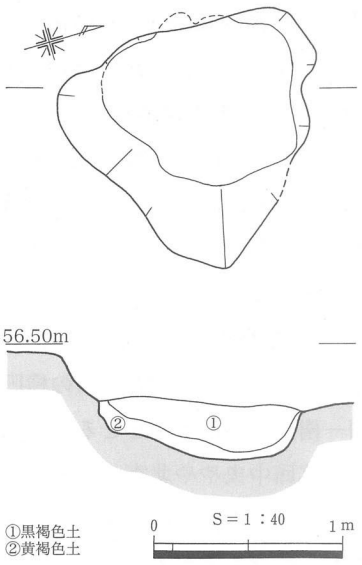
（坂本）



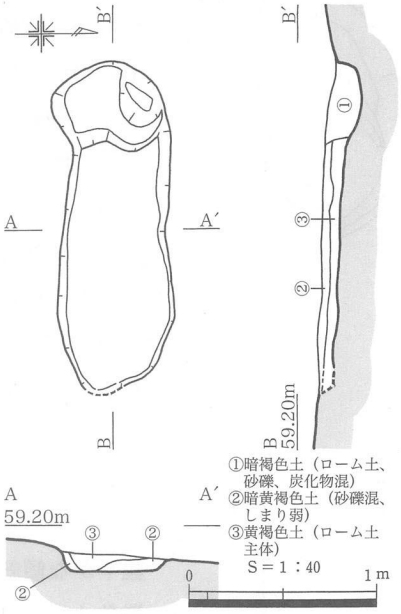
第44図　SK５ 出土遺物

第15表　SK５出土遺物観察表

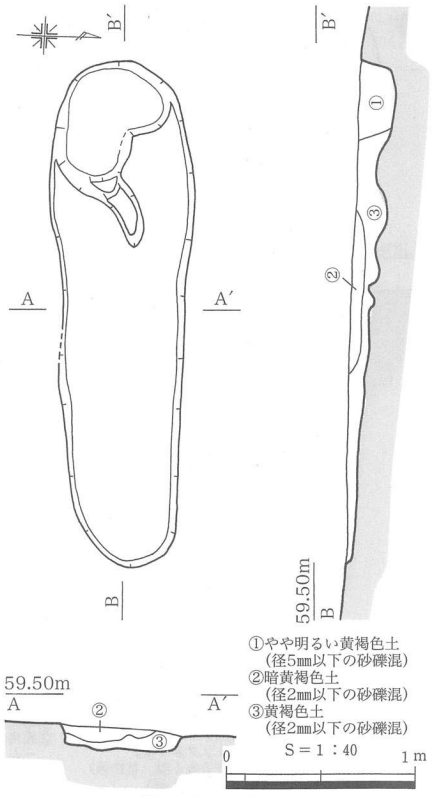
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長軸 〔cm〕	短軸 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S7	SK５ 埋土中	第44図 PL.30	石鏃	凸基式	3.35	1.5	0.35	1.7	ガラス質安山岩	
S8	SK５ 埋土中	第44図 PL.30	石鏃	凹基式	2.1	1.4	0.5	1.1	ガラス質安山岩	
S9	SK５ 埋土中	第44図	石鏃	凹基式	1.6	△1.7	0.4	0.5	黒曜石	



第45図　SK６



第46図　SK８



第47図　SK７

SK６（第45図、PL.15）

B区D５グリッド、標高約56.2～56.5mの緩斜面上に位置する。平面形は一片約1.3mの三角形に近い不整形を呈する。検出面からの深さは約30cmである。底面は不整な円形を呈し、南から北へ向けて傾斜している。埋土はローム土混じりの黒褐色土である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

（君嶋）

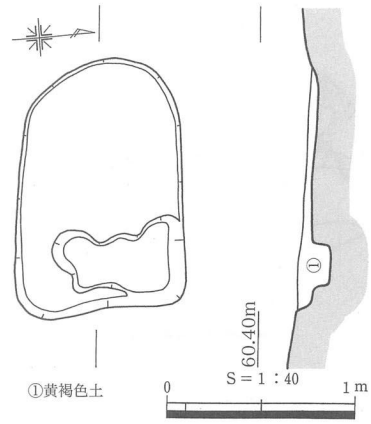
SK７（第47図、PL.15）

B区G６グリッド、標高58.75mにあり、SK８の東側に位置する。長軸2.68m、短軸0.64mの長楕円形を呈する。検出面からの深さは10cm、断面は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、西端は一段低くなっており、深さは18cmである。埋土は黄褐色のローム土が主体となる。堆積状況から西端の掘り込み部分は別の遺構である可能性がある。遺物は出土していない。時期、性格とも不明である。

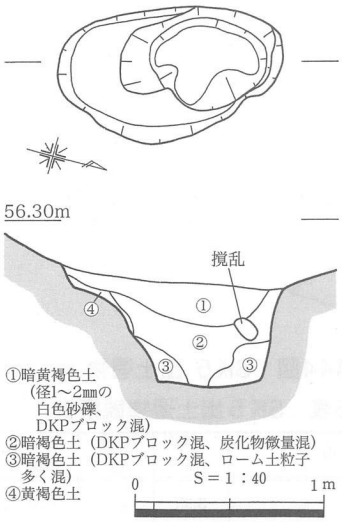
（坂本）

SK８（第46図、PL.15）

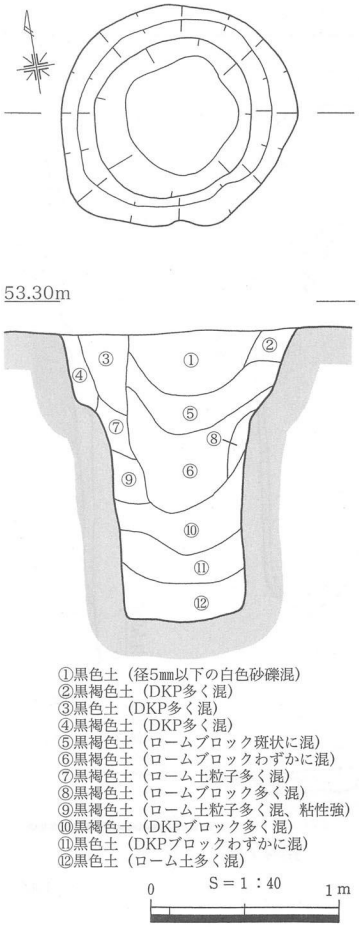
B区G６グリッド、標高59.0mにあり、SK７の西側に位置する。長軸1.75m、短軸0.53mの長楕円形を呈する。検出面からの深さは10cmで、断面は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、西端は一段低くなっており、深さ20cmである。埋土は黄褐色のローム土が主体となる。堆積状況から西端の掘り込み部分は別の遺構である可



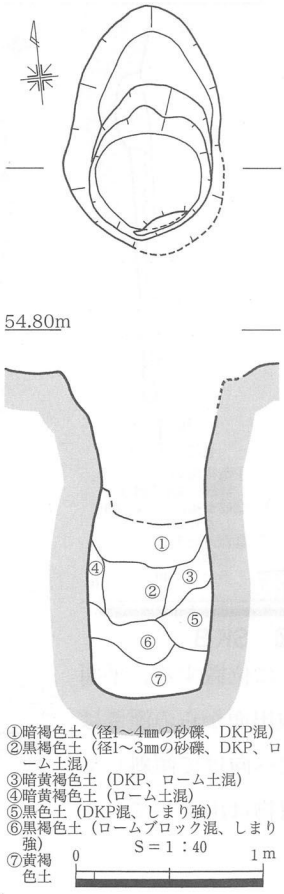
第48図　SK９



第50図　SK11



第49図　SK10



第51図　SK12

能性がある。遺物は出土していない。時期、性格とも不明である。　（坂本）

SK９（第48図、PL.14）

B区G５グリッド、標高約60.2～60.3mの平坦面に位置する。長軸約1.35m、短軸約0.9mの隅丸長方形を呈し、東西方向に主軸をとる。検出面からの深さは約５㎝と浅く、底面は平坦であるが、東端側に深さ20㎝ほどの掘り込みがある。埋土は地山土に近似した黄褐色土である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

（君嶋）

SK10（第49図、PL.14）

B区北端に近いB４グリッド、標高約53.2mの平坦面に位置する。長径約1.25m、短径約1.15mの円形を呈する。検出面からの深さは約1.55mで、底面は平坦である。埋土は黒褐色土系で、自然に埋没したものと思われる。遺物は出土していない。その形態から、落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。　（君嶋）

SK11（第50図、PL.16）

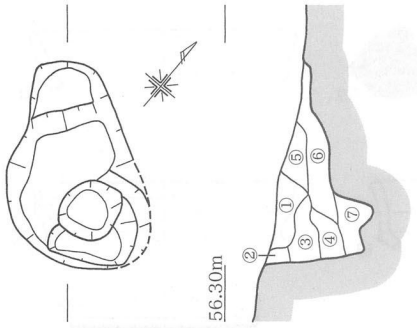
B区D５グリッド、標高約56.1～56.3mの緩斜面上に位置する。長径1.2m、短径0.75mの楕円形を呈し、北西―南東方向に主軸をとる。検出面からの深さは、坑底中央やや北寄りで最も深く55㎝である。底面は平坦で、南東側の壁面は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。埋土は暗黄褐色土系である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。　（君嶋）

SK12（第51図、PL.16）

B区C５グリッド、標高54.5mの緩斜面に位置する。長軸1.31m、短軸0.85mのやや歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは1.7mを測る。壁面は検出面から約0.6mの深さでややくびれる。また、北側では二段に掘り込まれている。埋土は暗褐色土、黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。底面ピットは有さないものの、その形態から落とし穴と考えられる。　（坂本）

SK13（第53図、PL.16）

B区D５グリッド、標高約56.0mの緩斜面に位置する。長軸1.25m、短軸1.0～1.1mの隅丸長方形を呈し、南北方向に主軸をとる。検出面からの深さは最大で85㎝である。底面は平坦で、中央に径35㎝、深さ55㎝のピットをもつ。埋土は暗黄褐色土系で、自然に埋没した状況を示している。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、底面ピットの存在から、落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。　（君嶋）



①暗茶褐色土（径2～3㎜白色礫混）
②暗黄褐色土（炭化物微量混）
③暗茶褐色土（ローム土混）
④暗茶褐色土（ロームブロック、DKPブロック混）
⑤暗黄褐色土（白色礫混）
⑥黄褐色土（DKP混）
⑦黄褐色土

S＝1：40　0　1m

第52図　SK14

SK14（第52図、PL.16）

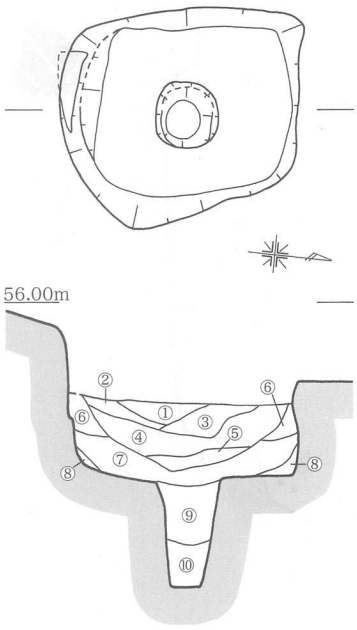
B区Ｄ５グリッド、標高約55.9～56.1mの緩斜面に位置する。長径1.15m、短径0.85mのいびつな楕円形を呈し、北西―南東方向に主軸をとる。底面は段状に高低差を持ち、南東寄りではピット状に深くなっている。検出面からの深さは最大で52㎝である。埋土は暗黄褐色土系である。堆積状況から、①～⑥層は、⑦層を埋土とするピットの埋没後に掘られた別の遺構の埋土である可能性も考えられる。遺物は出土しておらず時期は不明である。（君嶋）

SK15（第54図、PL.16）

B区Ｄ５グリッドに位置する。直径1.2mの円形を呈し、検出面からの深さは0.89mを測る。底面のほぼ中央に直径22㎝、深さ46㎝のピットをもつ。底面ピットは二段に掘り込まれている。埋土は暗褐色土系である。遺物は出土していない。底面ピットをもつことから落とし穴と考えられる。（坂本）

SK16（第55図、PL.16）

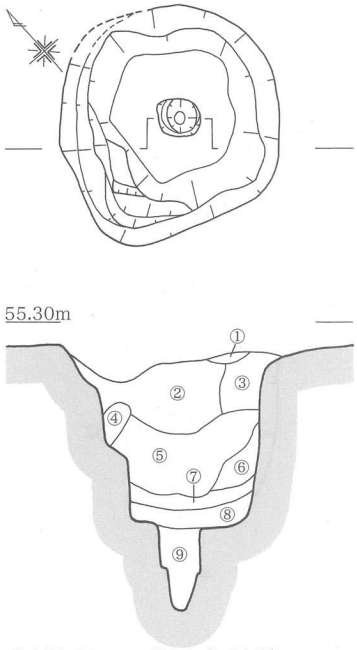
B区Ｅ６グリッド、標高55.25mの斜面に位置する。長軸1.3m、短軸1.18mのやや歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは1.55mを測る。底面は凹凸があり、一定しない。埋土は暗褐色土→暗黄褐色土→黒褐色土の順で自然に埋没したと考えられる。遺物は出土していない。底面ピットは有さないものの、その形態から落とし穴と考えられる。（坂本）



①黄褐色土（ローム土主体、暗褐色土ブロック混）
②黄褐色土（暗褐色土粒子多く混）
③暗黄褐色土（径3～5㎜小礫まばらに混）
④暗褐色土（ローム土混、DKPブロックまばらに混）
⑤暗黄褐色土（DKPブロック、暗褐色土わずかに混）
⑥暗黄褐色土
⑦黄褐色土（DKPブロック、暗褐色土わずかに混）
⑧黄褐色土（均質なローム土。粘性強）
⑨黄褐色土（ローム土主体、ATブロック多く混）
⑩黄褐色土

S＝1：40　0　1m

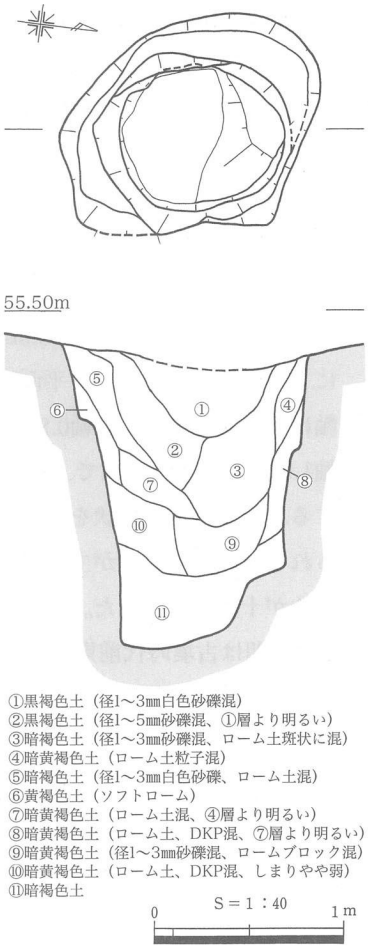
第53図　SK13



①暗褐色土とDKPの混合土（しまり弱）
②茶褐色土（DKP、炭化物微量に混、粘性やや強）
③暗黄褐色土（径1～3㎜の砂礫、DKP混）
④ロームブロック
⑤暗茶褐色土（炭化物微量混、粘性強）
⑥暗褐色土（炭化物微量混、粘性強）
⑦黄褐色土（ローム土、炭化物混、粘性強）
⑧暗黄褐色土（ローム土混、粘性強）
⑨黄褐色土

S＝1：40　0　1m

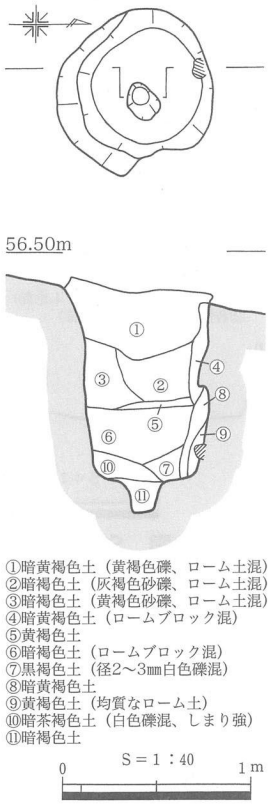
第54図　SK15



①黒褐色土（径1～3㎜白色砂礫混）
②黒褐色土（径1～5㎜砂礫混、①層より明るい）
③暗褐色土（径1～3㎜砂礫混、ローム土斑状に混）
④暗黄褐色土（ローム土粒子混）
⑤暗褐色土（径1～3㎜白色砂礫、ローム土混）
⑥黄褐色土（ソフトローム）
⑦暗黄褐色土（ローム土混、④層より明るい）
⑧暗黄褐色土（ローム土、DKP混、⑦層より明るい）
⑨暗黄褐色土（径1～3㎜砂礫混、ロームブロック混）
⑩暗黄褐色土（ローム土、DKP混、しまりやや弱）
⑪暗褐色土

S＝1：40　0　1m

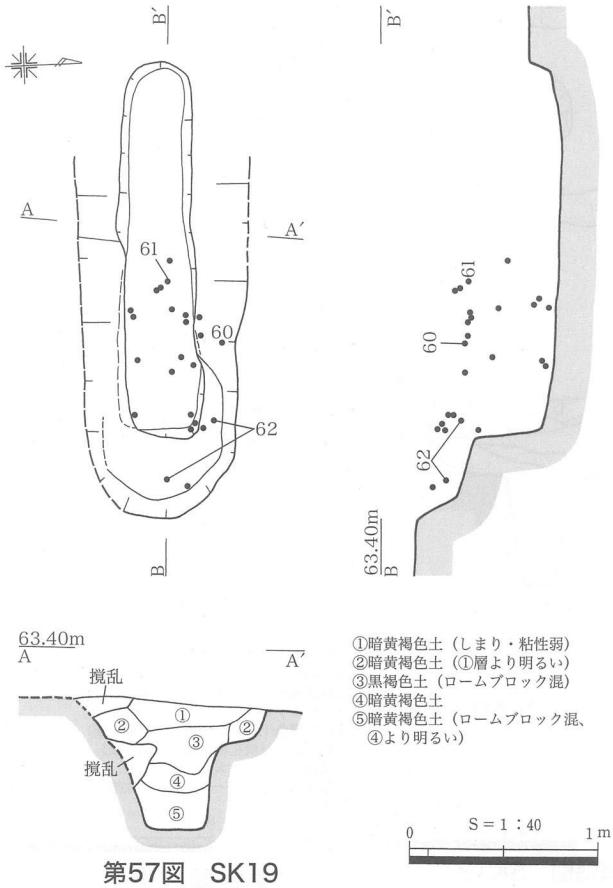
第55図　SK16



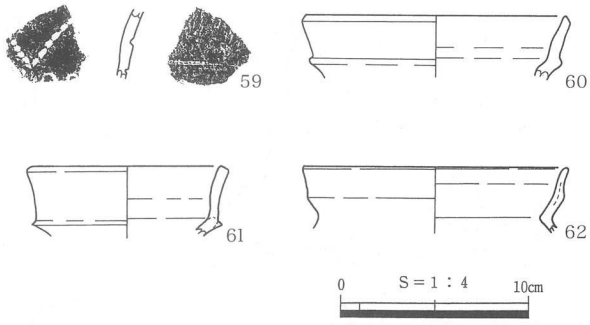
①暗黄褐色土（黄褐色礫、ローム土混）
②暗褐色土（灰褐色砂礫、ローム土混）
③暗褐色土（黄褐色砂礫、ローム土混）
④暗黄褐色土（ロームブロック混）
⑤黄褐色土
⑥暗褐色土（ロームブロック混）
⑦黒褐色土（径2～3㎜白色礫混）
⑧暗黄褐色土
⑨黄褐色土（均質なローム土）
⑩暗茶褐色土（白色礫混、しまり強）
⑪暗褐色土

S＝1：40　0　1m

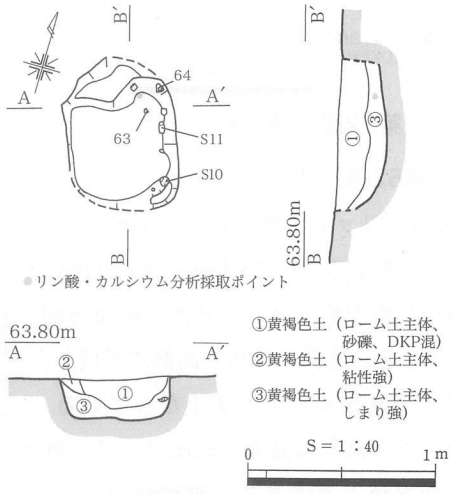
第56図　SK18



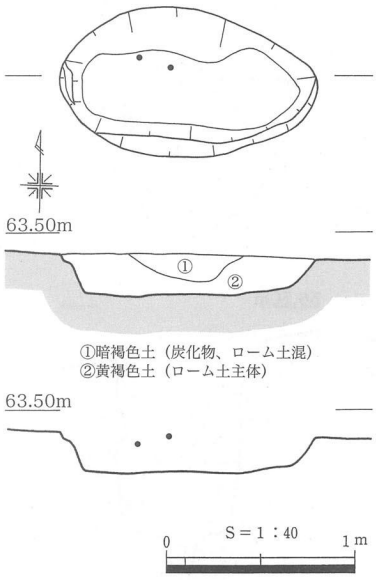
第57図　SK19



第58図　SK19 出土遺物



第60図　SK21



第59図　SK20

SK18（第56図、PL.17）

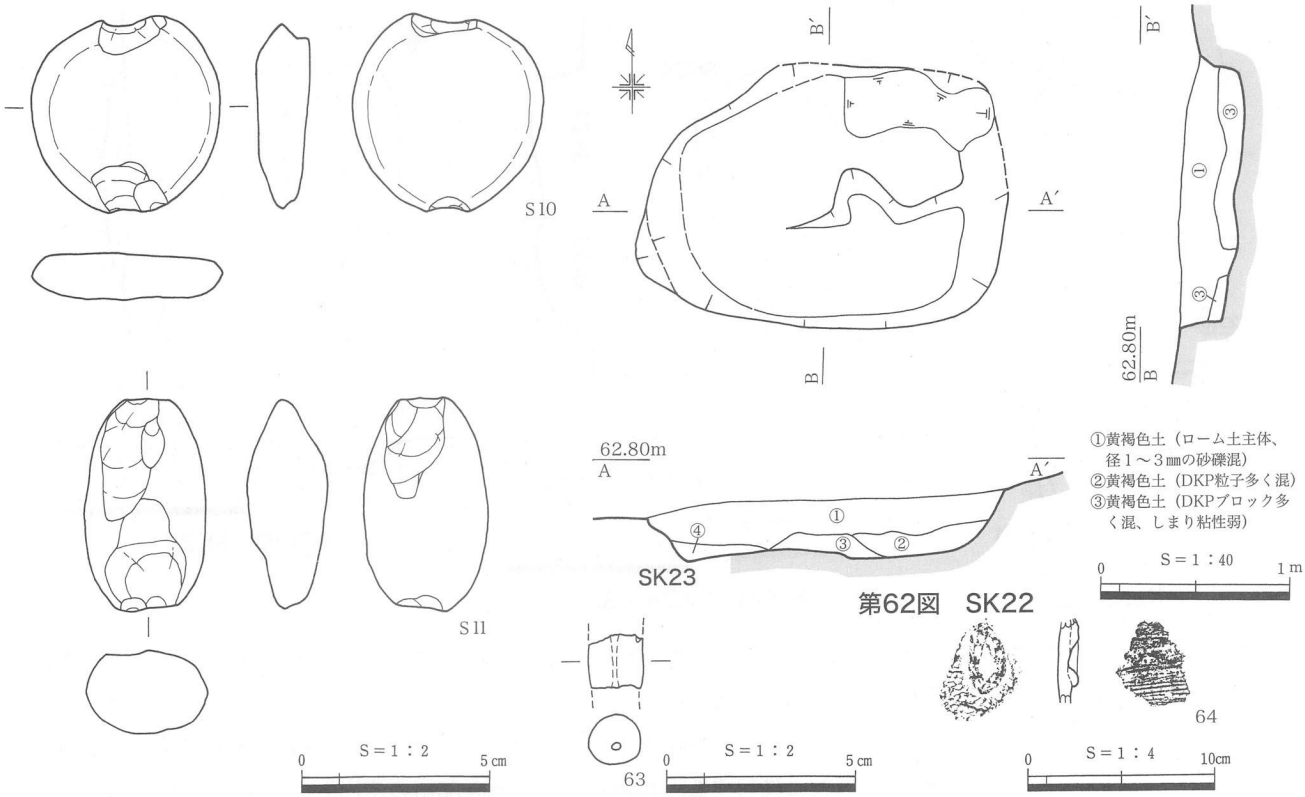
B区D５グリッド、E６杭付近に位置する。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸0.82m、短軸0.78m、検出面からの深さ１mを測る。底面中央よりやや東側に0.18m、短軸0.15m、深さ0.15mの浅いピットをもつ。埋土は暗黄褐色土系である。遺物は出土していない。底面ピットをもつことから落とし穴と考えられる。（坂本）

SK19（第57・58図、第16表、PL.18）

A区I２グリッド、標高63.0mの平坦地に位置する。西半分を試掘トレンチにより壊されているが、平面形は本来、長楕円形を呈すると考えられる。長軸は推定で2.86m、短軸0.89m、検出面からの深さは67cmである。底面は長軸1.98m、短軸0.38mで、検出面での形態よりもさらに細長い長楕円形を呈する。断面は逆台形状をなし、二段に掘り込まれている。埋土は５層に分けられる。暗黄褐色土が主体であるが、③層は黒褐色土である。埋土中より土器片が十数点出土した。埋土下層から60、61のような天神川Ⅱ～Ⅲ期の土器が出土していることから、本遺構の埋没時期は古墳時代前期と考えられる。59は縄文時代中期船元式の深鉢口縁、62は天神川Ⅸ～Ⅹ期（古墳時代中期末～後期初頭）の甕口縁で、ともに混入遺物である。（坂本）

第16表　SK19出土遺物観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
59	SK19 検出面	第58図 PL.24	縄文土器 深鉢口縁	器高△3.7cm	1/10以下	外面：竹管による押し引き沈線、刺突文 内面：RL縄文	淡褐色	1mm程の砂粒を含む	中期船元Ⅱ式
60	SK19 埋土上層	第58図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※14cm 器高△3.3cm	口縁部1/10以下	内外面：ナデ	淡褐色	密	
61	SK19 埋土上層	第58図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※10cm 器高△3.7cm	口縁部1/6	内外面：ナデ	淡褐色	密	
62	SK19 埋土中	第58図 PL.24	土師器 甕口縁部	口径※14.0cm 器高3.4cm	口縁部1/4	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	密	



第62図　SK22

第61図　SK21 出土遺物

第17表　SK21出土遺物観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
63	SK21 埋土中	第61図 PL.27	土玉	長さ△1.4cm 孔径0.2cm	両端を欠く	ナデ	褐色	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	
64	SK21 埋土中	第61図 PL.24	縄文土器 鉢　胴部	器高△4.5cm	1/10以下	外面：LR縄文　隆帯上に竹管による押し引き沈線を施す　内面：横位条痕	褐色	2㎜程の白色砂粒を多く含む	中期船元Ⅱ式

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長軸〔cm〕	短軸〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	石　材	備　考
S10	SK21 埋土中	第61図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	5.05	4.9	1.3	50	石英安山岩	
S11	SK21 埋土中	第61図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	5.5	2.2	2.2	56	石英安山岩	

SK20（第60・61図、第17表、PL.18）

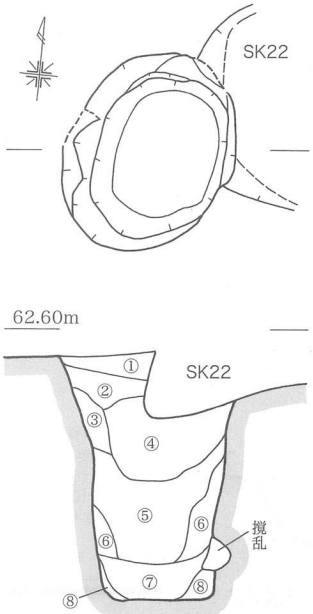
A区調査区際のＩ１グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、断面は逆台形状である。規模は長軸1.36m、短軸0.78m、検出面から深さ20㎝を測る。埋土は二層に分かれ、上層には炭化物が含まれる。遺物は上層より土器片２点が出土したが図化できなかった。また底面に掘り込まれた木根の撹乱土中から黒曜石の剥片１点が出土したが、埋土の体積状況から本来埋土中に存在したと考えられる。明確な時期や性格は特定できない。　（坂本）

SK21（第59図、PL.18）

A区J２グリッド、標高63.7mの平坦地に位置する。近接するSK５とは長軸が直交する。平面形は長軸方向の両端が撹乱により壊されているが、本来は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は長軸79㎝、短軸58㎝、検出面からの深さは25㎝を測り、断面は逆台形状を呈する。底面はやや凹凸があり、北端がやや高い。埋土は黄褐色のローム土主体である。遺物は、埋土中より縄文土器片数点のほか土玉63、石錘S10・S11が出土した。土器片は東辺側に偏って出土した。64は縄文時代中期船元式に位置づけられ、遺構の埋没時期を示すと考えられる。土壙の形態と出土遺物から土壙墓の可能性が考えられたため、リン酸・カルシウム分析を行ったが、埋葬を示唆する結果は得られなかった（第５章第１節参照）。　（坂本）

SK22（第62図、PL.17）

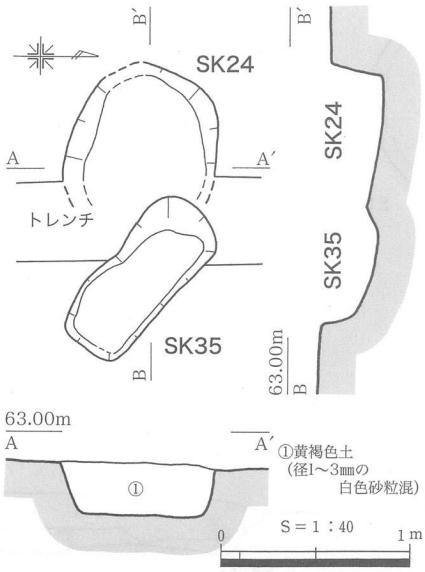
Ｉ３グリッドに位置する。南端はSK23を切って掘り込まれている。北東側を根撹乱で壊されているが、本来は楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸1.91m、短軸1.4m、検出面からの深さ0.31mを測る。底面は凹凸が



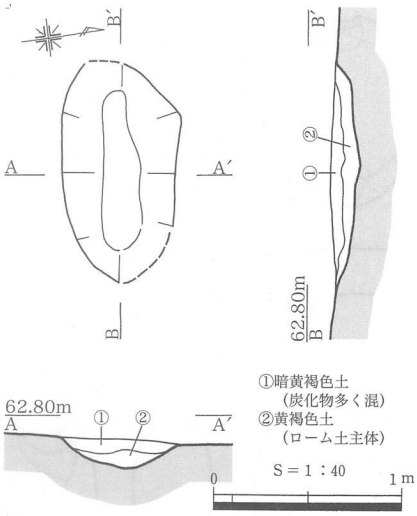
①黄褐色土（ローム土主体、粘性弱）
②暗黄褐色土（ローム土粒子多く混、砂礫混）
③暗黄褐色土（②層より暗い。砂礫混、粘性弱）
④黒褐色土（ローム土粒子混、粘性弱）
⑤暗黄褐色土（径１～３㎜の砂礫、DKP混）
⑥暗黄褐色土（径１～３㎜の砂礫混）
⑦暗褐色土（しまりやや強、粘性弱）
⑧黄褐色土（ローム土主体、粘性強）

S＝1：40　0　1m

第63図　SK23



第65図　SK24・35



第66図　SK27

あり、一定しない。遺物は出土せず、明確な時期や性格を特定できない。　（坂本）

SK23（第63図、PL.17）

A区I３グリッド、標高62.4mの平坦地に位置する。北東側で隣接するSK22と重複し、SK22に先行する。長軸1.1m、短軸0.86mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.3mを測る。埋土は暗黄褐色土と黒褐色土が互層状に堆積している。遺物は出土していない。底面ピットは有さないものの、その形態から落とし穴と考えられる。　（坂本）

SK24・35（第65図、PL.18）

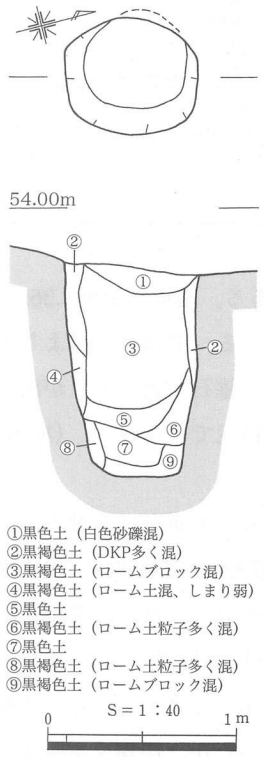
A区I２グリッド・I３グリッド、標高62.8mの平坦地に位置する。両遺構は重複しているが、先後関係は明らかではない。SK24は東半分をトレンチにより壊されているが、本来は楕円形を呈すると思われる。検出した規模は長軸0.66m、短軸0.8m、深さ0.28mを測る。断面は長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色で単層である。遺物は出土していない。SK35は長軸0.95m、短軸0.37mのやや不整形な隅丸長方形を呈する。検出面からの深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。両遺構とも時期、性格は不明である。　（坂本）

SK26（第64図、PL.17）

B区B４グリッド、標高約53.7mの平坦面に位置する。長径0.7m、短径0.62mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で1.1mで、底面は平坦である。埋土は黒褐色土系である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、その形態から落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。　（君嶋）

SK27（第66図、PL.17）

A区G１グリッド、標高62.6mの平坦地に位置する。規模は長軸1.17m、短軸0.6mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測る。断面は皿状を呈し、明確な壁を有さない。埋土は黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期、性格とも不明である。　（坂本）



①黒色土（白色砂礫混）
②黒褐色土（DKP多く混）
③黒褐色土（ロームブロック混）
④黒褐色土（ローム土混、しまり弱）
⑤黒色土
⑥黒褐色土（ローム土粒子多く混）
⑦黒色土
⑧黒褐色土（ローム土粒子多く混）
⑨黒褐色土（ロームブロック混）

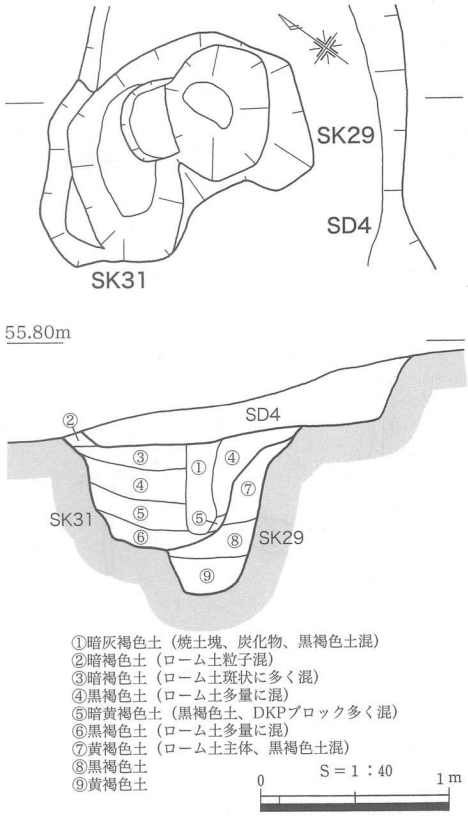
S＝1：40　0　1m

第64図　SK26

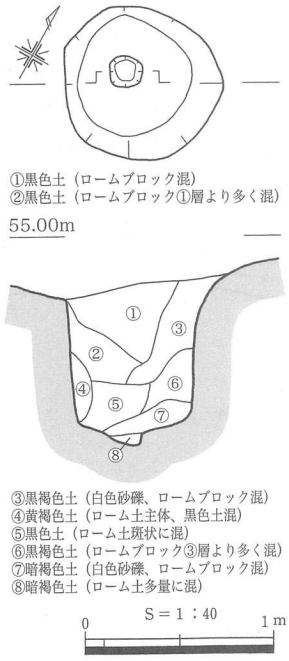
SK29・31（第67図、PL.17）

A区北端近くのB３・C３グリッド、標高約55.3～55.8mの緩斜面に位置する。SD４と重複しているが、埋土の堆積状況からSD４に先行することが明らかなので、第２遺構面の遺構として扱うことにする。両土坑は切り

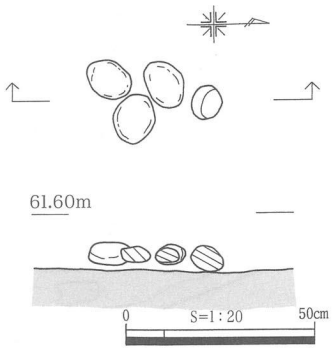
合い関係にあり、SK29がSK31に先行する。SK29は歪な円形を呈し、直径を復元すると85cm程度になると思われる。SD４の溝底からの深さは80cmである。SK31の形状と規模を土層断面から復元すると、北西―南東方向に主軸をとる長径1.5mほどのいびつな楕円形になると思われる。SD４の溝底からの深さは55cmで、底面は凹凸をもつ。両土坑とも、ローム土混じりの黒褐色土と暗褐色土もしくは黄褐色とが互層状に堆積しており、自然に埋没したとは考えにくい。また①層は柱痕のようにも見えるが、焼土塊や炭化物が混入している。遺物は、両土坑の埋土中より土師器・須恵器片が数点出土した。それぞれがどちらの土坑に帰属するものかは把握できない。いずれも小片であり図化に耐えないが、その年代は、おおむねSD４など周辺の遺構から出土した土器に近い７世紀代のものと思われる。性格については断定できないが、土器の出土や埋土の堆積状況などから、人為的に埋め戻された廃棄土坑である可能性が考えられる。（君嶋）



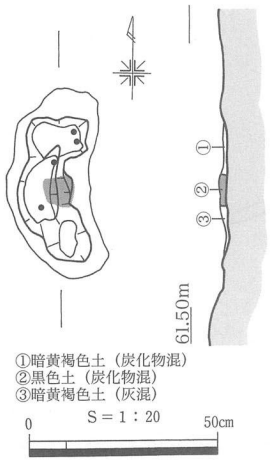
第67図　SK29・31



第68図　SK30



第69図　集石



第70図　地床炉状硬化遺構

SK30（第68図、PL.18）

A区の北端に近いB２グリッドに位置する。直径約85cmの円形を呈し、検出面からの深さは最大で80cmである。底面はほぼ平坦で、中央やや北寄りに径18cm、深さ８cmのピットをもつ。埋土は黒褐色土系である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、その形態から落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。（君嶋）

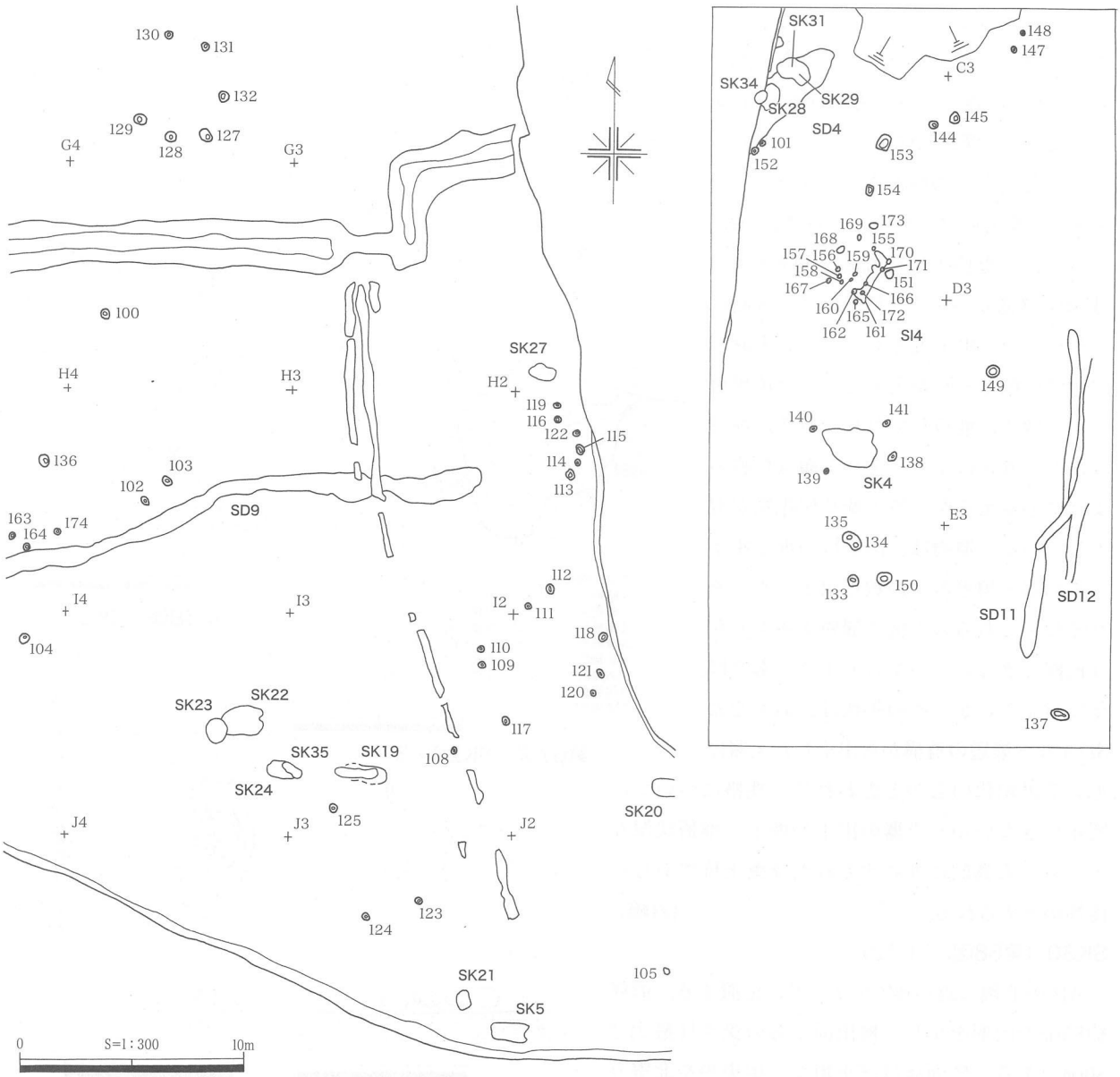
（７）その他の遺構

集石（第69図）

A区H４グリッド、標高61.50mの平坦地に位置する。遺構確認面上で河原石４点がまとまって検出されたものである。検出した石は長軸12cm前後、短軸10cm前後の楕円形を呈し、厚さは４cmほどで扁平である。石の表面や側面などを磨ったり、敲いたりした痕跡は認められない。性格・時期とも不明である。（坂本）

地床炉状硬化遺構（第70図）

A区G３グリッド、標高61.50mの平坦地に位置し、近くにP100が存在する。地山面が歪な楕円形状に硬化した状態で検出されたものである。規模は長軸48cm、短軸22cmを測る。断面は非常に浅い皿状を呈し、底面は凹凸がある。埋土は暗黄褐色土で、中央付近で土壌化した炭化物の堆積がみられた。遺物は埋土中より土器片が４点出土した。小片のため図化できなかったが、弥生時代以降のものである。その形状と炭化物の堆積から地床炉の可能性が想起されたが、硬化面には被熱した痕跡は見られず、本来の性格は不明である。（坂本）



第71図　A区ピット群分布図

（8）ピット群（第71・72・73図、第18・19・20表、PL.24）

A区99基、B区78基、合わせて177基のピットが検出された。これらのうち、P152とP177の２基が第１遺構面、それ以外は第２遺構面で検出したものである。A区は比較的まばらな状態で分布している。B区は調査区北側C４、C５、D４グリッドと南西側G７グリッドに密に存在する。

ピットの埋土は黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土・黄褐色土に分けることができる。ほとんどが単層であり、分層できるものは少ない。遺構内のピットを除いて、柱痕が確認できたのはP３、P６である。P３はP１、２とほぼ直線状に並んでおり、調査区外へとのびる柵跡の可能性がある。それ以外にもピットが直線状に並んでいる箇所があるが、それらには柱痕が全くみられないこと、規模にばらつきがみられることから、確実に建物や柵列を復元できるものはない。

39基のピットから遺物が出土した。図示した65はB区D４グリッドのP91から出土した縄文時代中期船元式の深鉢である。66はB区G７グリッドのP14から出土した弥生時代前期の壺形土器肩部である。これらのほか、小片のため図化はできなかったが、P85から弥生時代後期の壺の肩部、P52から7世紀後半の須恵器坏の口縁部、P69、83から土師器甕の口縁部、P６、P42から土師器甕の頸部が出土している。（坂本）

第18表　ピット計測表（1）

No.	区画	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土　色
P1	D4	54	54	21	③層　暗黄褐色系
P2	D4	56	46	26	⑥層　暗黄褐色系
P3	D4	62	44	36	不明
P4	D4	52	40	44	③層　暗黄褐色系
P5	D4	54	54	20	②層　暗黄褐色系
P6	D4	64	46	53	⑥層　暗黄褐色系
P7	D4	70	66	31	暗黄褐色
P8	D4	50	50	34	⑤層　暗黄褐色系
P9	D4	60	54	18	暗褐色
P10	G7	25	23	16	暗褐色
P11	G7	30	27	23	暗褐色
P12	G7	77	49	12	黄褐色
P13	G7	18	15	18	暗褐色
P14	G7	37	37	13	暗褐色
P15	G7	60	52	16	黄褐色
P16	G7	26	26	20	暗褐色
P17	G7	72	70	24	黄褐色
P18	G7	38	27	80	③層　暗黄褐色系
P19	G7	38	34	32	④層　暗黄褐色系
P20	G7	69	60	18	黄褐色
P21	G7	45	40	20	③層　暗黄褐色系
P22	G7	36	34	27	暗褐色
P23	G7	30	28	38	暗褐色
P24	G7	40	40	10	暗褐色
P25	G7	28	28	15	暗褐色
P26	G7	32	32	28	暗褐色
P27	G7	43	40	10	暗褐色
P28	G7	33	24	8	暗褐色
P29	G7	35	35	37	黄褐色
P30	G7	58	38	22	黄褐色
P31	G7	29	24	26	暗褐色
P32	G7	25	25	10	暗褐色
P33	H7	16	15	24	暗褐色
P34	D4	32	30	36	不明
P35	G5	35	35	34	暗褐色
P36	G5	26	23	7	暗褐色
P37	G5	17	21	3	暗褐色
P38	G5	43	40	20	暗褐色
P39	G5	44	30	7	黄褐色
P40	G7	18	16	23	暗褐色
P41	H7	70	62	15	③層　黄褐色系
P42	E6	55	47	58	⑤層　暗黄褐色系
P43	E6	46	45	40	③層　暗褐色系
P44	E6	56	53	42	④層　暗褐色系
P45	E6	28	20	14	②層　暗褐色系
P46	C6	50	42	30	④層　暗褐色系
P47	C6	55	51	35	④層　暗黄褐色系
P48	C6	45	35	12	②層　暗褐色/灰褐色
P49	C6	49	45	25	②層　暗黄褐色/茶褐色
P50	D5	57	55	42	⑤層　暗黄褐色系
P51	D5	38	26	19	暗黄褐色
P52	D5	60	56	30	③層　暗黄褐色系
P53	C5	23	20	12	暗褐色
P54	D5	55	45	7	暗褐色
P55	D5	23	20	20	暗褐色
P56	C5	82	48	64	暗褐色
P57	C5	48	46	21	③層　暗褐色系
P58	C5	48	46	56	③層　黒褐色
P59	C5	35	31	14	暗褐色（DKPを含む）
P60	C5	58	50	38	②層　黒褐色系
P61	C5	32	29	22	②層　黒褐色/暗黄褐色
P62	C5	48	42	18	②層　黒褐色系
P63	C5	40	40	25	②層　黒褐色/黄褐色
P64	C5	33	33	13	黒褐色（ローム土斑状に含む）
P65	C5	60	40	20	黒褐色
P66	C5	50	50	25	②層　黒褐色/暗褐色
P67	C5	46	24	18	暗褐色（ＤＫＰを含む）
P68	C5	31	25	19	暗褐色（炭化物を含む）
P69	C4	33	30	12	黒褐色（ローム土を含む）
P70	C4	30	30	11	黒褐色（ローム土を含む）
P71	C4	37	34	20	黒褐色（ローム土を含む）
P72	C4	37	30	14	黒褐色
P73	C4	50	42	39	④層　暗褐色系
P74	D4	33	23	38	黄褐色
P75	C4	72	46	52	④層　暗褐色系
P76	C4	30	30	11	暗褐色（炭化物を含む）
P77	C4	32	29	21	暗褐色（ローム土を含む）
P78	C4	74	64	35	③層　暗褐色/灰白色/黒褐色
P79	C4	30	28	7	暗褐色
P80	C4	32	30	11	暗褐色
P81	C4	46	42	22	②層　茶褐色/黒褐色
P82	C4	50	46	12	暗褐色（ローム土を含む）
P83	C5	19	18	36	暗褐色
P84	D5	74	62	62	
P85	D6	44	38	43	④層　暗黄褐色系
P86	C5	70	60	41	暗黄褐色

第72図　Ｂ区ピット群分布図

第19表　ピット計測表（２）

No.	区画	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土　色
P101	C３	28	21	20	黄褐色
P102	H３	29	23	15	暗褐色
P103	H３	30	24	8	暗褐色
P104	I４	33	31	20	暗褐色
P105	J１	30	26	21	暗黄褐色
P106	F４	44	32	8	SI３　P３
P107	F４	40	40	54	SI３　P２
P108	I２	22	21	24	黄褐色
P109	I２	29	28	10	黄褐色
P110	I２	28	26	12	黄褐色
P111	H１	26	23	7	黄褐色
P112	H１	33	32	16	黄褐色
P113	H１	40	33	15	黄褐色
P114	H１	30	29	15	黄褐色
P115	H１	40	33	10	黄褐色
P116	H１	26	24	10	黄褐色
P117	I２	21	20	8	黄褐色
P118	I１	28	28	20	暗黄褐色
P119	H１	24	20	21	黄褐色
P120	I１	22	16	14	黄褐色
P121	I１	34	20	7	黄褐色
P122	H１	20	18	11	黄褐色
P123	J２	26	26	11	黄褐色
P124	J２	18	18	17	黄褐色
P125	I２	30	30	21	黄褐色
P126	F４	34	30	50	SI３　P１
P127	F３	58	46	63	黄褐色系
P128	F３	42	40	52	暗褐色（ローム土を含む）
P129	F３	42	42	39	暗褐色
P130	F３	46	42	32	暗褐色
P131	F３	26	24	17	暗褐色（炭化物を含む）
P132	F３	36	36	50	暗褐色（ローム土を含む）
P133	E３	48	40	27	暗褐色（炭化物・ロームを含む）
P134	E３	42	36	48	暗黄褐色/暗褐色
P135	E３	60	40	23	暗黄褐色/暗茶褐色
P136	H４	50	38	41	暗黄褐色（炭化物を含む）
P137	E２	66	36	10	灰黄褐色
P138	D３	32	32	45	暗黄褐色/黄褐色
P139	D３	22	18	23	暗黄褐色（炭化物を含む）
P140	D３	28	26	21	黄褐色/黄色
P141	D３	26	22	17	暗黄褐色（炭化物を含む）
P142	B５	60	52	12	黒色（DKPを含む）
P143	B５	50	24	10	黒色（DKPを含む）
P144	C３	36	34	22	暗黄褐色
P145	C２	56	46	34	暗黄褐色
P146	C３	32	30	39	暗黄褐色
P147	C２	24	22	29	暗黄褐色
P148	C２	24	24	23	暗黄褐色
P149	D２	60	54	67	暗黄褐色
P150	E３	60	50	61	黄褐色
P151	C３	42	40	36	暗黄褐色
P152	C３	30	24	32	暗灰褐色
P153	C３	70	56	11	暗黄褐色
P154	C３	40	30	9	暗黄褐色
P155	C３	22	20	13	暗黄褐色
P156	C３	18	14	22	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P157	C３	16	16	28	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P158	C３	16	12	22	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P159	C３	16	10	23	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P160	C３	18	14	24	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P161	C３	22	18	24	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P162	C３	24	22	12	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P163	H４	28	24	55	暗褐色（砂礫を含む）
P164	H４	36	30	30	暗褐色
P165	C３	22	22	19	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P166	C３	16	14	19	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P167	C３	18	16	34	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P168	C３	44	24	30	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P169	C３	38	20	12	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P170	C３	34	16	31	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P171	C３	20	15	26	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P172	C３	22	18	25	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P173	C３	36	26	19	暗黄褐色（炭・焼土を含む）
P174	H４	22	20	35	暗褐色
P175	C区	53	45	23	暗褐色
P176	C区	53	51	30	暗褐色
P177	C５	26		42	茶褐色

第４節　遺構外出土の遺物

（第74～82図、第21～24表、PL.25～30）

遺構外の表土層・包含層・撹乱土からも多くの遺物が出土している。これらの包含層は、第３章第１節で述べたようにいずれも幅広い時期の遺物を含んでおり、層位毎の堆積時期を特定できるわけではない。そこで本節での記述は、層位毎ではなく土器と石器とに分けて行い、土器については時代別に概要を述べることにする。

縄文土器

早期末～前期に位置づけられるものとして黄褐色土出土の82がある。深鉢形土器の胴部下位の破片で、外面には対向する羽状縄文を施して菱形のモチーフを表している。北陸地方など他地域の影響を考えるべき資料であろう。量的にまとまって出土したのは中期船元式（68、72、83～91、94、95、101～103）で、同時期の遺構としてはSK21がある。これらのうち84は深鉢の口頸部片で、縦位の二枚貝条痕を地文とし、隆帯上に竹管による刺突を施す。一般に中国地方の中期の編年では、条痕地の土器は里木Ⅱ式に後続する中期末に位置づけられている。しかし、84の器形や隆帯などの特徴は船元Ⅱ式の範疇で理解できるものであり、船元Ⅱ式の縄文地が条痕地に転換した地域性を示すタイプとして中期前半に位置づけられよう[註]。後期のものには78、92がある。78は後期前葉福田K２式・島式段階、92は後期中葉と思われる。晩期～弥生時代前期に特徴的な突帯文土器では67、73、93がある。突帯が口縁端部に接する73・93は晩期末、無刻目突帯の67は弥生時代前期に位置づけられる。

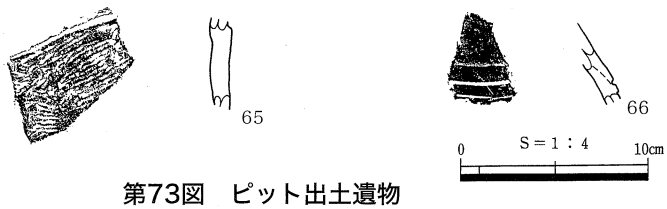
弥生時代～古墳時代

104は弥生時代前期、75、105は同中期中葉（Ⅲ様式）の甕形土器である。74は前期～中期中葉、107は中期の底部か。肩部に波状文を施す106は終末期～古墳時代前期にかけてのものである。

69、96は古墳時代前期、70、97は後期の甕形土器口縁部である。後期の遺構は確認されていないが、70、97に類似した口縁部はSI２やSK19の埋土中などからも少量出土している。

７世紀代～古代・中世

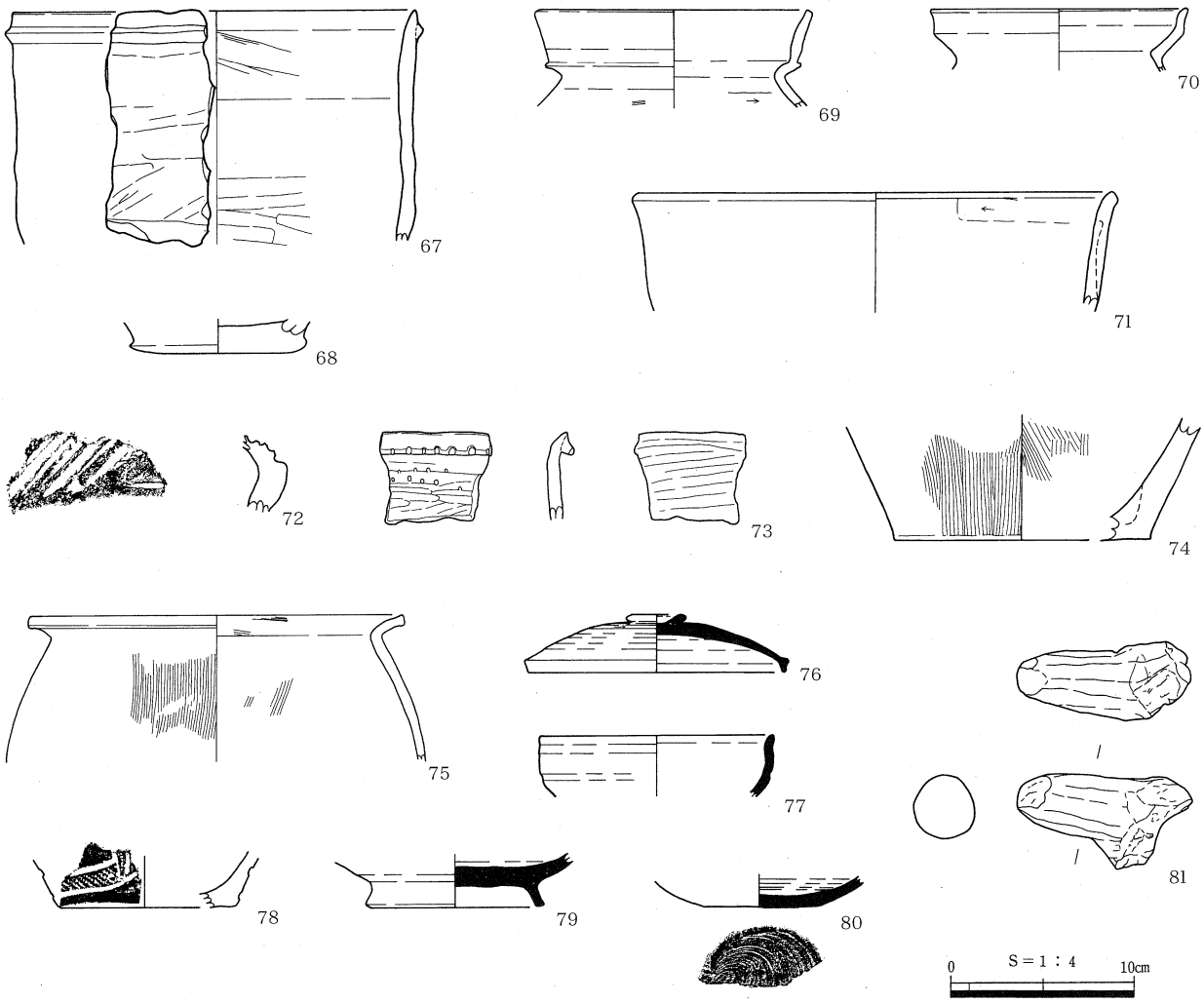
遺構外出土遺物のうち、最も出土量の多かったのが７世紀代の土師器・須恵器である。特にB区北端の撹乱土・茶褐色土中から大量



第73図　ピット出土遺物

第20表　ピット出土遺物観察表

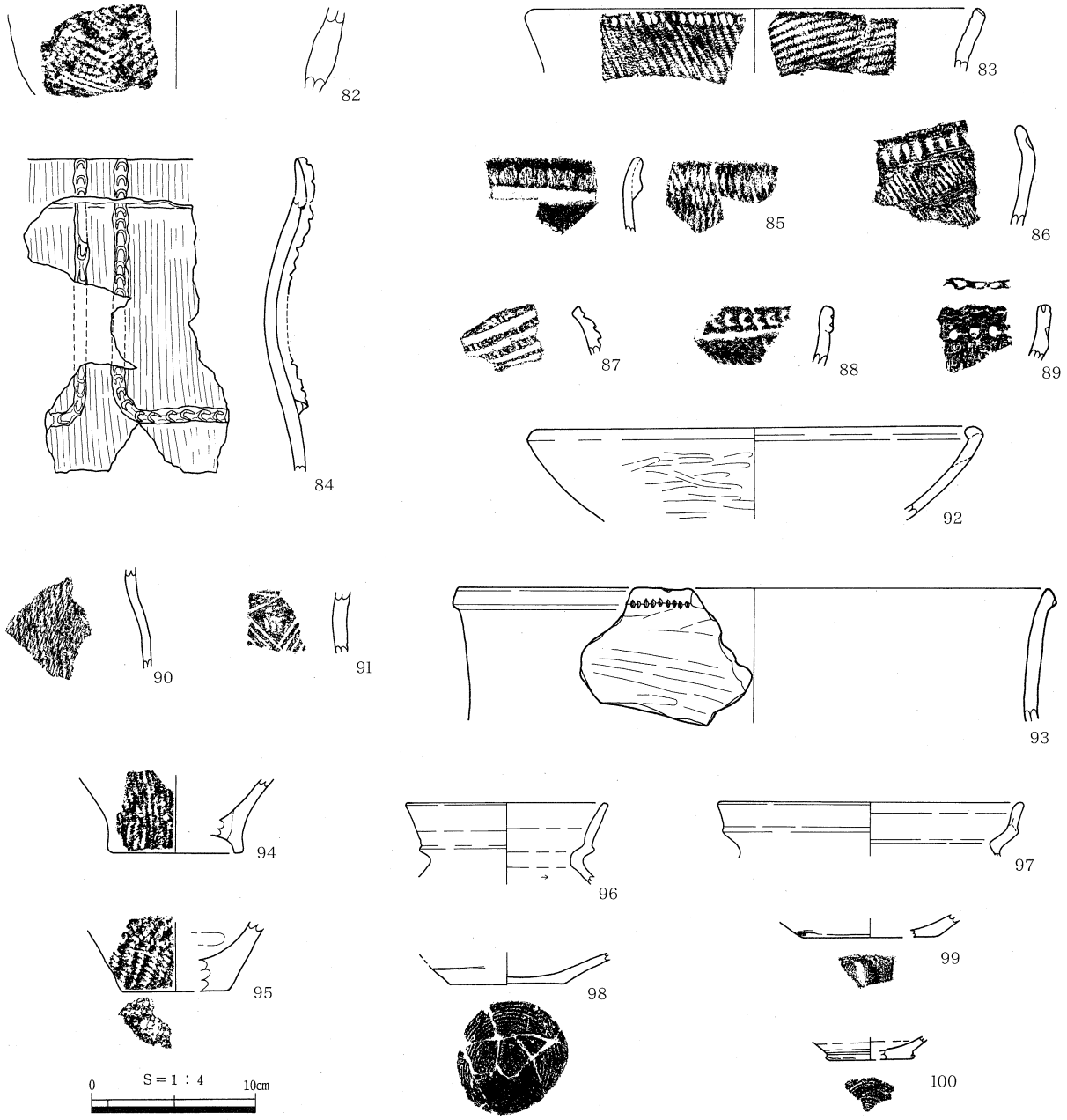
No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
65	P91 埋土中	第73図 PL.24	縄文土器 鉢　胴部	器高△4.9cm	1/10以下	外面：L縄文　沈線１条 内面：ナデ	淡褐色	１mm程の砂粒を含む	中期船元式
66	P14 埋土中	第73図	弥生土器 壺　肩部	器高△3.2cm	1/10以下	外面：削り出しの段に沈線２条、ナデ 内面：ナデ	淡褐色	１mm程の白色砂粒を含む	弥生時代前期



第74図　包含層出土土器（1）

第21表　包含層出土土器観察表（1）

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
67	A区　I4 暗褐色土	第74図 PL.25	突帯文土器 深鉢　口縁部	口径※22.0cm 器高△12.9cm	口縁部1/10 以下	外面：粗いナデ 内面：胴部上半粗いナデ、中位以下ケズリ	褐色	1～2㎜の白色 砂粒を含む	外面煤付着
68	A区　I4 暗褐色土	第74図	底部	底径6.8cm 器高1.8cm	底面完存	内外面：ナデ	褐色	3㎜程の白色砂 粒を多く含む	
69	A区　I4 暗褐色土	第74図 PL.26	土師器 甕口縁部	口径※14.5cm 器高△5.3cm	口縁部1/7	外面：口縁部工具によるナデ　肩部ハケ目 内面：頸部以下ケズリ	褐色	密	外面煤付着
70	A区　I3 暗褐色土	第74図 PL.26	土師器 甕口縁部	口径※13.8cm 器高△3.4cm	口縁部1/7	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	密	
71	A区　I4 暗褐色土	第74図 PL.26	土師器 甕口縁部	口径※25.8cm 器高△6.5cm	口縁部1/10	外面：ナデ　　内面：ケズリ後ナデ	褐色	2～5㎜の白色 砂粒を含む	
72	B区　E6 暗黄褐色土	第74図 PL.25	縄文土器 鉢　口縁部	器高△4.3cm	口縁部1/10 以下	外面に沈線を施す	褐色	1㎜以下の白色 砂粒を多く含む	中期船元式
73	B区　D7 暗黄褐色土	第74図 PL.25	突帯文土器 深鉢　口縁部	器高△4.8cm	口縁部1/10 以下	内外面：粗いナデ　刻目突帯	褐色	1㎜程の白色砂 粒を含む	外面煤付着
74	B区　E6 暗黄褐色土	第74図 PL.26	弥生土器 甕　底部	底部※13.8cm 器高△6.7cm	底部1/3	外面：ハケ 内面：ハケ	褐色	1㎜程の白色砂 粒を含む	
75	B区　B5 茶褐色土	第74図 PL.26	弥生土器 甕口縁部	口径※20.2cm 器高△8.0cm	口縁部1/10 以下	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ後強いナデ	褐色	1㎜程の白色砂 粒を含む	外面煤付着
76	B区　B4 茶褐色土	第74図 PL.26	須恵器 蓋	口径※14.0cm 器高3.2cm	約1/2	内外面：ヨコナデ　天井部回転ヘラケズリ	灰色	密	
77	B区　D5 茶褐色土	第74図 PL.26	須恵器 坏	口径※12.8cm 器高△3.3cm	口縁部1/7	内外面：ヨコナデ	黄灰色	密	
78	B区　B4 茶褐色土	第74図 PL.25	縄文土器 鉢　底部	底径※9.7cm 器高△3.0cm	底部1/3	外面：RLの磨消縄文帯、ミガキ 内面：ナデ	褐色	1～3㎜程砂粒 を含む	福田K２式
79	B区　B4 茶褐色土	第74図 PL.26	須恵器 高台付坏	底径8.9cm 器高△2.9cm	約1/2	内外面：ヨコナデ	灰色	1㎜程の白色砂 粒を含む	
80	B区　C4 茶褐色土	第74図 PL.26	須恵器 坏	底径※6.0cm 器高△1.7cm	底部3/5	外面：底部回転糸切り	灰色	1㎜程の白色砂 粒を含む	
81	B区　B4 黒褐色土	第74図 PL.27	土製支脚	長さ※9.6cm 厚さ3.5cm	突起部のみ	ナデ	褐色	白色砂粒を含む	



第75図　包含層出土土器（２）

に出土した。須恵器の坏蓋112～116・坏身117～119は天井部・底部のヘラケズリを省略している。おおむね高広ⅡA期（７世紀初頭～前葉）に相当しよう。口縁がわずかに外反する77はⅢA期（７世紀中葉～末葉）に、輪状つまみをもつ76はⅢB期（７世紀末葉～８世紀前葉）に位置づけられる。土師器の甕130～136は口縁が「く」字状に外反する。その他の煮炊具では移動式竈137、138、甑の把手139、支脚の突起81が出土している。また、手捏土器108も７世紀代のものであろう。底外面に回転糸切痕をもつ須恵器坏80、128は高広Ⅳ期（８世紀中葉）以降のものと思われる。同様に回転糸切痕をもつ土師質土器98～100は平安時代後期に位置づけられ、方形区画出土の32とほぼ同時期のものと考えられる。

近世・その他

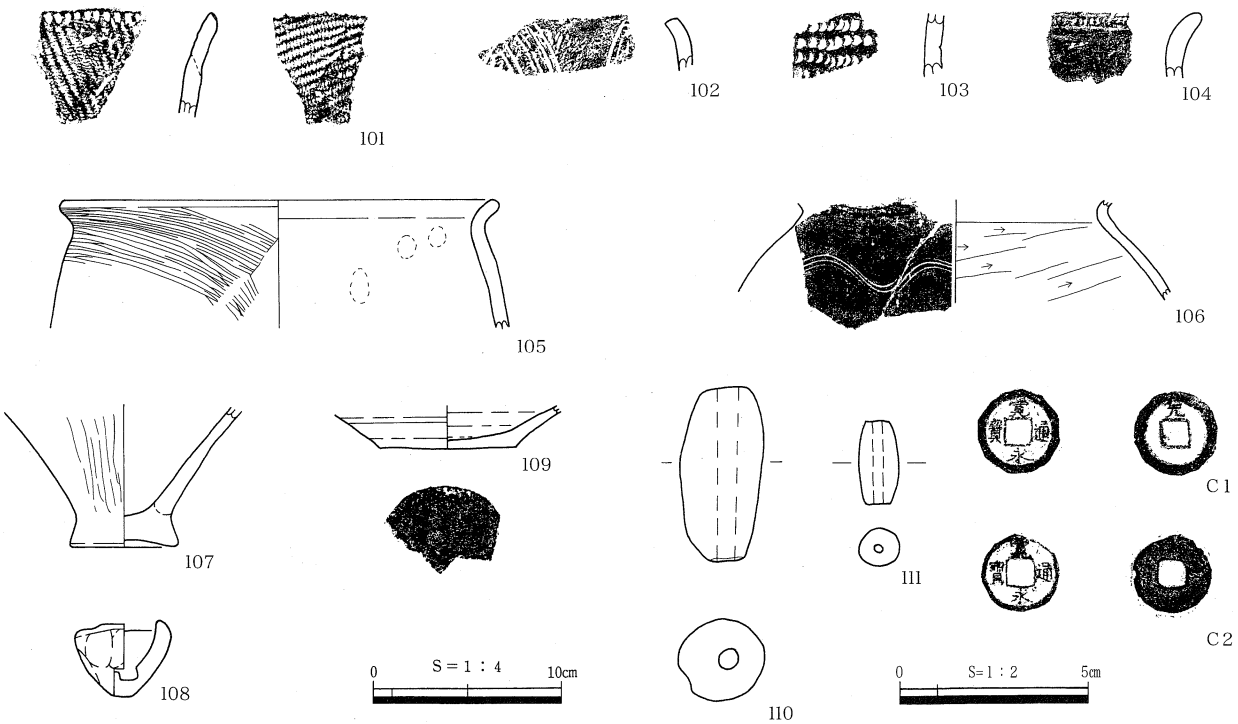
Ｃ１・Ｃ２は撹乱土から出土した寛永通宝である。ともに新寛永で、Ｃ１には「元」の背文字がある。

以上の他、時期は特定できないが、土錘110、土製管玉111が出土している。　（君嶋）

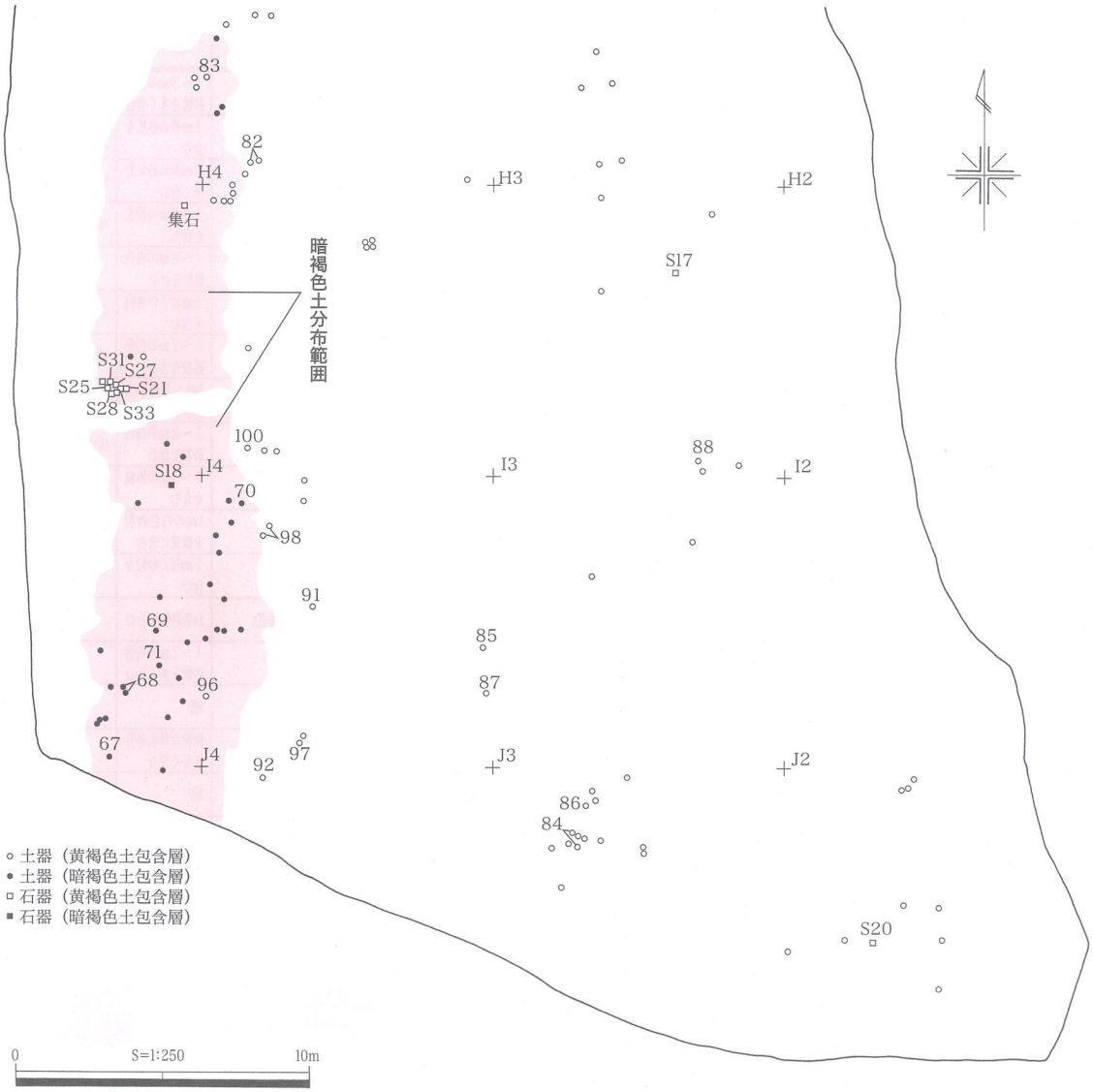
註）84に類似した条痕地に隆帯をもつ土器は島遺跡（北条町）に類例があるが、報告書中では同様の観点から船元Ⅰ・Ⅱ式の直後に位置づけられている。北条町教育委員会1983『島遺跡発掘調査報告書』第１集。なお、縄文土器に関しては山崎真治氏から多くのご教示をいただいた。記して謝意を表するとともに、理解に誤りがあれば筆者の責任であることを明記しておく。

第22表　包含層出土土器観察表（２）

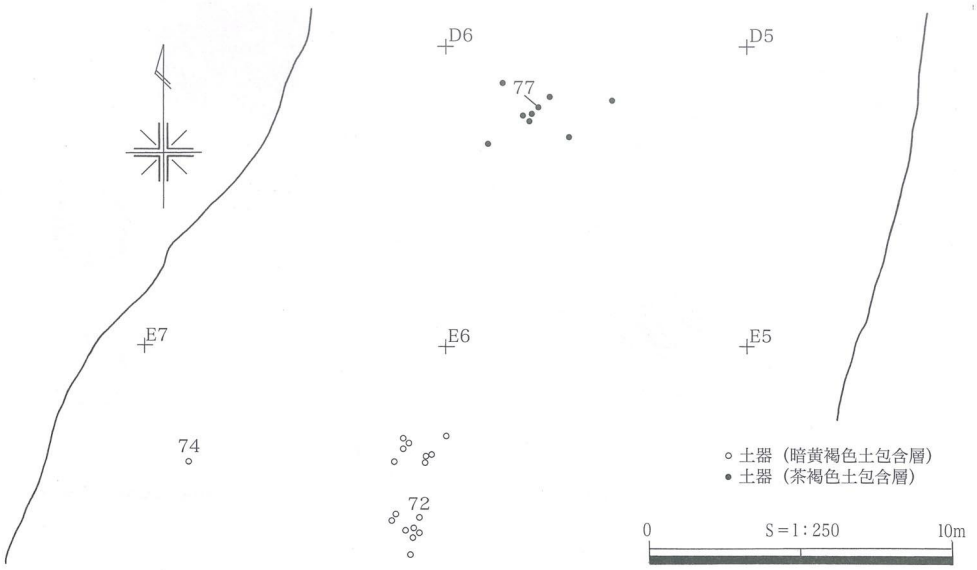
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
82	A区　H３ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　胴部	器高△5.0cm	1/10以下	外面：羽状縄文 内面：ナデ	褐色	1～3㎜の白色砂粒を多く含む	早期末～前期
83	A区　G４ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　口縁部	口径※27.0cm 器高△3.8cm	口縁部1/9	内外面：LR縄文　口縁端部に刻み目	褐色	1㎜程の砂粒を含む	外面煤付着 中期船元Ⅱ式
84	A区 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 深鉢　胴部	器高△19.0cm	胴部1/8	外面：縦位条痕　隆帯に竹管による刺突文 内面：ナデ	淡褐色	3㎜程の砂粒を多く含む	中期船元Ⅱ式
85	A区 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　口縁部	器高△4.4cm	口縁部1/10以下	口縁外面を肥厚させ貝殻による刺突 内面：RL縄文	淡褐色	1～2㎜の砂粒を含む	中期船元Ⅱ式
86	A区　J２ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 深鉢口縁部	器高△5.4cm	口縁部1/10以下	外面：R縄文　口縁部ヘラ状工具による刺突文　内面：横位条痕	明褐色	1～3㎜の白色砂粒を含む	中期船元式
87	A区　I３ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 浅鉢口縁部	器高△2.8cm	口縁部1/10以下	外面：撚糸文か　沈線４条 内面：ナデ	褐色	1㎜以下の砂粒を含む	中期船元Ⅳ式～里木２式
88	A区　H２ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 浅鉢口縁部	器高△3.6cm	口縁部1/10以下	口縁外面を肥厚させ爪形の刺突文 内外面：ナデ	淡褐色	1～2㎜の白色砂粒を含む	中期船元式
89	A区　I２ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 浅鉢口縁部	器高△3.2cm	口縁部1/10以下	外面：縦走縄文　竹管による円形刺突文 口唇部に刺突文　内面：ナデ	淡褐色	1㎜～5㎜の白色砂粒を含む	中期船元式
90	A区　J１ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　胴部	器高△6.0cm	1/10以下	外面：RL縦走縄文 内面：ナデ	褐色	1～2㎜の白色砂粒を含む	中期船元Ⅰ～Ⅱ式
91	A区　I３ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　胴部	器高△3.8cm	1/10以下	外面：RL縄文　半截竹管による山形文 内面：ナデ	灰褐色	1～2㎜の砂粒を含む	中期船元Ⅱ～Ⅲ式
92	A区　J３ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 浅鉢　口縁部	口径※26.4cm 器高△5.6cm	口縁部1/10以下	内外面：ミガキ	褐色	1㎜の白色砂粒を微量に含む	後期中葉
93	A区　G１ 黄褐色土	第75図 PL.25	突帯文土器 深鉢口縁部	口径※36cm 器高△8.3cm	口縁部1/10以下	内外面：粗いナデ　刻目突帯	褐色	1㎜程の砂粒を含む	
94	A区J１・J２ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　底部	底径※7.2cm 器高△4.5cm	底部1/3	外面：LR縄文 内面：ナデ	淡赤褐色	白色砂粒を含む	
95	A区　I１ 黄褐色土	第75図 PL.25	縄文土器 鉢　底部	底径※6.4cm 器高△4.2cm	底部1/4	外面：RL縄文（底外面にも施文） 内面：ナデ	褐色	1～2㎜の白色砂粒を多く含む	
96	A区　I３ 黄褐色土	第75図 PL.26	土師器 甕口縁部	口径12.0cm 器高△4.9cm	口縁部1/9	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	密	
97	A区　I３ 黄褐色土	第75図 PL.26	土師 甕口縁部	口径※18.4cm 器高△2.25cm	口縁部1/10	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	褐色	微細な黒色砂粒を多く含む	
98	A区　I３ 黄褐色土	第75図 PL.26	土師質土器 坏	底径７cm 器高△1.9cm	約1/2	外面：底部回転糸切り	淡褐色	密	
99	A区　H３ 黄褐色土	第75図 PL.26	土師質土器 坏	底径8.1cm 器高△1.4cm	底部1/4	外面：底部回転糸切り	淡褐色	密	
100	A区　H３ 黄褐色土	第75図 PL.26	土師質土器 皿	底径5.4cm 器高△1.3cm	底部1/4	外面：底部回転糸切り	褐色	密	



第76図　表土・撹乱土出土遺物（１）



第77図　Ａ区包含層遺物出土ポイント図

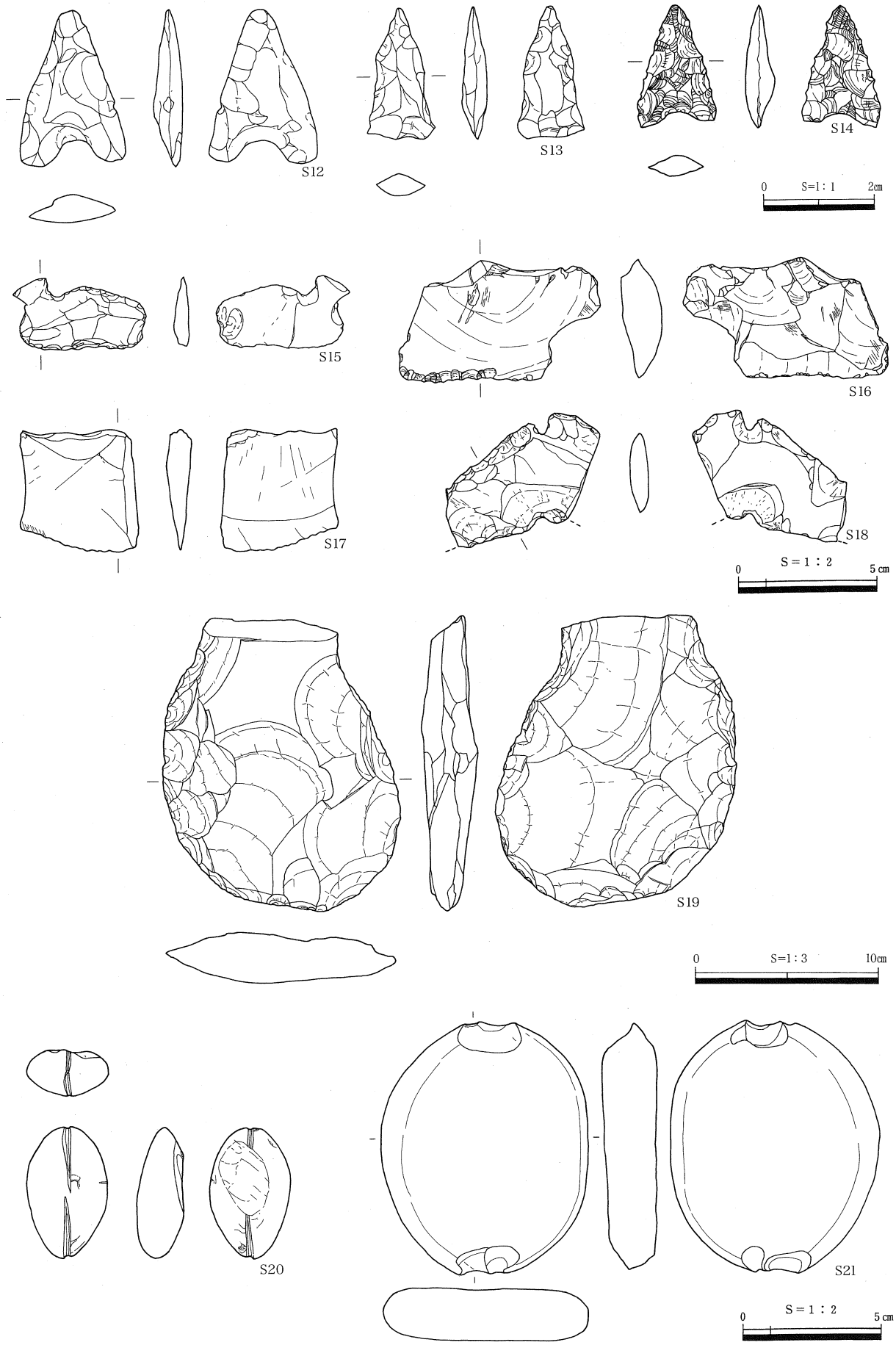


第78図　Ｂ区包含層遺物出土ポイント図

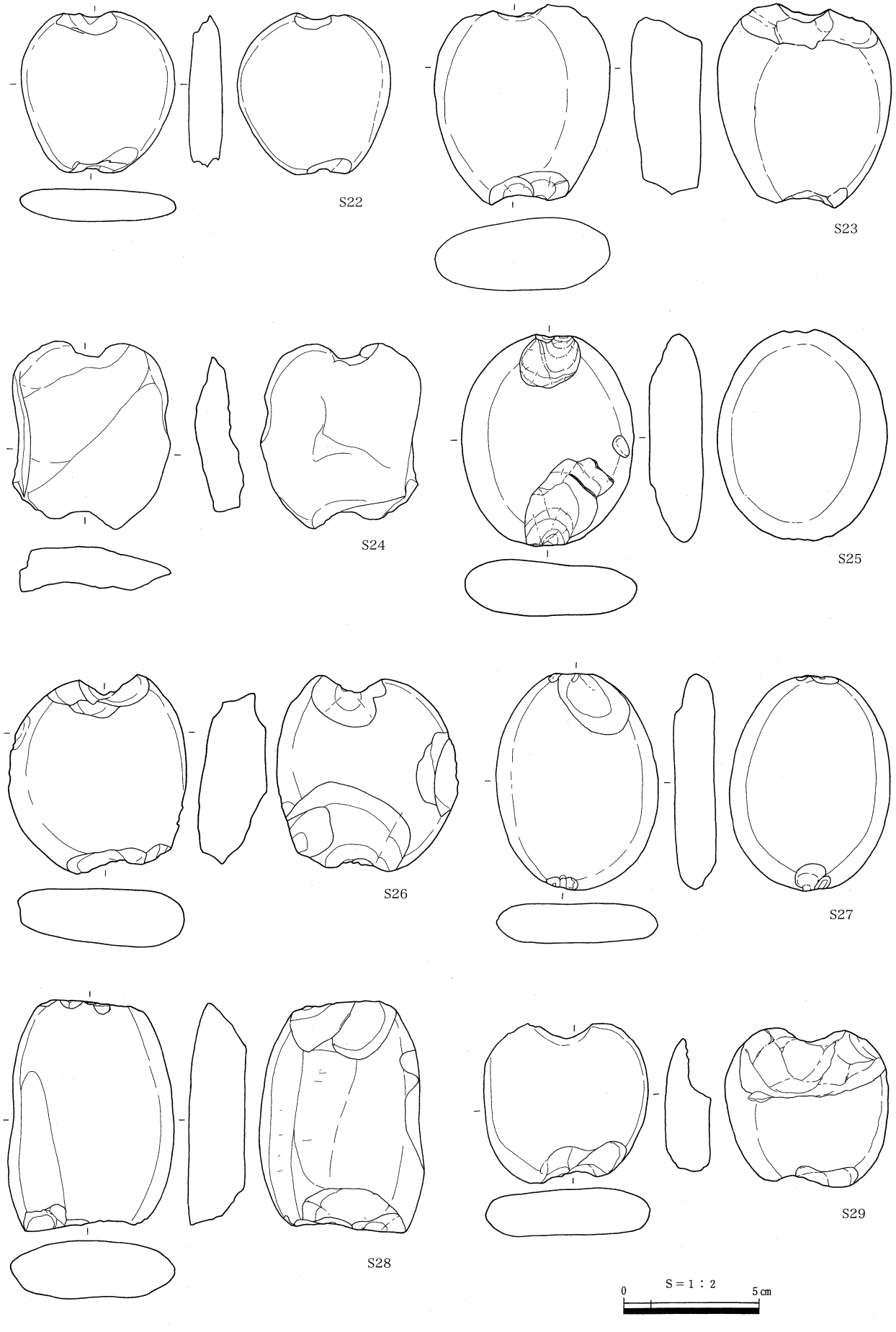
第79図　表土・撹乱土出土遺物（２）

第23表　表土・撹乱土出土土器観察表

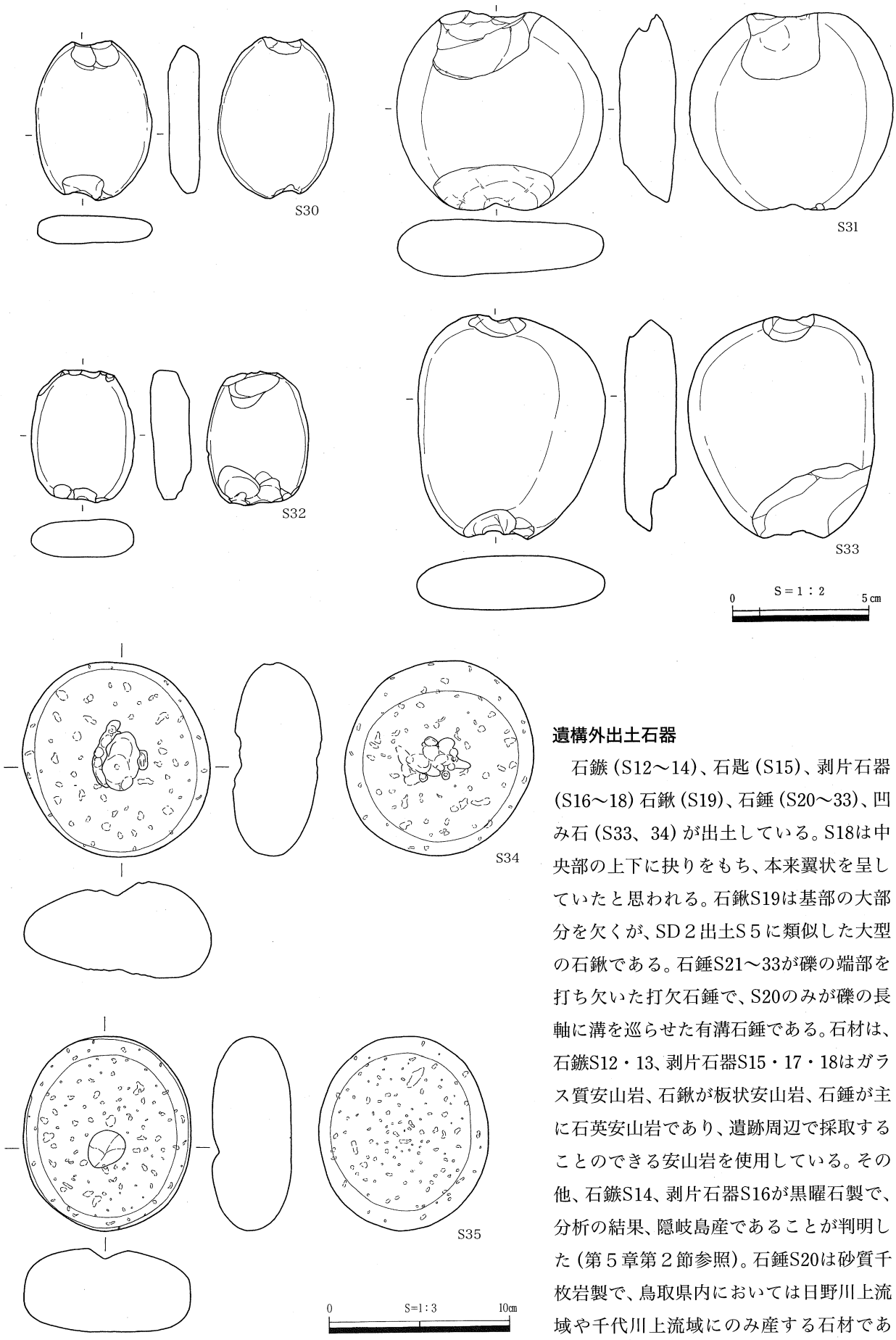
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
101	A区 撹乱土	第78図 PL.28	縄文土器 深鉢口縁部	器高△5.6cm	口縁部1/10 以下	内外面：LR縄文　口縁端部に刻み目	褐色	2mm程の白色砂粒を含む	中期船元式　83と同一個体の可能性あり
102	A区　SK19脇 撹乱土	第78図 PL.28	縄文土器 深鉢口縁部	器高△2.8cm	口縁部1/10 以下	外面：RL縄文　半截竹管による山形文　口唇部にRL縄文　内面：ナデ	淡褐色	1～2mmの砂粒を含む	中期船元Ⅲ式
103	B区　F６ 撹乱土	第78図 PL.28	縄文土器 深鉢胴部	器高△3.5cm	1/10以下	内外面：ナデ　竹管による爪形文	淡褐色	1～2mmの白色砂粒を含む	中期船元式
104	B区　E６ 撹乱土	第78図 PL.28	弥生土器 甕口縁部	器高△3.5cm	口縁部1/10 以下	内外面：ナデ　口縁部に刻み目	淡褐色	1mmの白色砂粒を含む	弥生時代前期
105	B区　E６ 撹乱土	第78図	弥生土器 甕口縁部	口径※22.8cm 器高△6.8cm	口縁部1/10 以下	外面：ハケ 内面：ナデ　指頭圧痕あり	褐色	2mm程の砂粒を微量に含む	外面煤付着
106	撹乱土	第78図 PL.28	弥生土器 壺肩部	器高△5.4cm	肩部1/4	外面：波状文を施す 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	1mm程の白色砂粒を含む	
107	B区　B４ 撹乱土	第78図 PL.28	弥生土器 底部	底径※5.5cm 器高△7.4cm	1/10以下	外面：ヘラミガキ　　内面：ナデ	淡褐色	1～3mm程の白色砂粒を含む	
108	A区　H４ 撹乱土	第78図 PL.27	手捏ね土器	口径4.2cm 器高4.0cm	完形	外面：ナデ 内面：指オサエ	暗茶褐色	密	
109	A区　G４ 撹乱土	第78図 PL.28	土師質土器 坏	底径※13.4cm 器高△2.2cm	底部1/３	内外面：ナデ　底部回転糸切り（磨滅）	淡褐色	密	
110	A区 撹乱土	第78図 PL.27	土錘	長さ4.7cm 最大幅2.2cm 孔径0.5cm 重さ19.5ｇ	ほぼ完形	胴部中央がやや膨らむ・外面：ナデ	黄灰褐色	密	
111	A区 撹乱土	第78図 PL.27	土製管玉	長さ2.2cm 最大幅1.1cm 孔径0.2cm 重さ3.0ｇ	完形	ミガキ	暗褐色	密	
112	B区　B4・5 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏蓋	口径11.1cm 器高3.8cm	約3/5	内外面：ヨコナデ 天井部：粗いナデ	灰色	2mm程の白色砂粒を含む	天井部ヘラ記号あり
113	B区　D５ 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏蓋	口径※9.4cm 器高△3.7cm	約1/2	内外面：ヨコナデ 天井部：ナデ、一部ヘラケズリ	灰色	2mm程の白色砂粒を含む	天井部ヘラ記号あり
114	B区　C５ 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏蓋	口径※9.7cm 器高△3.4cm	約1/2	内外面ヨコナデ　天井部：ナデ	灰色	1～3mmの白色砂粒を含む	
115	B区　B５ 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏蓋	口径※8.7cm 器高△3.4cm	約2/3	内外面：ヨコナデ 天井面：回転ヘラケズリ	灰白色	密	
116	B区　C５ 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏蓋	口径※11.1cm 器高△3.6cm	約1/3	内外面：ヨコナデ 天井面：ナデ、外周ヘラケズリ	灰色	密	
117	B区　B４ 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏	口径※11.2cm 器高2.7cm	約1/２	内外面：ヨコナデ　底部：ナデ	灰色	密	
118	B区　B４ 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏	口径※9.7cm 器高3.6cm	約3/5	内外面：ヨコナデ　底部：粗いナデ	灰色	1～3mmの白色砂粒を含む	
119	B区B５・C5 撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 坏	口径9.9cm 器高3.6cm	約3/5	内外面：ヨコナデ　底部：ナデ	灰白色	密	
120	B区　C４ 撹乱土	第79図 PL.28	須恵器 坏蓋	器高△1.7cm	約1/2	内外面：ヨコナデ	淡灰色	1～3mmの白色砂粒を含む	
121	A区　D３ 撹乱土	第79図 PL.28	須恵器 高坏坏部	口径※17.2cm 器高△3.4cm	口縁部1/4	内外面：ヨコナデ	灰白色	密	
122	B区　E６ 撹乱土	第79図 PL.26	須恵器 高坏坏部	口径15.8cm 器高△5.2cm	約3/5	内外面：ヨコナデ	淡灰色	1mm程の砂粒を多く含む	
123	撹乱土	第79図 PL.27	須恵器 甕	口径※14.1cm 器高△6.8cm	口縁部1/3	外面：ヨコナデ 内面：頸部以下同心円状の当具痕	灰色	1mm程の砂粒を含む	
124	B区　C５ 撹乱土	第79図 PL.28	須恵器 短頸壺	口径※4.3cm 器高△4.7cm	口縁部2/3	内外面：ヨコナデ	淡灰色	1～2mmの白色砂粒を微量に含む	
125	B区　B５ 撹乱土	第79図 PL.26	須恵器 高坏脚部	底径9.1cm 器高△4.7cm	約3/4	内外面：ヨコナデ	淡灰色	密	
126	B区　E６ 撹乱土	第79図 PL.26	須恵器 高坏脚部	底径※9.9cm 器高△8.6cm	約2/5	内外面：ヨコナデ	灰色	1～2mmの白色砂粒を微量に含む	
127	B区　B５ 撹乱土	第79図 PL.28	須恵器 高台付坏	底径※9.3cm 器高△2.2cm	約1/2	内外面：ナデ	灰白色	密	
128	B区　B4・5 撹乱土	第79図 PL.28	須恵器 底部	底径※11cm 器高△1.5cm	底部1/3	外面：底部回転糸切り	淡灰色	密	
129	B区　G６ 撹乱土	第79図 PL.28	土師器 壺口縁部	口径※14cm 器高△6.7cm	口縁部1/8	内外面：ナデ　内面指頭圧痕あり	褐色	1mmの白色砂粒を微量に含む	
130	B区　B4・5 撹乱土	第79図	土師器 甕	口径※16.9cm 器高△7.7cm	口縁部1/3	外面：外面ハケ　口縁部はその後ナデ 内面：頸部以下ケズリ	赤褐色	密	
131	B区　B4・5 撹乱土	第79図 PL.27	土師器 甕	口径※21.0cm 器高△8.4cm	口縁部1/4	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	1mm程の砂粒を含む	
132	B区　D５ 撹乱土	第79図 PL.28	土師器 甕	口径※24.８cm 器高△7.9cm	口縁部1/6	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	密	
133	B区　C５ 撹乱土	第79図 PL.28	土師器 甕	口径※24.6cm 器高△9.0cm	口縁部1/4	外面：頸部工具痕あり　胴部ハケ後ナデ 内面：頸以下ケズリ	淡褐色	1～2mmの白色砂粒を含む	
134	B区　D３ 撹乱土	第79図 PL.28	土師器 甕	口径※24.9cm 器高△9.9cm	口縁部1/5	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	密	
135	B区　B4・5 撹乱土	第79図	土師器 甕	口径※31.0cm 器高△6.2cm	口縁部1/4	外面：口縁部ナデ　頸部以下ハケ後ナデ 内面：口縁部ハケ後ナデ　頸部以下ケズリ	褐色	1～2mmの砂粒を含む	外面煤付着
136	A区　北端 撹乱土	第79図 PL.28	土師器 甕口縁部	口径※33.3cm 器高△12.7cm	口縁部1/4	外面：口縁部ナデ　頸部以下一部ミガキ 内面：頸部以下ケズリ	淡褐色	密	外面煤付着
137	B区　B４ 撹乱土	第79図 PL.27	竈	——	庇のみ	ナデ　一部ヘラケズリ	淡褐色	1～2mmの白色砂粒を含む	
138	B区　B５ 撹乱土	第79図	竈	器高△6.3cm	底部	外面：ハケ後ナデ	淡褐色	1mm程の砂粒を含む	
139	B区　B５ 撹乱土	第79図 PL.27	把手	厚さ2.7cm	把手のみ	指オサエ	淡褐色	白色砂粒を含む	煤付着



第80図　遺構外出土石器（1）



第81図　遺構外出土石器（2）



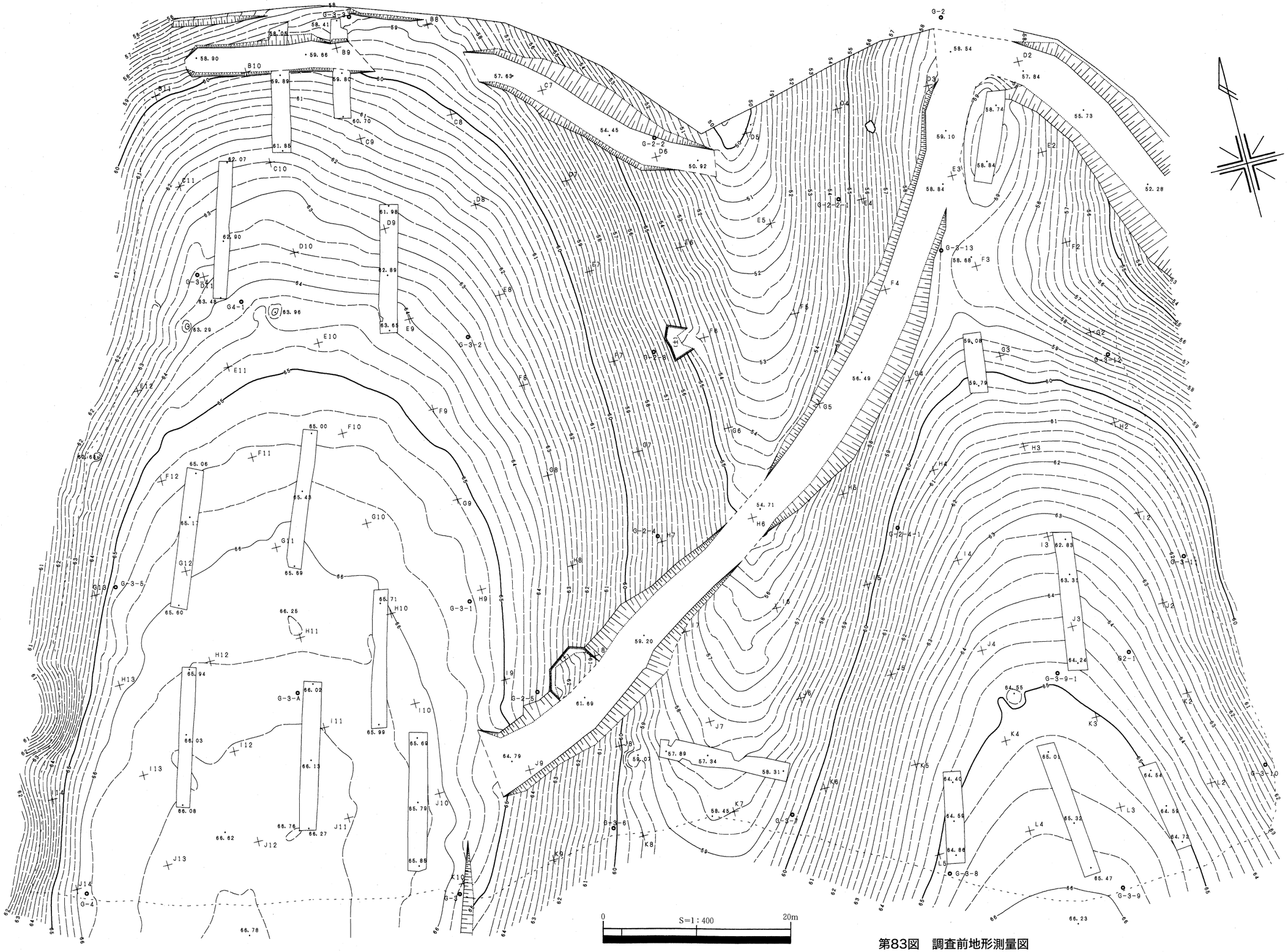
第82図　遺構外出土石器（３）

遺構外出土石器

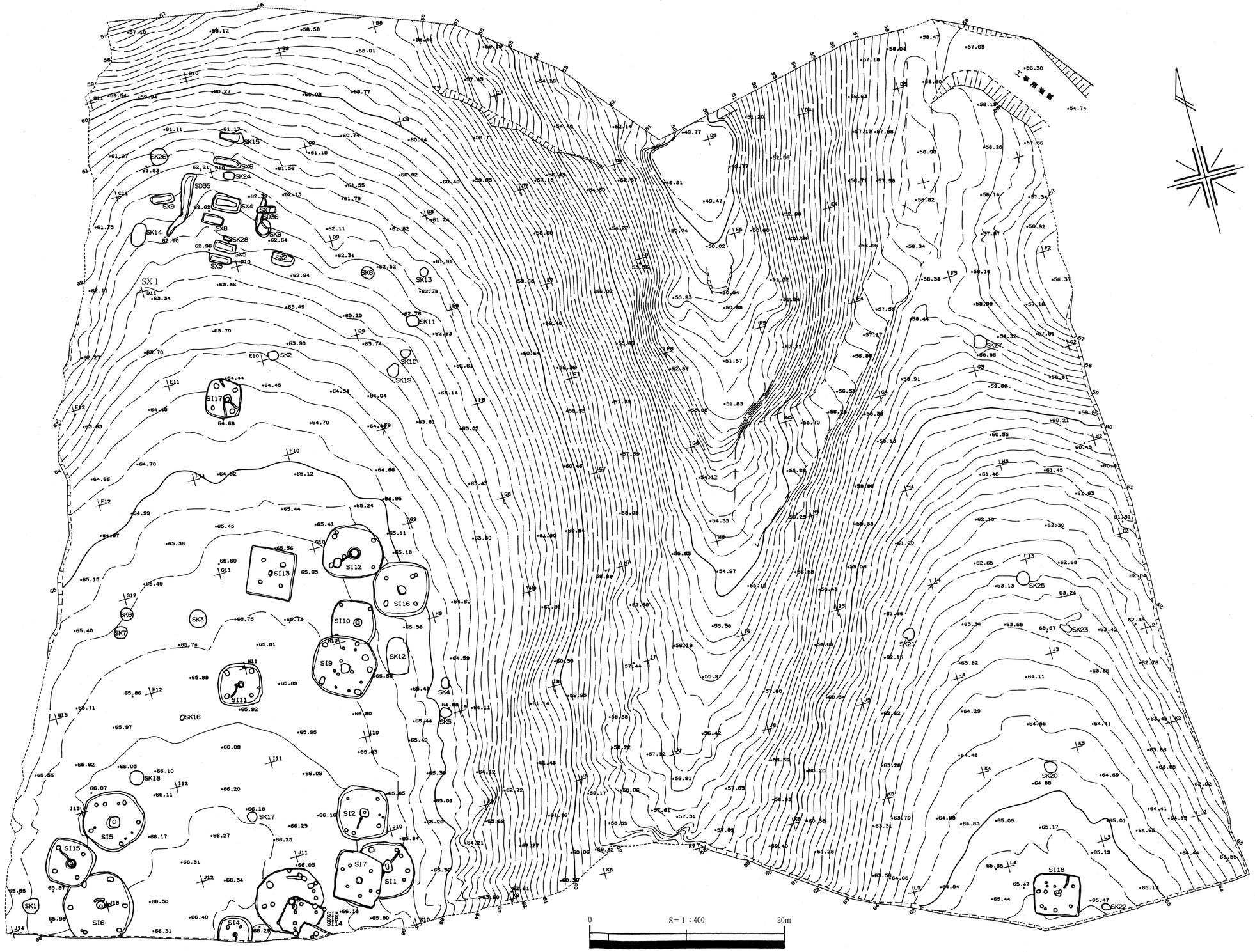
石鏃（S12～14）、石匙（S15）、剥片石器（S16～18）石鍬（S19）、石錘（S20～33）、凹み石（S33、34）が出土している。S18は中央部の上下に抉りをもち、本来翼状を呈していたと思われる。石鍬S19は基部の大部分を欠くが、SD２出土S５に類似した大型の石鍬である。石錘S21～33が礫の端部を打ち欠いた打欠石錘で、S20のみが礫の長軸に溝を巡らせた有溝石錘である。石材は、石鏃S12・13、剥片石器S15・17・18はガラス質安山岩、石鍬が板状安山岩、石錘が主に石英安山岩であり、遺跡周辺で採取することのできる安山岩を使用している。その他、石鏃S14、剥片石器S16が黒曜石製で、分析の結果、隠岐島産であることが判明した（第５章第２節参照）。石錘S20は砂質千枚岩製で、鳥取県内においては日野川上流域や千代川上流域にのみ産する石材である。S22は流紋岩製である。　（坂本）

第24表　遺構外出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　　徴	長軸 〔cm〕	短軸 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　　考
S 12	A区 表土中	第80図 PL.30	石鏃	凹基式	2.8	1.95	0.5	1.8	ガラス質安山岩	
S 13	A区　D５ 撹乱土	第80図 PL.30	石鏃	平基式	2.4	1.2	0.45	0.8	ガラス質安山岩	
S 14	A区　E３ 黄褐色土	第80図 PL.30	石鏃	凹基式	2.2	1.4	0.5	0.9	黒曜石	
S 15	A区 撹乱土	第80図	石匙	粗製の横型を呈する	4.8	2.6	0.6	7.2	ガラス質安山岩	
S 16	A区　G４ 表土中	第80図 PL.30	剥片石器	１方向に刃部を持つ	7.4	4.3	1.5	37	黒曜石	
S 17	A区　H２ 黄褐色土	第80図 PL.30	剥片石器	片側に刃部をもつ	4.3	4.4	0.9	18	ガラス質安山岩	
S 18	A区　I４ 暗褐色土	第80図 PL.30	剥片石器	翼状の形態を呈する。刃部は片側で上下とも中央に抉りをもつ	5.6	3.9	0.7	20	ガラス質安山岩	
S 19	A区 撹乱土	第80図 PL.30	石鍬	基部の大部分を破損　表裏とも刃部の磨耗は少ない	15.9	12.9	2.8	600	板状安山岩	
S 20	A区　J１ 黄褐色土	第80図 PL.29	石錘	円礫長軸に溝を巡らせる	4.7	2.9	1.7	30	砂質千枚岩	
S 21	A区　G４ 黄褐色土	第80図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	9.0	7.5	2.0	220	石英安山岩	
S 22	表土中	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	6.1	5.7	1.25	61	流紋岩	
S 23	A区　J１・J2 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	7.2	6.5	2.6	180	角閃石安山岩	
S 24	A区　J１・J2 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	角礫長軸の両端と短軸１箇所を打ち欠く	7.9	5.6	1.5	66	安山岩	
S 25	A区　H４ 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	7.8	6.3	2.0	138	角閃石安山岩	
S 26	A区　J１ 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端と短軸１箇所を打ち欠く	7.3	6.6	2.0	144	安山岩	
S 27	A区　H４ 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	8.0	6.0	1.5	118	石英安山岩	
S 28	A区　H４ 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	8.4	6.0	2.2	166	石英安山岩	
S 29	A区　J２ 黄褐色土	第81図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	6.8	6.1	1.7	78	安山岩	
S 30	A区　J１ 黄褐色土	第82図 PL.29	石錘	円礫の長軸の両端を打ち欠く	5.8	4.3	1.1	40	安山岩	
S 31	A区　J１ 黄褐色土	第82図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	7.4	7.5	2.0	168	石英安山岩	
S 32	A区　H４ 暗褐色土	第82図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	4.9	3.8	1.4	40	石英安山岩	
S 33	A区　H４ 黄褐色土	第82図 PL.29	石錘	円礫長軸の両端を打ち欠く	8.2	6.8	2.0	170	安山岩	
S 34	A区　I４ 撹乱土	第82図 PL.30	凹み石	表面中央に凹みがみられる	10.6	9.3	4.5	695	角閃石輝石安山岩	
S 35	A区　J１・２ 黄褐色土	第82図 PL.30	凹み石	表裏とも中央に凹みがみられる	10.9	10.0	5.0	610	角閃石輝石安山岩	



第83図　調査前地形測量図



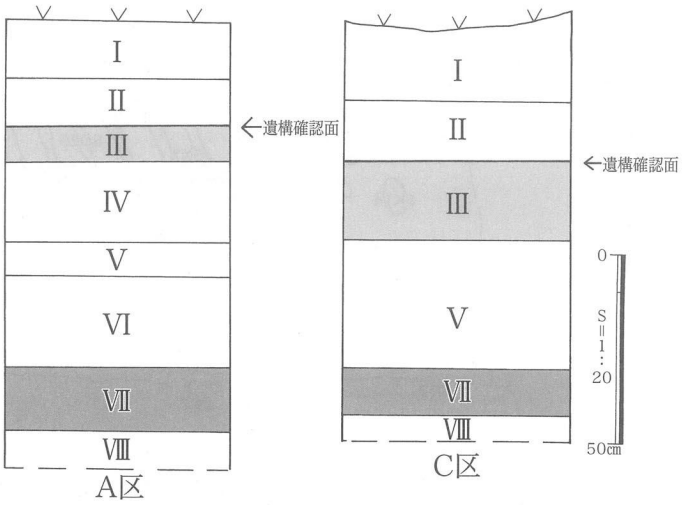
第84図　調査後地形測量図

第４章　井図地中ソネ遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と層序

井図地中ソネ遺跡は、東伯郡東伯町大字田越字井図地中ゾネに所在する、標高61～65mの東西２つの尾根と、それに挟まれた南北に走る谷地形を含む遺跡であり、調査区外東側の谷を挟んで井図地頭遺跡と隣接している。現況は植林されており、檜林となっていた。

調査地内の土の堆積は比較的緩やかで、Ｂ区谷底部で厚い包含層の堆積が見られたほかは、比較的薄い堆積であった。遺構検出面は、弥生時代末から古墳時代中期の遺物包含層である第Ⅱ層下で確認した。当遺跡の遺構確認面はこの１面のみで、この面でＡ区から弥生時代後期および古墳時代中期の竪穴建物跡や、弥生時代末～古墳時代初頭の時期に当たる土壙墓群などが確認された。第Ⅱ層包含層中の遺物は、これらの遺構の上部が削平された際に散乱したものが主であると考えられる。



Ⅰ茶褐色腐植土　(表土)
Ⅱ暗黄褐色土　(遺物包含層)
Ⅲ黄褐色土　粘性あり
Ⅳ明黄褐色土　粘性強　(ソフトローム層)
Ⅴ青灰色土　(上のホーキ火山灰層)
Ⅵ明黄褐色土　(漸移層)
Ⅶ黄褐色土　粘性強　(AT：姶良火山灰層　21.000～22.000Y.B.P)
Ⅷ白色土　粘性強

第85図　基本層序柱状図

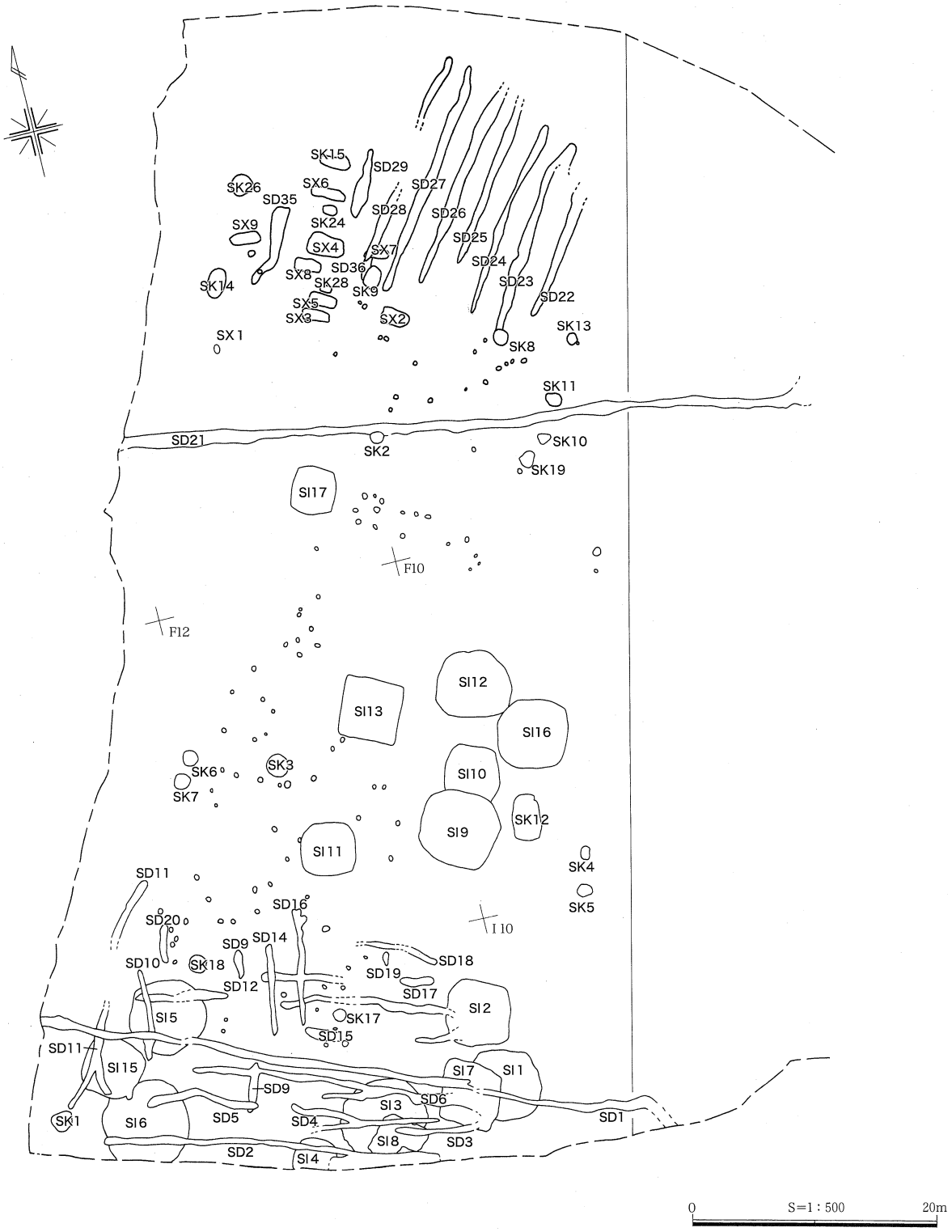
遺構確認面以下の層は、いわゆる「大山上部火山灰」とよばれる層で、表土下約60cmに大山起源の火山灰層である上のホーキ火山灰層が、約90cm下に約22,000年前の鍵層として著名な姶良火山灰層（AT層）が約20cmの厚さで堆積している状況が確認できたが、これらの層中に人的関与を受けた痕跡は見当たらなかった。

Ｃ区の基本層序もＡ区とほぼ同様であるが、第Ⅲ層の堆積がA区に比して厚いという状況がみられた。また、第Ⅴ層である上のホーキ層もいわゆる純層ではなく、Ａ区ほど硬化した状態ではなかった。よってＡ区で見られた第Ⅴ層と第Ⅶ層の漸移層である第Ⅵ層ははっきりとした形での分層は困難であった。後述するが、この状況はC区で確認された古墳時代中期の住居址の構築方法と密接に関わってくるものである。Ｃ区では縄文時代の落とし穴と思われる土坑も確認された。

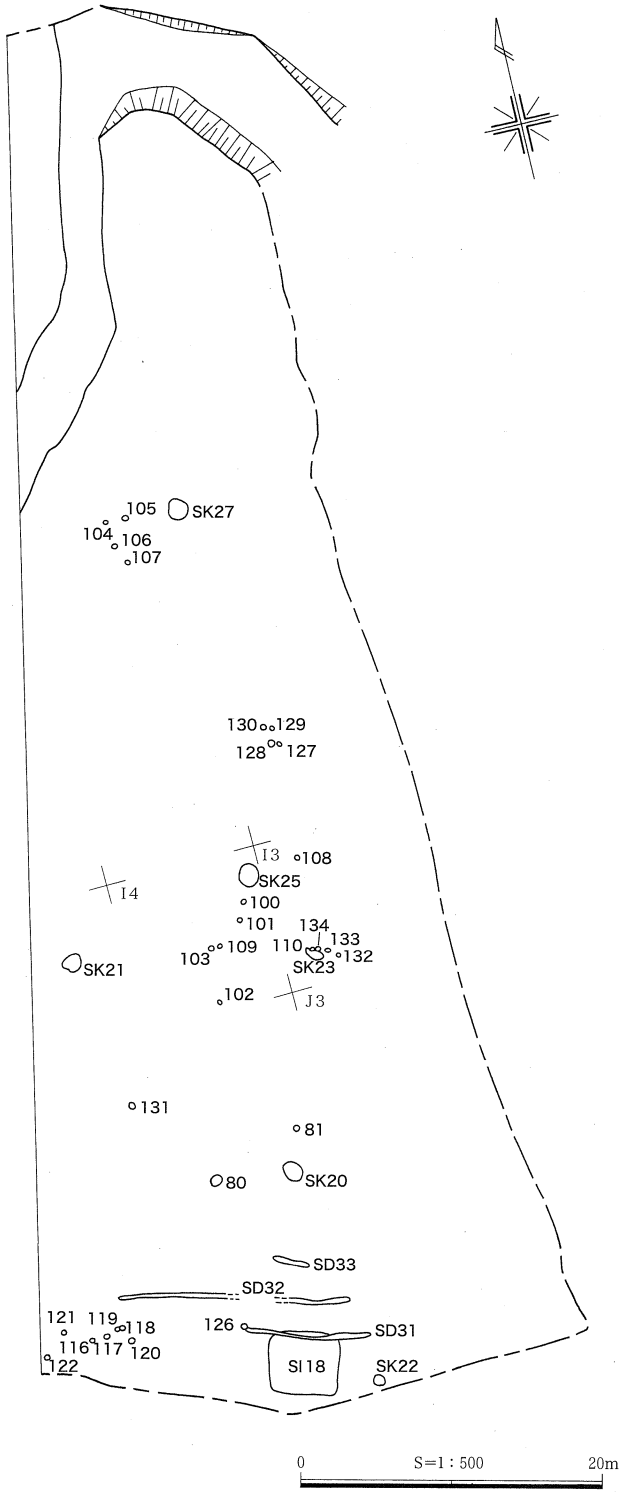
(大野)

座標	X軸	Y軸	座標	X軸	Y軸	座標	X軸	Y軸	座標	X軸	Y軸	座標	X軸	Y軸	座標	X軸	Y軸	座標	X軸	Y軸
B8	−56800	−59010	D9	−56820	−59020	F5	−56840	−58980	G9	−56850	−59020	H12	−56860	−59050	J2	−56880	−58950	K4	−56890	−58970
B9	−56800	−59020	D10	−56820	−59030	F6	−56840	−58990	G10	−56850	−59030	H13	−56860	−59060	J3	−56880	−58960	K5	−56890	−58980
B10	−56800	−59030	D11	−56820	−59040	F7	−56840	−59000	G11	−56850	−59040	I2	−56870	−58950	J4	−56880	−58970	K6	−56890	−58990
B11	−56800	−59040	E4	−56830	−58970	F8	−56840	−59010	G12	−56850	−59050	I3	−56870	−58960	J5	−56880	−58980	K7	−56890	−59000
C7	−56810	−59000	E5	−56830	−58980	F9	−56840	−59020	G13	−56850	−59060	I4	−56870	−58970	J6	−56880	−58990	K8	−56890	−59010
C8	−56810	−59010	E6	−56830	−58990	F10	−56840	−59030	H2	−56860	−58950	I5	−56870	−58980	J7	−56880	−59000	K9	−56890	−59020
C9	−56810	−59020	E7	−56830	−59000	F11	−56840	−59040	H3	−56860	−58960	I6	−56870	−58990	J8	−56880	−59010	K10	−56890	−59030
C10	−56810	−59030	E8	−56830	−59010	F12	−56840	−59050	H4	−56860	−58970	I7	−56870	−59000	J9	−56880	−59020	L2	−56900	−58950
C11	−56810	−59040	E9	−56830	−59020	G2	−56850	−58950	H5	−56860	−58980	I8	−56870	−59010	J10	−56880	−59030	L3	−56900	−58960
D3	−56820	−58960	E10	−56830	−59030	G3	−56850	−58960	H6	−56860	−58990	I9	−56870	−59020	J11	−56880	−59040	L4	−56900	−58970
D4	−56820	−58970	E11	−56830	−59040	G4	−56850	−58970	H7	−56860	−59000	I10	−56870	−59030	J12	−56880	−59050	L5	−56900	−58980
D5	−56820	−58980	E12	−56830	−59050	G5	−56850	−58980	H8	−56860	−59010	I11	−56870	−59040	J13	−56880	−59060			
D6	−56820	−58990	F2	−56840	−58950	G6	−56850	−58990	H9	−56860	−59020	I12	−56870	−59050	J14	−56880	−59070			
D7	−56820	−59000	F3	−56840	−58960	G7	−56850	−59000	H10	−56860	−59030	I13	−56870	−59060	K2	−56890	−58950			
D8	−56820	−59010	F4	−56840	−58970	G8	−56850	−59010	H11	−56860	−59040	I14	−56870	−59070	K3	−56890	−58960			

第25表　グリッド座標一覧表



第86図　Ａ区遺構配置図



第87図　Ｃ区遺構配置図

第２節　Ａ区の調査

（１）概要

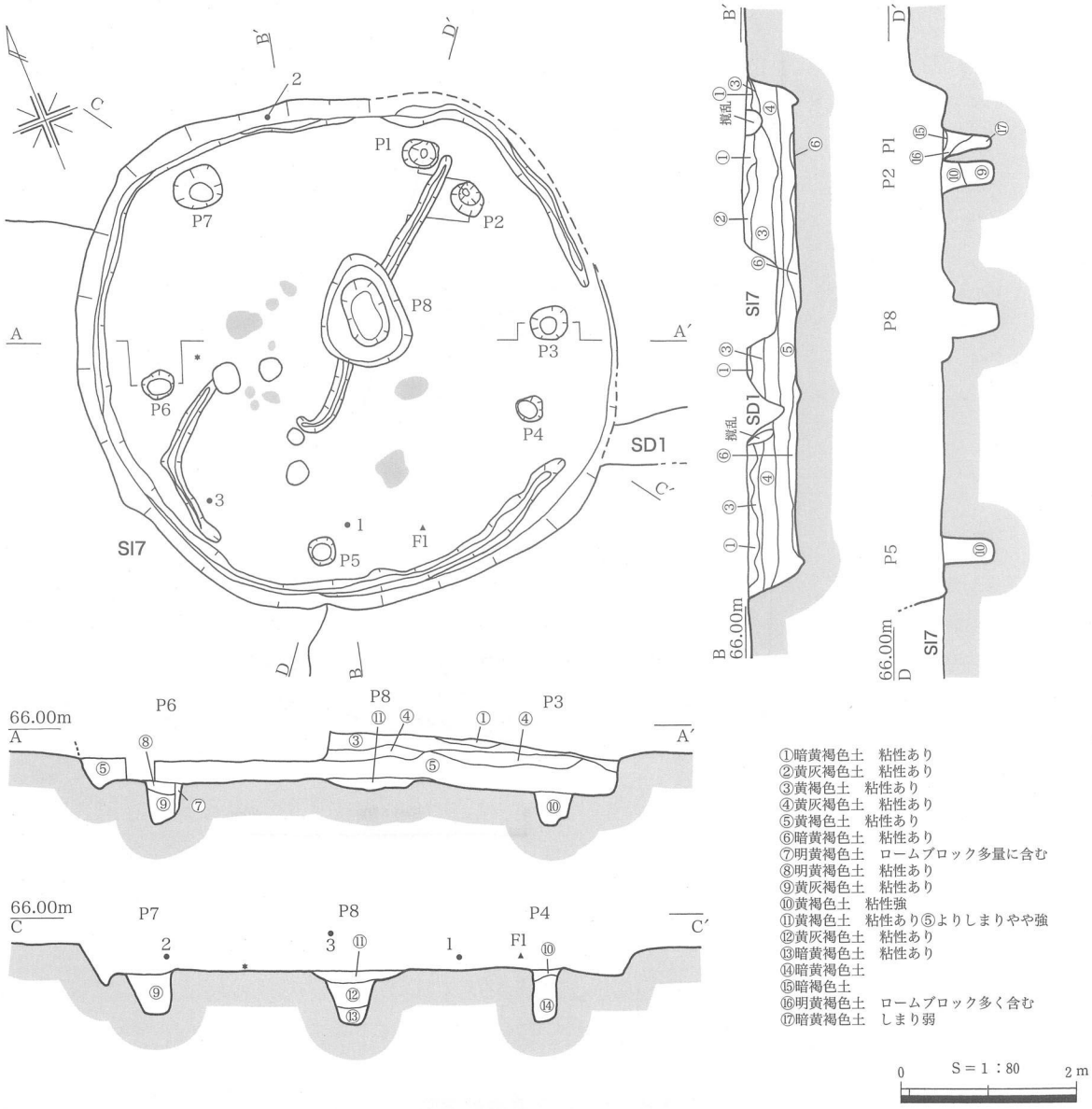
調査は事前に東伯町教育委員会により実施された試掘調査の結果から、最も遺構密度が高いと予想されるＡ区から、試掘調査の際に掘削されたトレンチを利用しつつ遺構確認作業に着手した。

結果、Ａ区南半部からは、弥生時代後期後葉の遺構として焼失住居を含む竪穴建物跡群のほか、貯蔵穴と考えられる土坑などが検出された。また、古墳時代中期の竪穴建物跡群も同じくＡ区南半部で確認できた。そして、これら古墳時代中期の建物に伴うと考えられる土坑４基の埋土中より、多量の炭化米が出土し、当時の稲作技術に関する貴重な資料が得られた。また、北半部からは弥生時代末～古墳時代初頭の時期にあたる、区画溝を持つ土壙墓群が多量の供献土器とともに検出された。（大野）

（２）竪穴建物跡

SI１（第88・89図、第26・27表、PL.31・58）

Ａ区南東隅J10グリッド、標高65.7mの平坦面に位置する。平面形はほぼ円形で、最大径6.4m、床面積24.77㎡を測る。遺存状態は良好で、残存壁高は最も遺存状態の良い北壁で44cmを測る。周壁溝（側溝）は幅25～11cm、深さ２～３cmを測り、断面「U」字状を呈する。北東部と南東部分に一部途切れる部分が認められたが、本来は



第88図　SI1

全周していたものと考えられる。また内側の床溝は、北東－南西方向に中央ピットを縦断するように伸びる２条と、床面南西隅で蛇行するもの１条、計３条が検出された。それぞれの規模は中央ピットの北東（151×17－2)、南西（117×19－3)、南西隅（227×16－4）㎝である。

ピットは８個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１とＰ４・５・６・７で、５本柱と考えられる。各柱穴の大きさはＰ１(40×31－54)、Ｐ４(31×29－62)、Ｐ５(33×30－58)、Ｐ６(38×31－48)、Ｐ７(58×48－53)㎝を測る。柱穴間距離はP1－P2間より順に3.12、2.88、2.64、2.3、2.6mである。Ｐ８は中央ピットで、上段（130×95－13)・下段（58×42－54）㎝である。Ｐ２・３はそれぞれＰ１・４主柱穴に近い位置にあり、主柱穴の立替、あるいは補助的な柱が立てられていた可能性が考えられる。床面上の被熱硬化面は、比較的大きなもので中央ピット南側に２箇所、西側に１箇所検出された。また、中央ピット西側周辺には、小さく点々と被熱した面が確認された。

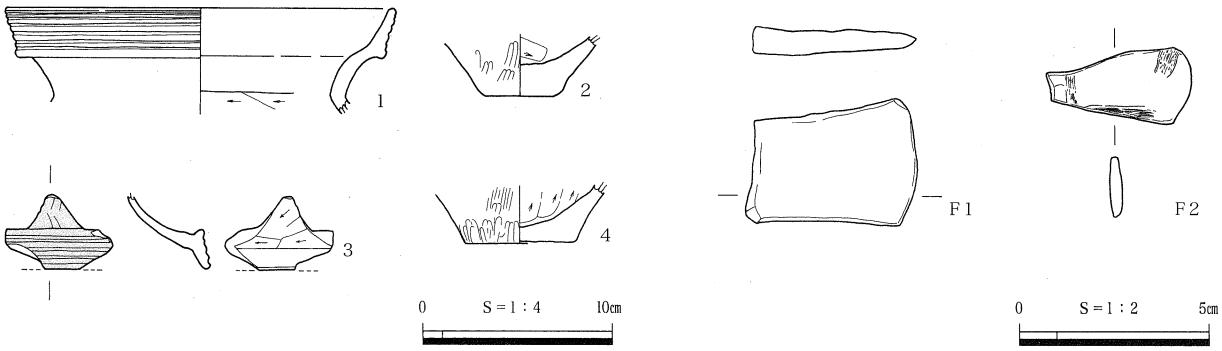
遺物は床面直上での出土はみられなかったが、埋土中から清水編年Ｖ-３様式に相当すると考えられる１などが出土している。

以上、出土遺物・住居形態からこの遺構の想定される年代として、弥生時代後期後葉の時期が考えられる。

（大野）

SI７（第90・91図、第28表、PL.31・32・57・58）

Ａ区J10グリッド、標高66.2mの平坦面に位置する。平面形は不整方形で、一辺5.1m、床面積20.82㎡以上を測る。検出面から床面までの深さは、最大南西側で48㎝、最小北側で22㎝を測る。当建物の北東半分とSI１の南西部分が重複しており、掘り込みはSI１のほうが深く、床面比高差は25㎝前後である。この建物も基本的に「上のホーキ層」まで掘り込み、当層を整地することによって床面を造り出しているが、SI１と重複している北東部分のみ「上のホーキ」ブロックを主体とする土により貼床を施されていた。これは、SI１を建てる際、SI７床面よりも深く掘り下げてしまっているので、その部分のみ床が柔らかくなり、床として不都合であるために施された処置であると考えられる。このことによりSI１とSI７の先後関係はSI１→SI７であることがわかる。貼床部分の残存状況は悪く、完全な形で貼床を検出できなかった。



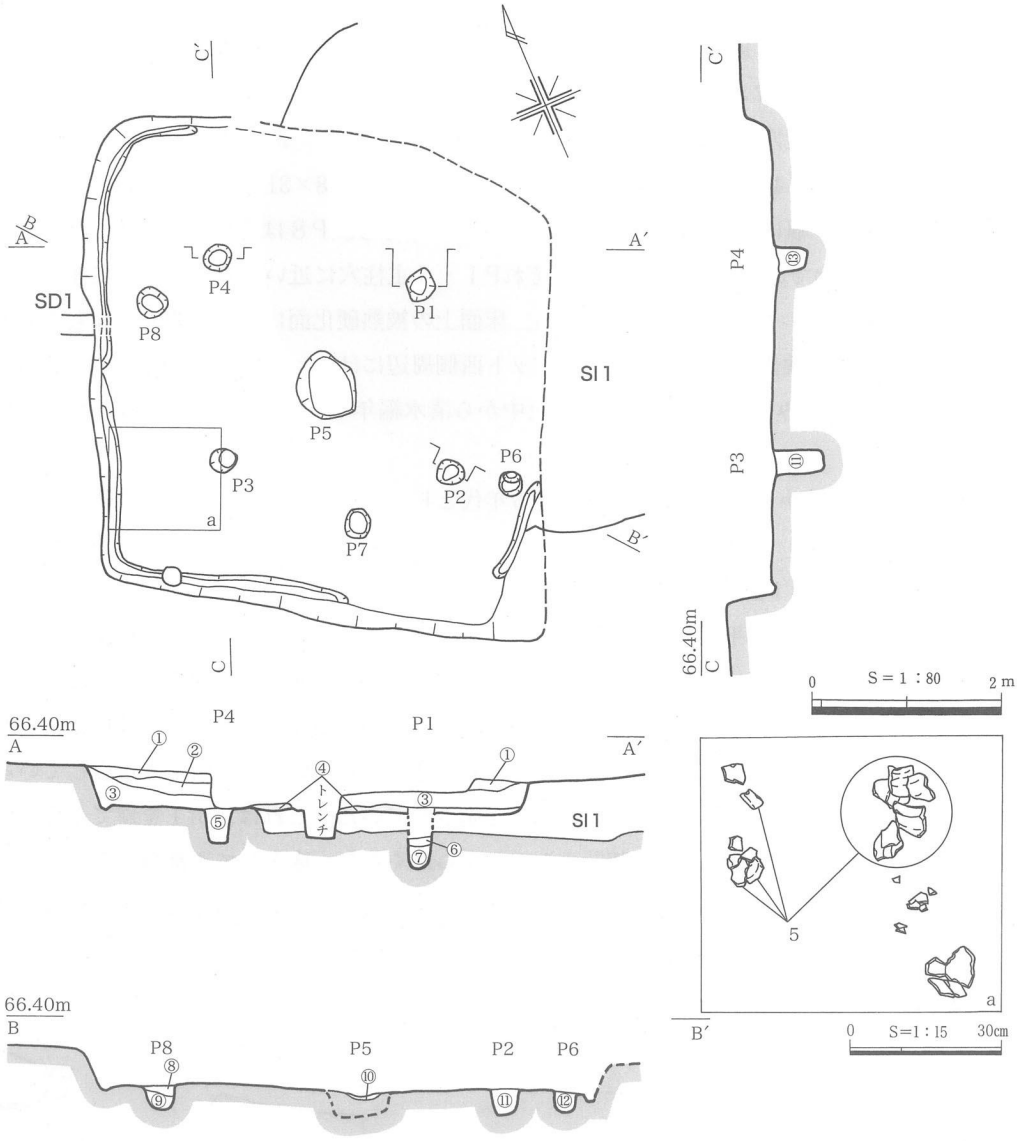
第89図　SI1出土遺物

第26表　SI1出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔㎝〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
1	SI1 埋土中	第89図 PL.58	弥生　甕 口縁部	器高△5.1㎝ 口径※20.6㎝	口縁部1/5	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	明黄褐色	密	
2	SI1 埋土中	第89図 PL.58	弥生 底部	器高△3.3㎝ 底径※3.4㎝	底部1/4	外面：ミガキ、底部ナデ 内面：粗いケズリ	明黄褐色 にぶい黄橙色	密	外面煤付着
3	SI1 埋土中	第89図 PL.58	弥生 脚部	器高△3.9㎝	1/８以下	外面：端部沈線、上部ミガキ 内面：端部ナデ、上部ケズリ	明黄褐色	密	外面赤彩
4	SI1 埋土中	第89図 PL.58	弥生 底部	底径：6.0㎝	底部　1/4	外面：ハケ→ミガキ 内面：ケズリ	灰黄褐色 黄橙色	1～3㎜の 砂粒含む	

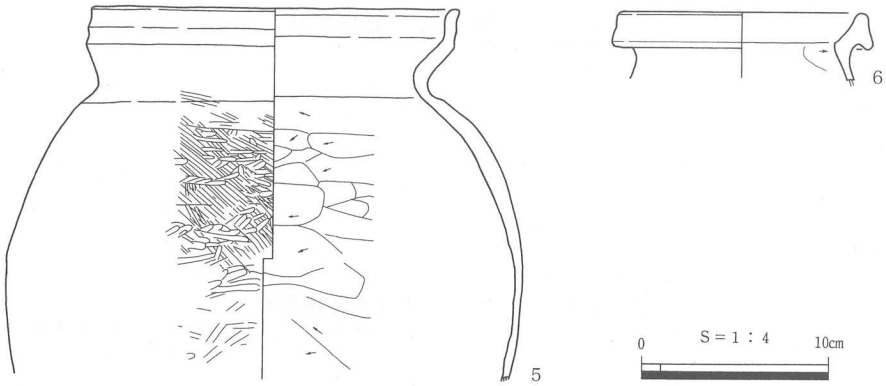
第27表　SI1出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔㎝〕	幅〔㎝〕	厚さ〔㎝〕	重量〔g〕	備　考
F1	SI1 埋土中	第89図 PL.79	板状鉄製品	断面はやや薄く三角形を呈す 片側に刃部を持つ	4.4	3.4	0.6	28.2	小型鉄斧？
F2	SI1 埋土中	第89図 PL.79	鉄片	平面三角形を呈する	3.8	2	0.4	5.3	



①黄褐色土
②暗褐色土　粘性あり
③黄褐色土　粘性あり　径1～2㎜の炭化物少量含む
④明黄褐色土　粘性強　径2～4㎝の上のホーキブロック多量に含む（貼り床）
⑤黄褐色土　径1㎝の上のホーキブロックを多量に含む
⑥黄褐色土　粘性あり　しまり弱
⑦黄褐色土　粘性あり　上のホーキブロックを多量に含む
⑧黄灰褐色土
⑨黄褐色土　粘性あり
⑩赤褐色土　炭化物・焼土を含む
⑪黄灰褐色土　径1㎝の上のホーキブロック少量含む
⑫黄褐色土　粘性あり
⑬黄褐色土　粘性あり　径1㎝の上のホーキブロック多量に含む

第90図　SI7



第91図　SI7出土遺物

第28表　SI7出土土器観察表

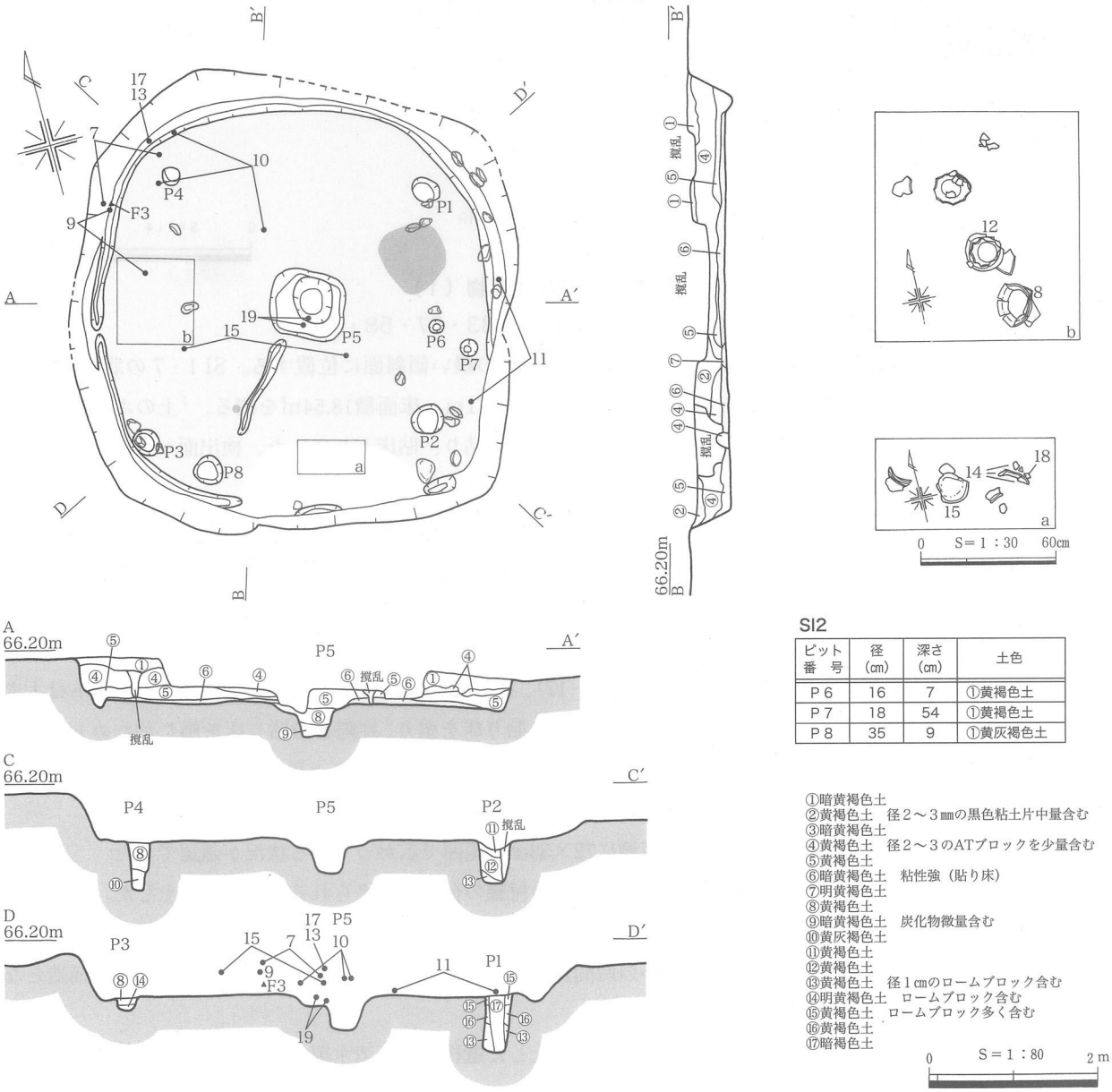
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
5	SI7 埋土中・ 床面直上	第91図 PL.57	土師器　甕 口縁～胴部	器高△19.7cm 口径：17.0cm 胴径：26.1cm	全体の3/4	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ→ミガキ 内面：ケズリ	淡明赤褐色 淡明褐色	0.1～0.2mm の砂粒を 含む	外面煤付着
6	SI7 埋土中	第91図 PL.58	甕　口縁部	器高△3.8cm 口径※13.4cm	口縁部1/6	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙 明黄褐色	密	

周壁溝（側溝）は西側半分と南東隅の一部を検出できた。この溝は幅14cm、床面からの深さは４cm程で断面は「U」字状である。

ピットは８個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４で、各柱穴の大きさはＰ１（35×30－58）、Ｐ２（29×25－23）、Ｐ３（30×23－51）、Ｐ４（30×29－36）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.03、2.4、2.18、2.15mを測る。Ｐ５（72×60－５）cmは中央ピットと考えられ、平面形は不整円形、埋土（⑩層）に焼土及び炭化物が含まれていた。

出土遺物としては南西隅の床面直上より甕（５）の上半部が倒れ込むように出土している。

この建物の時期は、床面直上で出土した甕が天神川編年Ⅸ期に相当することから、古墳時代中期後葉の時期が想定される。これは先に床面で確認したSI１との先後関係と矛盾しない。　（大野）

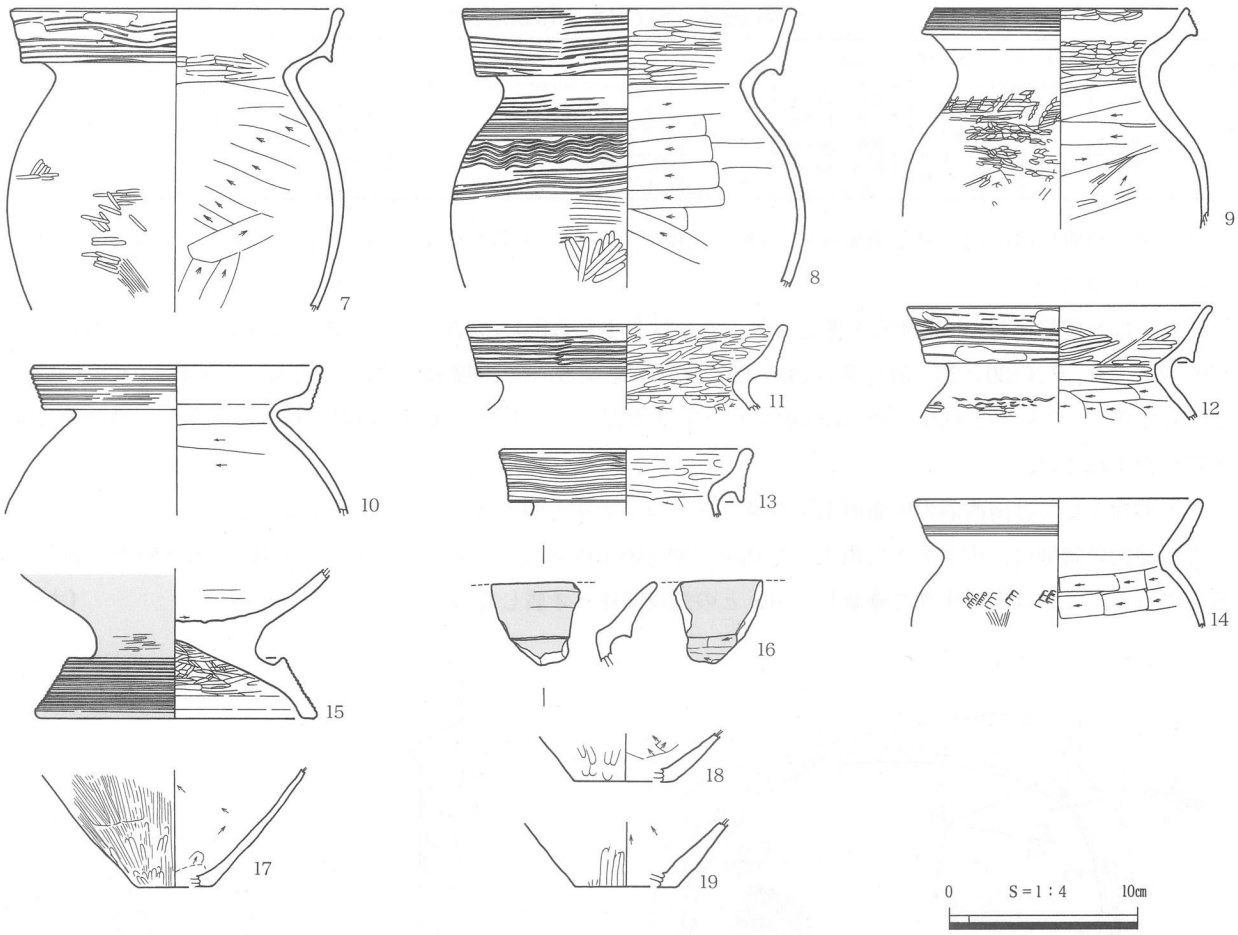


SI2

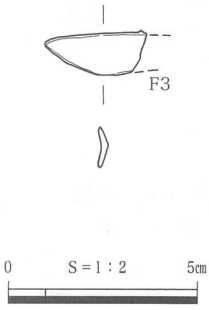
ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	土色
Ｐ６	16	7	①黄褐色土
Ｐ７	18	54	①黄褐色土
Ｐ８	35	9	①黄灰褐色土

①暗黄褐色土
②黄褐色土　径２～３mmの黒色粘土片中量含む
③暗黄褐色土
④黄褐色土　径２～３のATブロックを少量含む
⑤黄褐色土
⑥暗黄褐色土　粘性強（貼り床）
⑦明黄褐色土
⑧黄褐色土
⑨暗黄褐色土　炭化物微量含む
⑩黄灰褐色土
⑪黄褐色土
⑫黄褐色土
⑬黄褐色土　径１cmのロームブロック含む
⑭明黄褐色土　ロームブロック含む
⑮黄褐色土　ロームブロック多く含む
⑯黄褐色土
⑰暗褐色土

第92図　SI2



第93図　SI2出土遺物（１）



第94図
SI2出土遺物（２）

SI２（第92～94図、第29・30表、PL.33・57・58・79）

Ａ区I10グリッド、標高66.1～65.7mの緩い傾斜面に位置する。SI１・７の北側にある。平面形は隅丸方形で、長辺5.3m、短辺5.1m、床面積18.54㎡を測る。「上のホーキ層」まで掘り込み、その上ほぼ床全面に⑥層を貼り、貼床としていた。検出面から床面までの深さは、最大西側で60㎝、最小南側で17㎝を測る。

周壁溝（側溝）は一部途切れるものの、本来は全周していたものと考えられる。この溝は幅８㎝、床面からの深さは８㎝程で断面は「U」字状である。内側の床溝は長さ1.26m、深さ６㎝で、中央ピットであるＰ５と、Ｐ８の間を北東方向に走る。

ピットは８個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４で、各柱穴の大きさはＰ１（37×31－68）、Ｐ２（40×35－50）、Ｐ３（33×27－17）、Ｐ４（24×21－57）㎝を測る。これらのピットは大きさが貼り床除去後大きく広がった。これは柱を立てた後に貼り床を張り、柱際まで貼り床を施したためと考えられる。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.7、3.41、3.23、3.02mを測る。Ｐ５上段（88×77－16）・下段（53×48－34）㎝は中央ピットと考えられ、平面形は隅丸方形で、二段に掘り込まれている。

床面の被熱硬化面（焼土）は、中央ピット東側に72×53㎝の範囲で広がっている状況が確認できた。

出土遺物としては、床面直上より甕８・12・14・18や台付甕の台部と考えられる15などが出土した。

その他に床面より約10～15㎝浮いた状態で、東壁に流れ込んだように10～20㎝程の川原石が多数出土している。これらの川原石が、建物廃棄時からどのくらいの時間差をもって流れ込んだのかは不明であるが、上屋構造となんらかの関わりを持つものである可能性がある。

この遺構の想定される年代としては、床面直上より出土した遺物がほぼ清水編年Ｖ-３様式にあたることから、弥生時代後期後葉の時期が充てられる。

（大野）

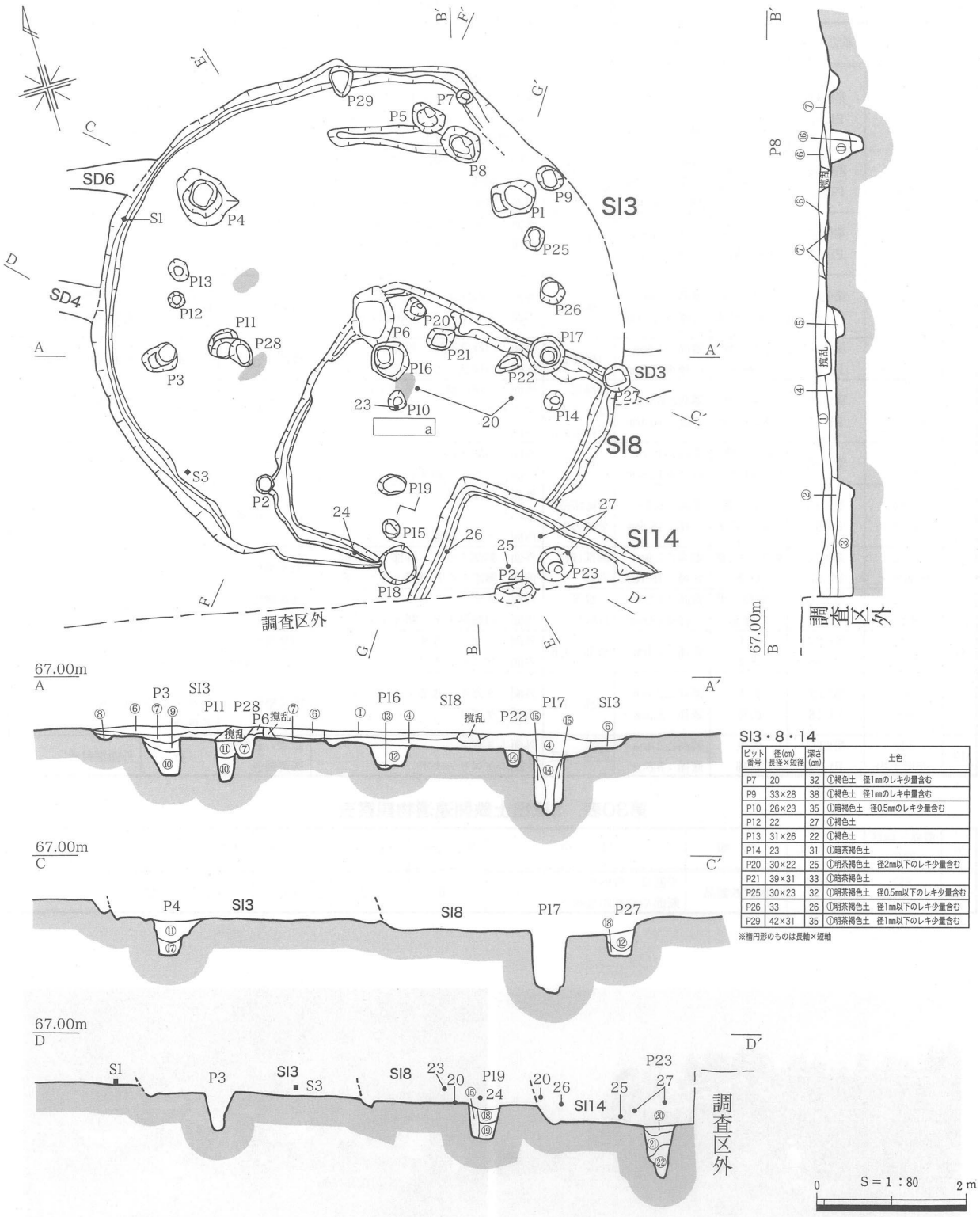
第29表　SI2出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
7	SI2 埋土中	第93図 PL.57	弥生　甕 口縁～胴部	器高△16.2cm 口径：17.8cm 胴径：18.0cm	口縁～胴部 1/2	外面：口縁沈線→ナデ　頸部ナデ、胴部ミガキ→上半ナデ、下半ハケメ 内面：口縁ミガキ→ナデ、頸部ミガキ、頸部以下ケズリ	浅黄色	1～4mmの 石英を 多く含む	外面黒斑および 煤付着
8	SI2 床面直上	第93図 PL.57	弥生　甕 口縁～胴部	器高△14.9cm 口径：17.8cm 胴径：18.9cm	口縁部完 形に近い	外面：口縁部沈線→一部ナデ、頸部ナデ、胴部上半ナデ、下半ミガキ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	2mm以下の 長石・石英 少し含む	肩部平行沈線・波状文めぐる。口縁下半および肩部煤付着
9	SI2 埋土中	第93図 PL.57	弥生　甕 口縁～胴部	器高△11.8cm 口径※13.4cm	全体1/3	外面：口縁沈線、頸部ナデ、胴部ミガキ 内面：口縁～頸部ミガキ、肩部以下ケズリ→粗いミガキ	黒褐色	密	
10	SI2 埋土中	第93図 PL.57	弥生　甕 口縁～肩部	器高△7.9cm 口径※15.2cm	口縁部3/4	外面：口縁沈線→ナデ、頸部ナデ 内面：ミガキ→ナデ、頸部以下ケズリ	黒褐色	2mm以下の 長石・石英 多く含む	外面磨滅著しく 調整判別困難
11	SI2 床面直上	第93図 PL.60	弥生　甕 口縁部	器高△4.5cm 口径※17.6cm	口縁部1/3	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	橙色	密	外面煤付着
12	SI2 床面直上	第93図 PL.57	弥生　甕 口縁～肩部	器高△6.2cm 口径：16.4cm	口縁部 ほぼ完形 全体の2/3	外面：口縁沈線→ナデ、頸部ナデ、肩部ミガキ 内面：ミガキ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	1～4mmの 石英を 多く含む	外面煤付着 肩部波状文
13	SI2 埋土中	第93図	弥生　甕 口縁部	器高△3.5cm 口径※13.6cm	口縁1/2	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：ミガキ、頸部以下ケズリ	淡褐色	0.1～0.2mmの 砂粒を含む	外面煤付着
14	SI2 床面直上	第93図 PL.57	弥生　甕 口縁～肩部	器高△6.8cm 口径：15.5cm	口縁部完存 全体の2/3	外面：口縁沈線→ナデ、頸部ナデ、肩部ハケ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	1～2mmの 石英を 多く含む	外面煤付着 肩部刻み目文？
15	SI2 床面直上	第93図 PL.57	弥生　台付甕 脚部	器高△7.9cm 底径：15.1cm	脚部ほぼ 完形	外面：胴部ミガキ、脚部平行沈線 内面：胴部ケズリ、脚部ミガキ下部ナデ	明赤褐色	密	外面全面赤彩
16	SI2 埋土中	第93図 PL.58	土師器　甕 口縁部	器高△4.2cm 口径※19.6cm	口縁部 1/8以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙色 ～赤褐色	密	内外面に赤彩
17	SI2 埋土中	第93図 PL.58	弥生 底部	底径：4.1cm	底部　1/6	外面：ハケ→ミガキ 内面：ケズリ→ナデ	明黄褐色 にぶい黄橙色	2mm大の砂 粒多く含む	外面煤付着
18	SI2 床面直上	第93図 PL.58	弥生 底部	器高△2.7cm 底径：5.5cm	底部　1/2	外面：ミガキ、底部ナデ 内面：ケズリ	明黄橙色	2mm以下の 長石・石英 多量含む	体部黒斑アリ
19	SI2 P5埋土中	第93図 PL.58	弥生 底部	器高△3.4cm 底径：5.6cm	底部　1/5	外面：ミガキ 内面：ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	密	外面煤付着

第30表　SI2出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F3	SI2 埋土中	第94図 PL.79	板状鉄製品	平面は三角形を呈する 断面やや湾曲気味	2.6	1.2	0.2	1.1	刃部？

写真７・８　作業風景



ピット番号	径(cm)長径×短径	深さ(cm)	土色
P7	20	32	①褐色土　径1mmのレキ少量含む
P9	33×28	38	①褐色土　径1mmのレキ中量含む
P10	26×23	35	①暗褐色土　径0.5mmのレキ少量含む
P12	22	27	①褐色土
P13	31×26	22	①褐色土
P14	23	31	①暗茶褐色土
P20	30×22	25	①明茶褐色土　径2mm以下のレキ少量含む
P21	39×31	33	①暗茶褐色土
P25	30×23	32	①明茶褐色土　径0.5mm以下のレキ少量含む
P26	33	26	①明茶褐色土　径1mm以下のレキ少量含む
P29	42×31	35	①明茶褐色土　径1mm以下のレキ少量含む

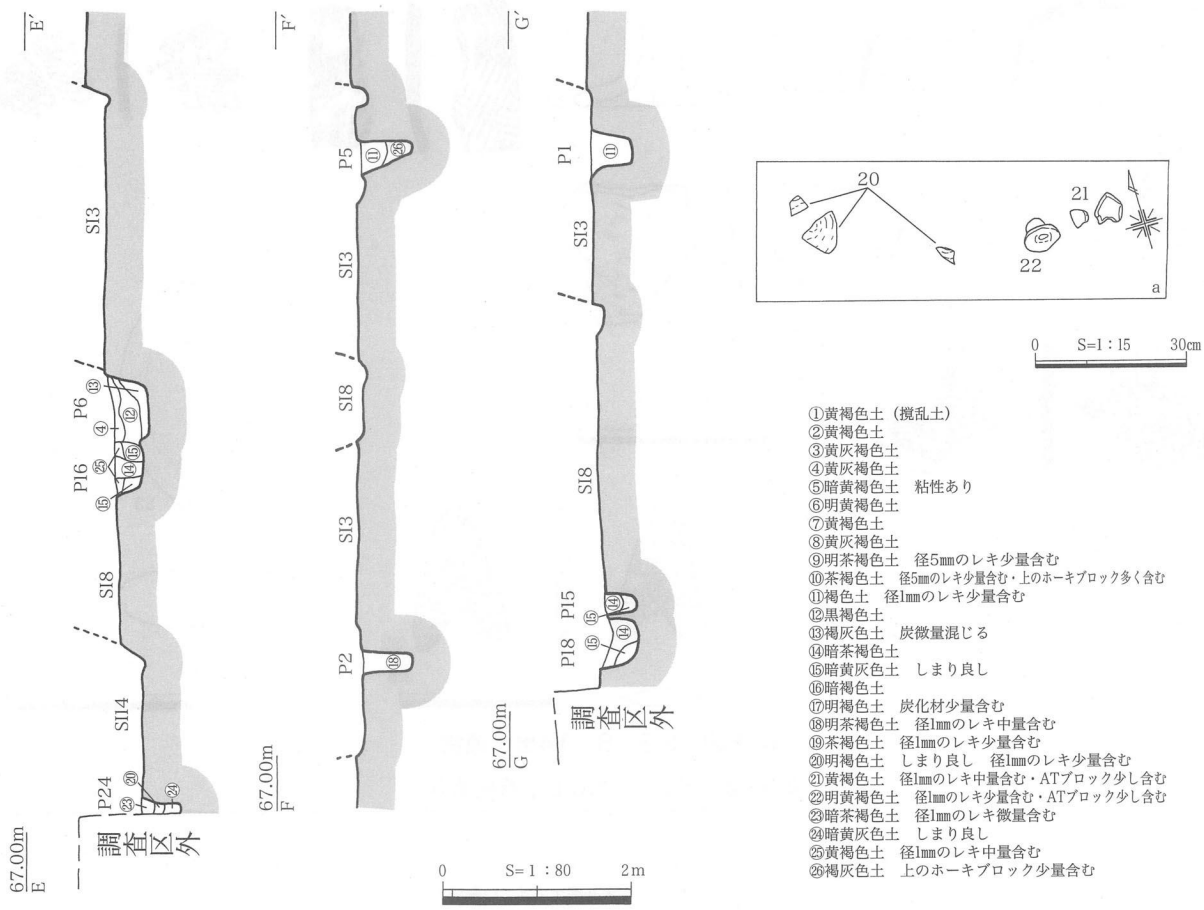
※楕円形のものは長軸×短軸

第95図　SI3・8・14（1）

SI3（第95～98図、第32表、PL.33・79）

Ａ区J11グリッド、標高66.2mの平坦面に位置する大型の竪穴建物である。北東側にSI７がある。当遺構は南側をSI８及びSI14に壊されている。平面形は円形で、最大径7.2m、床面積21.77㎡以上を測る。当初東側は後世の削平により流失していると考えていたが、かすかに周壁溝の残存と数点のピットが認められたため、おおよそのプランを確認できた。壁高は、検出面から床面までで最大20cm（西側）、最小４cm（東側）を測る。

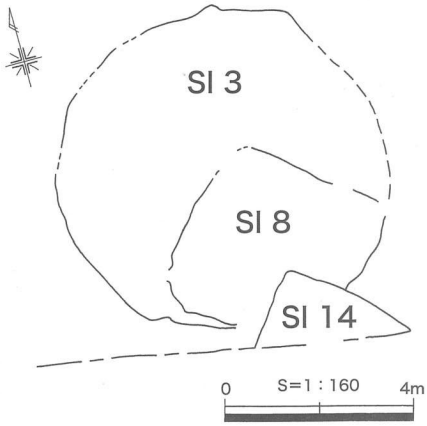
周壁溝（側溝）は半周以上巡っていたものと思われる。この溝は幅10～35cm、床面からの深さは６cm程で断面



第96図　SI3・8・14（2）

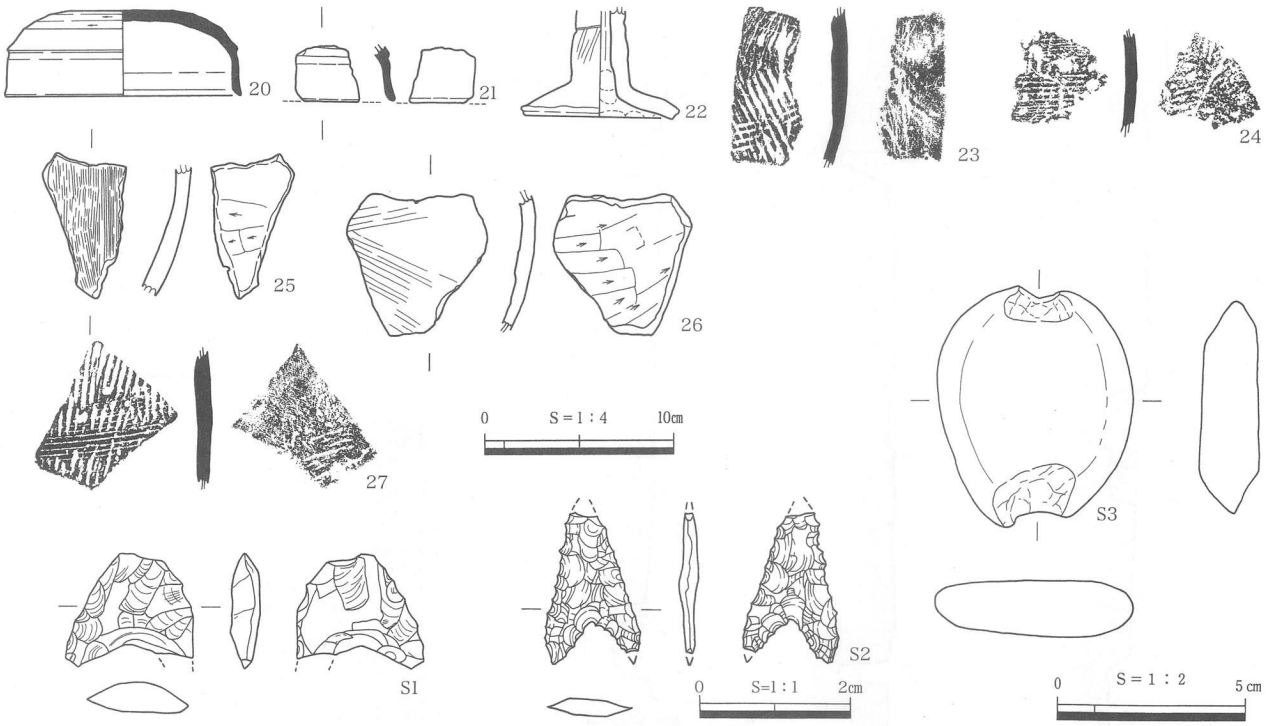
「U」字状である。また内側の床溝は、北東に１条検出した。Ｐ１から西へと伸びている。

ピットは竪穴建物３棟総数で29個検出した。埋土の状況からSI３に関わるピットは、Ｐ１からＰ13・17・19であると判断される。主柱穴と考えられるものはＰ１・Ｐ17・Ｐ19・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５で、７本柱の建物となる。各柱穴の大きさはＰ１（55×41－46）、Ｐ17（52×50－85）、Ｐ19（40×29－47）、Ｐ２（28×23－52）、Ｐ３（48×36－50）、Ｐ４（76×57－50）、Ｐ５（45×35－60）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ17間より順に2.2、2.7、1.75、2.2、2.2、3.2mを測る。Ｐ17とＰ19は、主柱配置の並びや深さの関係からこの建物の柱穴として使われたものと判断した。主柱以外のピットのなかで、主柱配置上に並んでいるものや主柱近くに位置しているものについては、建築段階および構造上の調整材・補助材としての役割が考えられる。中央ピットは、Ｐ６（80×54－32）cmと考えられる。埋土からSI８の周壁溝に切られている。平面形は楕円形である。埋土中に少量の炭を含む。そのほか、床面上西側に小規模な被熱硬化面（焼土面）を検出した。また、P28上に焼土を検出した。遺物は、ほぼ完形に近い黒曜石製の石鏃２（Ｓ１・Ｓ２）と石錘（Ｓ３）及び最大長2.25cm、厚さ0.7cmの鉄片（Ｆ４）が出土した。共に埋土中での出土であったため遺構の時期の確定はできないが、建物の形状と周辺遺構との関係から、弥生時代後期後半頃の時期が想定される。



第97図　SI3・8・14模式図

黒曜石製石鏃に関しては、当遺構だけでなく遺構検出時から調査区南東域で、製品とともにチップが頻繁に見つかっていた。これらは、加工によって生成したものであるから、現地での生産活動の痕跡として捉えることができる。ただし、当遺跡内で、生産に関わる遺構が検出されなかったため関わりは不明である。（岩井）



第98図　SI3・8・14出土遺物

第31表　SI8・14出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
20	SI8 埋土・床面 直上	第98図 PL.57	須恵器 坏蓋	器高△4.6cm 口径※12.6cm	全体3/4	外面：天井部ケズリ　口縁部ナデ 内面：ナデ	灰色	1mm以下の レキ多く 含む	
21	SI8 床面直上	第98図 PL.58	須恵器 坏蓋	器高△2.8cm	1/8以下	内外面ナデ	灰色	密	
22	SI8 床面直上	第98図 PL.57	高坏　脚部	器高△5.7cm 底径　7.9cm	脚部のみ	外面：筒部ハケ→ナデ　裾部ナデ 内面：筒部上半シボリ目　下半指頭 圧痕　裾部粗いナデ	明赤褐色	2mm以下の 砂粒含む	筒部上部に一条 沈線アリ
23	SI8 埋土中	第98図 PL.58	須恵器 胴部	器高△8.2cm	1/4以下	外面：平行タタキ 内面：円形のあて具痕	灰色	やや祖	摩滅著しい
24	SI8 埋土中	第98図 PL.58	須恵器 胴部	器高△4.6cm	1/4以下	外面：カキ目 内面：摩滅著しく不明	灰色	やや祖	摩滅著しい
25	SI14 埋土中	第98図 PL.58	甕　胴部	器高△7.75cm	1/8以下	外面：ハケ 内面：ケズリ	明赤褐色 橙色	1～2mmの 石英など 砂粒含む	外面煤付着
26	SI14 埋土中	第98図	甕　体部	器高△7.0cm	1/8以下	外面：ハケ 内面：ケズリ	黄橙色	4mm以下の 砂粒少し 含む	
27	SI14 埋土中	第98図 PL.58	須恵器 胴部	器高△7.0cm	1/4以下	外面：平行タタキ 内面：円形のあて具痕	青灰色	やや粗	外面に平行沈線 あり

第32表　SI3出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S1	SI3 埋土	第98図 PL.79	石鏃	凹基式	2.2	1.7	0.4	0.9	黒曜石	
S2	SI3 埋土	第98図 PL.79	石鏃	凹基式	2	1.3	0.3	0.5	黒曜石	
S3	SI3 埋土	第98図 PL.79	石鏃	長軸方向を打ち欠く	6.4	5.2	1.5	72.1	両輝石安山岩	表面が摩耗し滑らか

SI8（第95～98図、第31表、PL.33・57・58）

Ａ区J11グリッド、標高66.2mの平坦面に位置する竪穴建物である。この遺構はSI３の埋土を掘りこんで建てられており、さらに南側をSI14に壊されている。平面形は方形で、長辺3.8m、短辺3.7m、床面積9.34㎡以上を測る。壁高は、検出面から床面までで、最大28㎝（南東側）、最小14㎝（北側）を測る。

周壁溝（側溝）は、北側で途切れているがほぼ全周巡るものと思われる。この溝は幅10～32㎝、床面からの深さは7㎝程で断面は「U」字状である。

ピットは９個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ14・P15・P16の３本柱で、各柱穴の大きさはP14（25×23－31）、Ｐ15（27×24－31）、Ｐ16（55×38－31）㎝を測る。柱穴間距離はP14－P15間より順に2.8、2.3、2.35mを測る。主柱以外のピットに関して、P18は埋土から同時期または近い時期の埋没と考えられるが、当遺構の周壁を壊していることなどから関わりが薄いと思われる。

中央ピットに関しては、それらしき遺構は見当たらなかった。そのほか、床面に小規模ではあるが、被熱して赤化している部分が認められた。

遺物は、床面直上で須恵器坏蓋20と高坏脚部22が出土した。これら出土須恵器が、ほぼ田辺編年MT15の特徴を有する。

出土遺物から、この遺構の想定される年代として、古墳時代中期末～後期初頭の時期が考えられる。この年代はSI３との切り合い関係と矛盾しない。（岩井）

SI14（第95～98図、第31表、PL.33・58）

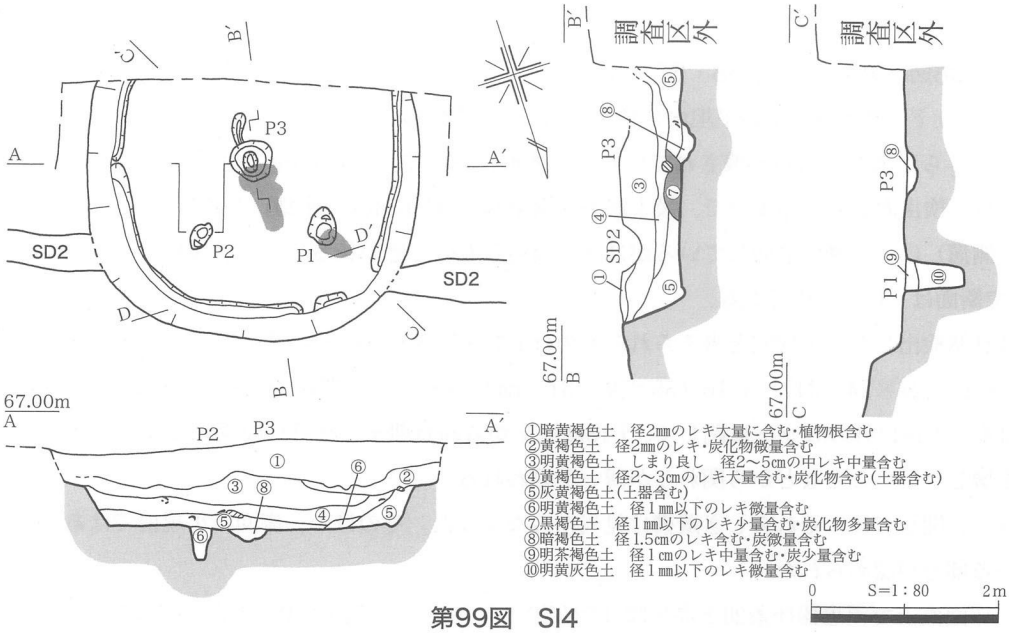
Ａ区J11グリッド、標高66.2mの平坦面に位置する竪穴建物である。調査区の南端に位置し、調査区内では北側隅にあたる部分のみ確認できた。SI８の埋土を壊して建てており、重複して建てられているSI３・８・14の３棟中最も新しい遺構である。平面形は推定方形プランで、長辺2.9m以上、床面積2.1㎡以上を測る。壁高は、検出面から床面までで、最大31㎝（東側）、最小19㎝（西側）を測る。

周壁溝（側溝）は調査域内ですべて巡っているため、区域外でも同様の可能性がある。この溝は幅17～25㎝、床面からの深さは7㎝程で断面は「U」字状である。ピットは２個検出した。両者とも柱穴と考えられるが、遺構の全体が不明であるので主柱と判断し難い。各柱穴の大きさはＰ28（47×45－70）、Ｐ29（55×推定26－43）㎝を測る。

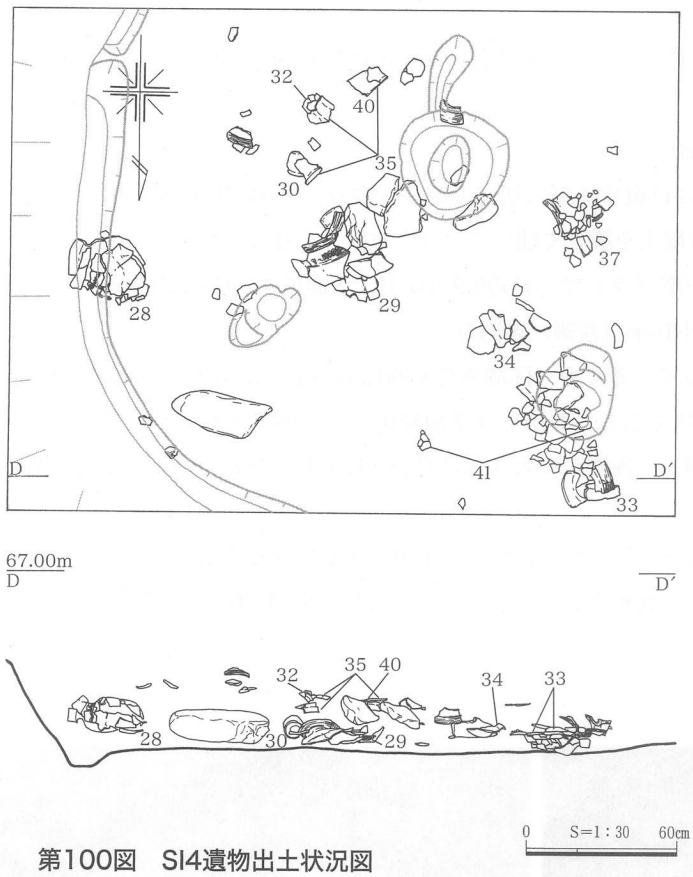
遺物は、詳しい時期を特定できる遺物は出土しなかったが、埋土中に須恵器片を含むこと、SI８との切り合い関係からSI８より新しい時期のものであると判断できることから、古墳時代中期以降の遺構であり、当遺跡中最も新しい時期の竪穴建物であるといえる。（岩井）

写真9　SI8遺物出土状況

写真10　SI14遺物出土状況



第99図　SI4



第100図　SI4遺物出土状況図

SI４（第99～101図、第33表、PL.34・58～60）

Ａ区J11グリッド西側、標高66.4mの平坦面に位置する小型の竪穴建物で、調査区南端、SI３の南西に立地する。南側は調査区外にかかる。平面形は推定楕円形で、残存最大径3.7m、床面積5.97㎡以上を測る。床面をAT層まで掘りこんで造っている。壁高は、検出面から床面までで最大49㎝（南東側）、最小29㎝（西側）を測る。

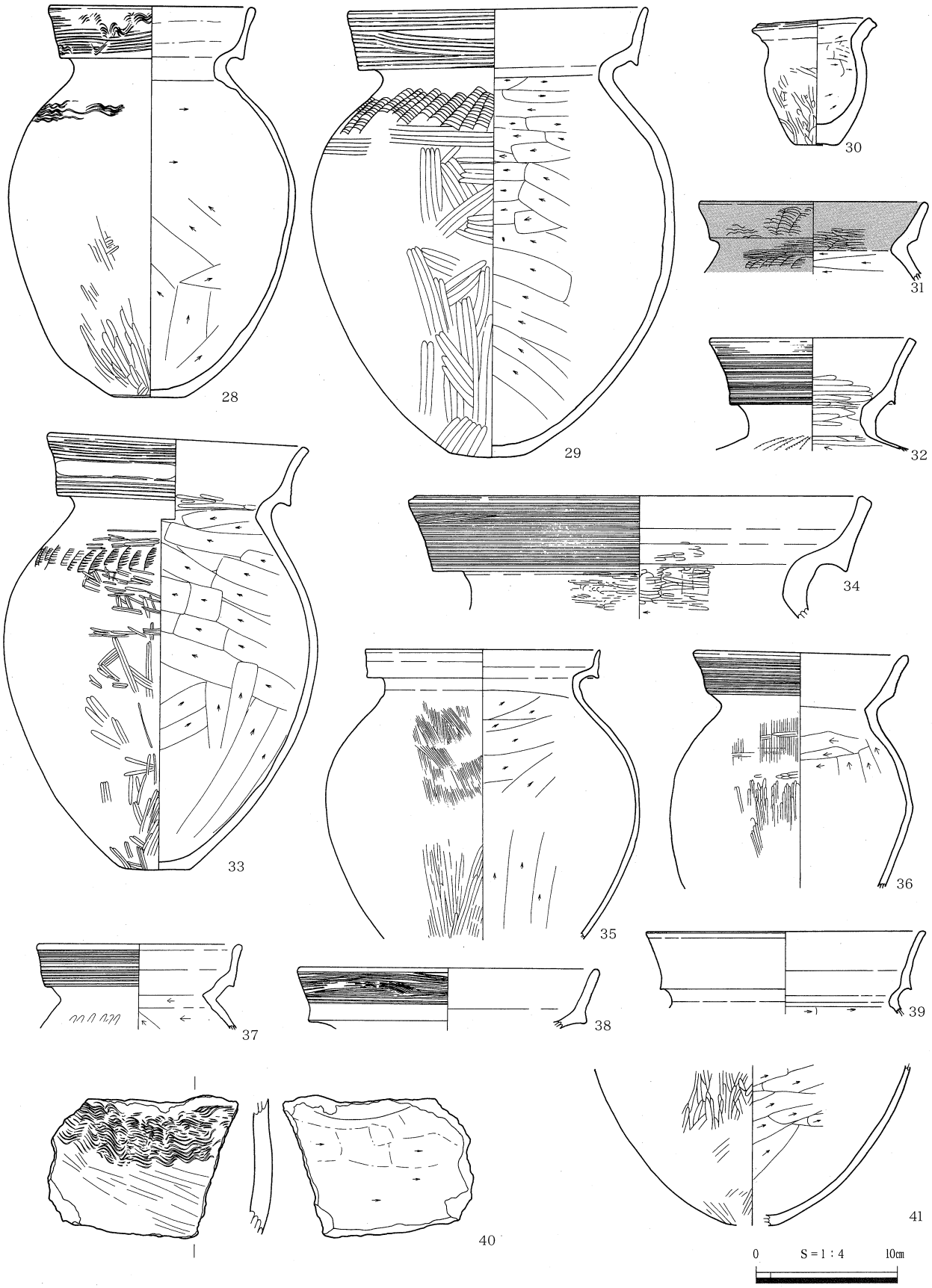
埋土は表土である①層を除き、６層に分層できたが、多量の遺物が混入している状況が認められた④～⑥層より上層である③層は、遺構上面を削平された後埋没した層である可能性が高い。

周壁溝（側溝）は北西で一部断絶が見られるが、調査区外も含めてほぼ全周していたと考えられる。この溝は幅８～15㎝、床面からの深さは８㎝程で断面は「U」字状である。

また内側の床溝は床面中央部分に見られ、Ｐ３から南に向かって伸びている。

ピットは３個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１とＰ２で、４本柱の建物になると思われる。各柱穴の大きさはＰ１（38×30－69）、Ｐ２（32×19－44）㎝を測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間で1.28mを測る。Ｐ３は中央ピットと考えられ、二段に掘りこまれており、上段不整円形、下段楕円形を呈する。上段の大きさは、（45×42－12）㎝で、下段は（23×15－９）㎝である。上段部分から北側周辺にかけて炭化物を多量に含む黒褐色土（⑦層）の盛りあがりが見られた。土器は含んでいない。

出土遺物としては、床面および埋土中からまとまった状態で土器が出土している。床面直上より出土したもの



第101図　SI4出土遺物

第33表　SI４出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
28	SI4 床面直上	第101図 PL.59	弥生　甕	器高※27.8cm 口径：14.8cm 底径：5.8cm	胴部半ばを欠く 1/3	外面：口縁沈線→波状文、頸部ナデ、胴部下半ミガキ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	明黄褐色	やや祖 1～3mmの砂粒を多量に含む	肩部波状文
29	SI4 埋土・床面直上	第101図 PL.59	弥生　甕	口径：21.5cm 器高：31.2cm	ほぼ完形	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部ナデ、胴部ミガキ 内面：口縁ナデ、頸部ミガキ、以下ケズリ	にぶい黄橙色	1～6mmの石英を多く含む	胴部に煤付着 ほぼ丸底 肩部押し引き 平行沈線見られる
30	SI4 床面直上	第101図 PL.59	弥生　小型甕	口径：8.9cm 器高：9.3cm 底径：3.1cm	完形	外面：口縁・頸部ナデ、体部ミガキ、底部ナデ 内面：ケズリ→ナデ	淡明褐色 淡明赤褐色	0.1mm前後の砂粒を含む	黒斑あり
31	SI4 埋土中	第101図 PL.58	弥生　甕 口縁部	口径：16.0cm	口縁部1/8	外面：口縁波状文・頸部上半ナデ・頸部下半押引き沈線→ミガキ 内面：口縁部ミガキ　頸部ケズリ	赤褐色 にぶい黄橙色	密	外面・内面口縁部に赤色塗彩アリ外面口縁部に煤付着
32	SI4 埋土中	第101図 PL.58	弥生　壷 口縁部	口径※14.7cm	口縁部1/4	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ミガキ、肩部ケズリ	橙色		肩部貝殻腹縁による押し引き刺穴
33	SI4 床面直上	第101図 PL.59	弥生　甕	口径：18.8cm 器高：31.1cm 底径：4.5cm	ほぼ完形	外面：口縁沈線→ナデ、頸部ナデ、胴部ミガキ 内面：口縁ナデ→一部ミガキ、頸部以下ケズリ	明黄褐色 橙色	1～6mmの石英を多く含む	胴部に煤付着 肩部貝殻押し引き文
34	SI4 床面直上	第101図 PL.60	弥生　大型甕 口縁部	口径：32.0cm	口縁部1/8	外面：口縁沈線、頸部ミガキ 内面：口縁部ミガキ→ナデ、頸部ミガキ、頸部下半ケズリ→ミガキ	橙色	1～3mm大の砂粒を含む	頸部に指頭圧痕アリ 外面煤付着
35	SI4 埋土中	第101図 PL.60	弥生　甕 口縁～胴部	器高△20.7cm 口径※16.8cm	3/4以上	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケ、胴部ミガキ 内面：口縁ナデ、頸部以下ケズリ	黄橙色	密、1～2mm大の砂粒を多く含む	外面煤付着
36	SI4 床面直上	第101図 PL.59	弥生　甕 口縁～体部	口径：15.2cm 胴径：17.3cm	全体の3/5	外面：口縁沈線、頸部ナデ、肩部以下ハケ→ミガキ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色 黄橙色	2mm以下の砂粒含む	外面胴部に煤付着
37	SI4 床面直上	第101図 PL.58	弥生　甕 口縁部	口径※14.6cm	口縁部1/4	外面：口縁部沈線、頸部上半ナデ下半ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	1mm大の砂粒含む	外面煤付着
38	SI4 床面直上	第101図 PL.58	弥生　甕 口縁部	口径※21.6cm	口縁部1/5	外面：口縁部沈線、下端ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色	密	
39	SI4 埋土中	第101図 PL.58	弥生　甕 口縁部	口径：20.0cm	口縁部1/8	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部下ケズリ	黄橙色	密	外面口縁部煤付着
40	SI4 埋土中	第101図 PL.58	弥生　壷 肩部	器高△9.6cm	1/8以下	外面：ミガキ→肩部波状文 内面：ケズリ→ナデ	にぶい橙色	密	
41	SI4 床面直上	第101図	弥　生 胴～底部	底径△3.6cm	胴部1/6	外面：ミガキ　内面：ケズリ→ナデ	褐灰色	密	内外面煤付着

としては、28・29・33・34・36～38の甕および30の小型甕がある。特に、住居東側（28）・中央部（29）・西側（36）・北西側（33）の４箇所の甕は、横倒しのまま埋土に押しつぶされた状態で出土しており、28は甕内に埋土が流入した後に破損していた。

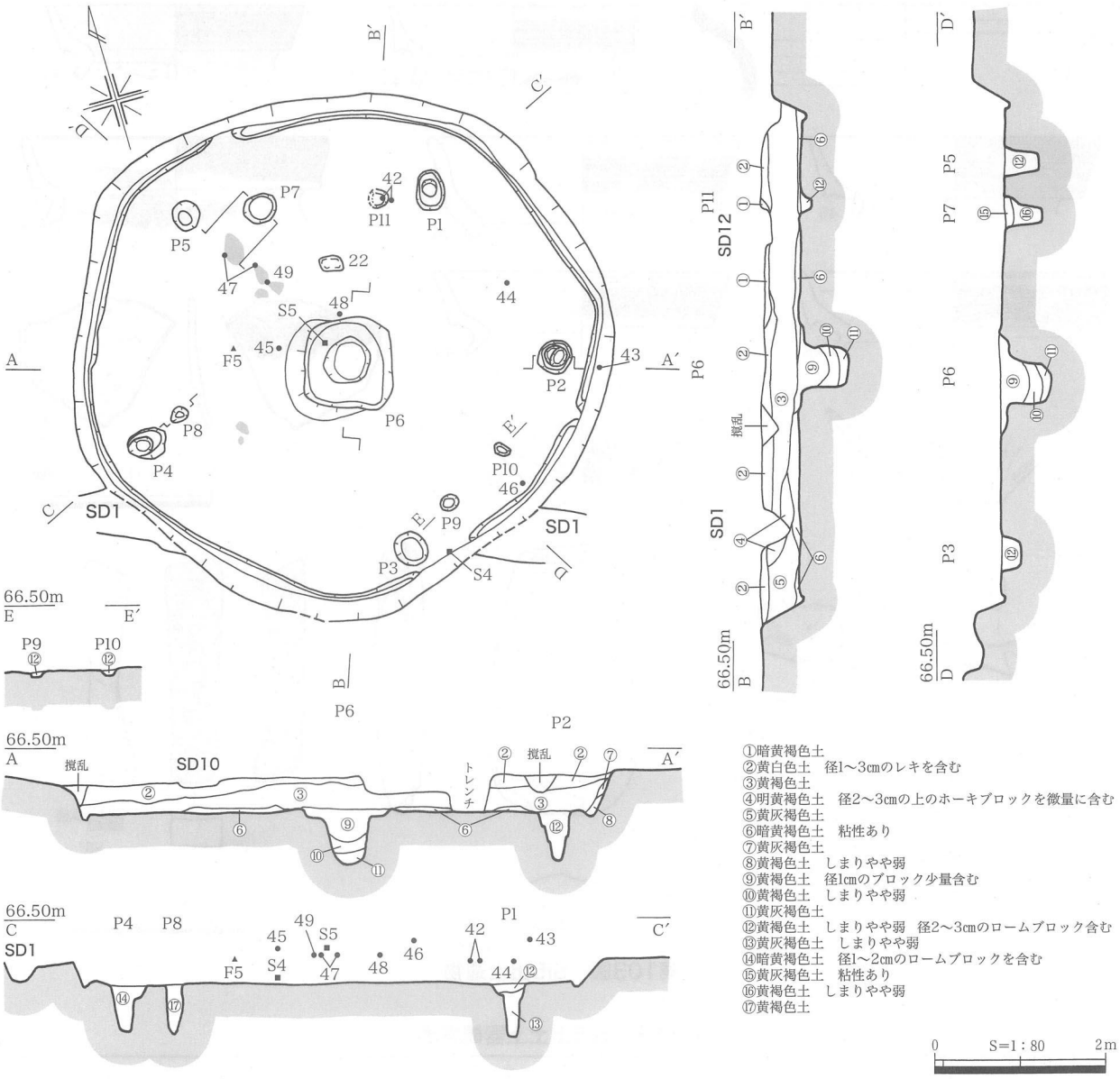
また、遺構中心部付近の埋土中には人頭大の礫とともに32の壺の口縁部や40の大型甕の肩部の破片と考えられる土器が出土している。おそらく建物廃棄後、何らかの意図を持って２次的に投げ込まれたものである可能性が高い。これらの土器は床面直上出土のものと型式差が認められないことから、建物廃棄時と２次投棄時との間の時間差はあまりないのではないかと考えられる。

出土遺物のほぼすべてが清水編年Ⅴ-３様式に相当することから、この建物は弥生時代後期後葉の時期が想定される。（岩井）

SI５（第102・103図、第34～36表、PL.34・60・61・79）

Ａ区I12グリッド、標高66.2mの平坦面に位置する。SI６・15の北側にある。平面形は隅丸五角形で、長辺6.38m、短辺6.24m、床面積24.91㎡を測る。基本層序第Ⅶ層のAT層まで掘り下げ、AT層を床面としている。検出面から床面までの深さは、最大東側で47cm、最小北西側で23cmを測る。

周壁溝（側溝）は一部途切れているものの、本来は全周していたものと考えられる。この溝は幅11cm、床面からの深さは５cm程で断面は「U」字状である。



第102図　SI5

ピットは11個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ５で、各柱穴の大きさはＰ１（47×31－64）、Ｐ２（38×35－58）、Ｐ３（40×37－23）、Ｐ４（48×35－55）、Ｐ５（35×32－42）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.5、2.83、3.45、2.75、2.9mを測る。Ｐ６上段（110×104－11）・下段（55×53－56）cmは中央ピットと考えられ、平面形は隅丸方形で、周囲に地山を削りだした低い土堤をもつ。

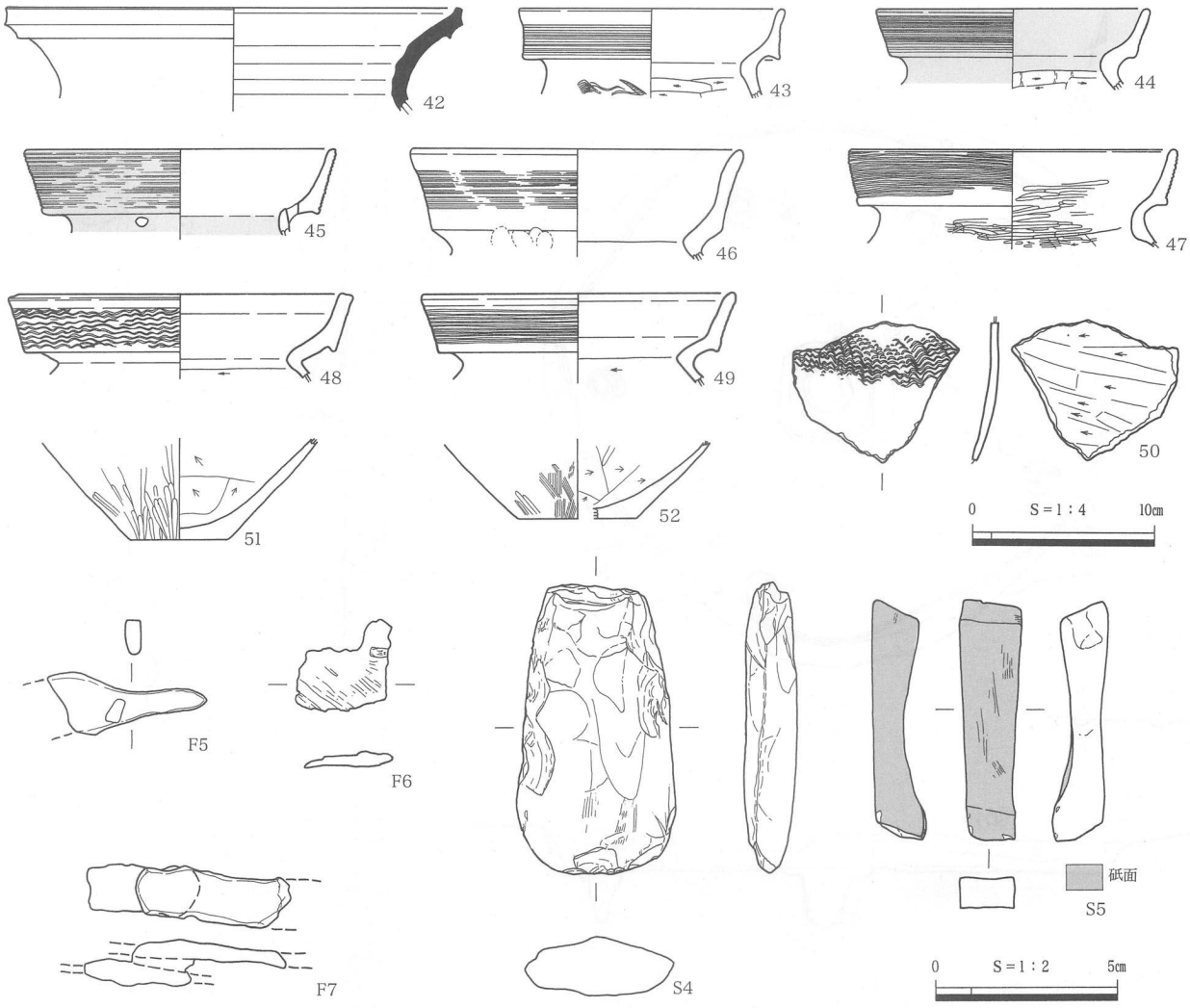
Ｐ９・P10は約90cmの間隔をもって並ぶ径18cm、深さ５～10cmほどの浅いピットである。入り口として使用された梯子等の痕跡の可能性が考えられる。

出土した土器としては、埋土中北西部を中心に43～49の甕の口縁部破片及び51・52の底部破片が、また北東部より42の須恵器口縁部片が出土している。

その他の遺物として小型石斧（Ｓ４）や砥石（Ｓ５）、器種不明の鉄製品の破片（Ｆ５・Ｆ６）が出土した。

床面直上より出土した遺物は認められなかったため、この遺構の時期は確定できないが、建物の形態と周辺の遺構の状況から判断して、埋土中より出土した42～49の清水編年Ｖ-３様式にあたる甕（弥生時代後期後葉）に近い時期のものであると考えられる。この時期よりも新しい須恵器片（42）が同じく埋土中から出土しているが、これについては土層断面からは確認できない位置に撹乱土が混入しており、その中に混じっていた可能性が高い。

（大野）



第103図　SI5出土遺物

第34表　SI5出土土器観察表

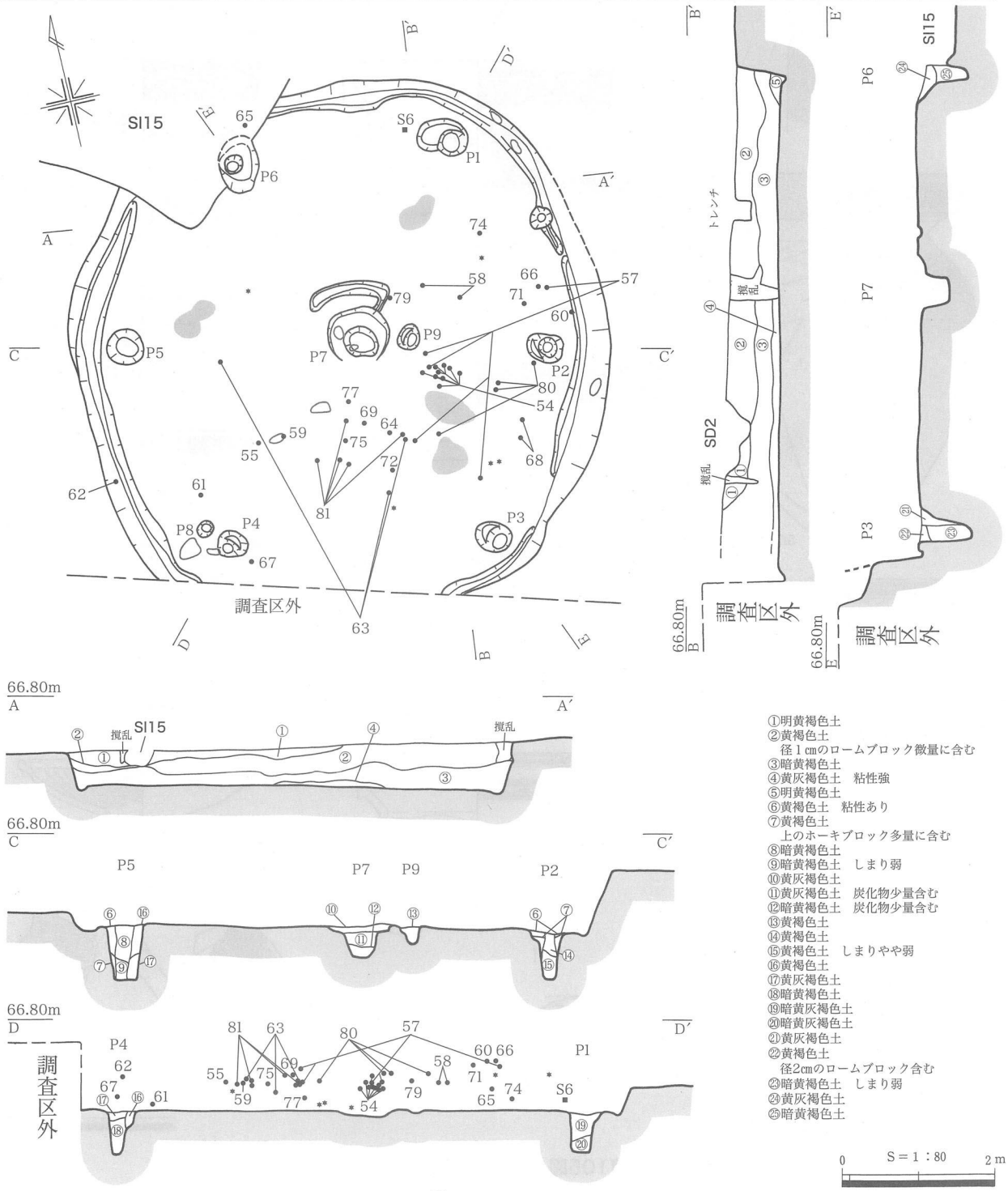
No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
42	SI5 埋土中	第103図 PL.60	須恵器　甕 口縁部	口径：25.8cm	口縁部1/6	内外面：ナデ	青灰色 暗緑灰～暗オリーブ灰色	密	外面自然釉アリ
43	SI5 埋土中	第103図 PL.61	弥生　甕 口縁部	器高△5.0cm 口径※4.3cm	口縁部1/2	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部ナデ 内面：口縁ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	1～2mmの石英を含む	頸部貝殻押し引き沈線および波状文？ 外面煤付着
44	SI5 埋土中	第103図 PL.60	弥生　甕 口縁部	器高△4.5cm 口径※15.2cm	口縁部1/3	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁ナデ　頸部ケズリ	にぶい橙色	1mm大の石英など砂粒含む	内外面赤彩
45	SI5 埋土中	第103図 PL.60	甕　口縁部	器高△4.1cm 口縁※17.2cm	口縁部 1/4以下	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：ナデ	橙色	密	内外面赤彩 頸部に直径5.5mmの円状穿孔あり
46	SI5 埋土中	第103図 PL.60	甕　口縁部	器高△6cm 口縁※18.5cm	口縁部 1/4以下	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	淡黄色	密	
47	SI5 埋土中	第103図 PL.60	甕　口縁部	器高△5.2cm 口径※18cm	口縁部 1/5以下	外面：口縁沈線、頸部ナデ、頸部以下ミガキ 内面：口縁部～頸部ミガキ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密	外面煤付着
48	SI5 埋土中	第103図 PL.60	甕　口縁部	器高△4.7cm 口縁※19cm	口縁部1/7	外面：口縁沈線→波状文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	密	外面波状文あり
49	SI5 埋土中	第103図 PL.60	甕　口縁部	器高△4.9cm 口縁※19.4cm	口縁部1/5	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色 灰色	密	
50	SI5 埋土中	第103図 PL.60	甕　肩部	器高△7.7cm	全体の 1/8以下	外面：ナデ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	密	外面波状文あり
51	SI5 埋土中	第103図 PL.61	弥生　底部	器高△5.4cm 底径※5.4cm	底部1/2	外面：ミガキ 内面：ナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	密	
52	SI5 埋土中	第103図 PL.60	弥生　底部	器高△4.2cm 底径※6.7cm	底部1/2	外面：ハケ→ミガキ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	密	

第35表　SI5出土鉄関連遺物観察表

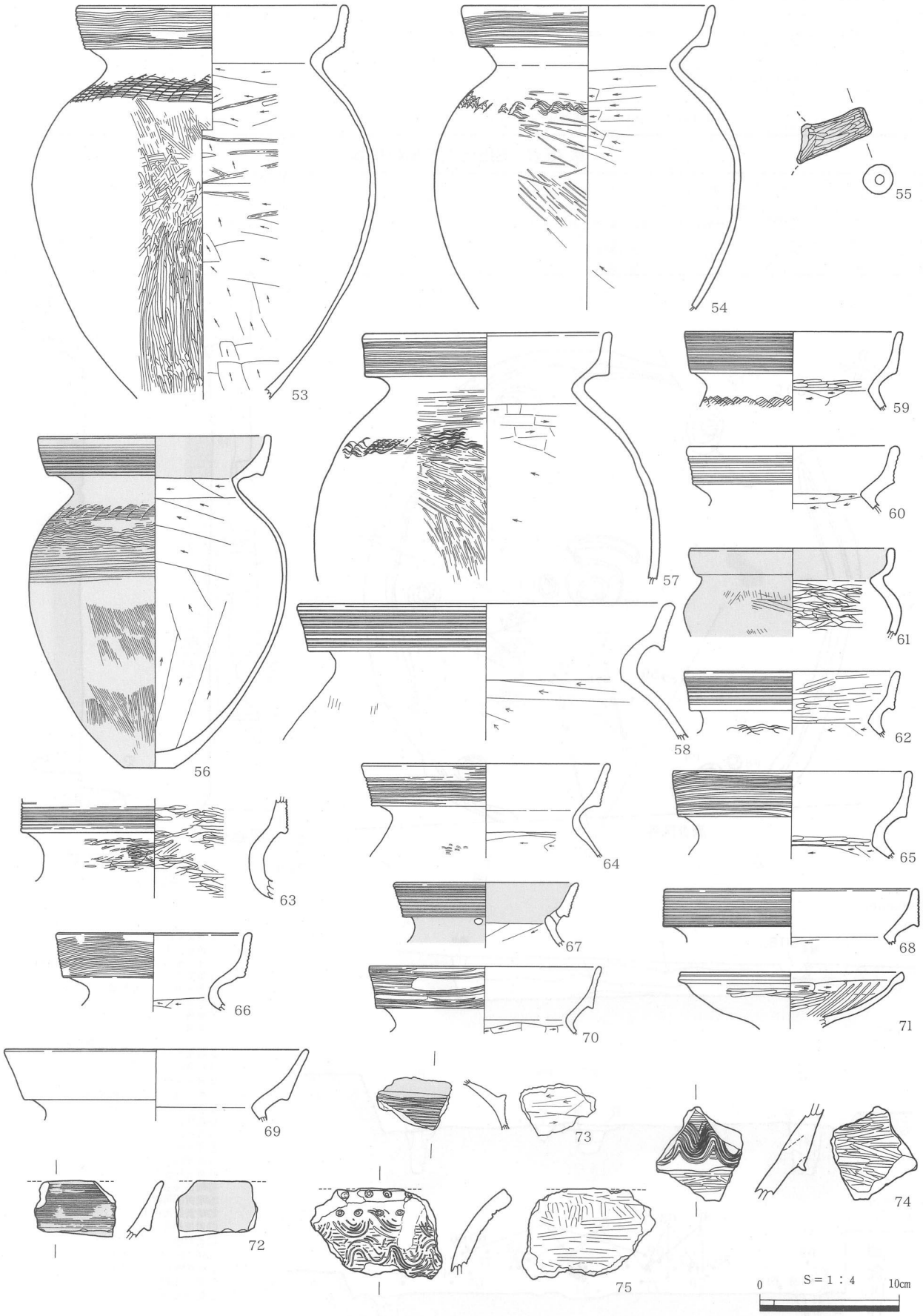
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F5	SI5 埋土中	第103図 PL.79	鉄片	不定形	4.6	1.6	0.4	4.7	
F6	SI5 埋土中	第103図 PL.79	鉄片	不定形	2.5	2.2	0.2	3.5	
F7	SI5 埋土中	第103図 PL.79	板状鉄製品	幅1.3cmの鉄板が2枚重なり合う。	①4.3 ②3.1	①1.4 ②1.5	①0.4 ②0.6	8.18	

第36表　SI5出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	石　材	備　考
S4	SI5 床面上	第103図 PL.79	磨製石斧	両面に粗雑な磨きが見られる	8	4.3	1.6	79.9	細粒砂岩	未製品
S5	SI５ 埋土	第103図 PL.79	砥石	砥面は側面3面を使用し、一方の上端も砥面として使用している。	6.6	1.7	1.4	22	流紋岩	



第104図　SI6



第105図　SI6出土遺物（1）

SI6（第104～106図、第37～40表、PL.35・61～63・79）

Ａ区I13グリッド、標高66.3～66.0mの緩い傾斜面に位置する。SI15に北西側の一部を壊されている。平面形は円形で、最大径7.5m、床面積32.28㎡以上を測り、本遺跡中最大規模の竪穴建物である。検出面から床面までの深さは、最大東側で79cm、最小北西側で41cmを測る。

周壁溝（側溝）は南西隅で一部途切れるものの、本来は全周していたものと考えられる。この溝は幅30cm、床面からの深さは６cm程で断面はU字状である。

床溝は中央ピットであるＰ７の北東から伸び、30cmの地点で「く」の字に屈曲している。

ピットは９個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ６で、６本柱の建物となる。各柱穴の大きさはＰ１（66×41－59）、Ｐ２（50×47－63）、Ｐ３（48×37－68）、Ｐ４（42×35－58）、Ｐ５（50×45－73）、Ｐ６（74×52－66）cmを測る。Ｐ６はSI15を建てる際に半分削平されていた。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に3.0、2.65、3.6、3.0、2.75mを測る。Ｐ７上段（81×78－16）・下段（48×35－39）cmは中央ピットと考えられ、平面形は楕円形で、２段に掘り込まれている。

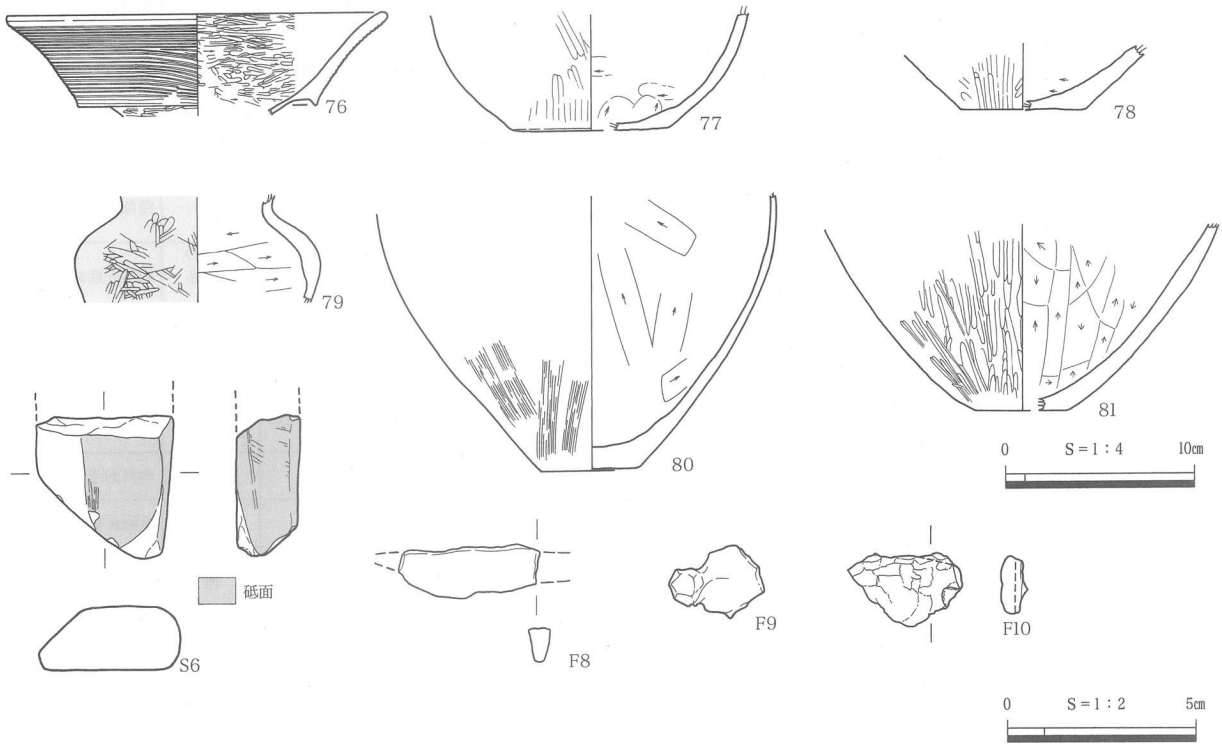
床面の焼土面は中央ピット（Ｐ７）を中心に４カ所検出された。

出土遺物は床面直上出土のものは認められなかったが、埋土中の標高65.5～65.9m、床面から20～40cmほど高い位置より多量の土器と不明鉄製品（Ｆ８・Ｆ９・F10）、砥石（Ｓ６）、桃の炭化種子（✱）が出土した。土器は甕・壺・高坏のほか、注口土器（55）、口縁部に波状文や竹管文の施されている器台（74・75）など、バラエティーに富んだ器種が含まれている。

また、桃の炭化種子も６点が土器に混ざるように出土した。これらの遺物は遺構埋没段階、もしくは人為的にある程度埋められた後、意図的に投げ込まれたものと考えられる。この遺構は検出面から床面まで最大79cmと、本遺跡の中でも最も残りのよい遺構である。しかし床面に残された遺物は全く検出されなかった。この状況は、これら埋土中の大量の遺物が、この竪穴建物を廃棄した人々となんらかの関わりがあるものではないかと連想させるものである。

この遺構の年代として、埋土中出土土器がほぼ清水編年Ｖ-３様式に相当することから、弥生時代後期後葉の時期と考えられる。

（大野）



第106図　SI6出土遺物（２）

第37表　SI６出土土器観察表（1）

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
53	SI6 埋土中	第105図 PL.62	弥生　甕 口縁～胴部	器高△28.5cm 口径：19.6cm 胴径：24.7cm	全体の2/3	外面：口縁沈線→ナデ、頸部ナデ、頸部～肩ハケ→ナデ、頸部以下ハケ→ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部ミガキ、頸部以下ケズリ	明赤褐色 明褐色	2mm大の砂粒含む	外面煤付着
54	SI6 埋土中	第105図 PL.61	弥生　甕 口縁～胴部	器高△21.8cm 口径※18.2cm 胴径※22.0cm	全体の1/2	外面：口縁沈線、頸部ナデ、肩部以下ミガキ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	黄橙色	0.5～2mm の砂粒を含む	胴部煤付着 肩部波状文
55	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　注口	直径　2.2cm 注口部径0.6cm	注口部分のみ	外面：ミガキ	明褐色	1mm以下の砂粒含む	外面赤彩
56	SI6 埋土中	第105図 PL.61	弥生　甕	器高：24cm 口径：16.7cm 底径：3.9cm	ほぼ完形	外面：口縁沈線、頸部ナデ、頸部ナデ、肩部沈線→波状文、胴部ハケ→ナデ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密 1～3mmの石英・砂粒を含む	外面煤付着 外面所々に赤彩あり
57	SI6 埋土中	第105図 PL.62	弥生　甕 口縁～胴部	器高△17cm 口径※18cm	全体の1/3	外面：口縁部沈線、頸部ナデ、肩部以下ミガキ　内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密	外面肩部波状文
58	SI6 埋土中	第105図 PL.61	弥生　甕 口縁～肩部	器高△9.8cm 口径：27.2cm	口縁部3/4	外面：口縁部沈線、頸部ナデ、肩部ハケか 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明黄褐色 にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒多く含む	外面磨滅により調整判別困難
59	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△5.6cm 口径：15.8cm	口縁部1/8	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部上部ミガキ、下部ケズリ	にぶい黄橙色 黄橙色	密	肩部波状文 口縁部煤付着
60	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△4.6cm 口径※15.4cm	口縁部1/6	外面：口縁部沈線→ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ　下半のみナデ→ミガキ、頸部ケズリ	黄橙色	1～2mmの石英を多く含む	
61	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生 小型　甕？ 口縁～胴部	器高△6.3cm 口縁※14.6cm	口縁～胴部1/4	外面：口縁～頸部ナデ、以下ハケ→ナデ 内面：口縁部ナデ　　頸部以下ケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密	外面および口縁内面に赤彩アリ
62	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△5.4cm 口径※15.6cm	口縁部1/3	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	密	外面煤付着 肩部櫛描波状文
63	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁～頸部	器高△5.9cm 口径※19.2cm	口縁～頸部1/4	外面：口縁沈線　頸部ミガキ 内面：ミガキ	黄褐色	3mm大の石英など砂粒多く含む	
64	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁～肩部	器高△6.7cm 口径※17.6cm	口縁～肩部1/4	外面：口縁部沈線→ナデ　頸部以下ナデ 内面：口縁部ミガキ→ナデ　頸部ミガキ　以下ケズリ	にぶい橙色	1mm以下の砂粒多く含む	肩部に波状文アリ 内外面煤付着
65	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△6.3cm 口径※17.4cm	口縁部1/3	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部上部ミガキ、下部ケズリ	浅黄橙色 黄橙色	密	外面頸部上部に煤付着
66	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△5.5cm 口径※13.6cm	口縁部1/7	外面：口縁部沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明黄褐色 にぶい黄橙色	密	
67	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁～頸部	器高△4.6cm 口径※13.2cm	口縁～頸部1/3	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	明赤褐色	2mm以下の砂粒含む	頸部に焼成前穿孔アリ（内→外） 外面および口縁内面に赤彩アリ
68	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△3.8cm 口径※18.3cm	口縁部1/5	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	淡褐色	0.1mm大の砂粒を含む	頸部外面に煤付着
69	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　甕 口縁部	器高△5.2cm 口径※22.0cm	口縁部 1/2	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ	浅黄色	1～3mmの石英を多く含む	内外面磨滅著しい
70	SI6 埋土中	第105図 PL.62	弥生　甕 口縁部	器高△4.8cm 口径※16.8cm	口縁部 2/3	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部ナデ 内面：口縁ナデ、頸部ミガキ、以下ケズリ	浅黄橙色	1mmの石英を含む	外面煤付着
71	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　高坏 坏部	器高△4.1cm 口径※16.2cm	坏部1/5	外面：ナデ→口縁部下ミガキ 内面：口縁部ナデ、以下ケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	1～2mmの石英を多く含む	外面黒斑アリ
72	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥　生 口縁部	器高△4.1cm 口径※17.9cm	口縁部1/8以下	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：ナデ	橙色	密	内外面赤彩
73	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　器台 受部	器高△3.6cm	1/8以下	外面：脚部ミガキ、端部沈線 内面：ケズリ	明赤褐色 灰色	密	外面赤彩
74	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　器台 受部	器高△6.2cm	1/8以下	外面：口縁部沈線→波状文、頸部以下ミガキ 内面：ミガキ	橙色	密	
75	SI6 埋土中	第105図 PL.63	弥生　器台 口縁部	器高△5.9cm	1/8以下	外面：口縁部沈線→波状文 内面：ミガキ	橙色	密	外面竹管による刺突文あり
76	SI6 埋土中	第106図 PL.61	弥生 器台 受部	器高△5.4cm 底径※20.4cm	受部1/2	外面：口縁部沈線、頸部ミガキ 内面：ケズリ→ミガキ	淡褐色	1～2mm大の砂粒を含む	
77	SI6 埋土中	第106図 PL.63	弥生　底部	器高△5.1cm 底径※8.4cm	底部1/4	外面：ミガキ　底部ナデ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	1～5mmの長石・石英を含む	内外面煤付着

第38表　SI６出土土器観察表（２）

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
78	SI6 埋土中	第106図 PL.63	弥生　底部	器高△3.4cm 底径※6.8cm	底部　1/4	外面：ミガキ 内面：風化著しく判別不能	にぶい黄橙色	密	
79	SI6 埋土中	第106図 PL.63	弥生 小型甕 胴部	器高△5.7cm 胴径※13.1cm	胴部　1/4	外面：ミガキ 内面：ケズリ	赤褐色 明黄褐色	密	外面赤彩
80	SI6 埋土中	第106図 PL.62	弥生　底部	器高△4.6cm 底径：5.2cm	胴部以下 2/3	外面：上部ナデ、下部ハケ 内面：粗いケズリ	にぶい黄橙色	1～3mmの 石英を 多く含む	外面煤付着
81	SI6 埋土中	第106図 PL.62	弥生　底部	器高△9.7cm 底径：4.8cm	胴部以下 2/3	外面：ミガキ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色 黒褐色	密	底面にもミガキ

第39表　SI6出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F8	SI6 埋土中	第106図 PL.79	板状鉄製品	不定形 断面は三角形を呈する	3.7	1.3	2.5～5.5	5.5	
F9	SI6 埋土中	第106図 PL.79	鉄片	不定形	2.5	1.8	0.8	3.8	
F10	SI6 埋土中	第106図 PL.79	鉄片	断面矩形を呈する	3.1	2.9	0.2	3.4	

第40表　SI6出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S6	SI6 埋土	第106図 PL.79	砥石	砥面を3面持つ	3.7	3.5	1.7	31.9	アプライト	右側上端部欠損

SI15（第107～109図、第41・42表、PL.35・62・63・79）

Ａ区Ｉ13グリッド、標高66.1～65.7mの緩い傾斜面に位置する。南東隅がSI６の北西壁を壊している。平面形は隅丸方形で、長辺4.76m、短辺4.72m、床面積15.06㎡を測る。検出面から床面までの深さは、最大東側で89cm、最小北側で62cmを測る。

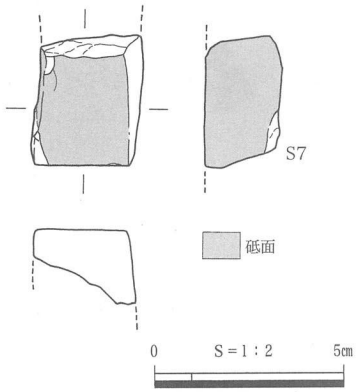
周壁溝（側溝）は一部途切れるがもとは全周していたものと思われる。この溝は幅８cm、床面からの深さは４cm程で断面は「U」字状である。

床溝は主柱穴と考えられるＰ４と中央ピットであるＰ５を繋ぐように伸びている。

ピットは５個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４で、４本柱の建物となる。各柱穴の大きさはＰ１（37×33－35）、Ｐ２（40×35－69）、Ｐ３（50×38－58）、Ｐ４（45×42－69）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.5、2.32、2.5、2.52mを測る。Ｐ６上段（69×60－７）下段（44×36－43）cmは中央ピットと考えられ、平面形は円形で、２段に掘り込まれ、地山削り出しの土堤をもつ。

床面の被熱して赤化している面は中央ピットを中心に３箇所認められる。

出土遺物としては、床面直上からの出土はみられなかった。埋土中上層から83・84の土師器甕口縁部破片が、同じく下層から弥生土器の甕の上半部（82）が出土した。土器以外の遺物としてはアプライト（優白質微花崗岩）製の砥石片（Ｓ７）が出土している。



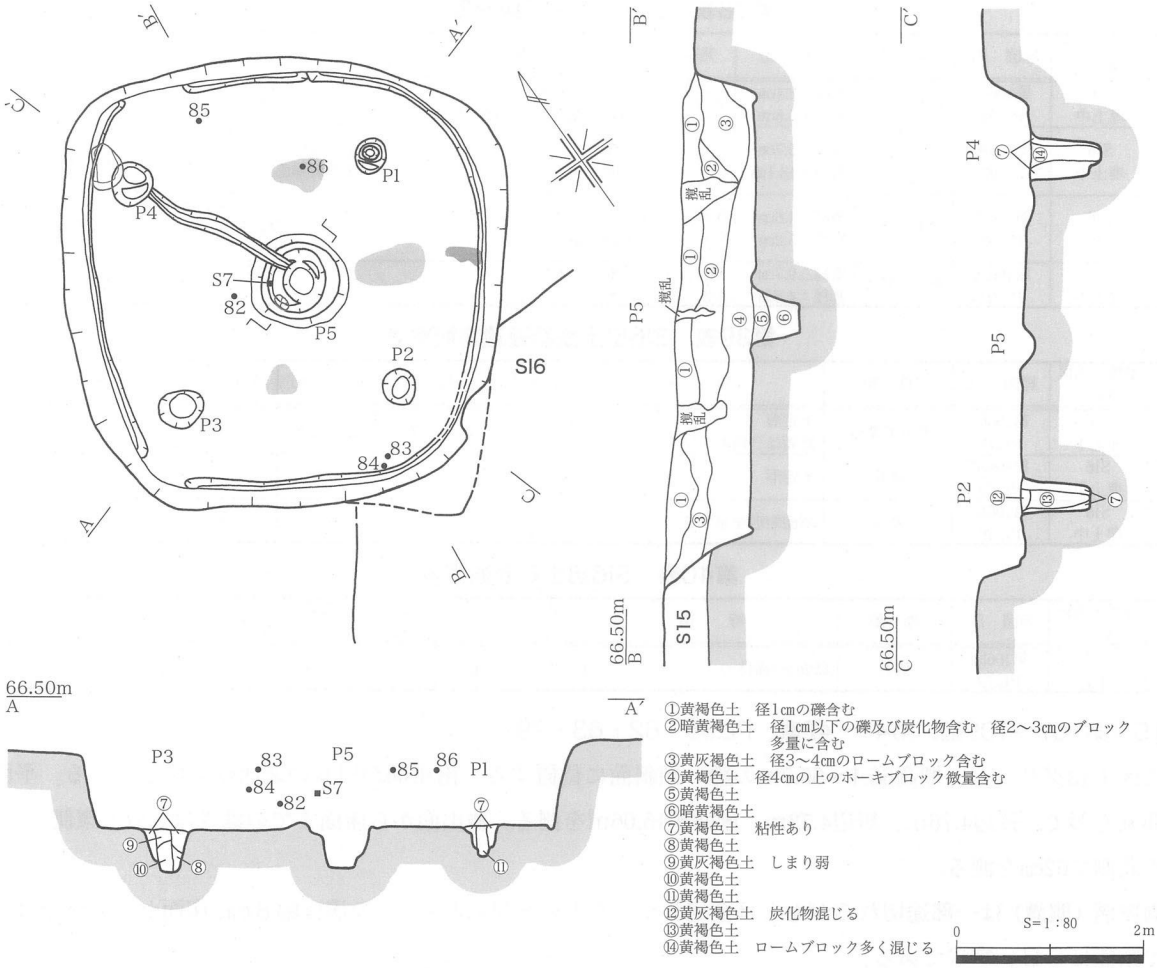
第107図　SI15出土遺物（１）

この遺構の想定される年代として、埋土中出土遺物のうち最も下層から出土している82の甕が、清水編年Ｖ-３様式にあたることから、弥生時代後期後葉の時期が考えられる。他の出土遺物は、古墳時代初頭から中期の年代が想定されるものであるが、根撹乱の著しい上層より出土しているため、撹乱土中に混入していた可能性が考えられるものである。

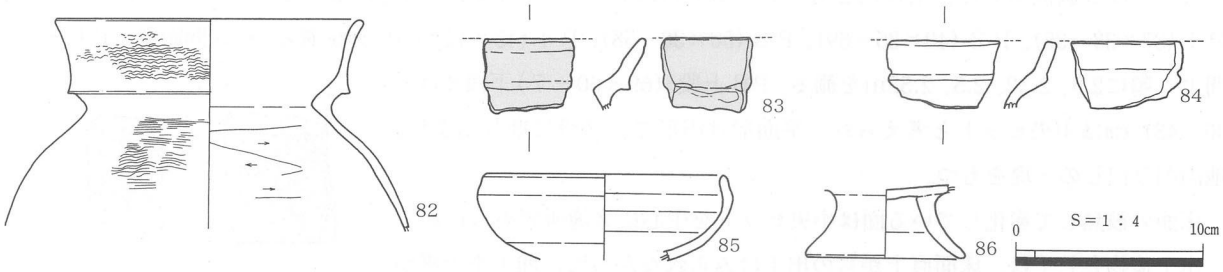
（大野）

第41表　SI15出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S7	SI15 埋土	第107図 PL.79	砥石	砥面を2面持つ	3.4	2.7	1.9	30	アプライト	左側下端部欠損



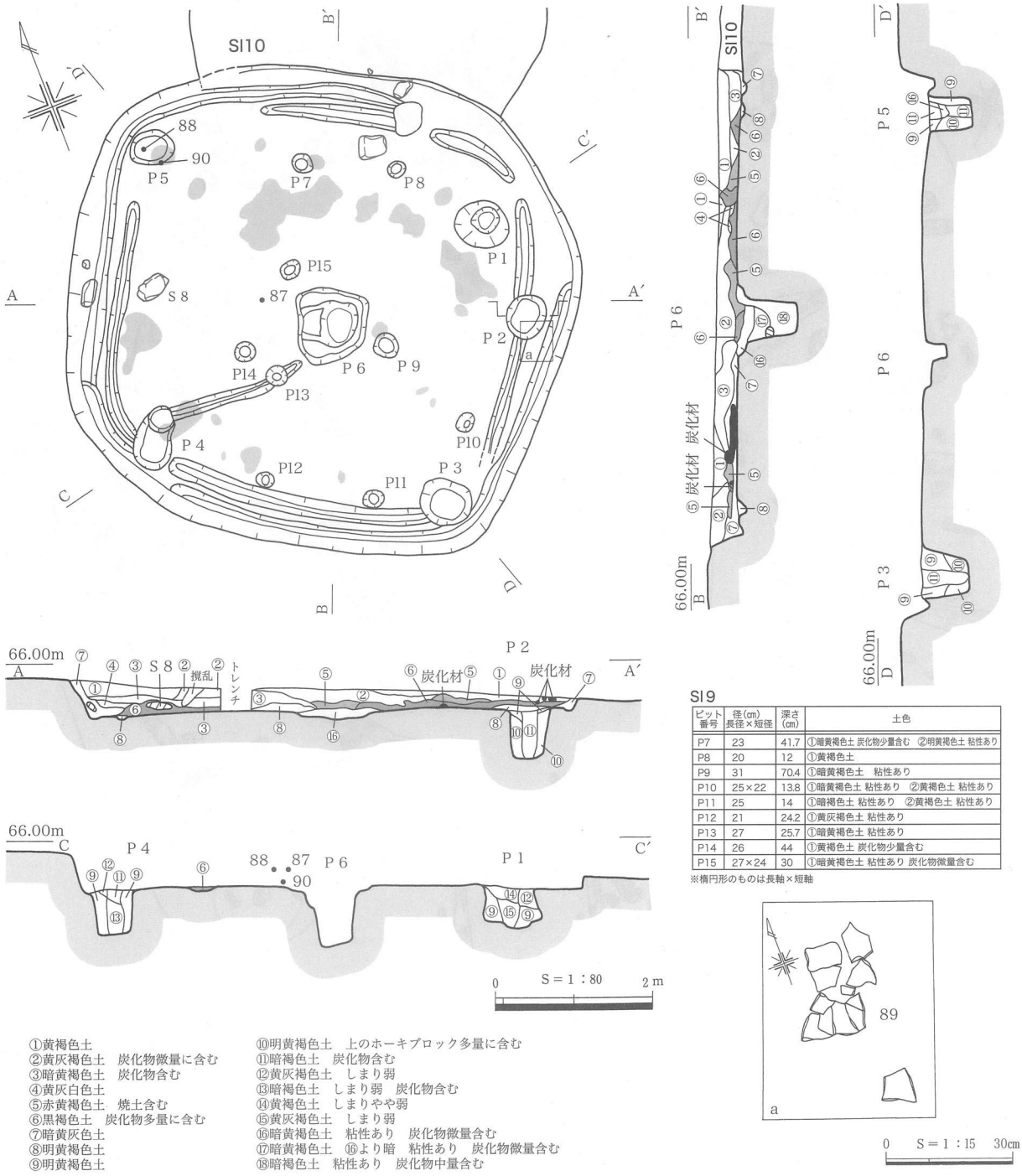
第108図　SI15



第109図　SI15出土遺物（2）

第42表　SI15出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
82	SI15 埋土中	第109図 PL.62	弥生　甕 口縁～肩部	器高△10.1cm 口径※16.4cm	全体の3/4	外面：口縁部ナデ→波状文、頸部ナデ、肩部沈線→波状文、肩部下ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明黄褐色	砂粒を含む	
83	SI15 埋土中	第109図 PL.63	甕 口縁部	器高△3.9cm	口縁部 1/8以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	内外面赤彩
84	SI15 埋土中	第109図 PL.63	土師器　甕 口縁部	器高△3.7cm	口縁部 1/8	内外面：ナデ	淡褐色	0.1～0.2mmの砂粒を含む	
85	SI15 埋土中	第109図 PL.63	高坏　受部	器高△4.6cm 口径※13.2cm	1/4以下	内外面：ナデ	橙色	1～3mmの砂粒多く含む	
86	SI15 埋土中	第109図 PL.63	低脚坏 脚部	器高△3.9cm	全体の 1/4以下	内外面：ナデ	橙色	1～2mmの砂粒を含む	



SI9

ピット番号	径(cm) 長径×短径	深さ(cm)	土色
P7	23	41.7	①暗黄褐色土 炭化物少量含む　②明黄褐色土 粘性あり
P8	20	12	①黄褐色土
P9	31	70.4	①暗黄褐色土　粘性あり
P10	25×22	13.8	①暗黄褐色土 粘性あり　②黄褐色土 粘性あり
P11	25	14	①暗褐色土 粘性あり　②黄褐色土 粘性あり
P12	21	24.2	①黄灰褐色土 粘性あり
P13	27	25.7	①暗黄褐色土 粘性あり
P14	26	44	①黄褐色土 炭化物少量含む
P15	27×24	30	①暗黄褐色土 粘性あり 炭化物微量含む

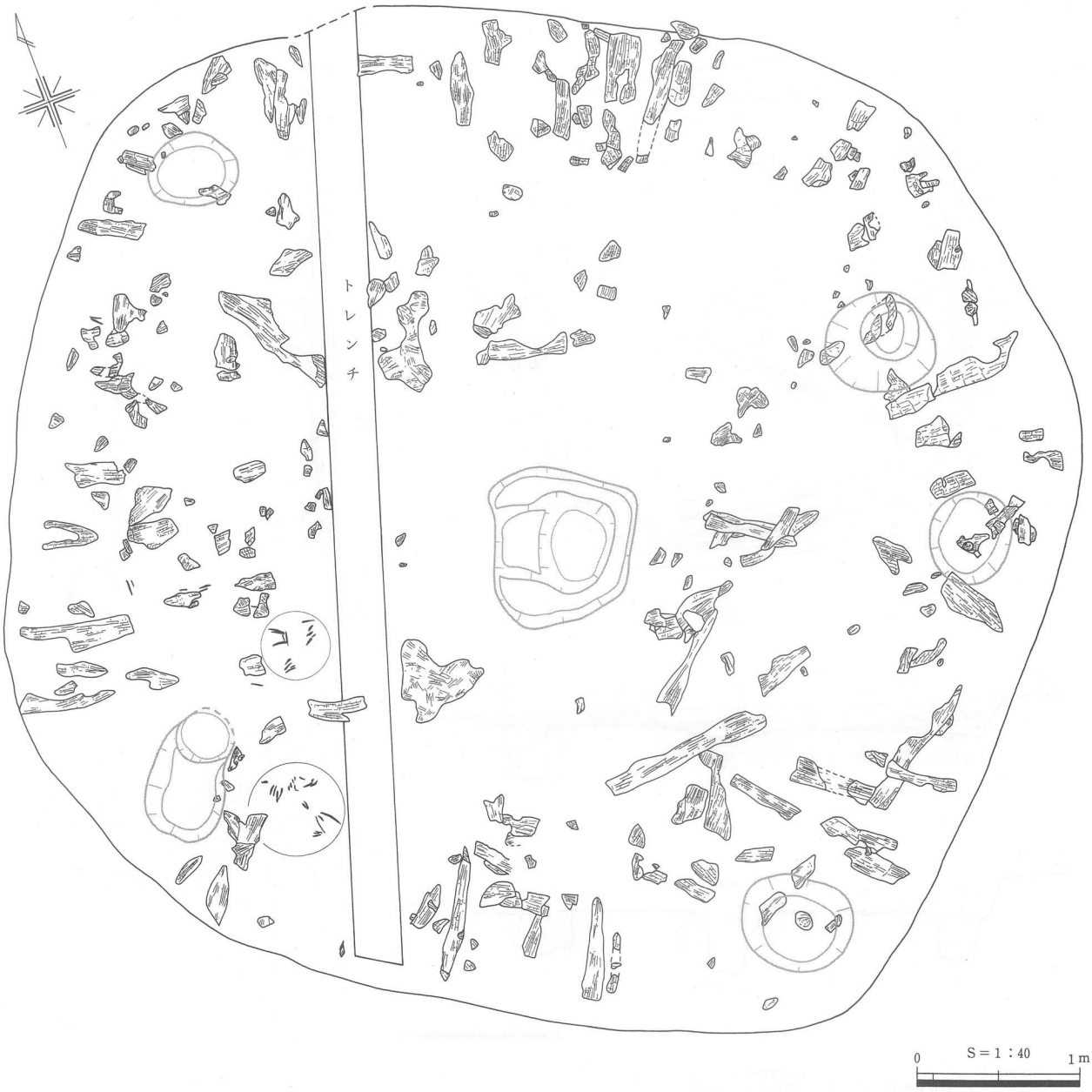
※楕円形のものは長軸×短軸

第110図　SI9

SI9（第110～114図、第43・44表、巻頭図版３、PL.36・37・64・65・79）

Ａ区H10グリッド、標高65.8mの平坦面に位置する。SI10の南側を壊して造られている。平面形はほぼ隅丸方形で、長辺6.9m、短辺6.1m、床面積26.6㎡を測る。検出面より焼土と炭化材混じりの埋土が確認でき、いわゆる焼失住居であることが分かった。検出面から床面までの深さは、最大西側で52cm、最小北東側で18cmを測る。貼床は施されておらず、基本層序第Ⅶ層である「上のホーキ層」を床面としている。

周壁溝（側溝）は２重に巡っている。外側の溝は幅16cm、床面からの深さは３cm程で断面は「U」字状である。また内側の溝は、幅15cm、深さ３cmで主柱穴を結ぶように走っている。この内側の溝は埋土中に焼土や炭化物を含まないことから、廃棄時には埋没していたと考えられる。この溝は立て替え時の周壁溝である可能性が考えら

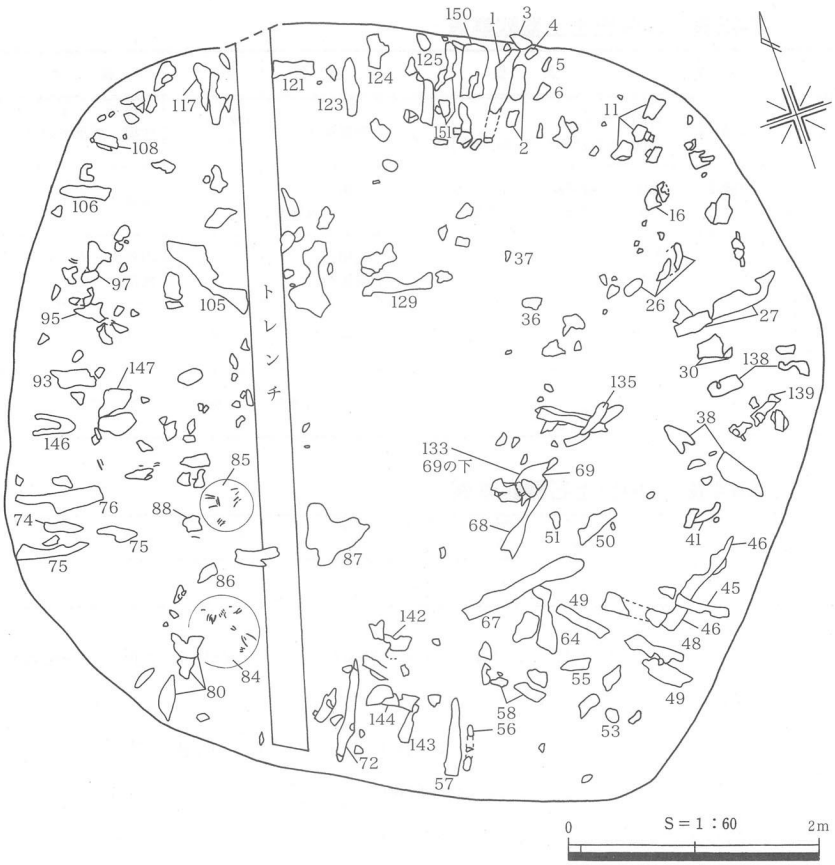


第111図　SI9炭化材出土状況図

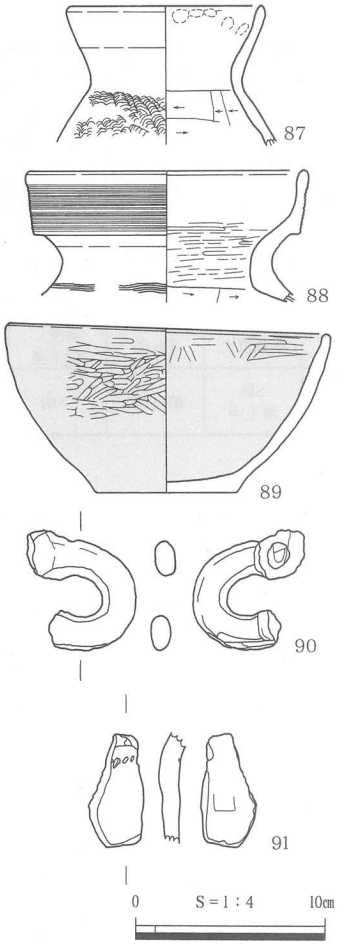
れるが、溝の内側から主柱穴となるようなピットは検出されなかった。そのほか、長さ1.7m、幅16cm、深さ３cmの床溝が、Ｐ４から中央ピットであるＰ６に向けて東に伸びている。

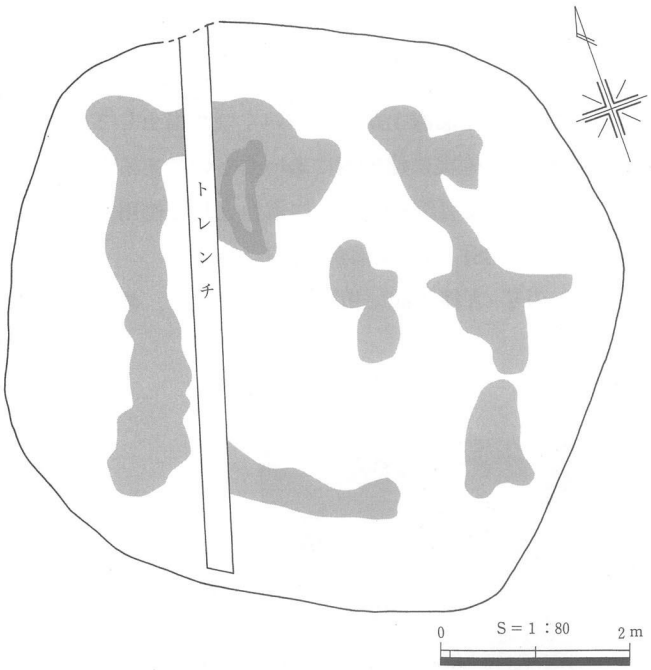
ピットは15個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１及びＰ３からＰ５で、４本柱となる。各柱穴の大きさはＰ１（63×60－50）、Ｐ３（69×56－57）、Ｐ４（80×33－57）、Ｐ５（56×44－60）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ３間より順に3.7、3.8、3.5、4.35mを測る。これら主柱穴と考えられるピットの断面を観察すると、炭化物混じりの柱穴痕がはっきりと確認でき、その周囲を硬く締まった⑨・⑩層で固めている状況が確認できた。同じような状況がＰ２(57×49－65）にもみられ、本建物廃棄時には少なくともＰ１～Ｐ５までの５本の柱が立っていたことが分かった。Ｐ２は何らかの補助的な柱が立てられていたか、もしくはＰ２も主柱穴に含めた不整形の５本柱建物であった可能性が考えられる。Ｐ６上段（105×80－10）・下段（58×45－66）cmは中央ピットで、２段に掘り込まれ、平面形は上下段とも不整円形を呈する。

埋土の状況としては、床面直上に炭化材と共に炭化物を多く含んだ層（⑥層）があり、その上に焼土（⑤層）が約５～10cmの厚さで堆積していた。この焼土は建物中央部と縁辺部にはなく、ドーナツ状を呈している（第113図）。

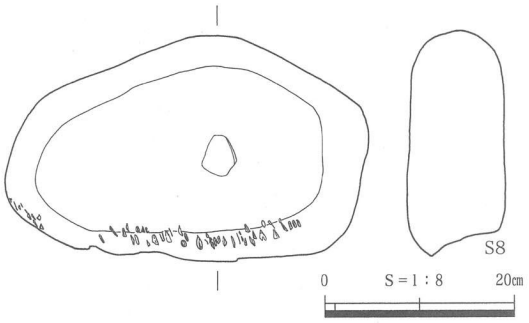


第112図　SI9炭化材No.





第113図　SI9焼土検出状況図



第114図　SI9出土遺物

また北側床面では、これに対応するように焼土面が円形に検出されている。このドーナツ状の焼土層は焼失時に屋根上から崩落したものである可能性が高く、大山町妻木晩田遺跡や羽合町南谷大山遺跡にみるように土屋根構造を持つ建物であると推定される。よって焼失時焼土となった土屋根が、崩落後も床面を赤化させるほどかなりの期間高温を保っていたことが分かる。

炭化材（第111図）は建物縁辺部の残りが比較的良好で、垂木と考えられる炭化材が建物中心に向かって放射状に倒れ込んでいる状況が確認された。なかには下部だけ舟底状に残存していた炭化材も認められ（27・106）、被熱し炭化した下部のみ残ったものであると考えられる。木材が垂木と考えられる炭化材の中には、丸木状のもの（２・５・27・45・49・55・56～58・72・74～80・93・97・106・108・117・143・146・151）と板状のもの（1・3・4・11・38・123・124・138・147・150）が認められたが、部位による使い分けなどは確認できなかった。

第43表　SI９出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
87	SI9 埋土中	第114図 PL.65	弥生　甕 口縁～肩部	器高△7.2cm 口径※10.2cm	口縁1/4	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明黄褐色	砂粒を 含む	口縁部に一条の 沈線、肩部波状文 あり
88	SI9 埋土中	第114図 PL.65	弥生　甕 口縁～肩部	器高△6.6cm 口径※14.6cm	口縁部 1/5以下	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ケズリ	浅黄色 にぶい黄橙色	密	肩部に波状文
89	SI9 床面直上	第114図 PL.64	弥生　鉢	器高：9.1cm 口径：17.3cm 底径：7.4cm	ほぼ完形	外面：ミガキ 内面：ミガキ	明褐色 淡褐色	0.1～0.2mm 大の砂粒 を含む	内外面とも赤彩、 黒斑あり
90	SI9 床面直上	第114図 PL.65	弥生 水差し 把手部	最大長：6.4cm 最大幅：5.9cm 最大厚：1.2cm	把手のみ	手捏ね→ナデ	浅黄橙色	密	内部に粘土芯あり
91	SI9 埋土中	第114図	不明	器高△6cm	1/8以下	外面：ナデ 内面：摩滅、一部ケズリ	にぶい黄橙色	密	上部に刺突文

第44表　SI9出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔kg〕	石　材	備　　考
S8	SI9 床面上	第114図 PL.79	石	上端角に刻み痕あり	38.4	23.9	10.4	15.3	安山岩	台石？

また、これら垂木と考えられる炭化材に直交する角度で出土した67・68・129などは、垂木とは異なる構造材であったと考えられる。67・68は角材で、129は丸木材であった。

その他、柱材と考えられるものとして53の丸木材が挙げられる。53はＰ３直上で直立した状態で出土し、床面近くで途切れていた。被熱した上部のみ炭化し、埋められていた部分は腐蝕して柱痕のみ残ったものであろう。床面上からは、屋根材であったと考えられる炭化した草本類が散らばった状況で検出された（84・85）。また、焼土内側に、87のような繊維方向が不揃いの、バラバラになった炭化材が集中して出土している箇所が数カ所確認された。そのほかに、炭化した種子が床面上から出土しており、分析の結果ムクロジの種子と同定されている。(第５章第７節参照)

床面直上の出土遺物としては、東壁とＰ２の間から押しつぶされたような形で赤彩された鉢（89）が、Ｐ５の南側からは水差し形土器の把手（90）が出土している。また、同じく床面直上から石がいくつか出土しており、これらの上に炭化材が倒れ込むように出土したので、建物廃棄時には確実に建物内にあったものであると判断される。そのうち、西側壁付近から出土したＳ８は縁辺部に刻んだような痕跡があり、作業台として使用されたものと考えられるものである。他に、埋土中炭化材直上からは甕（87･88）の口縁部が出土している。

この竪穴建物の時期としては、出土土器がおおよそ清水編年のＶ-３様式期に相当することから、弥生時代後期後葉の時期が充てられる。

（大野）

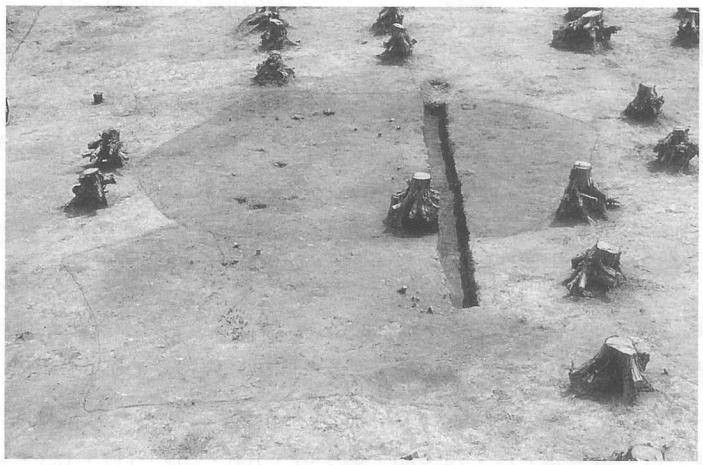
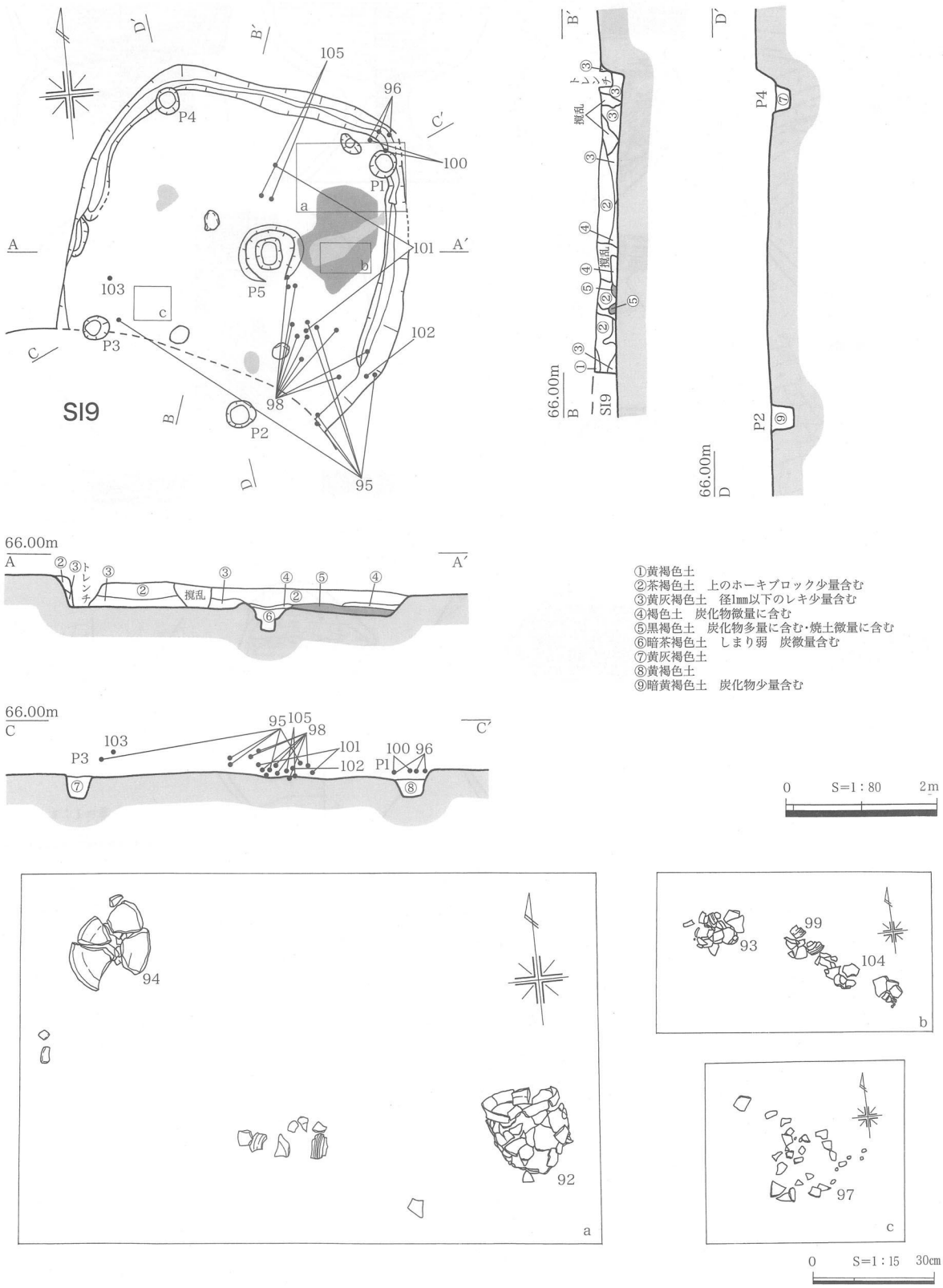


写真11　SI9・10遺構検出状況（北から）

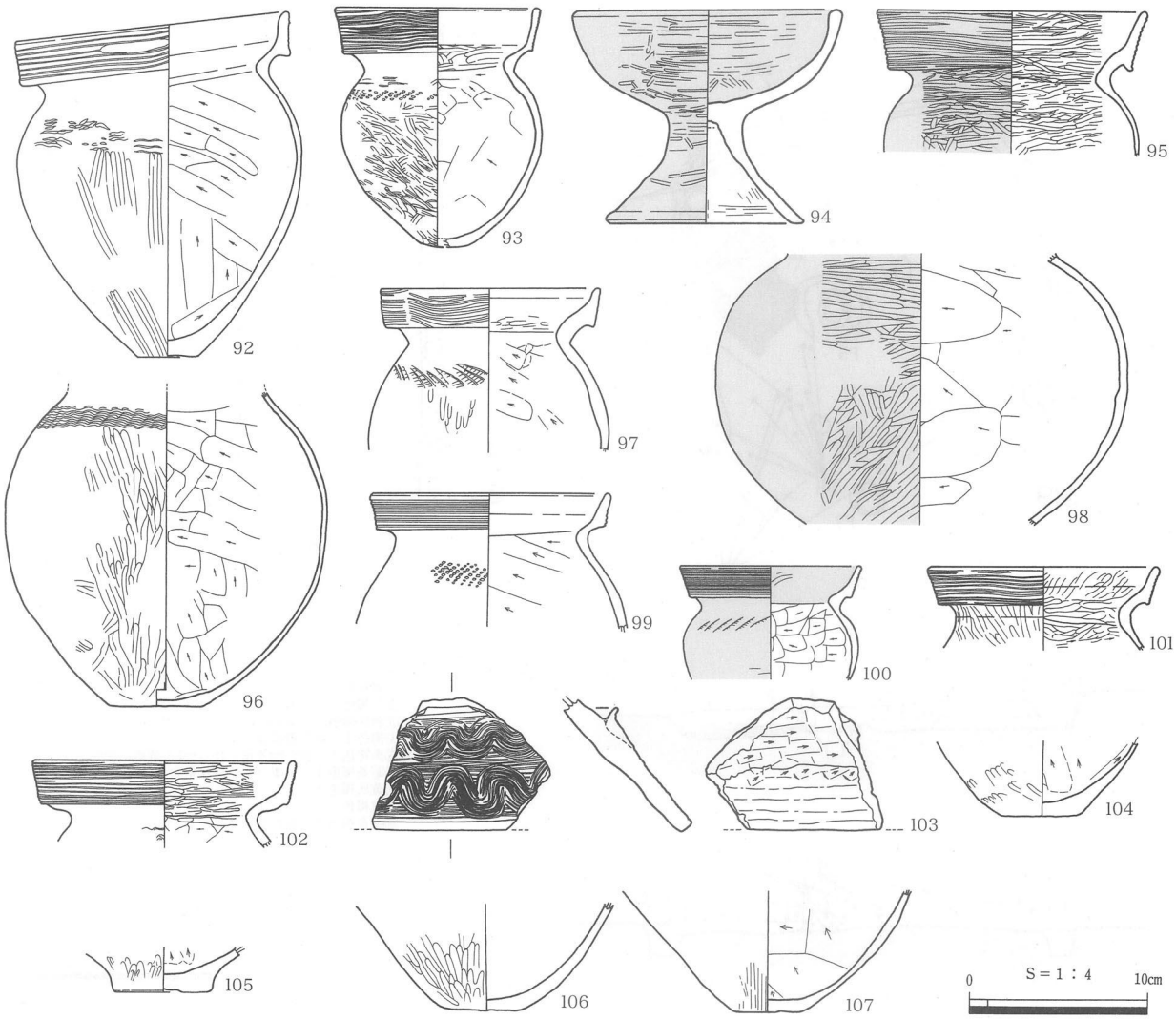


第115図　SI10

SI10（第115・116図、第45表、PL.38・64・65）

Ａ区Ｇ９グリッド、標高65.7～65.4mの緩い傾斜面に位置する。南側をSI９によって壊されている。平面形は隅丸方形で、一辺4.6m、床面積13.29㎡以上を測る。検出面から床面までの深さは、最大西側で36㎝、最小東側で20㎝を測る。

周壁溝（側溝）は北半部のみ確認でき、南側のSI９に壊されている部分とその周辺は確認できなかったが、本



第116図　SI10出土遺物

来は全周していたものと考えられる。この溝は幅19cm、床面からの深さは４cm程で、断面は「U」字状である。

床は基本層序第Ⅶ層である「上のホーキ層」を床面としており、床面の標高は約65.25mで、SI９とほぼ同じである。ピットは５個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からP４で、４本柱の建物となる。各柱穴の大きさはＰ１(38×36－37)、Ｐ２(40×36－56)、Ｐ３(34×31－41)、Ｐ４(33×31－30)cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に3.85、2.28、3.2、3.01mを測る。Ｐ６上段（90×77－６）・下段（40×35－46）cmは中央ピットと考えられる。平面形は楕円形で、二段に掘り込まれ、周囲に地山を削りだして作られた高さ12cm程の土堤を持つ。また、中央ピットの東側の床面上には焼土と炭を多く含む層（⑤層）が認められ、その下の床面も被熱し、赤化していた。

図化できた出土遺物はほぼ床面直上より出土している。特に建物東半部、⑤層の炭化物を多く含む層を中心に集中して出土している傾向が認められ、93・99の甕や104の底部破片は⑤層下から出土している。また92・94の甕と高坏も⑤層北辺につぶれた状態でほぼ完形のまま出土した。

このような床面直上からまとまった状態で遺物が出土する状況は、本遺跡ではSI10も含めてSI４・SI11と小型の竪穴建物跡について特にみられ、他の大型・中型の建物跡からは、このように顕著な形での床面直上からの出土をみない。この点は竪穴建物の規模による性格の違いを反映している可能性があり、注意を要する点であるといえる。

この遺構の年代として、床面直上より出土している土器がほぼ清水編年Ｖ-３様式に相当することから、弥生時代後期後葉の時期が想定される。　　(大野)

第45表　SI10出土土器観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
92	SI10 床面直上	第116図 PL.64	弥生　甕	器高：19.3cm 口径：15.4cm 底径：3.3cm	ほぼ完形	外面：口縁部沈線→一部ナデ、頸部ナデ、肩部以下ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄色	1～5mmの石英を多く含む	外面煤付着 肩部波状文
93	SI10 床面直上	第116図 PL.64	弥生　甕	器高：13.4cm 口径：12.6cm 底径※2.6cm	4/5以上	外面：口縁沈線、頸部ナデ、肩部以下ミガキ 内面：口縁～頸部ミガキ→ナデ、頸部以下ケズリ	淡褐色	密	外面煤付着 肩部に列点状の刻み目文あり
94	SI10 床面直上	第116図 PL.64	弥生　高坏	口径：15.1cm 底径※11cm	脚部　1/2	内外面：ミガキ、脚部内面ナデ	にぶい黄橙色	密	全面赤彩（脚内面除く）
95	SI10 埋土・床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 口縁～肩部	器高△7.9cm 口径：15.2cm	口縁～肩部2/3	外面：口縁沈線、頸部～肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ケズリ→ミガキ	淡褐色	密 1mm前後の砂粒含む	外面全面赤彩
96	SI10 床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 胴部	器高△17.5cm 胴径※18cm 底径：5.2cm	胴部1/3	外面：ミガキ 内面：ケズリ	淡褐色	1～5mmの砂粒を多く含む	内外面煤付着
97	SI10 床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 口縁～胴部	器高△9.1cm 口径※12.4cm	口縁～胴部　1/4	外面：口縁部沈線　頸部ナデ　胴部ミガキ 内面：口縁部ミガキ　頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色 灰褐色	密	肩部に押引き沈線文 外面煤付着
98	SI10 埋土・床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 胴部	器高△15.1cm 胴径※23cm	胴部1/4	外面：ミガキ 内面：ケズリ	赤褐色 淡褐色	密	外面煤・外面赤彩あり
99	SI10 床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 口縁～胴部	器高△7.4cm 口径：13.2cm	全体の1/3	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密	外面煤付着 肩部に刺突文
100	SI10 床面直上	第119図	弥生　甕 口縁部～胴部	器高△6.3cm 口径※10.2cm	全体の2/5	外面：口縁沈線、頸部ナデ、頸部以下ミガキ 内面：口縁～頸部ミガキ→ナデ、頸部以下ケズリ	赤褐色 淡褐色	密	外面煤付着 外面と口縁部に赤彩あり
101	SI10 埋土・床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 口縁部	器高△4.5cm 口径：13cm	口縁部1/2	外面：口縁沈線、頸部以下ケズリ 内面：ミガキ	淡褐色	密	外面煤付着
102	SI10 埋土中	第116図 PL.65	弥生　甕 口縁部	器高△4.5cm 口径※14.8cm	口縁部1/3	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ケズリ	淡灰褐色	密	頸部下摩滅気味の波状文あり
103	SI10 埋土中	第116図 PL.65	弥生　器台 脚部	器高△7.3cm	1/8以下	外面：脚部ナデ、端部平行沈線→波状文 内面：脚部ナデ、端部ナデ	黄橙色	密	
104	SI10 床面直上	第116図 PL.65	弥生　甕 底部	器高△4.2cm 底径：4.2cm	底部のみ	外面：ミガキ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	2mm以下の長石・石英中量含む	外面煤付着 底部表面剥離
105	SI10 床面直上	第116図 PL.63	弥生　底部	器高△2.6cm 底径：5.7cm	底部のみ	外面：ミガキ、底部ナデ 内面：ケズリ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	密	
106	SI10 埋土・床面直上	第116図 PL.64	弥生　底部	器高△5.7cm 底径：4.4cm	胴部～底部１/3	外面：ミガキ 内面：ナデ	灰黄褐色 暗灰黄色	密	底面にもミガキ
107	SI10 埋土中	第116図	弥生　底部	器高△6.8cm 底径：3.4cm	底部～胴部1/5	外面：ミガキ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	密	底面にもミガキ

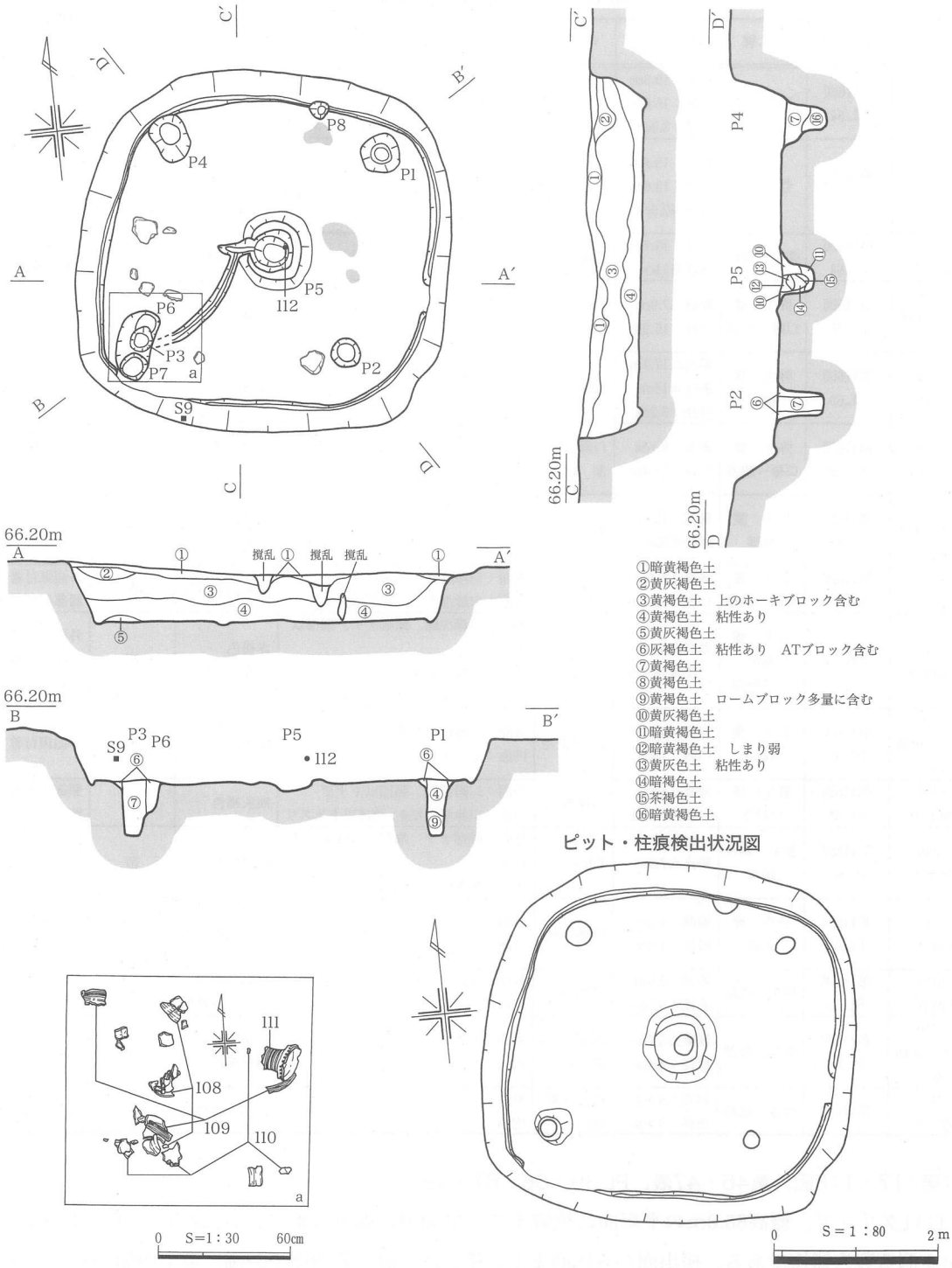
SI11（第117・118図、第46・47表、PL.39・66・67・79）

Ａ区Ｇ11グリッド、標高66.0mの平坦面に位置する。平面形は隅丸方形で、長辺4.5m、短辺4.4m、床面積12.68㎡を測る竪穴建物である。検出面から床面までの深さは、最大北西側で62cm、最小南側で50cmを測る。床面は基本層序第Ⅶ層のAT層とその下のⅧ層である白色土層との層利面まで掘り込み、西半分はＡＴ層が、東半分は白色土層が露出している。貼り床は認められず、硬く締まった両層をそのまま床面として利用したものと考えられる。

周壁溝（側溝）は一部途切れるが、本来は全周していたものと考えられる。この溝は幅８cm、床面からの深さは８cm程で断面は「U」字状である。

床溝は２条あり、１条は中央ピットであるＰ５から西へ約0.45m伸び、２条目は１条目の中位からＰ３に向かって北東に1.4m程伸びている。

ピットは８個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４で、４本柱の建物になる。ピット・柱痕検出状況図にみるように、まず柱痕のプランが明確に認められた。これら柱痕の径は20cm前後であり、Ｐ３では柱の



第117図　SI11

周囲を固めたような盛り上がりがみられた。その後ATと白色粘土が混ざりあった柱穴堀方埋土（⑥層）を除去すると、ピットの規模はＰ１(50×48－65)、Ｐ２(38×35－60)、Ｐ３（35×27－68)、Ｐ４（60×41－54）cmとなった。

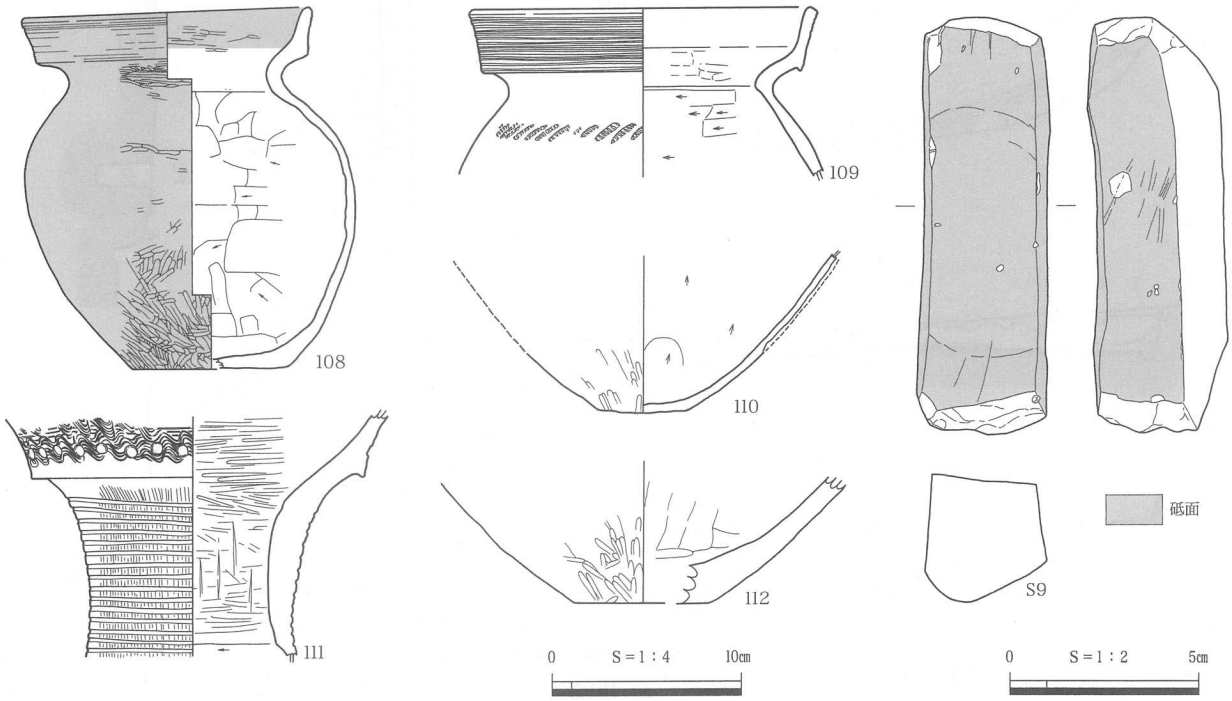
このうち、Ｐ３の堀方埋土除去後、新たにＰ６・Ｐ７が検出された。このＰ６・Ｐ７埋土は、Ｐ３の柱穴堀方埋土である⑥層であり、Ｐ１に柱が建っていた時点で完全に埋められていたものであることが分かる。他の主柱穴にはこのようなピットは検出されなかったことから、このＰ６・Ｐ７は建て替え時の柱穴などではなく、Ｐ３に建てられていた柱を据える際、何回か据えなおした跡であると考えられる。おそらくこの柱だけ安定が悪く、そのため柱の周囲を余計に盛り固めたのであろう。

主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.45、2.52、2.55、2.6mを測る。

Ｐ５は中央ピットである。Ｐ５検出時に、内側にピット内ピットともいうべき径20cm程の小型のピットのプランを検出した。断面をみると、深さは約20cmで中央ピットの底面までは達していなかった。埋土は４層に分層できた。下層は外側の埋土よりも粘性の強い土（⑬・⑭・⑮層）が入り込んでいた。この小ピットの性格は不明であるが、中央ピットの性格を考える上で興味深いものである。中央ピットの平面形は楕円形で、規模は（63×57－43）cm、２段に掘り込まれ、周囲に地山削りだしの土堤を持つ。

出土遺物としては、Ｐ３周辺の床面直上より甕（108・109）や器台（111）が、南壁近くの埋土中から砥石（Ｓ９）が出土している。

この遺構の想定される年代としては、床面直上より出土した土器が清水編年Ⅴ-３期にあたることから、弥生時代後期後葉の時期が想定される。（大野）



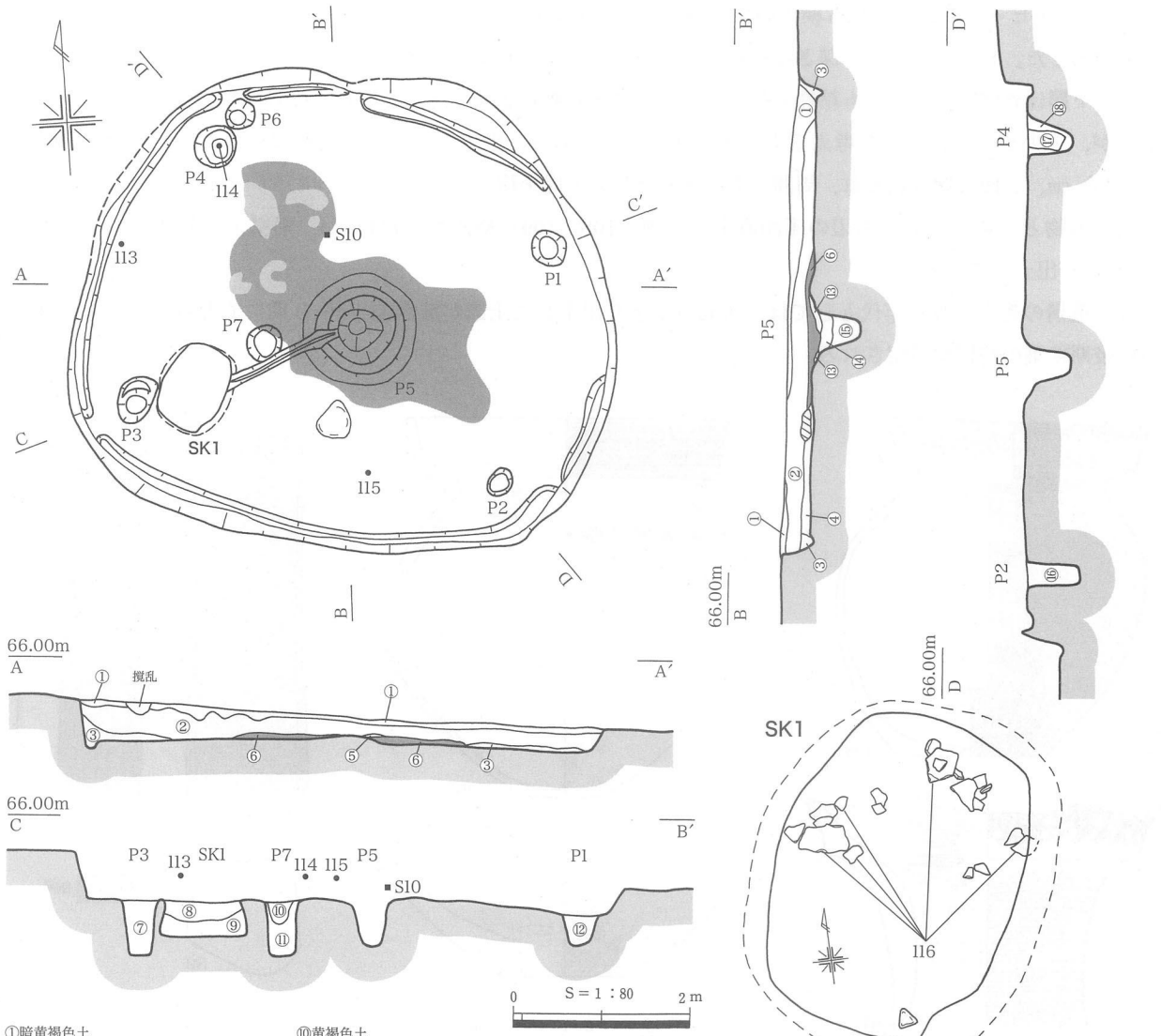
第118図　SI11出土遺物

第46表　SI11出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
108	SI11 床面直上	第118図 PL.66	弥生　甕	器高：14.4cm 口径：15.5cm 底径：8.4cm	口縁ほぼ 完形	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部以下ミガキ 内面：口縁ミガキ、頸部以下ケズリ	赤褐色 淡褐色	0.1～0.2mm 大の砂粒 含む、 0.4mm大の 礫含む	外面及び口縁部 内面煤・赤彩あり
109	SI11 床面直上	第118図 PL.66	弥生　甕 口縁～肩部	器高△8.7cm 口径：18.6cm	口縁部 ほぼ完存	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	1.5mm内の 砂粒を 含む	外面煤付着 肩部貝殻腹縁に よる刺突文
110	SI11 埋土中	第118図	弥生　底部	器高△8.4cm 底径※4.9cm	底部完存	外面：ミガキ 内面：ケズリ→粗いナデ	明黄褐色	1～4mmの 砂粒含む	外面煤付着
111	SI11 床面直上	第118図 PL.66	器台　受部	器高△12.7cm	口縁～ 筒部 ほぼ完存	外面：口縁部沈線→波状文→刺突文、頸部ハケ→沈線 内面：ミガキ、頸部しぼり目、頸部下ケズリ	明橙色	密	
112	SI11 埋土中	第118図 PL.67	弥生　底部	器高△6.5cm 底径※7.3cm	底部　1/3	外面：ミガキ 内面：ケズリ	橙色 淡赤橙色	2mm大の 砂粒多く 含む	

第47表　SI11出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S9	SI11 埋土	第118図 PL.79	砥石	砥面を4面持つ	11	3.3	3.4	194.3	流紋岩	砥面の一部に擦痕あり



①暗黄褐色土
②黄灰褐色土　径１cmのレキ含む
③黄褐色土
④暗黄褐色土　粘性あり
⑤赤褐色土（焼土）
⑥暗茶褐色土　炭化物を多量に含む
⑦黄灰褐色土
⑧黄褐色土　径5mmの炭化材を微量に含む
⑨暗黄褐色土　炭化材中量含む
⑩黄褐色土
⑪黄灰褐色土　炭化物微量に含む
⑫黄褐色土
⑬赤褐色土（焼土まじり）
⑭黄灰褐色土　炭化物少量含む
⑮暗黄褐色土
⑯黄灰褐色土
⑰暗黄褐色土
⑱黄褐色土　上のホーキブロック多量に含む

SI12

ピット番号	径(cm)長径×短径	深さ(cm)	土色
P6	34	24	①黄褐色土　粘性あり

第119図　SI12

SI12（第119～121図、第48・49表、PL.40・66・67・79）

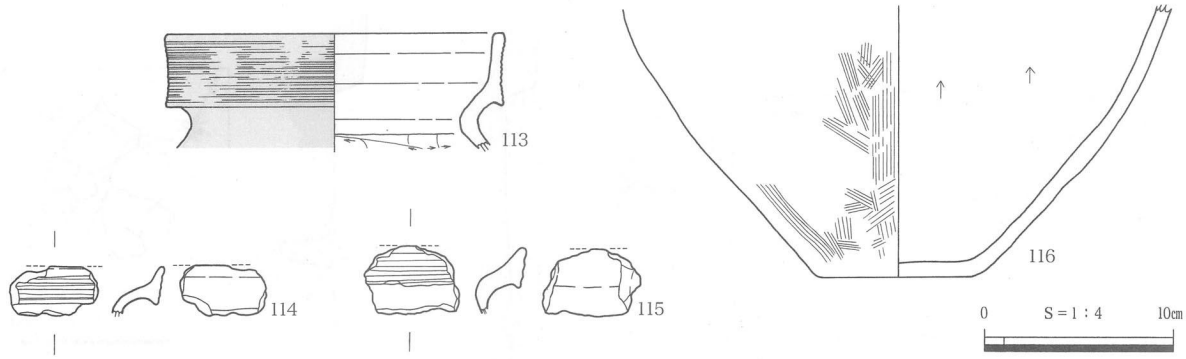
Ａ区Ｆ９グリッド、標高65.6～65.2mの緩い傾斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で、長辺6.1m、短辺5.2m、床面積23.20㎡を測る。検出面から床面までの深さは、最大南西側で56㎝、最小北東側で29㎝を測る。

周壁溝（側溝）は所々で途切れているが、本来は全周していたものと考えられる。この溝は幅16㎝、床面からの深さは７㎝程で、断面は「U」字状である。

床溝は長さ1.35mで、中央ピットであるＰ５とSK１を連結するように北東方向に伸びている。

ピットは７個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からP４で、４本柱の建物となる。各柱穴の大きさはＰ１（45×39－36）、Ｐ２（33×25－57）、Ｐ３（56×37－66）、Ｐ４（48×45－51）㎝を測る。柱穴間距離はP１－P２間より順に2.74、4.23、3.06、3.9mを測る。Ｐ５（82×72－56）㎝は中央ピットと考えられ、平面形は円形で二段に掘り込まれており、周囲に高さ５㎝程の地山削り出しの土堤を持つ。

SK１は建物内土坑（104×76－47）㎝で、断面袋状を呈する。この土坑の埋土中より弥生土器の底部破片（116）が出土している。建物内からの出土遺物としては床面直上からの出土は認められなかった。埋土中より

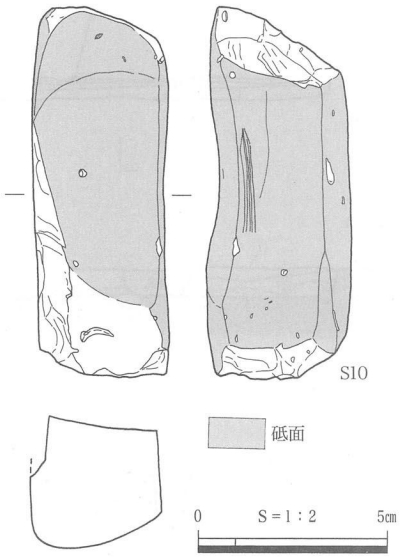


第120図　SI12出土遺物（1）

113～115の甕の口縁部と砥石（Ｓ10）が出土している。建物内と土坑内からの出土遺物はほぼ同時期ものと認められるので、SK１はこの建物に伴うものであると考えられる。この土坑の性格については貯蔵施設ではないかと想像されるが、明確にその性格の判断できる状況は確認できなかった。中央ピットと連結するように伸びる床溝も、どのような意図をもって作られたのかは不明である。

また、建物中央床面上のおよそ1.8×2.9mの範囲で、炭化物を多量に含む層（⑥層）が確認された。この層は中央ピットであるＰ５埋土を直接覆っており、Ｐ５埋土中の炭化物を含む層（⑭層）とは異なる起源の層であることが分かる。そして、この炭化物層下の床面が集中的に被熱して赤化していることから、床面の焼土は炭化物層と関わりのあるものと思われる。このような状況は、炭化材等が明瞭に残存していないものの、この遺構がいわゆる焼失住居の範疇に入る可能性がある。

出土遺物はほぼ清水編年Ｖ-３様式に相当するので、この建物跡は、弥生時代後期後葉の時期に比定されるものである。　（大野）



第121図　SI12出土遺物（2）

SI13（第122・123図、第50表、PL.41・66・67）

Ａ区F10グリッドからG10グリッド内中央部、標高65.7mの平坦面に位置する。平面形はほぼ正方形で、長辺4.9m、短辺4.8m、床面積18.27㎡を測る。壁高は、検出面から床面までで最大40cm（南西側）、最小31cm（北東）を測る。

周壁溝（側溝）は北西で一部断絶があるが、壁下全周を巡っている。この溝は幅10～20cm、床面からの深さは10cm程で断面は「U」字状である。

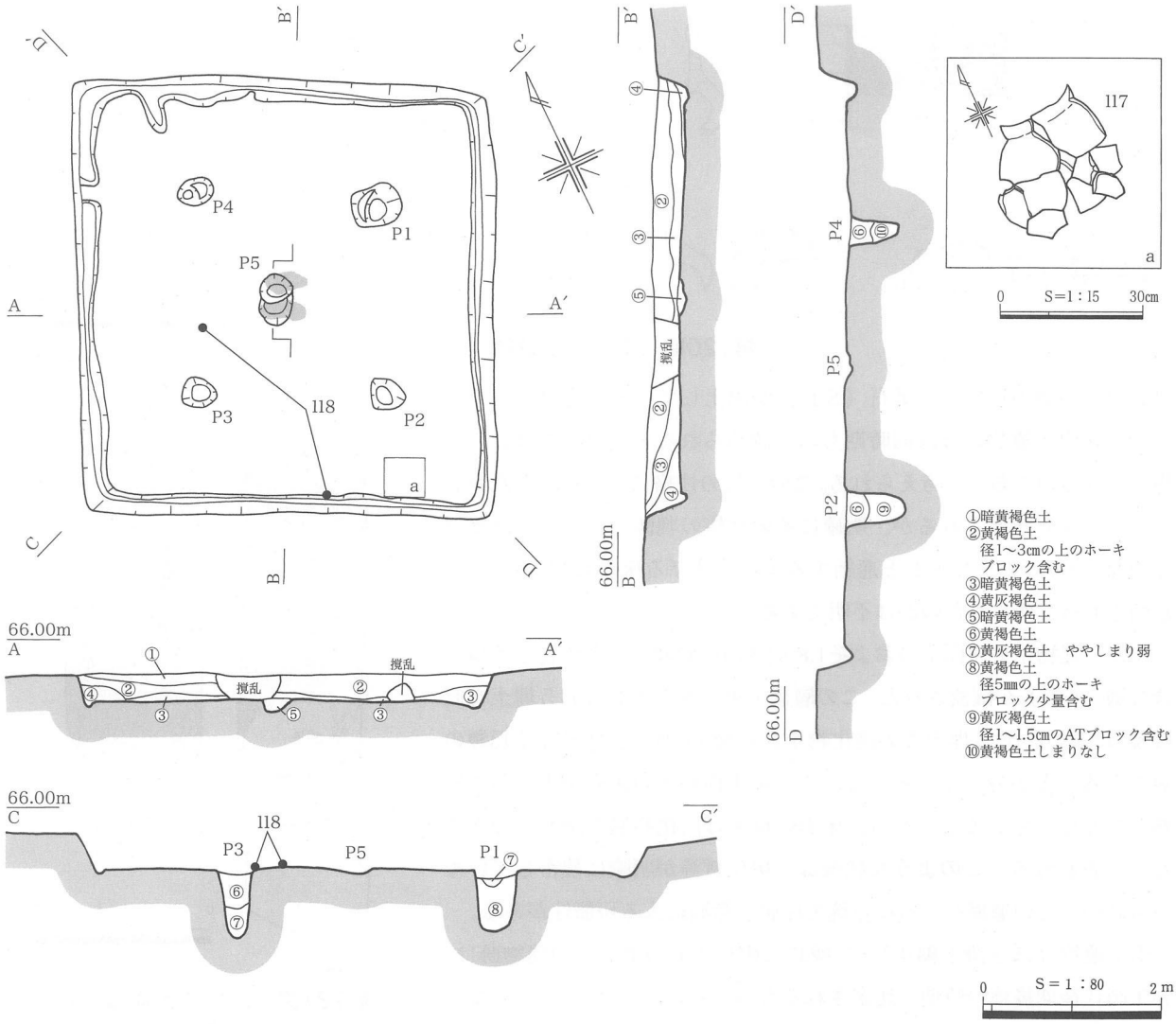
床溝は、北辺から一部突出している部分がある。ピットは５個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４の４本柱で、各柱穴の大きさはＰ１（57×45－67）、Ｐ２（41×35－62）、Ｐ３（40×31－73）、Ｐ４（42×30－53）

第48表　SI12出土土器観察表

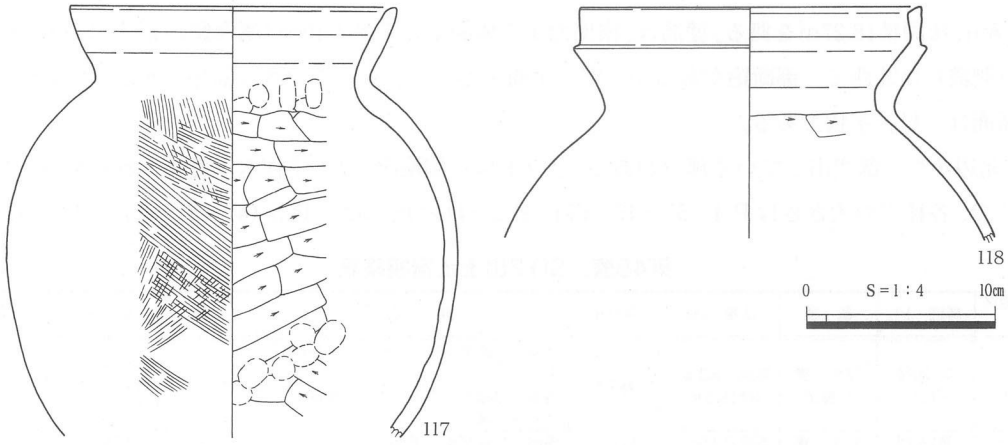
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
113	SI12 埋土中	第120図 PL.67	弥生　甕 口縁部	器高△6.2cm 口径18.2cm	口縁1/6	外面：口縁部沈線→一部ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ→ナデ、頸部ケズリ→一部ナデ	黄橙色	1～5mmの 砂粒少し 含む	外面赤彩
114	SI12 埋土中	第120図 PL.67	弥生　甕 口縁部	器高△2.6cm	1/8以下	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	灰褐色 橙色	砂粒多く 含む	外面煤付着
115	SI12 埋土中	第120 PL.67	弥生　甕 口縁部	器高△3.3cm	1/8以下	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：ナデ	橙色	砂粒多く 含む	
116	SI12 埋土中	第120図 PL.66	弥生 胴部～底部	器高△14.4cm 底径：8.1cm	胴部～底部１/5	外面：ハケ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	1～5mmの 砂粒含む	外面摩滅部分多し

第49表　SI12出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S10	SI12 埋土	第121図 PL.79	砥石	砥面を4面持つ	9.9	3.4	3.4	194.6	流紋岩	砥面の一部に擦痕あり



第122図　SI13



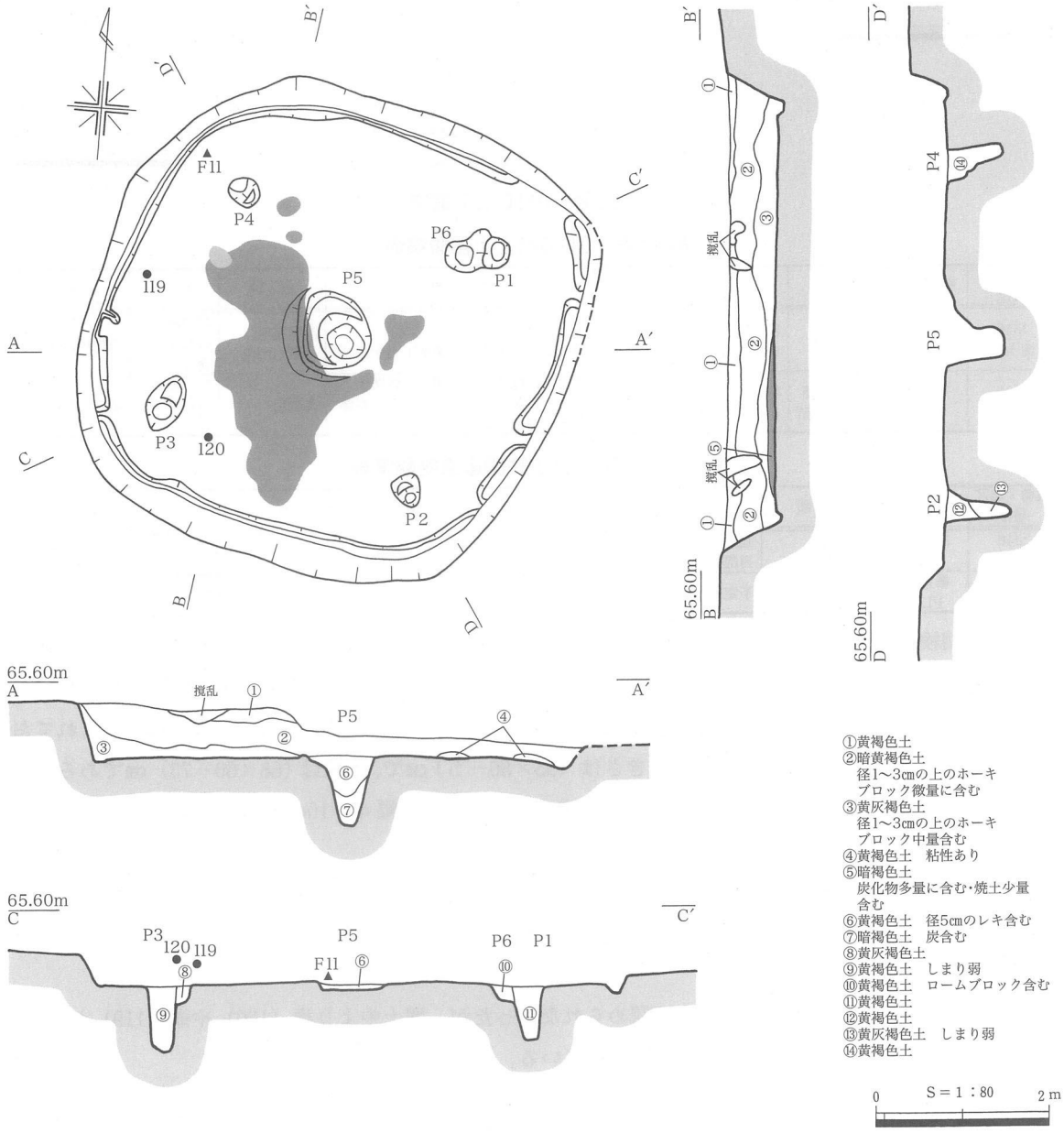
第123図　SI13出土遺物

cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.1、2.05、2.24、2.11mである。Ｐ５（58×37－8）cmは中央ピットと考えられ、平面形は楕円形で、浅い窪み状を呈し、内側壁面に被熱硬化面が見られた。住居内および中央ピット内埋土に炭や焼土は含まれていなかった。

出土遺物としては、甕が２個体出土しており、床面直上から117・118が出土している。これらの遺物から古墳時代中期後半（天神川Ⅷ～Ⅸ期）の時期が想定される。（岩井）

第50表　SI13出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
117	SI13 床面直上	第123図 PL.66	土師器　甕	器高△23.0cm 口径※17.5cm 胴径※22.6cm	全体　1/3	外面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ→一部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ→指頭圧痕	橙色 にぶい黄橙色	0.1～0.2mm大の砂粒含む	外面体部煤付着
118	SI13 床面直上	第123図 PL.67	土師器　甕 口縁～肩部	器高△14.4cm 口径：18.1cm	口縁～肩部1/5	外面：ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部以下ケズリか	にぶい黄橙色	1～2mmの石英を含む	内外面摩滅

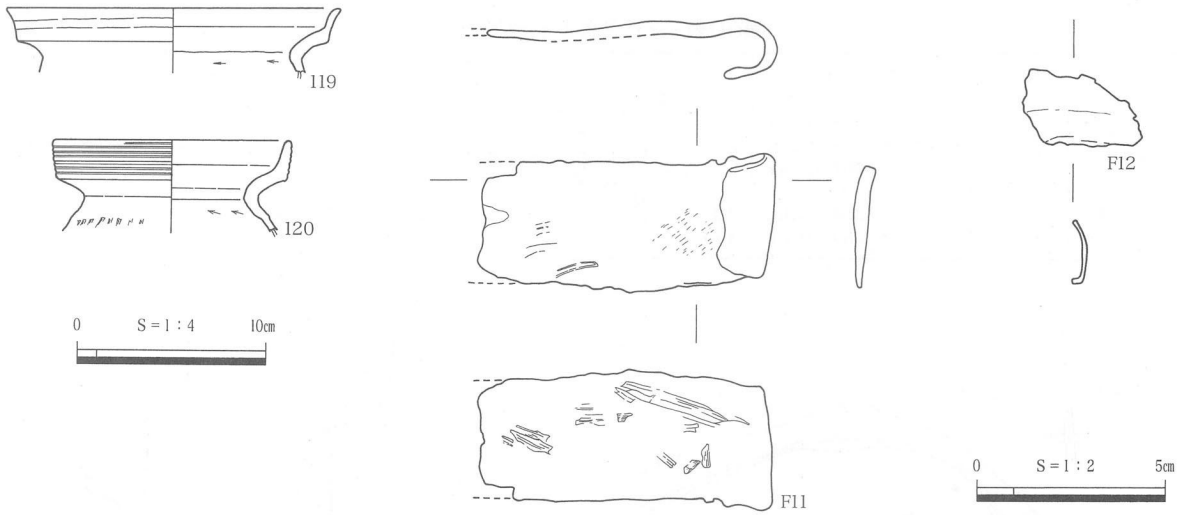


第124図　SI16

SI16（第124・125図、第51・52表、PL.41・67・79）

Ａ区Ｇ９グリッド南東側、標高65.4～64.8mのやや急な傾斜面に位置する。北西側にほぼ同面積のSI12がある。平面形は隅丸方形で、長辺5.64m、短辺5.58m、床面積20.5㎡を測る。壁高は、検出面から床面までで、最大66cm（南西側）、最小13cm（東側）を測る。

周壁溝（側溝）は北東側で途切れているがほぼ全周巡る。この溝は幅５～25cm、床面からの深さは10cm程で断面は「U」字状である。



第125図　SI16出土遺物

第51表　SI16出土土器観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
119	SI16 埋土中	第125図 PL.67	口縁部	器高△：3.4cm 口径※17.8cm	口縁部1/6	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部下半ケズリ	淡黄褐色 にぶい橙色	1～3mmの砂粒多く含む	内面摩滅著しい
120	SI16 埋土中	第125図 PL.65	弥生　甕 口縁～肩部	器高△4.9cm 口径：12.8cm	口縁部1/6	外面：口縁部沈線、頸部～肩部ナデ 内面：口縁部～頸部上半ナデ、頸部下半～肩部ケズリ	黄橙色	1～3mmの長石多く含む	肩部に刺突文

第52表　SI16出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F11	SI16 埋土中	第125図 PL.79	鎌？	端部を折り返し受部をつくる 刃部欠損	3.3	7.7	0.2～0.4	45.8	左側端部欠損
F12	SI16 埋土中	第125図 PL.79	鉄片	不定形　断面湾曲気味	2.9	2	0.1	2.8	

ピットは５個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４の４本柱で、各柱穴の大きさはＰ１（41×30－62）、Ｐ２（48×27－76）、Ｐ３（70×40－77）、Ｐ４（37×30－66）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に3.01、3.05、2.8、3.15mを測り、ほぼ３m前後に収まる。Ｐ５は中央ピットと考えられ、二段に掘りこまれており、上段・下段ともに不整円形である。上段の大きさは（95×80－５）cmで、下段は（68×60－73）cmである。また、遺存状態は悪いが、西から南にかけて土堤状の高まりを持つ。土堤は幅４～10cmで、高さは２cm程である。土堤内側に被熱痕跡などは見られなかった。

床面上には小規模な被熱硬化面（焼土面）と、中央ピットから西側にかけて炭を多量に含む暗褐色土（⑤層）が厚く堆積していた。中央ピットの底にも炭混じりの暗褐色土（⑦層）が堆積しており、⑤層の流れ込みの可能性がある。

出土遺物としては、床面直上からの出土は認められなかったが、埋土中より甕（120）や壺（119）が出土している。他に鎌と考えられる鉄製品（Ｆ11）も出土している。

これらの土器は、ほぼ清水編年Ｖ-３様式に相当することから、この遺構の年代も弥生時代後期後葉頃の時期が想定される。（岩井）

SI17（第126・127図、第53表、PL.41・67）

Ａ区E10グリッドのほぼ中央部、標高64.7～64.4mの緩い傾斜面に位置する。平面形は隅丸方形で、長辺4.0m、短辺3.7m、床面積9.77㎡を測る。壁高は、検出面から床面までで、最大44cm（南側）、最小25cm（北側）を測る。床は基本層序第Ｖ層の「上のホーキ層」を床面としており、貼床はされていなかった。

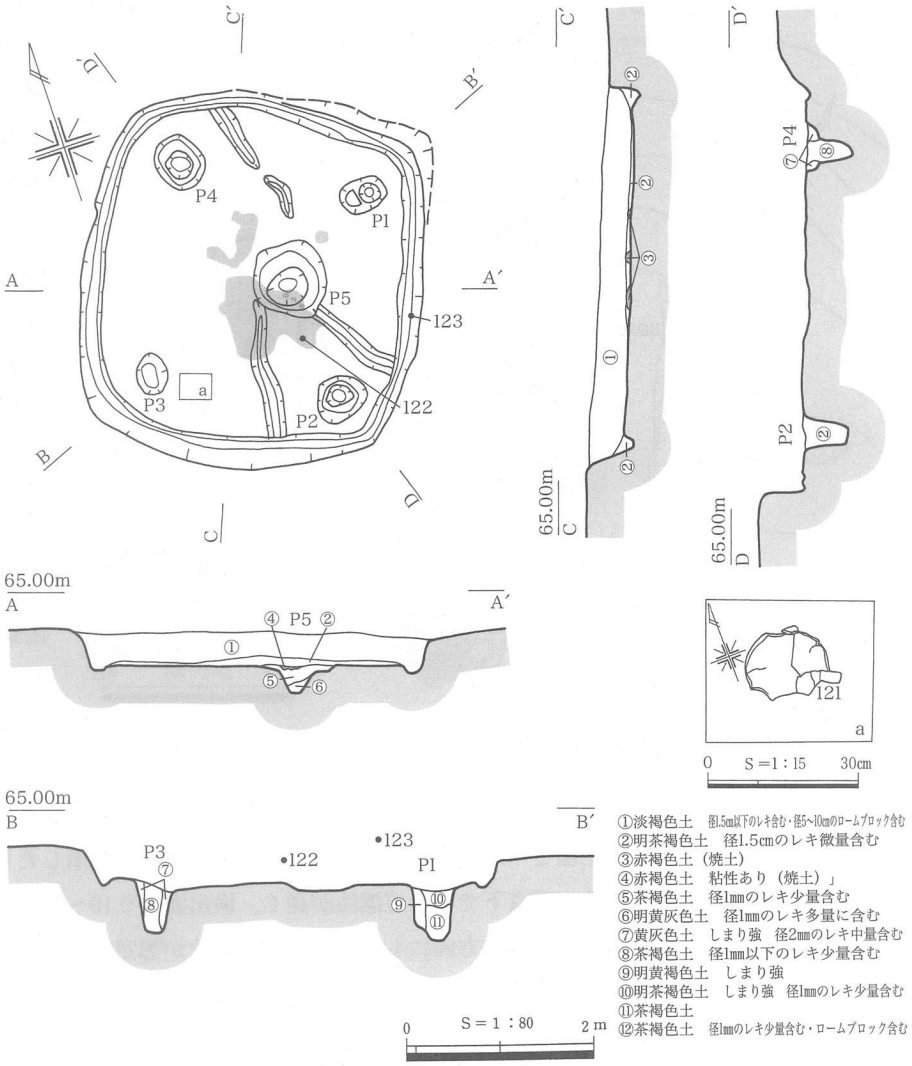
周壁溝（側溝）は全周を巡っている。この溝は幅13～20cm、床面からの深さは７cm程で断面は「U」字状である。

また内側の床溝は３条見られる。北側に位置する溝は、南から北に向かって伸び、北辺周壁溝で収束する。

南側の床溝は、それぞれ住居中央部分から伸び、東辺および南辺へと収束する。用途は不明である。

ピットは５個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ４の４本柱で、各柱穴の大きさはＰ１（50×34－57）、Ｐ２（55×46－53）、Ｐ３（44×31－59）、Ｐ４（58×50－52）cmを測る。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.2、2.05、2.3、2.05mを測る。Ｐ５は中央ピットと考えられ、二段に掘りこまれており、上段・下段ともに不整円形である。上段の大きさは（88×77－７）cmで、下段は（43×38－23）cmである。

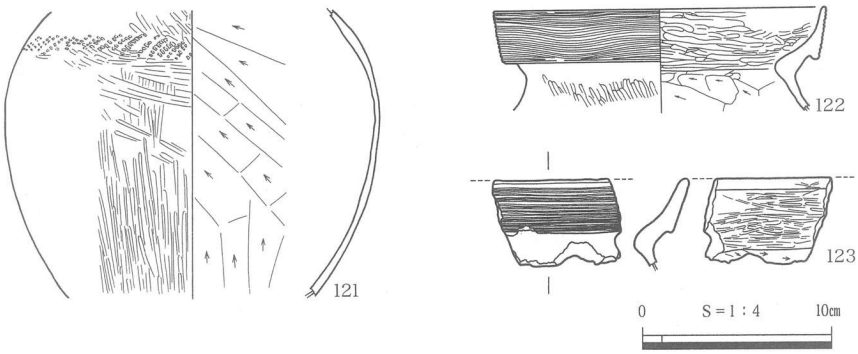
そのほか、床面上中央付近に赤化した被熱硬化面（焼土面）が見られた。中央ピット上の焼土は、埋土上にあり、拳大の炭混じりの粘土塊や炭化材も検出した。これらは、建物廃棄後のなんらかの所作によるものと考えられる。



第126図　SI17

遺物は、床面直上から甕の胴部（121）が出土しているのをはじめ、埋土中より甕の口縁部（122・123）も出土している。

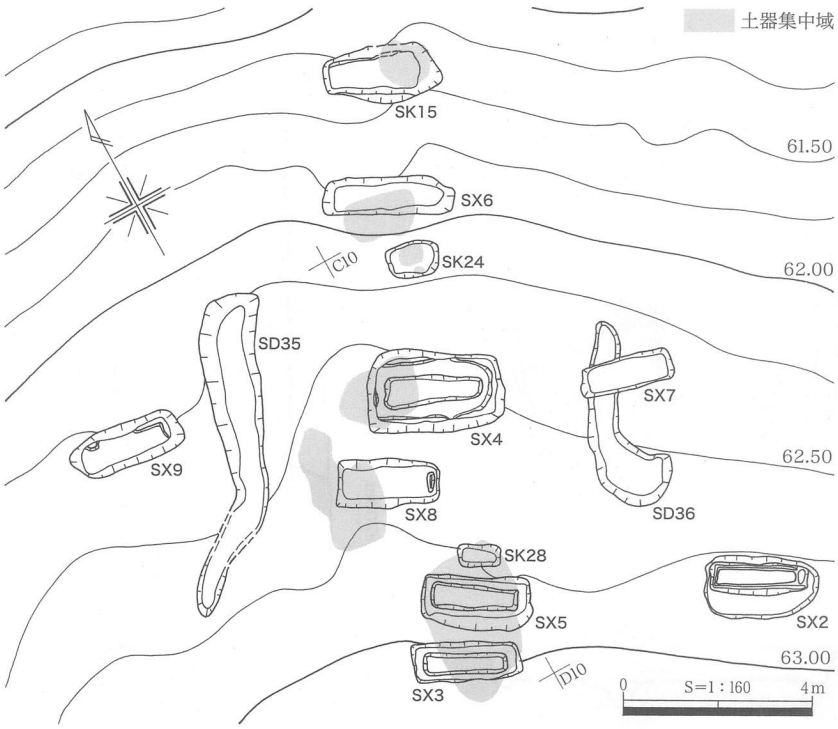
これらは清水編年Ｖ-３様式に相当すると考えられる。よってこの遺構の年代は弥生時代後期後葉の時期が想定されるものである。　（岩井）



第127図　SI17出土遺物

第53表　SI17出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
121	SI17 床面直上	第127図 PL.67	甕　胴部	器高△15.2cm 胴径※20cm	胴部1/3	外面：ミガキ 内面：ケズリ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	密	肩部に刺突文あり
122	SI17 埋土中	第127図 PL.67	弥生　甕 口縁～頸部	器高△5.2cm 口径※17.8cm	口縁部 1/4	外面：口縁部沈線、頸部ナデ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	淡灰褐色	0.1～0.2mm 大の砂粒 を含む	
123	SI17 埋土中	第127図	弥生　甕 口縁～頸部	器高△4.6cm	口縁部 1/6	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	浅黄橙色	密	



第128図　SX群全体図

（３）土壙墓

A区北側、B～Cグリッド間に区画溝をもった土壙墓群が検出された。中心主体（SX４）を南端で屈曲する２本の溝で区画し、その周囲に主軸をほぼN－65°－W前後の土壙墓が造られていた（巻頭図版２、第128図）。

検出された標高は63.00m前後だが、その上部、基本層序のⅡ層である遺物包含層を掘り下げた時点で多量の土器及び川原石が集中して出土した。しかし、土器出土地点では埋土の識別が困難で、遺構面を検出することができなかった。その後、黄褐色のソフトローム層を10～20㎝掘り下げた時点で初めて土壙墓群を検出することができた。土壙墓の検出地点と土器及び川原石の集中地点が重なること、土器の器種構成が特徴的なことなどから、これら土器と川原石は供献土器および標石であると判断したものである。したがって、本来の土壙墓掘り込み面は土器検出面直下である可能性が高く、検出面より10～20㎝高いと考えられる。

これらの土壙墓群は、主軸をほぼ同一方向にもつこと、埋葬頭位が想定できるものに関しては北西方向であること、また、直上より供献土器の出土しているものに関してはほぼ同一時期であることから、たがいに同じ意識のもとに造られたものであると判断されるものである。

SX1（第129・130図、第54表、PL.42・67）

A区北側、D11グリッド杭の北側、標高63.40m付近に位置し、土壙墓群の南西につくられている。長軸0.59m、短軸0.48mの土壙中に、土器棺がつぶれた状態で出土した。この土器棺は、主軸をほぼ東西方向に向けた形で甕を横位に据え、別個体の甕胴部破片で蓋をしていた。

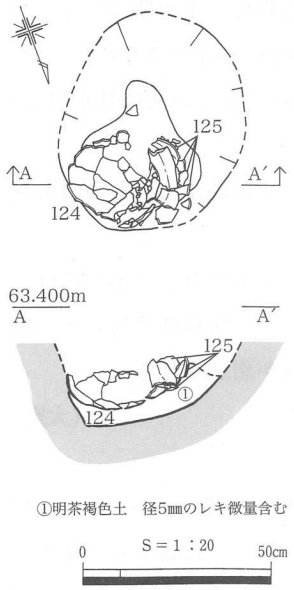
この土壙の埋土は不鮮明で、上面ではプランを検出することができず、土器棺が出土したレベルまで掘り下げた段階ではじめて確認できた。よって実際の土壙掘り込み面は更に高いレベルである可能性が高い。確認できた深さは0.15mである。

埋土は土器棺の下部のみ確認できた。土壙掘り方と土器棺の間に７～８㎝の厚さで明茶褐色土が入れられており、土壙掘削後、土器棺の据わりをよくするために充填されたものと考えられる。

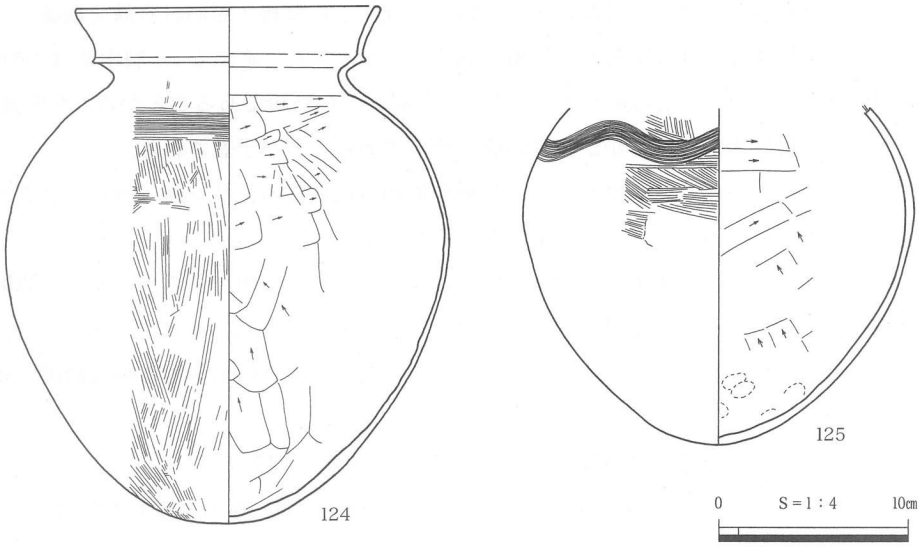
使用されていた甕は古墳時代初頭のもので、土壙墓群と同時期にあたる。よってこの土器棺墓も、土壙墓群となんらかの関わりをもったものであると考えられる。

ところで、鳥取県内の土器棺墓について、吉田学氏が集成・分類を行っている（『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山町教育委員会2000）。その分類に従うと、当例は弥生時代後期後葉から古墳時代後期後葉にかけて県内全域にみられる形態である「１個体の土器を埋設し、蓋をした」（ｂ）形態にあたる。氏によれば、当遺跡の所在する伯耆東部地域の土器棺墓は、古墳時代に集中的にみられ、他地域に比して規模が小さいものが多いという。つまり、本例は当地域にみられる典型的な土器棺墓であると位置づけられよう。

この土器棺墓の年代は、棺身として使用されていた甕がおおむね天神川編年Ⅰ期に位置付けられることから、弥生時代末～古墳時代初頭の時期が想定される。（大野）



第129図　SX1



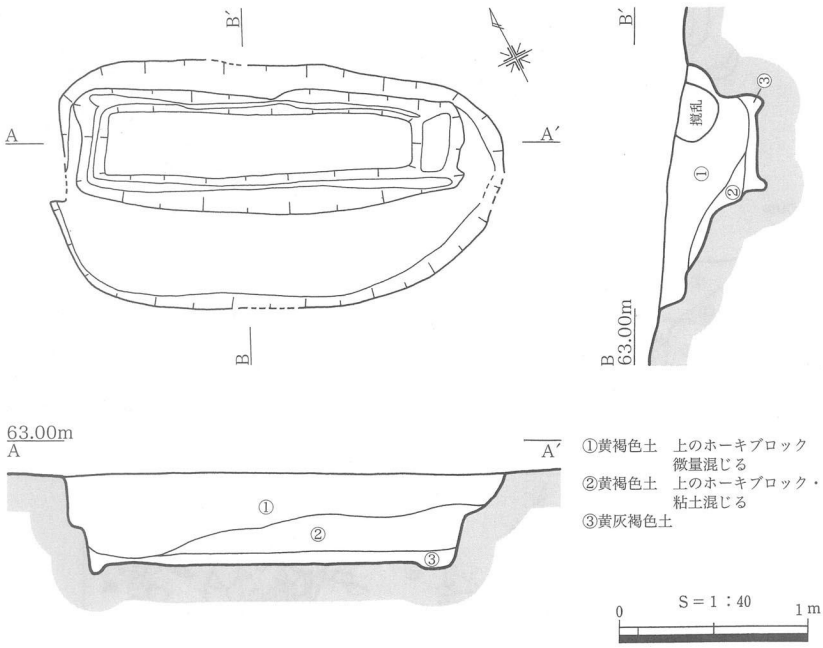
第130図　SX1出土遺物

第54表　SX1出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
124	SX1 埋土中	第130図 PL.67	土師器　甕	器高：27.7cm 口径※16.2cm	全体1/2	外面：口縁～頸部ナデ、胴部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	淡褐色	0.1～0.2mm 大の砂粒 を含む	土器棺身
125	SX1 埋土中	第130図 PL.67	土師器　甕 体部	残存長 △17.9cm	体部1/2	外面：ハケ→粗いナデ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	密	土器棺蓋 肩部に波状文あり

SX2（第131図、PL.43）

Ｄ９グリッド北側、標高約63.25mに位置する土壙墓である。区画溝の外側にあり、土壙墓群の中心部からやや離れた位置にある。墓壙は二段に掘り込んでおり、確認面である一段目の規模は長さ2.34m、幅1.28m、深さ0.27mで、二段目は長さ1.99m、幅0.64m、深さ0.25mであり、確認面から二段目底面まで0.52mの深さになる。



第131図　SX2

棺床の据えられていた範囲は小口北西側0.33m、南東側0.23mで、側壁は両壁約1.6m前後となる。そしてその棺床となる部分の周囲に、木棺痕跡と考えられる掘り込みが検出された。小口板の掘り方は南東が0.37m、深さ５cmで、北東側の溝は見られず、棺床から深さ約５cmのところに、0.27×0.14mの方形の堀込みがみられた。側板は南西側、北東側ともに長さ1.95m、深さ４～５cmである。つまり、二段目底面は、棺床部下４～５cmの深さに、棺床部を除くほぼ全ての範囲掘り込んでいることになる。

主軸はN－61°－Wで、底面小口幅は北西側が約10cm広くなっていることから、埋葬頭位は北西であると考えられる。

埋土は３層確認できた。底面に小口・側壁を設置した痕跡と思われる溝を確認したものの、土層断面にはこれらの溝と対応するような縦方向の堆積は認められなかった。従って、土層中では木棺痕跡は確認できなかったが、②層は粘土や硬質の「上のホーキ」ブロックが混入された層であることから、木棺裏込めであった可能性が高く、その下の③層は木棺と更にかかわりの深い埋土であることが予想される。

この③層についてリン酸カルシウム分析を依頼したところ、リン酸・カルシウム共に下の地山よりも多量の含量値を示す結果が得られている（第５章第７節参照）。

時期については、遺構中から遺物は出土しなかったため不明である。しかし、周囲の土壙墓群と主軸がほぼ一致することや、当地区に他時期にあたる埋葬施設が検出されなかったことから、SX２も土壙墓群と何らかの関わりを持つものであることが考えられ、ほぼ同時期の弥生時代末～古墳時代初頭の時期が想定される。

（大野）

SX3（第132・133図、第55表、PL.43・44・68・70・71）

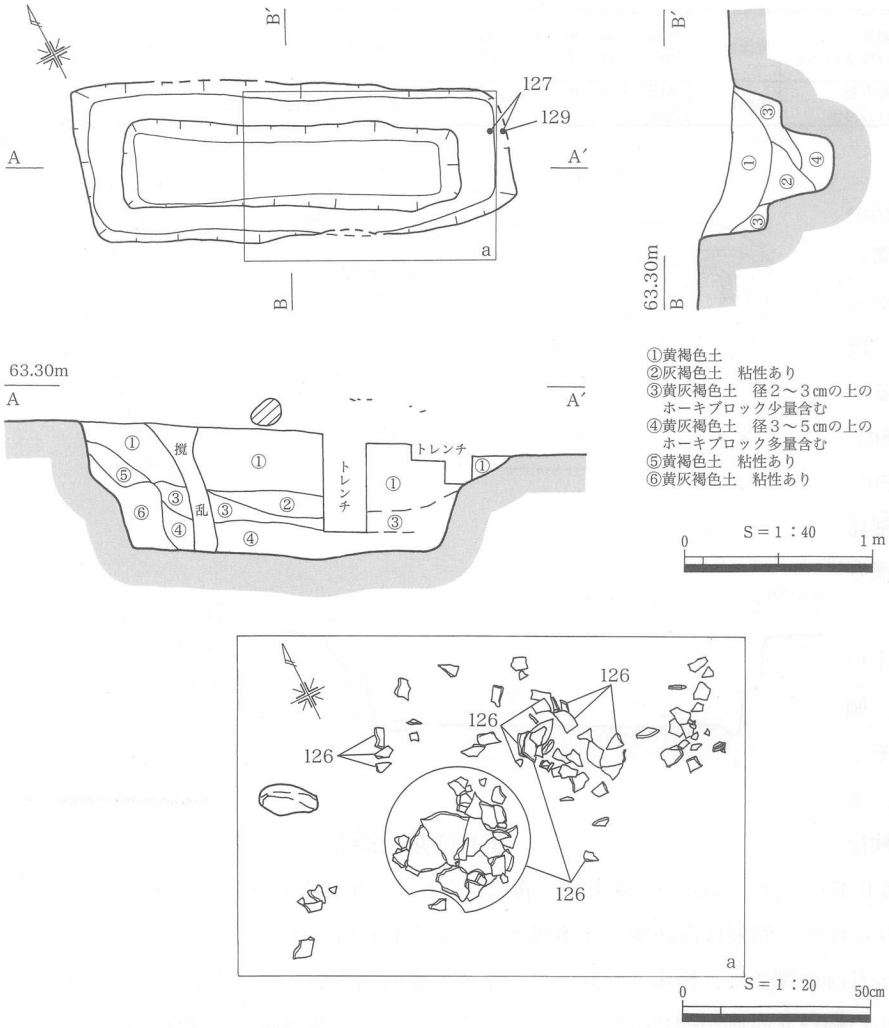
C10グリッド南端、SX５の南隣に位置する。墓壙は二段に掘り込まれており、一段目の規模は長さ2.34m、幅0.94m、深さ0.36mで、二段目は長さ1.8m、幅0.42m、深さ0.34mであり、確認面から二段目底面までの深さは0.7mになる。二段目に木棺を埋置したものであろう。主軸はN－63°－Wで、底面小口幅は北西側が0.37m、南東側が0.27mとなり、北西側が10cm広くなっていることから、埋葬頭位は北西であると考えられる。

埋土は６層確認できた。土層断面の中で、木棺痕跡となるようなものは確認できなかった。SX３の埋土の特徴として、最下層の④層に「上のホーキ」ブロックが多量に混入している点が挙げられる。これは、土壙墓の埋没過程として、まず、木棺空洞部に木棺直上に載っていた④層が入り込み、その後裏込めの③層、更に上層の②層が流れ込んだものと考えられる。

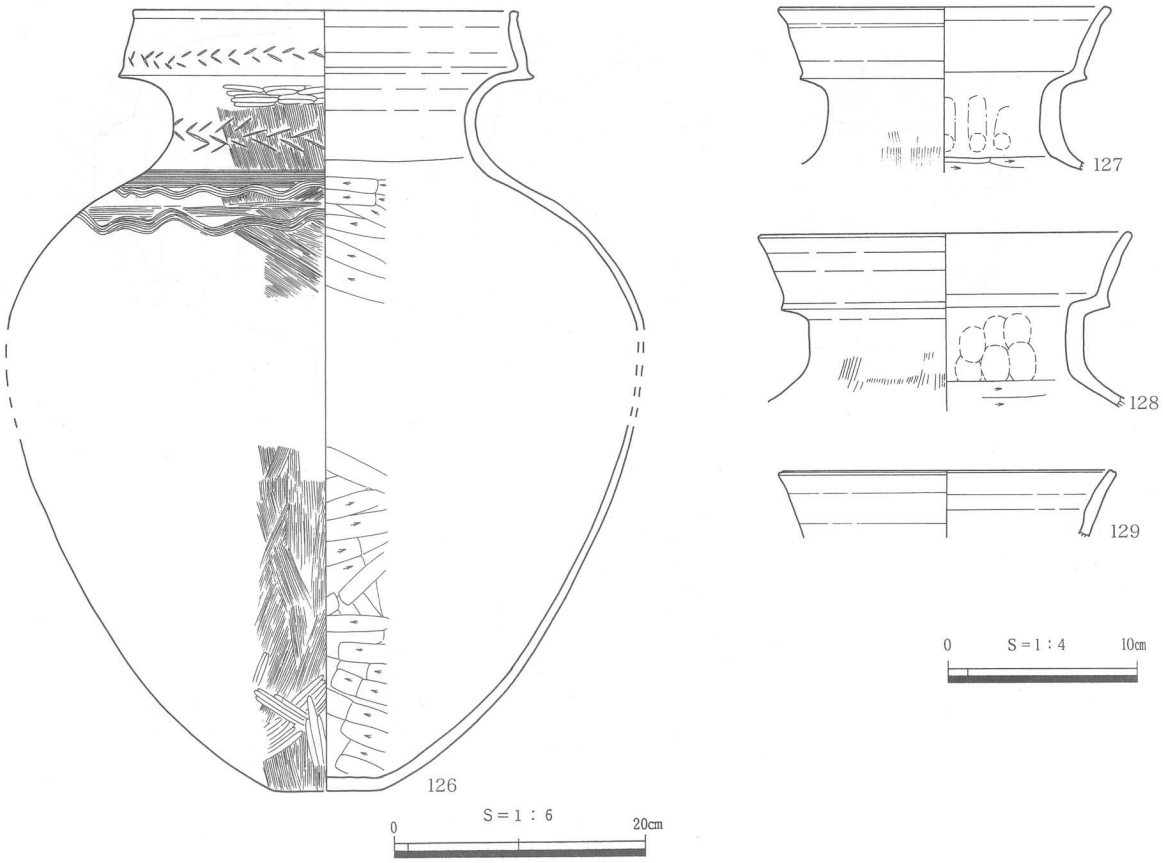
出土遺物としては、確認面下埋土中からは出土しなかったものの、直上から石及び多量の土器が集中して出土している。

特に126の大型壺は、SX３直上に底部が据えられたような状態で出土している。これらは、この土壙墓に伴う標石及び供献された土器であると考えられるものである。

この遺構の時期として直上出土土器がおおむね天神川編年Ⅰ期にあたることから、弥生時代末～古墳時代初頭が想定される。（大野）



第132図　SX3

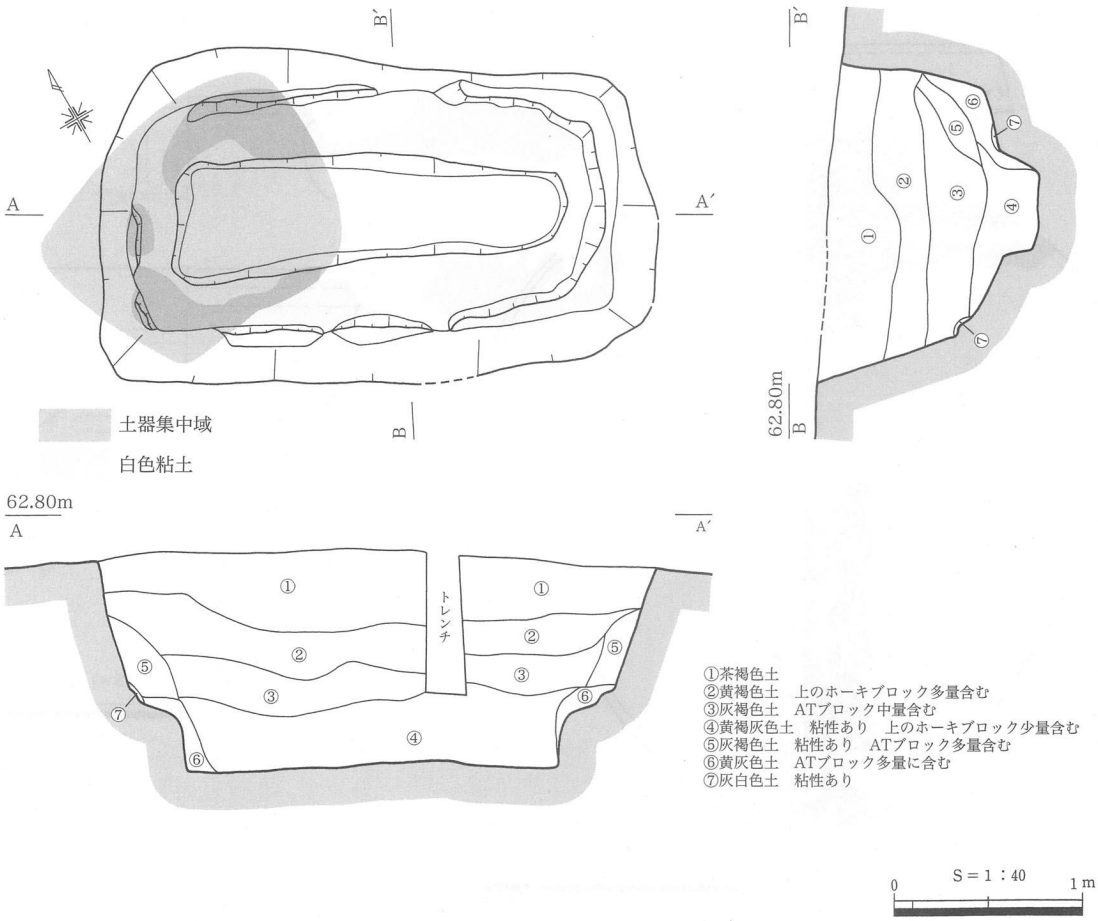


第133図　SX3出土遺物

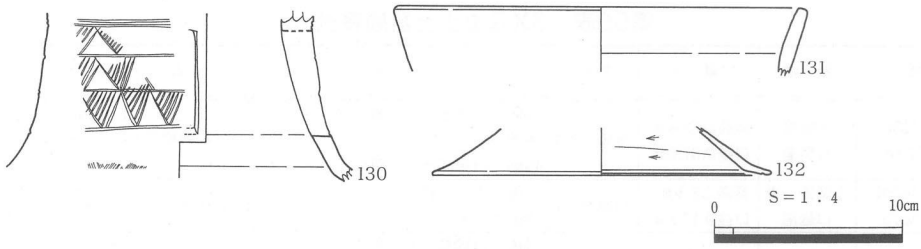
第55表　SX３出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
126	SX3 直上	第133図 PL.68	土師器 大型壷	器高△62.8cm 口径※31.2cm	全体の2/3	外面：口縁部ナデ、頸部ハケ→ナデ 胴部ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	1～2mmの 石英を 多く含む	
127	SX3 直上	第133図 PL.70	土師器　壷 口縁部	器高△8.3cm 口径※17.3cm	口縁部1/4	外面：ナデ、肩部ハケ 内面：ナデ	浅黄橙色	密	頸部内面に指頭 圧痕あり
128	SX3 直上	第133図 PL.70	土師器　壷 口縁～肩部	器高△9cm 口径※20.0cm	口縁～ 肩部1/3	外面：口縁部ナデ　頸部ハケ→ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部ケズリ →ナデ	浅黄色	1mmの石英 を多く 含む	頸部内面に指頭 圧痕および煤付着
129	SX3 直上	第133図 PL.71	土師器　甕 口縁部	器高△3.5cm 口径※17.4cm	口縁部1/7	内外面ナデ	淡黄色	密	

写真12　調査前状況（北から）



第134図　SX4



第135図　SX4出土遺物

第56表　SX４出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
130	SX4 直上	第135図 PL.71	器台　脚部	器高△8.2cm	1/4以下	内外面ナデ	橙色	密	外面鋸歯文あり 側面に5cm程の透孔痕あり
131	SX4 直上	第135図 PL.71	甕　口縁部	器高△3.6cm 口径※22.1cm	口縁部 1/4以下	内外面ナデ	橙色	密	
132	SX4 直上	第135図 PL.71	脚部	器高△2.4cm 底径※18.2cm	口縁部 1/4以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	淡黄色	密	

SX４（第134・135図、第56表、PL.45・71）

Ｃ９グリッド西端のSX８とSK24に隣接した地点、SX４に直交するようにそれぞれSD35とSD36があり、ちょうどその中間点に位置する。土壙墓群の中心的な埋葬施設である。墓壙は三段に掘り込んでいるようにみえる。検出面である一段目の規模は長さ2.97m、幅1.69m、深さ0.66m、二段目は長さ2.4m、幅1.26m、深さ0.09m、三段目は長さ2.07m、幅0.54m、深さ0.3mを計り、確認面から三段目底面までは1.05mとなる。

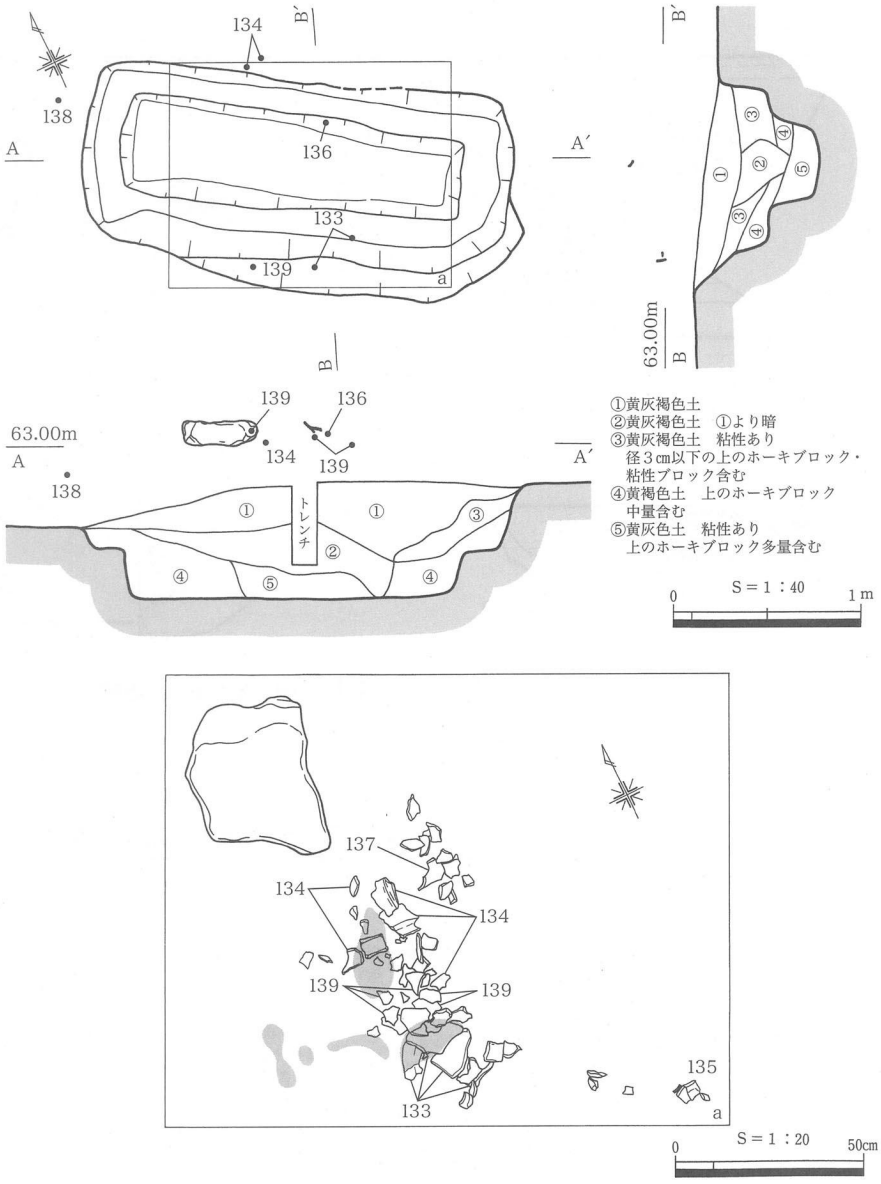
二段目の平坦面には粘性の強い灰白色土が貼られており、このために浅く二段目を掘り込んだものと考えられる。この灰白色土の性格については、三段目埋土中には認められず、棺を覆っていた可能性は低いと考えられることから、裏込め土の一部であると考えられる。よってSX４もSX２・３・５などと同じく、広義では二段墓壙の範疇

に入るものと考えられる。主軸はN－62°－Wで、底面小口幅は北西側が0.57m、南東側が0.33mであり、北西側が広くなっていることから、埋葬頭位は北西方向であると考えられる。

埋土は二段目平坦面の灰白色土を含み、７層確認できた。底面に木棺痕跡の溝等は検出できなかったが、ロームブロックを多量に含む⑤・⑥層は裏込め土である可能性が高く、従って④層と⑤層の縦に走る分層ラインが木棺痕跡であると判断できる。木棺の規模は④層から判断すると長さ約1.7m、幅約0.4mになる。

④層についてリン酸カルシウム分析を依頼したが、良好な結果は得られなかった（第５章第７節参照）。

出土遺物については、埋土中からの出土はなかった。しかし、SX４直上に土器片が集中して検出されている。大半は小片で図化するに至らなかったものが多く、全体の器種構成を確認するに至らなかったが、供献されていた土器であると考えられる。図化できたものでは、器台脚部（130）・口縁部（131）・不明脚部（132）の破片がある。



第136図　SX5

時期としては、出土土器がおおむね天神川編年Ｉ期に相当すると考えられることから、弥生時代末～古墳時代初頭が想定される。

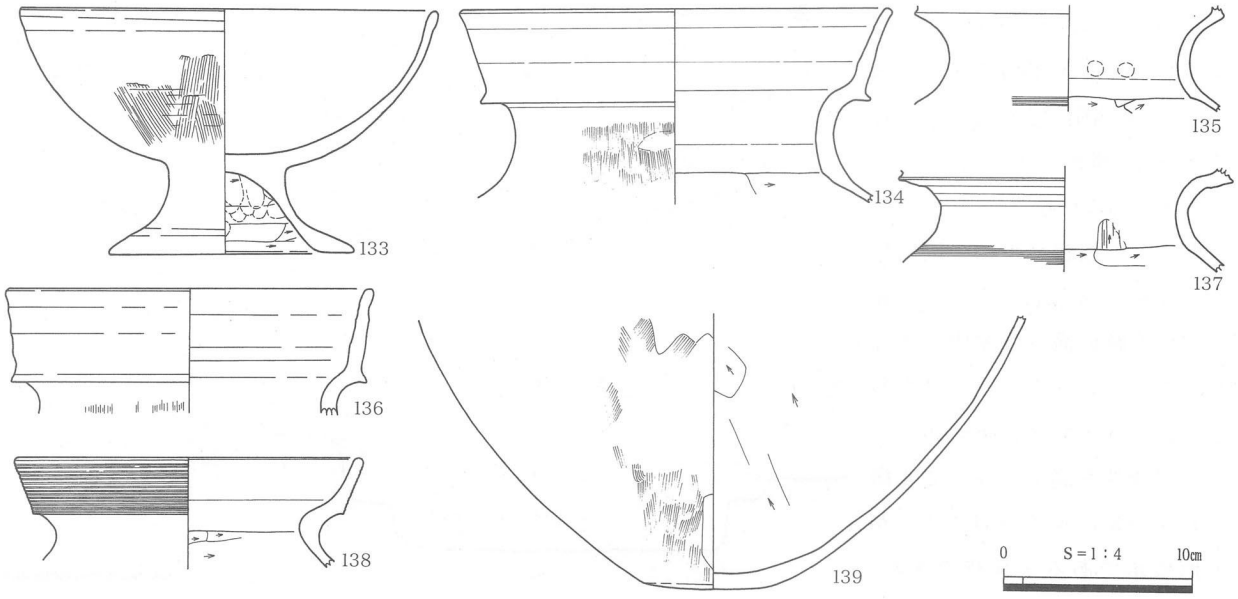
（大野）

SX５（第136・137図、第57表、PL.44・68・70・71）

D11グリッド南東隅、SX３とSK28に挟まれた地点に位置する。墓壙は二段に掘り込まれており、一段目の規模は長さ2.28m、幅1.1m、深さ0.38mで、2段目は長さ1.84m、幅0.51m、深さ0.24mとなり、確認面から底面までの深さは0.62mとなる。主軸はN－57°－Wで、底面小口幅は北西側0.43m、南東側0.22m、北西側のほうが約20cm広くなることから、埋葬頭位は北西であったと考えられる。

埋土は５層確認できた。底面に堆積する④層および⑤層は、上のホーキ層のロームブロックを多量に含む層である。これは隣接するSX３と同様の状況であり、埋葬時、木棺上を覆った土が崩落したものであると考えられるものである。

埋土中より遺物の出土はみられなかったが、土壙墓確認面20～25cmほど高い位置に標石及び供献土器と思われる遺物が集中してみられた。図化できた遺物としては低脚坏（133）・甕（134～138）・底部破片（139）があり、このうち138の甕口縁部破片以外は土壙墓直上に集中して出土した。また、土壙墓上部の土器集中地点埋土に焼土が認められた。



第137図　SX5出土遺物

第57表　SX5出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
133	SX5 直上	第137図 PL.68	土師器 低脚坏	器高：13.2cm 口径：22.3cm	完形に 近い	坏部　外面：ナデ、下半のみハケ→ナデ 内面：ミガキ 脚部：外面ナデ 内面：上半ケズリ　下半ナデ	黄橙色	密	坏部内面摩滅著しい 脚部内面に指頭圧痕アリ 内外面に少量の煤付着
134	SX5 直上	第137図 PL.70	土師器　壺 口縁部	器高△10cm 口径：22.7cm	口縁部2/3	外面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	1mm以下の 砂粒含む	
135	SX5 直上	第137図 PL.71	土師器　壺 頸部	器高△5.5cm 口径※12.7cm	頸部1/6	外面ナデ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	密	
136	SX5 直上	第137図 PL.70	土師器　甕 口縁～頸部	器高△6.8cm 口径※19.6cm	口縁部 1/8以下	外面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ハケ 内面：ナデ	浅黄橙色	密	内面摩滅著しい
137	SX5 直上	第137図 PL.71	土師器　壺 頸部	器高△4.8cm 頸部※13.2cm	頸部1/4	外面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄色	密	肩部に平行沈線文
138	SX5 直上	第137図 PL.70	弥生　甕 口縁部	器高△5.5cm 口径※18.2cm	口縁部1/4	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙色	1mm以下の 砂粒含む	内面磨滅気味
139	SX5 直上	第137図 PL.68	土師器 底部	器高△14.3cm 底径※6.8cm	胴部1/4	外面：ハケ→粗いナデ 内面：ケズリ	黄橙色 浅黄色	密	内面煤付着

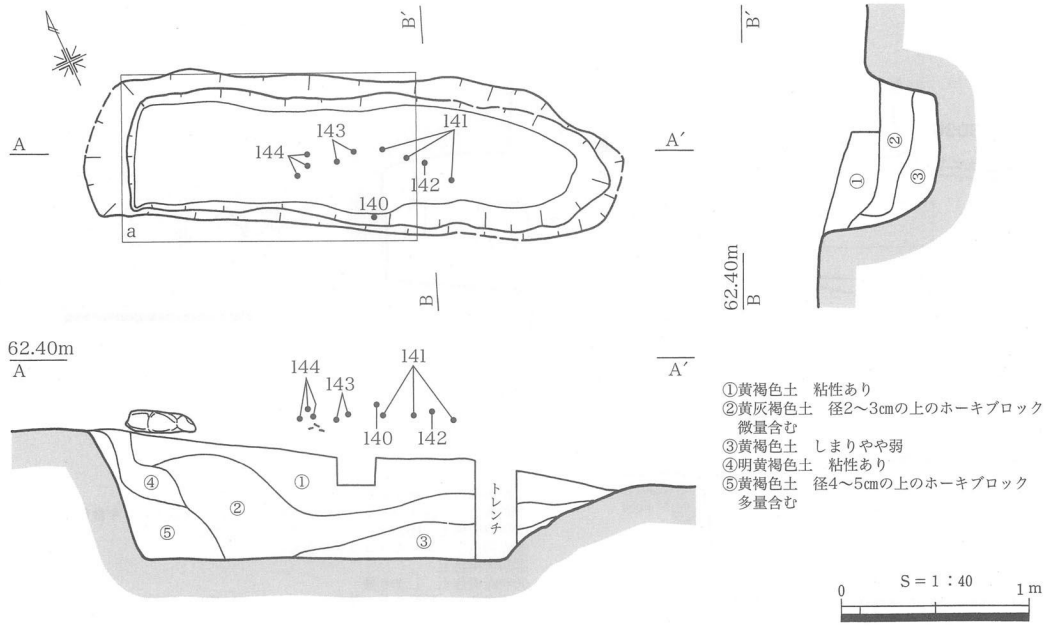
これら出土遺物の時期としては、清水編年Ⅴ-３様式に相当する138以外の遺物は、ほぼ天神川編年Ⅰ期に相当すると考えられる。上記のように138は、他の遺物が出土している集中域からはずれた地点より出土しているため、おそらくこの遺構に伴うものではないだろう。よってこの遺構の時期としては弥生時代末～古墳時代初頭頃であると考えられる。　(大野)

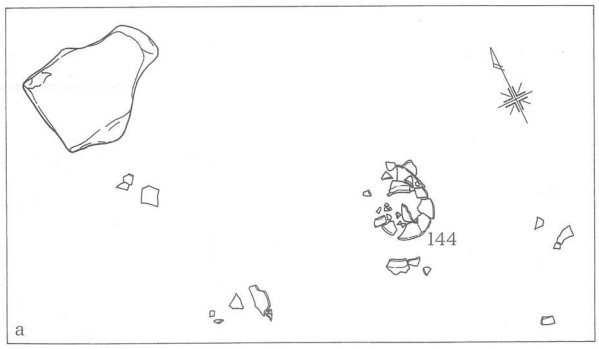
SX６（第138・139図、第58表、PL.45・70・71）

Ｂ９グリッド南西隅、SK24の北隣に位置する。埋土と遺構確認面との差がはっきりとせず、南東側はやや壊れた形での検出となった。掘り込みは一段で、規模は長さ2.82m、幅0.79m、深さ0.56mである。

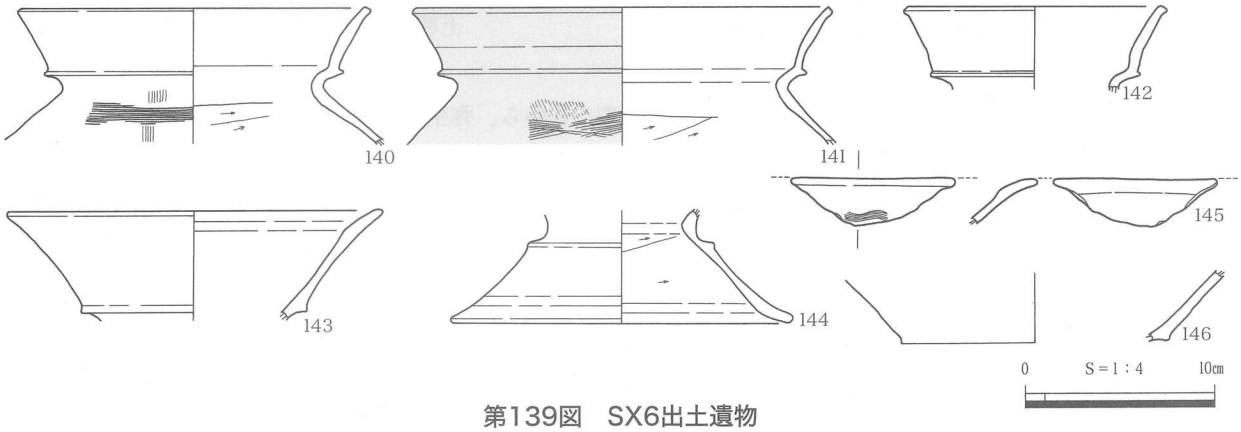
以上の形状のみでは土壙墓と判断しがたいが、土壙墓群内の位置関係と、主軸がN－65°－Wであり、他の土壙墓とほぼ同じになるという点から、土壙墓と判断した。底面小口幅は北西側が0.55m、南東側は復元数値ではあるが、約0.33mとなり、少なくとも北西側が広くなっていることがわかり、埋葬頭位は北西方向の可能性が高いといえる。

埋土は５層確認できたが、棺痕跡を確認できるような堆積状況ではなかった。





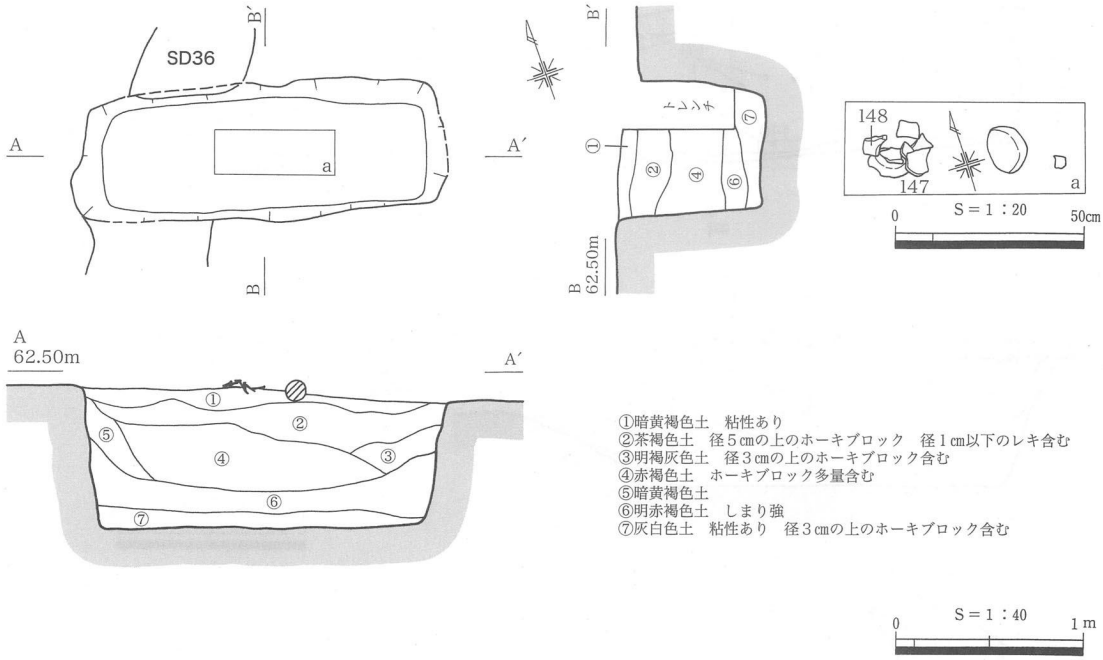
第138図　SX6



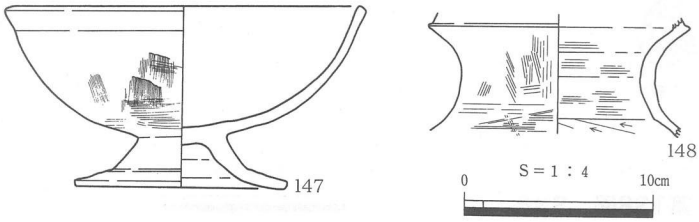
第139図　SX6出土遺物

第58表　SX6出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
140	SX6 直上	第139図 PL.70	土師器　甕 口縁～肩部	器高△7cm 口径※18.3cm	口縁部1/7	外面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄色	密	肩部平行沈線文
141	SX6 直上	第139図 PL.70	土師器　甕 口縁～肩部	器高△8cm 口径※22.0cm	口縁部1/3	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部ケズリ	淡黄褐色	密・砂粒を含む	外面赤彩
142	SX6 直上	第139図 PL.70	弥生　壺 口縁部	器高△4.4cm 口径※13.4cm	口縁部1/7	内外面ナデ	浅黄橙色	密	
143	SX6 直上	第139図 PL.70	土師器 器台　受部	器高△5.8cm 口径※19.8cm	受部1/2	内外面ナデ	明黄褐色 にぶい黄橙色	密	
144	SX6 直上	第139図	土師器 器台　脚部	器高△6.8cm 底径※18.0cm	脚部1/3	外面：ナデ 内面：屈曲部・脚裾部ナデ、脚部ケズリ	明黄褐色	1mm大の石英など砂粒少し含む	やや摩滅気味
145	SX6 直上	第139図 PL.71	土師器 高坏　坏部	残存長△2.8cm	口縁部1/6	内外面ナデ	浅黄橙色	密	
146	SX6 直上	第139図	土師器 器台　受部	器高△3.4cm	受部1/6	内外面ナデ	にぶい黄橙色	密	外面波状文あり



第140図　SX7



第141図　SX7出土遺物

出土遺物として、確認面から３～10cm上から、石及び甕（140～142）・鼓形器台（143・144・146）・高坏（145）などの土器が集中して出土した。特に、144の鼓形器台の脚部は、土壙墓直上で押しつぶされたような状態で出土している。これらは土壙墓に伴う標石及び供献土器と考えられるものである。

時期は、出土土器がおおむね天神川編年Ｉ期に相当することから、弥生時代末～古墳時代初頭が想定される。

（大野）

SX７（第140・141図、第59表、PL.46・71）

Ｃ９グリッド中央、東側の区画溝であるSD36を壊して作られている。掘り込みは一段で、長さ1.94m、幅0.72m、深さ0.76m、主軸はN－71°－Wである。主軸の方向と他の土壙墓との位置関係から、土壙墓であると判断した。

底面小口幅は北西側が0.53m、南東側が0.49mでほぼ同じになり、底面小口幅から埋葬頭位は判断できなかった。

埋土は７層に分層できたが、棺痕跡を確認できる状況ではなかった。

出土遺物としては土壙中央部、埋土上面より径11cmの円形河原石と低脚坏（147）及び壺頸部（148）が出土している。これらは土壙墓に伴い、標石及び供献土器と考えられるものである。

想定される時期としては、出土土器から他の土壙墓と同時期である弥生時代末～古墳時代初頭（天神川編年Ｉ期）が充てられるが、区画溝であるSD36を壊して造られていることから、中心主体であるSX４よりもやや新しい時期であろう。

（大野）

第59表　SX7出土土器観察表

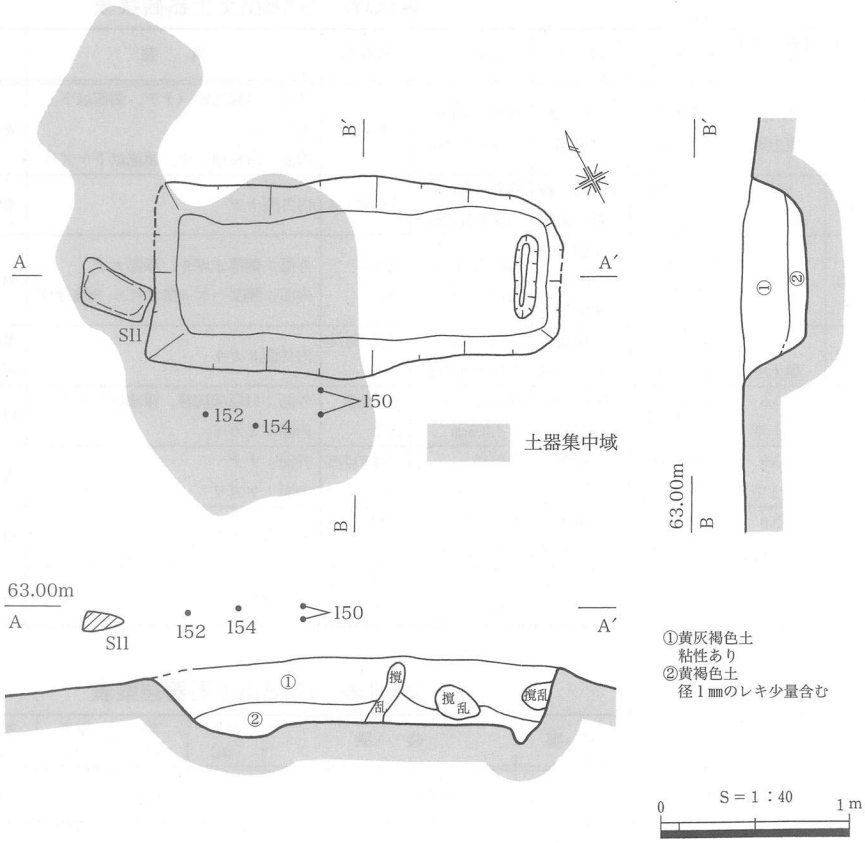
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
147	SX7 直上	第141図	土師器 低脚坏	器高△9.7cm 口径※19.7cm 底径：11.3cm	坏部1/4 脚部ほぼ 完形	外面：坏部ハケ、脚部ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色	密	
148	SX7 直上	第141図 PL.71	土師器　壷 口縁下端～ 頸部	器高△6cm	頸部　1/4	外面：口縁下端ナデ、頸部ハケ 内面：頸部ハケ、下端ケズリ	浅黄色	密	

SX８（第142～144図、第60・61表、PL.68・70・71）

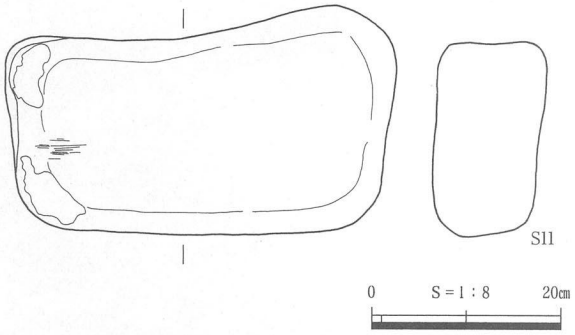
C10グリッド中央東側、ＳＸ４の南側に位置する。平面は隅丸長方形で長さ2.16m、幅1.08m、深さ0.34mで、主軸はN—62°—Wである。軸の方向と他の土壙墓との位置関係から、当遺構も土壙墓であると判断した。底面小口幅は北西側0.6m、南東側が0.62mでほぼ同じになり、埋葬頭位は判断できなかった。

土壙床面では、南東側小口に溝状の掘り込みが検出された。長さ0.44m、幅0.1～0.14m、深さ0.08mを測る。おそらくこの溝状の掘り込みは、木棺痕跡であると考えられる。埋土を含め他に棺痕跡と考えられるものは確認できなかった。

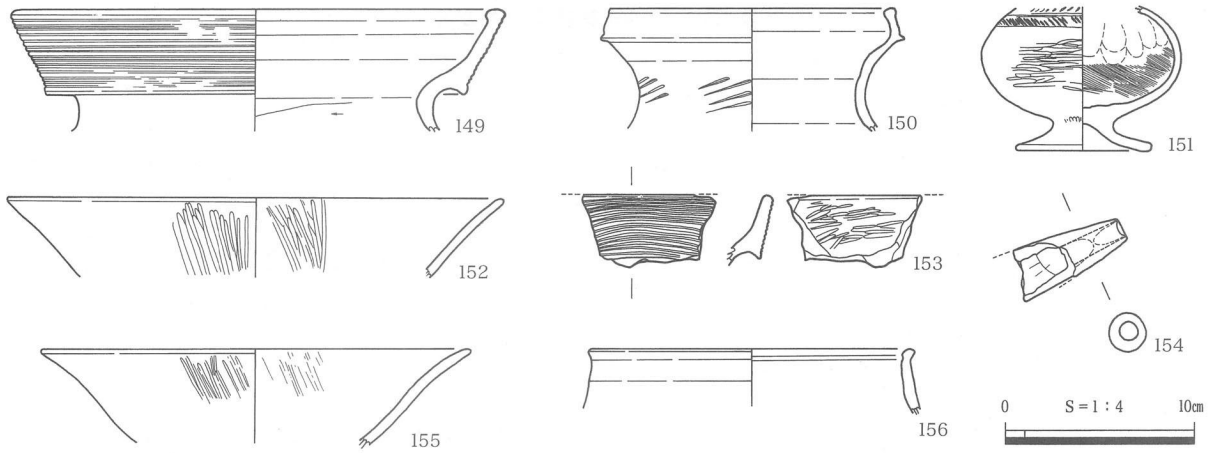
出土遺物としては、土壙墓確認面から18～28cmほど高い位置で、標石（S11）及び台付小型壷（151）や高坏（152・155）などの遺物が、土壙中央部から北西方向にかけて同じ高さで集中して広がっていた。当遺構は埋葬施設であり、これらの土器は供献土器と考えられる。時期は弥生時代末～古墳時代初頭（天神川編年Ⅰ期）に相当すると考えられる。（岩井）



第142図　SX8



第143図　SX8出土遺物（1）



第144図　SX8出土遺物（2）

第60表　SX8出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
149	SX8 埋土中	第144図 PL.70	弥生　甕 口縁部	器高△6.5cm 口径※26.4cm	口縁1/4	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ミガキ→ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	淡褐色	密	
150	SX8 埋土中	第144図 PL.70	土師器　壺 口縁～頸部	器高△6.3cm 口径※15.2cm	全体の1/4	内外面ナデ	橙色	密	頸部に貝殻復縁による刻み目文あり
151	SX8 埋土中	第144図 PL.68	土師器 小型台付 短頸壺	器高△7.6cm 底径：7cm	完形に 近い	外部：胴部ミガキ、脚部ナデ 内面：胴部ハケ→指オサエ、脚部ナデ	明黄褐色	密	肩部に羽状文あり
152	SX8 埋土中	第144図 PL.71	土師器 高坏　受部	器高△4.2cm 口径※26.4cm	口縁部1/4 以下	内外面ミガキ	黒褐色 灰色	密	
153	SX8 埋土中	第144図	弥生　甕 口縁部	残存長 △3.8cm	口縁1/8 以下	外面：口縁部沈線、頸部以下ナデ 内面：ミガキ	橙色	密	
154	SX8 埋土中	第144図 PL.71	土師器 注口	残存長 △6.5cm	全体の1/8 以下	外面：ナデ 内面：ケズリ	浅黄橙色	密	外面指頭圧痕アリ
155	SX8 埋土中	第144図 PL.71	土師器 高坏　受部	器高△5cm 口径※23cm	口縁部1/4 以下	内外面ミガキ	橙色	密	
156	SX8 埋土中	第144図	土師器　甕 口縁部	器高△3.2cm 口径※17.3cm	口縁部1/4 以下	内外面ナデ	橙色	密	

第61表　SX8出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔kg〕	石　材	備　考
S11	SX8 直上	第143図 PL.79	石	表面に擦痕あり	41.8	23.8	11.8	21.8	安山岩	

写真13　SX4完掘状況（南から）

SX９（第145図、PL.47）

C10グリッド北端、SD35の西隣に位置する。墓壙は二段に掘り込まれていたと考えられるが、二段目は一部しか残存していなかった。確認面である上段の規模は、長さ2.4m、幅0.92m、深さ0.78mで、下段の深さは残存している部分で0.12mであり、確認面から底面までの深さは0.9mとなる。下段の長さと幅は残存している部分が一部であったので計測できなかった。主軸はN－83°－Wで、他の土壙墓より若干西に振れている。

埋土は５層確認できたが、棺痕跡を確認できるような堆積状況ではなかった。

遺物は出土しなかった。

時期は、埋土の状況と、周辺の土壙墓群との位置関係から、他の土壙墓とほぼ同時期であると考えられるものである。

（大野）

SK15（第146・147図、第62・63表、PL.47・68・72・79）

Ｃ９グリッド南西、土壙墓群の北端に位置する。形態は、遺構確認時、北東側のプランがはっきり検出できず、一部残存した部分で復元ラインを引いた。当初小型の土坑と思われたが、壁面検出時に二段に掘り込んだ長方形のプランが確認できた。規模は、上段が長さ2.45m、幅1.22m、深さ0.3mで、下段が長さ1.96m、幅0.6m、深さ0.1m、確認面から底面までの深さは0.4mとなる。

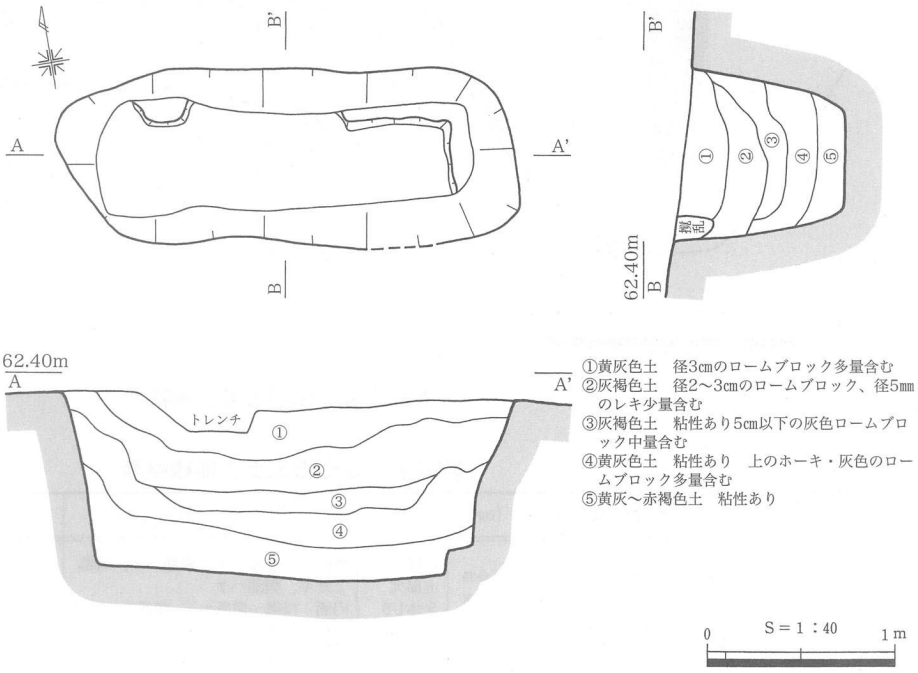
主軸はN－67°－Wで、底面小口幅は北西側が0.49m、南東側が0.78mとなり、南東側が広くなるが、南東側は壊れた状況で確認されたので、信用できる数値ではなく、埋葬頭位の判断基準にはならない。

出土遺物は確認面より約15cm上から、大型の二重口縁の壷（157）・鼓形器台（160）などが集中して出土している。また、土壙墓直上の土器集中地点から南に1.5mほど離れたところから、甕の口縁部破片（159）と鋤先（Ｆ13）が出土した。

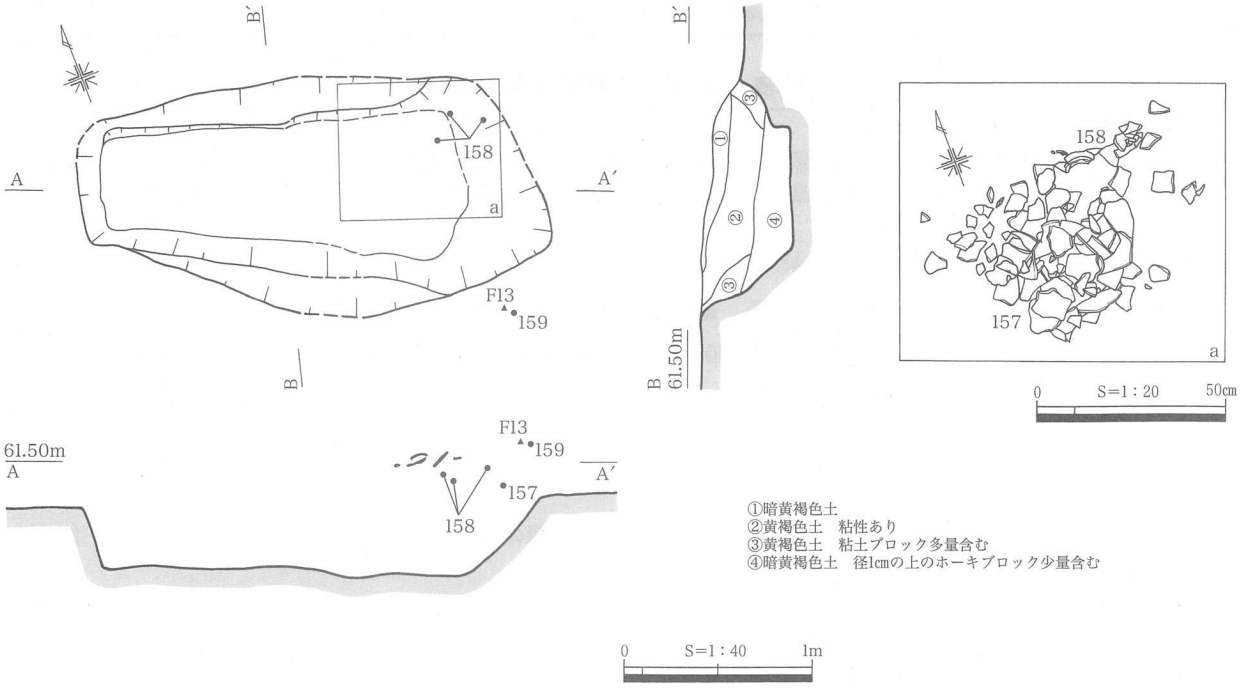
遺物から想定される時期としては、159が清水編年Ｖ-３様式に相当する以外、ほぼ天神川編年Ｉ期に相当するものである。159及び鋤先のＦ13は上述のように土器集中地点より少し離れた地点より出土しているため、他遺構からの流れ込みの可能性が考えられる。

よってこの土壙墓は弥生時代末～古墳時代初頭の時期が想定される。

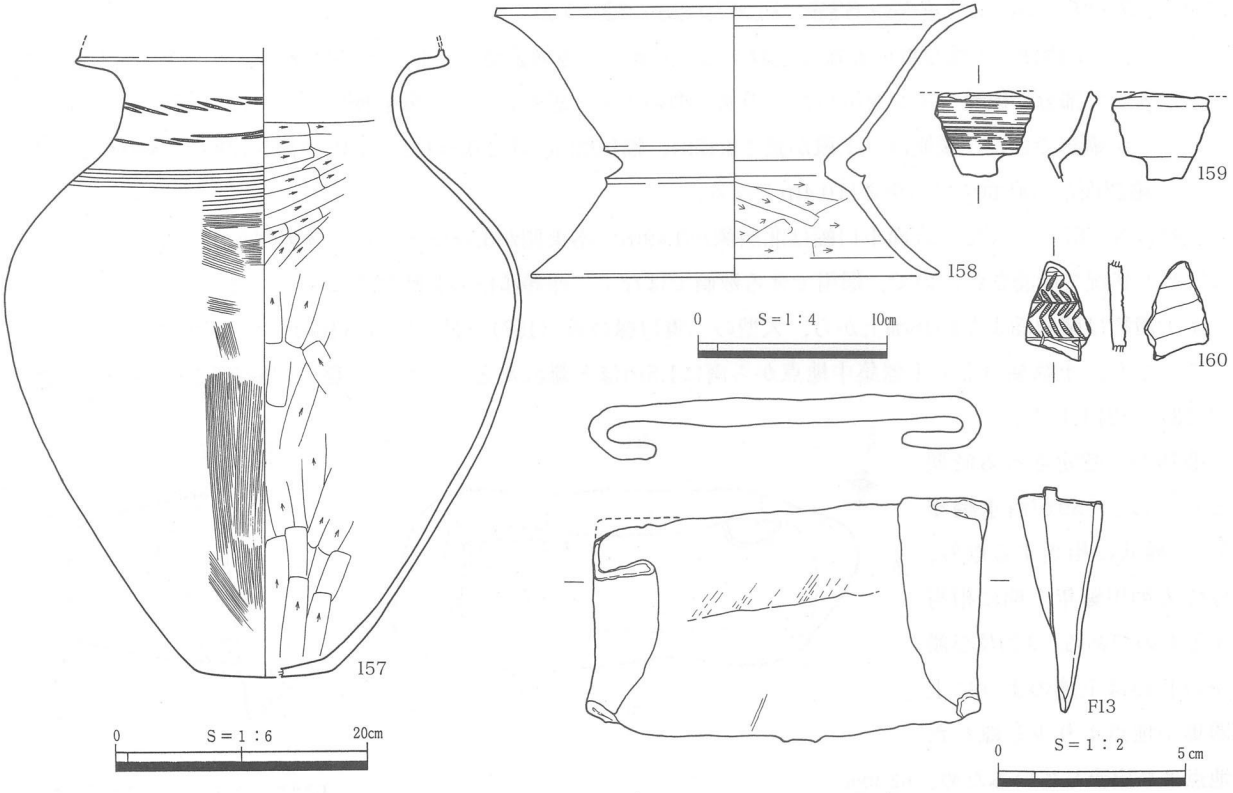
（大野）



第145図　SX9



第146図　SK15



第147図　SK15出土遺物

第62表　SK15出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
157	SK15 埋土中	第147図 PL.68	土師器 大型壷	器高△50.6cm 胴径：41.3cm	口縁 上部欠 全体1/3	外面：口縁部ナデ、頸部ハケ、肩部ミガキ、胴部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	明黄褐色	1～3mmの 石英を 含む	多重口縁 頸部に貝殻復縁による刻み目・平行沈線文あり
158	SK15 埋土中	第147図 PL.68	土師器 器　台	器高：14.4cm 口径：25.6cm	全体の1/2	外面：ナデ 内面：受部ナデ、脚部ケズリ	にぶい橙色 橙色	密	
159	SK15 埋土中	第147図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△4.5cm	1/8以下	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：ナデ	橙色	1～3mmの 砂粒含む	
160	SK15 埋土中	第147図	不明	器高△5cm	1/8以下	外面：ナデ 内面：ケズリ	浅黄橙色	密	外面貝殻復縁による綾杉文あり

第63表　SK15出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F13	SK15 埋土中	第147図 PL.79	鋤（鍬）先	端部を折り返し受部をつくる 刃部欠損	6.1	10.3 刃長△13.5	0.4～0.7	205.7	身部内面に木柄装着痕明瞭に残る

SK24（第148・150図、第64表、PL.45・71）

Ｃ９グリッド南西、SX６の南隣に位置する。掘り込みは一段で、長さ１ｍ、幅0.76mの小型の土坑である。

主軸はN－67°－Wで、底面小口幅は北西側0.46m、南東側0.59mである。通常は墓とは認めがたい土坑であるが、他の土壙墓と埋土及び主軸がほぼ共通すること、位置関係などから、土壙墓群と何らかの関わりかある遺構であると判断した。

埋土は３層確認できた。

出土遺物はないが、埋土の状況などから、他の土壙墓と同時期のものであると考えられる。（大野）

SK28（第149・150図、第64表、PL.44）

C10グリッド南東、SX５の北隣に位置する。長さ0.92m、幅0.41m、深さ0.51mの小型土坑である。

主軸はN－56°－Wで、埋土は２層に分層できた。

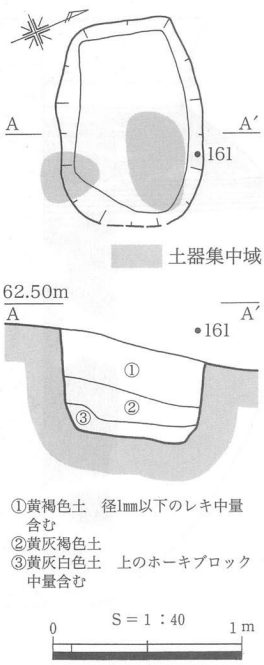
この土坑検出面の直上より、甕（162）が立位の状態で出土している。この甕は二重口縁をもち、底部は焼成後

穿孔されていた。この土坑の位置・主軸の方向から、土壙墓群となんらかの関係があったものであると考えられる。

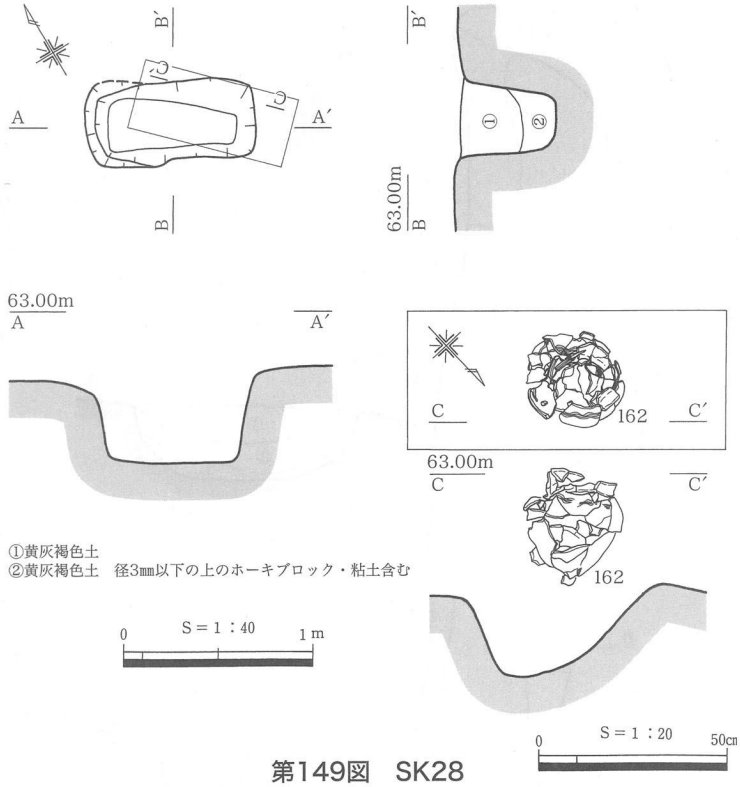
隣接するSX５直上から出土した土器の標高はほぼ63.00mを下面とするが、SK28直上の甕の場合、標高63.00mは口縁部上端の高さになる。両遺構の検出面はほぼ同一のレベルであるので、土器を供献した高さはSX５上の土器出土レベルである63.00mだとすると、このレベルを口縁部上端とする直立した甕は埋土中に埋められていたものと考えられる。

この甕は穿孔部を下面とする土器棺墓の可能性が考えられるが、甕底部とSK28底面との比高差は約40cmで、SK28に伴うものとすれば土器棺墓の可能性は低いと思われる。しかし、検出できなかったものの、上面に甕を埋納した別の土坑が存在した、という可能性は否定できない。いずれにせよ、土壙墓群に関係の深い遺物であることは間違いない。

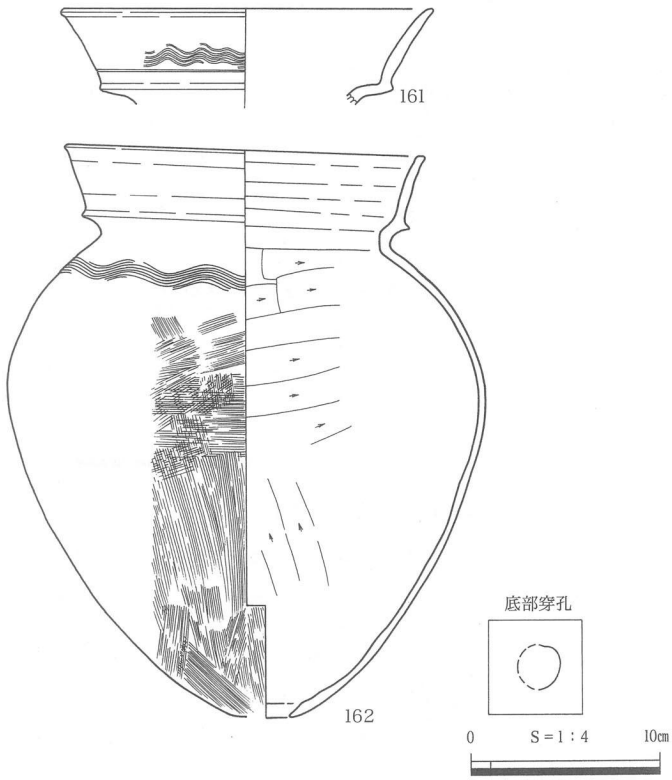
時期については出土した甕の年代から、他の土壙墓と同時期である弥生時代末～古墳時代初頭（天神川編年Ｉ期）が想定される。　（大野）



第148図　SK24



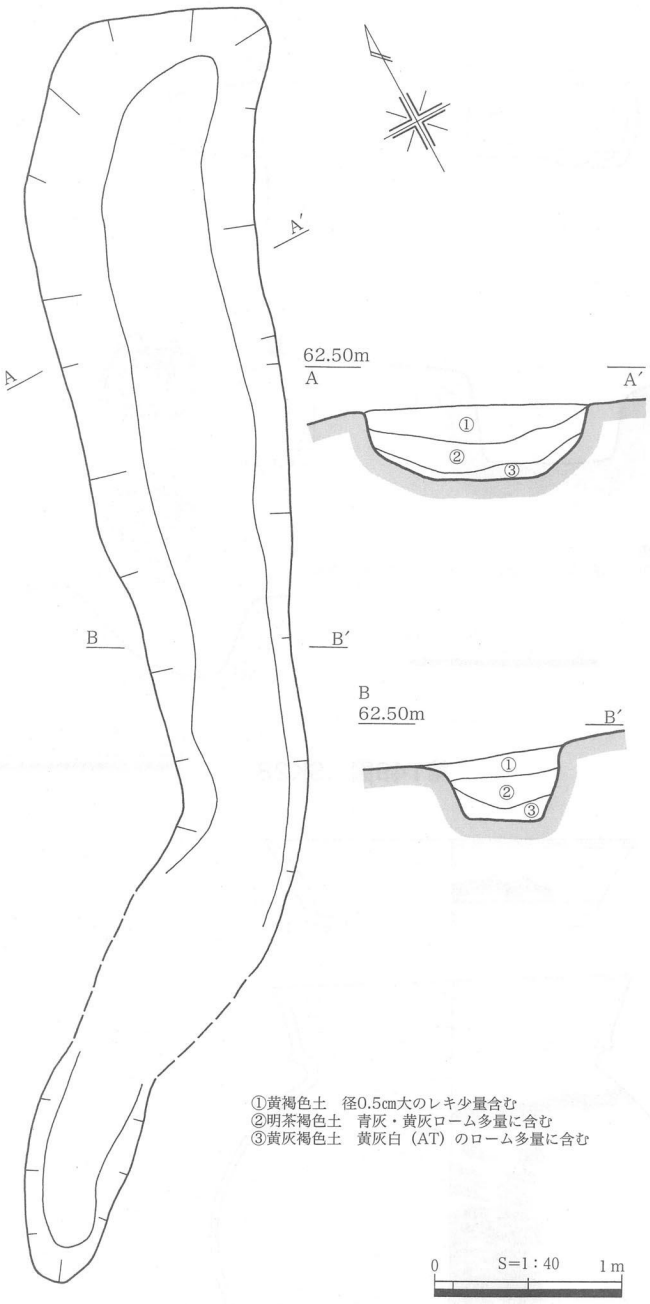
第149図　SK28



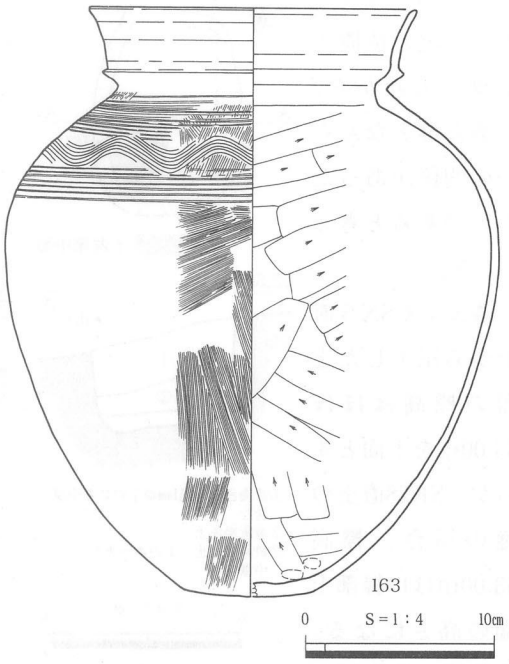
第150図　SK24・SK28出土遺物

第64表　SK24・28出土土器観察表

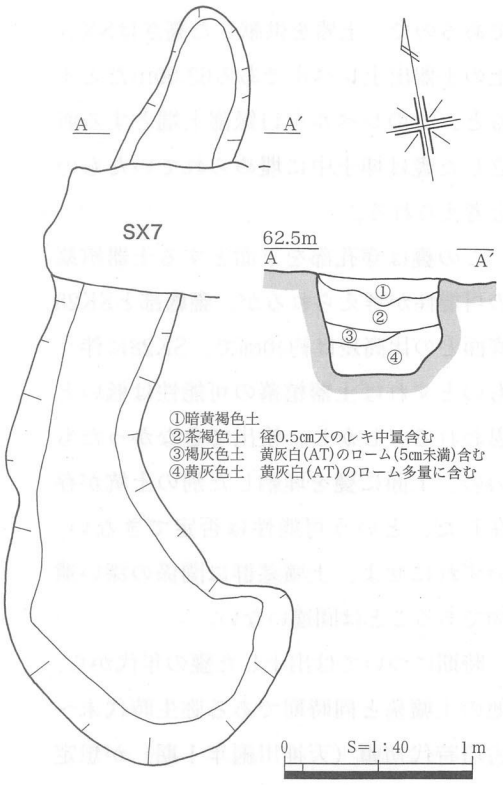
No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
161	SK24 埋土中	第150図 PL.71	土師器　甕 口縁部	器高△5.1cm 口径※19.6cm	口縁部1/6	外面：ナデ→口縁部波状文 内面：ナデ	にぶい黄橙色 橙色	砂粒多く含む	
162	SK28 埋土中	第150図 PL.69	土師器・甕	器高：30.6cm 口径：19.3cm	ほぼ完形	外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	1～2mm大の石英を多く含む	底部焼成後穿孔



第151図　SD35



第152図　SD35出土遺物



第153図　SD36

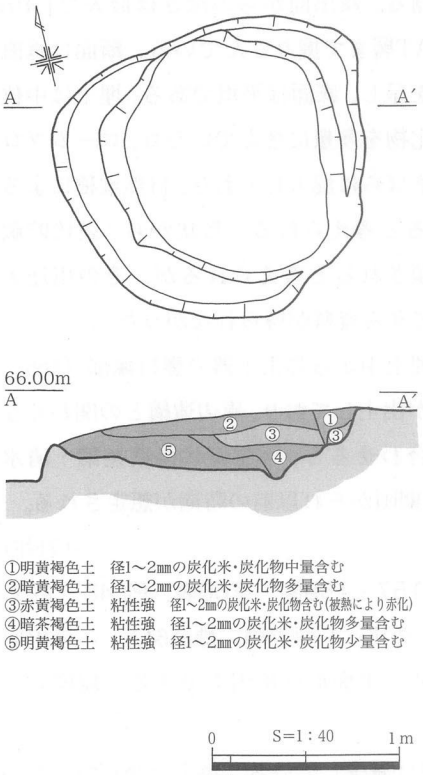
SD35・36（第151～153図、第65表、巻頭図版２、PL.69）

土壙墓の区画溝と考えられる２条の溝である。どちらの溝も北東方向に走っており、土壙墓群の主軸とほぼ直交する角度である。両溝の間隔は約7mで、ちょうどその中間に中心主体であるSX４がある。どちらも基本層序のⅤ層である上のホーキ火山灰層を掘り込んでいる。

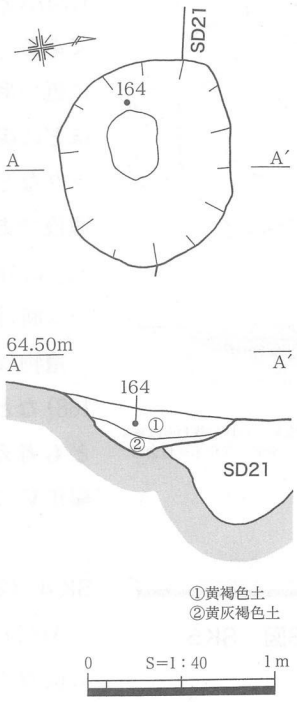
SD35は長さ6.9m、最大幅1.22m、深さ0.4mの溝で、北東から4.5mの地点で南西方向に屈曲している。埋土は３

第65表　SD35出土土器観察表

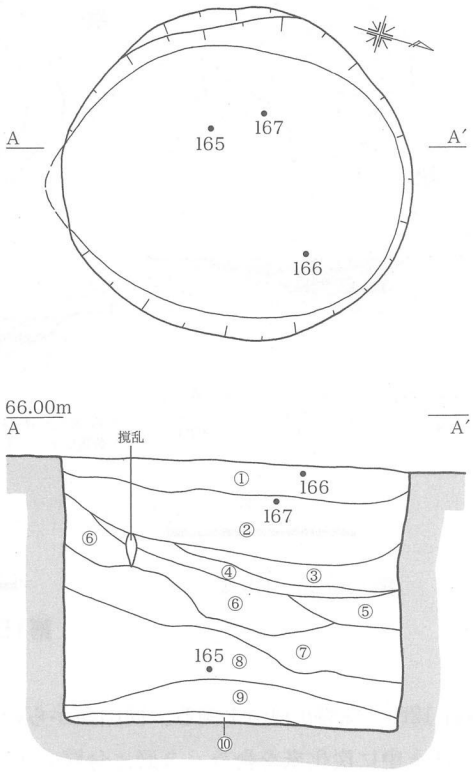
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔㎝〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
163	SD35 埋土中	第152図 PL.69	土師器　甕	器高：31.3㎝ 口径：17.5㎝	ほぼ完形	外面：口縁部ナデ、肩～底部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	1～3㎜大の石英を多く含む	肩部に平行線・波状文めぐる



第154図　SK1



第155図　SK2



第156図　SK3

層確認できた。出土遺物として土師器甕が埋土中より出土している。

SD36は長さ4.2m、最大幅1.13m、深さ0.51mの溝で、北東から2.8mの地点で南東方向に屈曲している。埋土は４層確認できた。埋土中より遺物は出土しなかったが、SD36が掘削された後にSX７が造られており、この溝が中心主体であるSX４を区画するために掘削されたものであるとすれば、土壙墓群中には土器型式差として現れない程度の時期幅が存在するということがいえる。　（大野）

（４）土坑

SK１（第154図、PL.48）

A区I13グリッド南西側、標高65.9mの平坦面に位置する。SI６の西側に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.77m、短軸1.48mを測る。検出面からの深さは最大で0.37mである。埋土は、炭と焼土とともに炭化米を多量に含む。土層中に炭化米を含む割合は、第②・第④層が最も多く、間に厚い焼土の堆積を挟む。その他は少量でまばらに混じっている状況であった。底面に被熱硬化面などは見られなかった。また現場において層ごとに炭化米のみを抽出した結果、総量は4630gになった。他の遺物は出土していない。

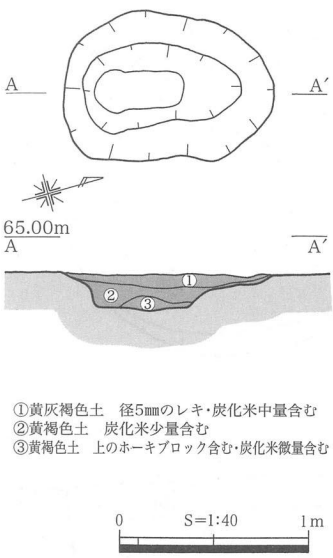
時期決定に関して、炭素14年代測定法の分析を依頼した結果（第５章第４節）、古墳時代中期後葉から後期前半頃の測定結果が得られており、該期の竪穴建物と何らかの関係があったのではないかと考えられる。　（岩井）

SK２（第155・159図、第66表、PL.72）

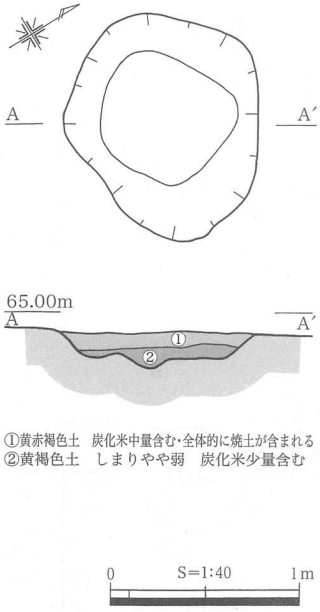
A区D９グリッド南西側、標高64.3mの平坦面に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.1m、短軸0.9mを測る。検出面からの深さは最大で0.51mである。埋土は自然堆積によると考えられる。調査区中央北よりに位置するSD21を切っている。遺物は須恵器片（164）が埋土中より出土しているが、周辺遺構からの流入と考えられ時期は古墳時代以降で、新しい時期のものであると考えられる。　（岩井）

SK３（第156・159図、第66表、PL.49・72）

A区G11グリッド中央東寄り、標高65.8mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.87m、短軸



第157図　SK4



第158図　SK5

1.74mを測る。検出面からの深さは最大で1.4mである。AT層まで掘りこんでいる。断面は垂直に近い形を呈し、底面は平坦である。埋土は中位ほどに炭化物を多量に含んでいたり、ロームブロックなどまばらに混入しており、自然堆積による埋没であると考えられる。形状から「袋状貯蔵穴」に分類されると考えられるが、その用途までは断言できる資料が得られなかった。

遺物は埋土中から弥生土器の甕口縁部（165～168）などが出土しており、周辺遺構との関わりなども考え合わせると、弥生時代後期後葉・清水編年Ⅴ-３期頃かそれ以前の時期が想定される。

（岩井）

SK４（第157・159図、第66表、PL.48・72）

A区Ｈ９グリッド南東側、標高64.8mの平坦面に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.12m、短軸0.74mを測る。検出面からの深さは最大で0.21mである。

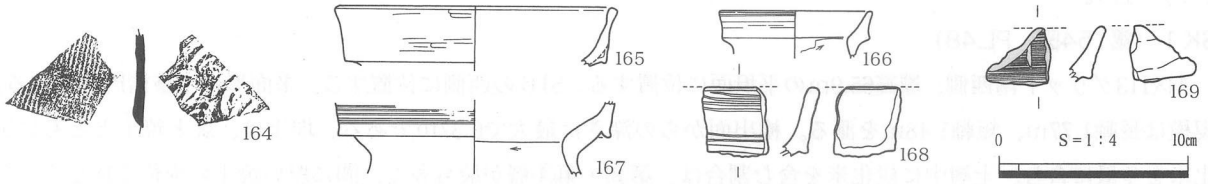
埋土中に炭化米を含み、３層に分層できる。下層に行くほど含まれる量は減少している。焼土は含んでいなかった。底面に被熱硬化面は見られなかった。炭化米総量は55gになり、SK１と比べるとかなり少量である。

遺物は埋土上層で弥生土器の甕口縁部（169）が出土しているが、周辺遺構からの流入と考えられる。ただし、他の炭化米を含む土坑の炭素14年代測定の結果から、古墳時代中期後葉から後期前半という測定結果が得られており、当遺構も同時期の可能性が高い。

（岩井）

SK５（第158、PL.48図）

A区Ｈ９グリッド南東側、標高64.9mの平坦面に位置する。SK４の南側に位置する。平面形は不整円形である。規模は長軸1.24m、短軸0.86mを測る。検出面からの深さは最大で0.23mである。底面は不整で凹凸が見られる。埋土中に炭化米を含み、規模や検出状況がSK４と近似している。炭化米を含む層は2層に分かれ、下層の方が少ない。



第159図　SK2・SK3・SK4出土遺物

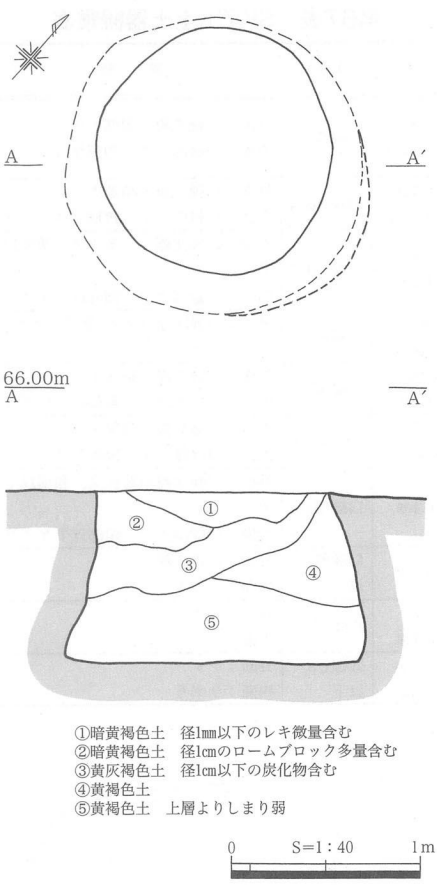
第66表　SK２・３・４出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
164	SK2 第1層中	第159図 PL.72	須恵器 胴部	器高△5cm	全体の1/8 以下	外面：平行タタキ 内面：当て具痕あり	黒黄色 青灰色	密	外面自然釉かかる
165	SK3 第8層中	第159図 PL.72	弥生 口縁部	器高△3cm 口径※14.4cm	口縁部1/8	内外面：ナデ→ミガキ	橙色	1mm以下の 砂粒含む	内外面に煤付着
166	SK3 第1層中	第159図 PL.72	甕　口縁部	器高△2.3cm 口径※8cm	口縁部1/6	外面:口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	暗灰色	密	外面煤付着
167	SK3 第2層中	第159図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△3.8cm 口径※15cm	口縁1/6	外面:口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密	外面煤付着
168	SK3 埋土中	第159図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△3.6cm	1/8以下	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色	密	外面煤付着
169	SK4 第2層中	第159図 PL.72	弥生 口縁部	器高△3cm	1/8以下	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：ナデ	灰色	密	外面赤彩

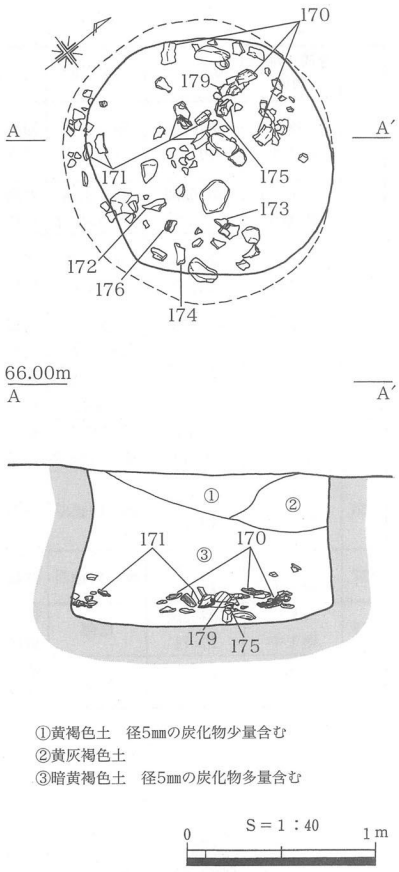
上層にのみ焼土が多量に混じり、全体的に赤く見える。土坑内に被熱硬化面は見られない。炭化米総量は340gになり、SK４よりかなり多く炭化米を含んでいる。他に遺物は出土していないが、SK１と同様炭素14年代測定法の結果、古墳時代中期後葉から後期前半の測定結果が得られている。　（岩井）

SK６（第160、PL.49図）

A区G12グリッド北東側、標高65.4mの平坦面に位置する。平面形は上縁部・底面部ともに円形である。規模は上縁部で長軸1.33m、短軸1.25m、底面で長軸1.66m、短軸1.57mを測る。AT層まで掘りこんでいる。断面形はやや袋状を呈し、上縁部から最大0.23m底面縁辺部が壁際に入り込む。底面は平坦である。検出面からの深さは最大で0.9mである。



第160図　SK6

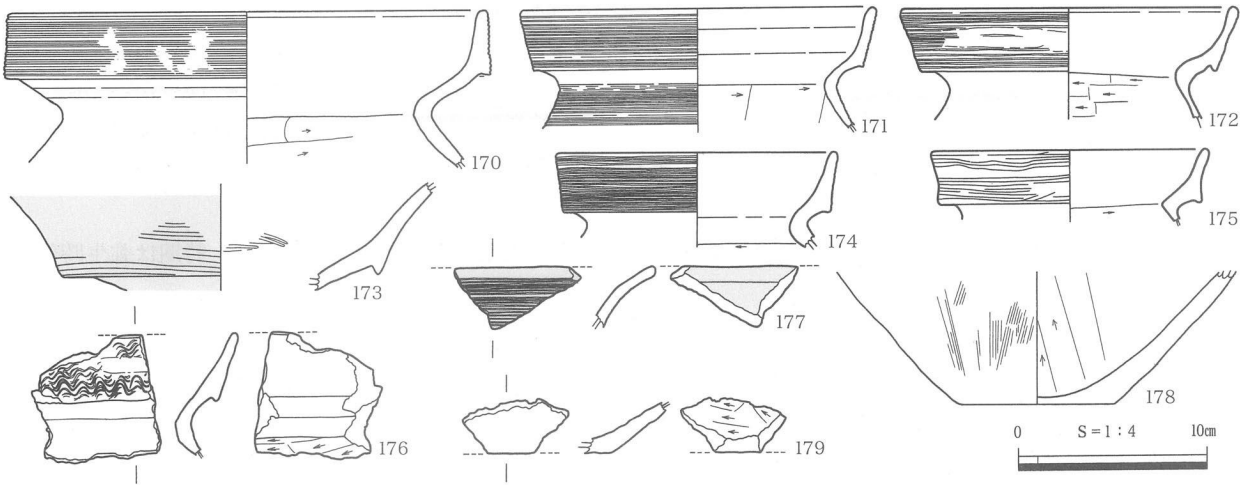


第161図　SK7

埋土は、中位に炭化物を含む層が堆積しているが、SK３と同様自然堆積によるものと考えられ、時期・用途とも不明である。遺物は埋土中から出土したが、小破片であったため図化するに至らなかった。　（岩井）

SK７（第161・162図、第67表、PL.49・71・72）

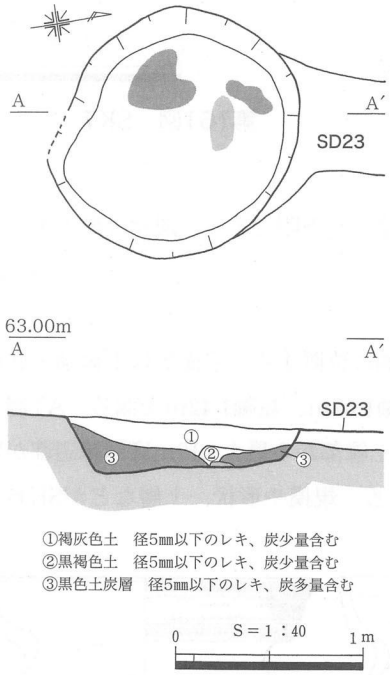
A区G12グリッド北東側、標高65.6mの平坦面に位置する。SK６の南西側に位置する。平面形は上縁部・底面部ともに円形である。規模は上縁部で長軸1.38m、短軸1.21m、底面で長軸1.52m、短軸1.42mを測る。AT層まで掘りこんでいる。断面形は片側にゆるやかなくびれを持つ袋状を呈し、上縁部から最大0.18m底面縁辺部が壁際に入り込む。底面は平坦である。検出面からの深さは最大で0.95mである。規模や形状、土層などがSK６と近似している。



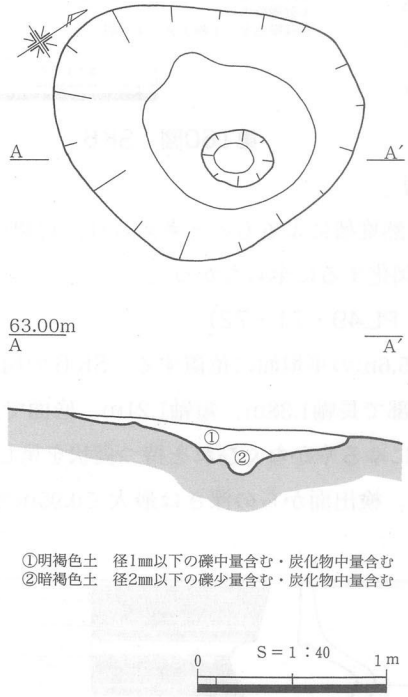
第162図　SK7出土遺物

第67表　SK7出土土器観察表

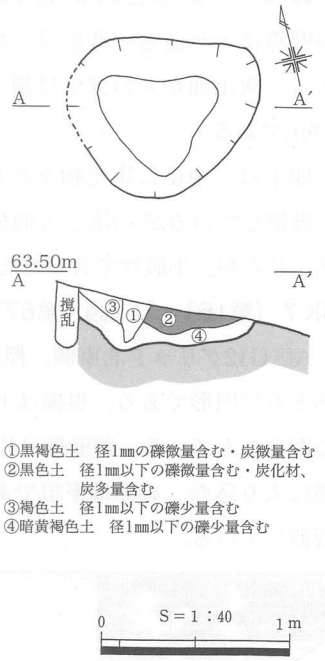
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
170	SK7 埋土中	第162図 PL.71	弥生　甕 口縁部	器高△7.9cm 口径※25.4cm	口縁部2/5	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	橙色 にぶい黄橙色	やや祖 3～5mm大 の礫含む	摩滅著しい
171	SK7 第3層中	第162図 PL.72	弥生土器 甕　口縁部	器高△6.4cm 口径：19.6cm	口縁部3/4	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙	密	頸部外面平行沈線文 口縁部煤付着
172	SK7 埋土中	第162図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△5.9cm 口径※18cm	口縁部1/5	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密	
173	SK7 埋土中	第162図 PL.72	弥生 器台　受部	器高△5cm 口径※15cm	口縁部1/4	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：ミガキ	黄橙色	密	
174	SK7 埋土中	第162図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△5cm 口径※15cm	口縁部1/4	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	黄橙色	密	
175	SK7 埋土中	第162図 PL.72	弥生土器 甕　口縁部	器高△3.7cm 口径※14.8cm	口縁部1/6	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	褐灰色 にぶい黄橙色	1mm大の 砂粒含む	
176	SK7 埋土中	第162図 PL.72	甕　口縁部	器高△6.4cm	口縁部1/6	外面：口縁沈線→波状文、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	淡黄色	密	
177	SK7 埋土中	第162図 PL.72	甕　口縁部	器高△3.2cm	口縁部1/8 以下	外面：口縁沈線 内面：ミガキ	赤褐色	密	内外面赤彩
178	SK7 埋土中	第162図 PL.71	底部	器高△7cm 底径※8.4cm	1/8以下	外面：ハケ 内面：ケズリ	にぶい橙色	密	
179	SK7 埋土中	第162図	底部	器高△2.9cm 底径※10cm	底部1/8 以下	外面：ナデ 内面：ケズリ	橙色	密	



第163図　SK8



第164図　SK9



第165図　SK10

遺物（170～179）は、弥生土器の甕口縁部・底部を中心に床面直上で多量に出土しており、時期は弥生時代後期後葉・清水編年Ⅴ-３期頃が想定される。（岩井）

SK８（第163図）

A区D８グリッド東側、標高62.6mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.4m、短軸1.22mを測る。検出面からの深さは最大で0.3mである。

遺構検出時から土坑内埋土に炭化物が多量に認められた。断面は台形を呈し、底面は平坦である。

埋土は３層に分層でき、下層に行くほど炭化物を多く含む。底面には、焼土が厚く堆積しており、直下には被熱

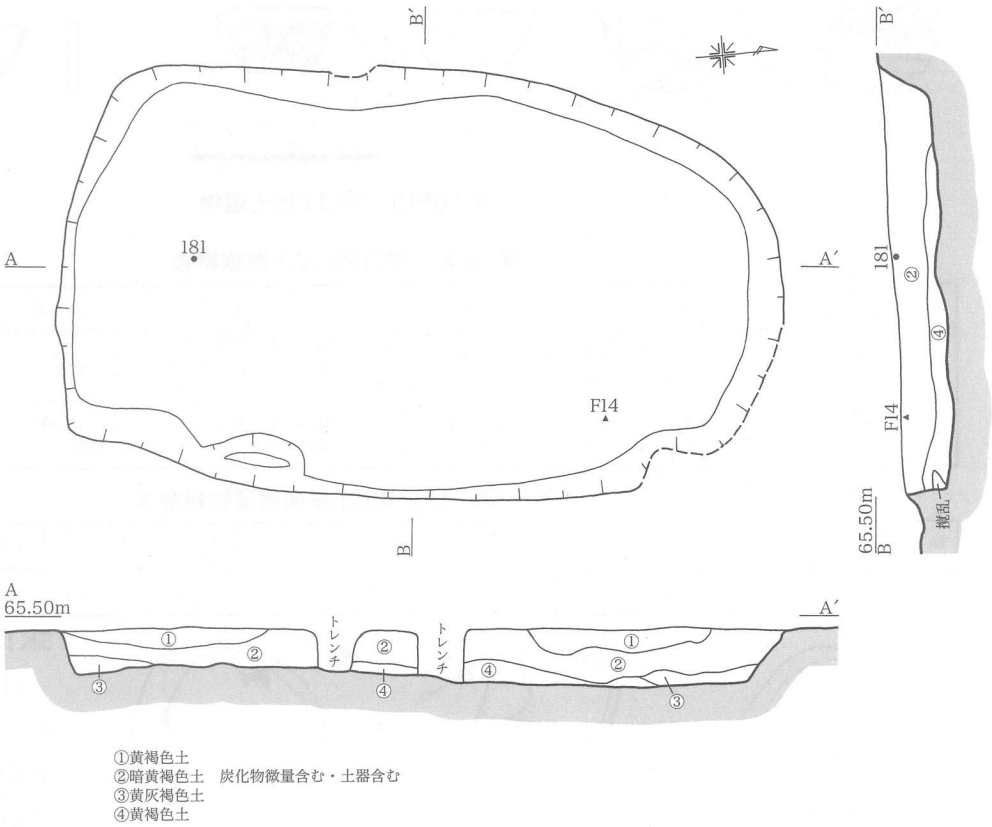
硬化面が見られた。また、溝であるSD23を切っている。遺物は出土していない。（岩井）

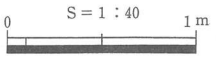
SK９（第164図）

Ａ区Ｃ９グリッド中央南寄り、標高62.6mの平坦面に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.62m、短軸1.18mを測る。検出面からの深さは最大で0.32mである。

底面にピット状の窪みがみられ、炭化物を多量に含む。遺物は出土していない。

（岩井）





第166図　SK12

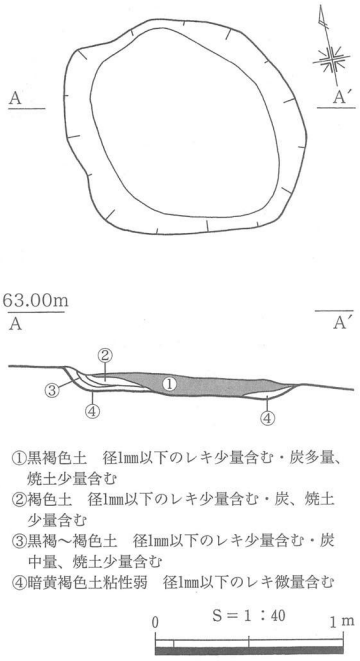
SK10（第165図）

Ａ区Ｅ８グリッド中央北寄り、標高63.4mの平坦面に位置する。平面形は不整円形である。規模は長軸1.0m、短軸0.74mを測る。検出面からの深さは最大で0.39mである。SK８と同様の検出状況であった。

形状は浅い窪み状で、炭化物を多量に含む層は上層に限られた。また、焼土など含んでいなかった。遺物は出土していない。（岩井）

SK11（第167図）

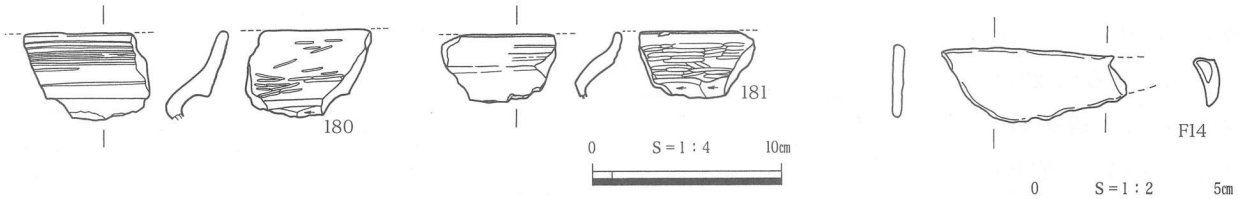
Ａ区Ｅ８グリッド北側、標高62.7mの平坦面に位置する。SK10の北東側に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.4m、短軸1.2mを測る検出面からの深さは最大で0.17mである。SK８と同様の検出状況であった。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は全体的に黒く、炭化物を多量に含んでいた。炭化物の混ざり具合から３層に分層した。また、各層中の下層近くに薄い焼土の堆積が見られた。被熱硬化などの状況は見られなかった。遺物は出土していない。（岩井）



第167図　SK11

SK12（第166・168図・第68・69表、PL.50・72・79）

Ａ区Ｈ９グリッド北側、標高65.5～65.2mの緩やかな斜面上に位置する。SI９の東側に位置する。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸3.84m、短軸2.1mを測る。検出面からの深さは最大で0.29mである。当初、小型の竪穴建物と想定し掘り下げていたが、周壁溝もピットもなく遺構の性格を判断できなかったため土坑として扱った。底面は平坦である。遺物は、埋土上層上位で弥生土器の甕口縁部（180・181）、鉄器（F14）が出土したが、周辺遺構からの流入と考えられるため、時期は不明であるが、出土遺物の時期である弥生時代後期後葉以降のものであると考えられる。（岩井）



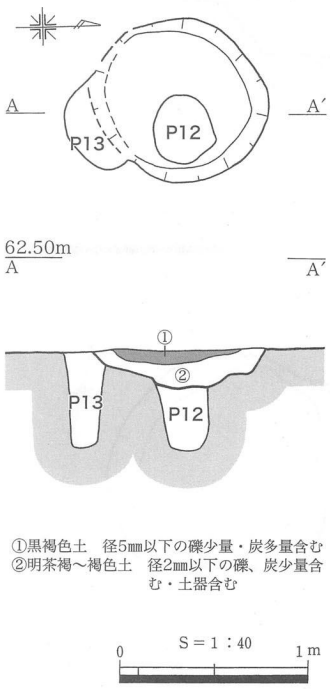
第168図　SK12出土遺物

第68表　SK12出土土器観察表

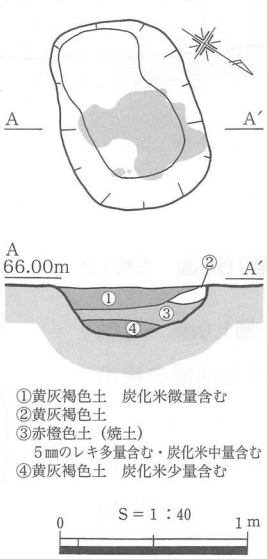
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
180	SK12 埋土中	第168図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△4.6cm 口径※17.6cm	口縁部1/8 以下	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁上半ミガキ、下半ナデ 頸部ケズリ	灰黄色	1mm大の 砂粒多く 含む	口縁下端部に煤付着
181	SK12 第2層中	第168図 PL.72	弥生　甕 口縁部	器高△3.6cm 口径※14.0cm	口縁1/8 以下	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	にぶい橙色 橙色	0.5mm以下 の砂粒 少し含む	外面摩滅

第69表　SK12出土鉄関連遺物観察表

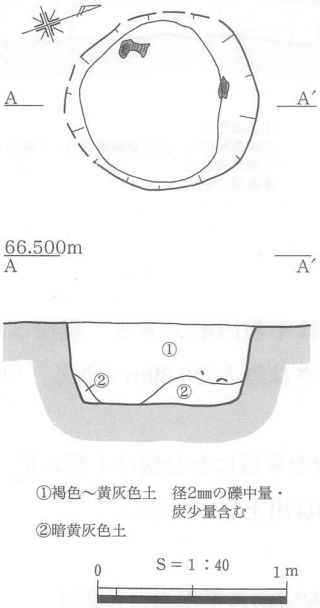
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F14	SK12 埋土中	第168図 PL.79	鉄片	断面片側に向かってやや先細りする	4.6	1.2～2	0.2～0.6	6.9	



第169図　SK13



第170図　SK16



第171図　SK17

SK13（第169図）

A区D８グリッド東側、標高62.0mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸0.9m、短軸0.85mを測る。検出面からの深さは最大で0.15mである。SK８と同様埋土中に炭を多量に含む。２層に分層でき、上層の方が炭を多く含む。そのほか、P12・13を切っている。遺物が底面付近で出土したが、図化できるほど残りがよくなかった。

（岩井）

SK14（第172・173図・第70表・PL.50・72）

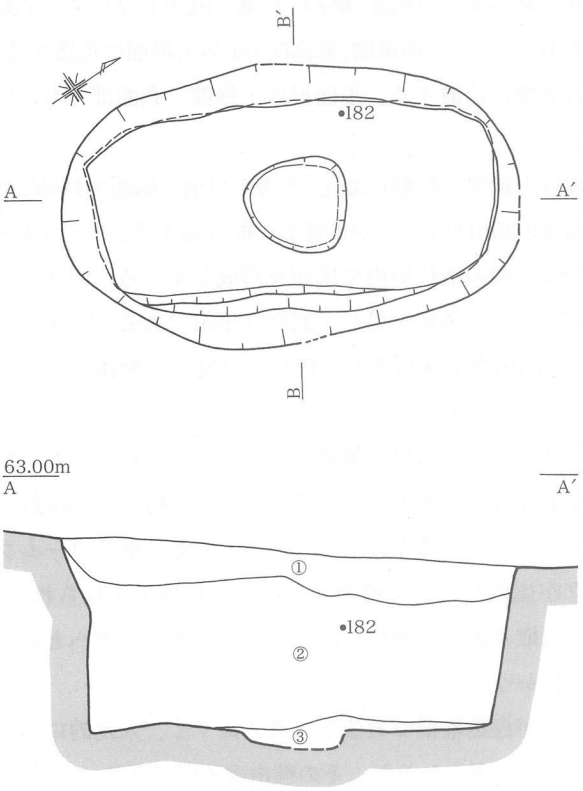
A区C10グリッド西側、標高62.7mの平坦面に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸2.44m、短軸1.41mを測る。検出面からの深さは最大で1.09mである。底面には浅い円形のピット状の窪みがある。長軸0.55m、短軸0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は自然堆積によるものと思われる。

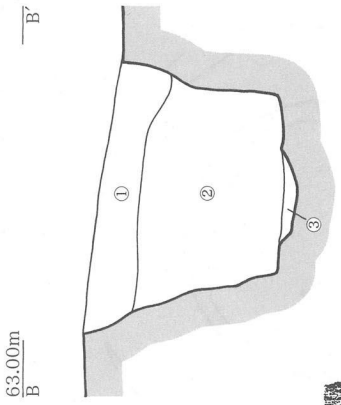
遺物は埋土中から縄文土器の胴部片（182）が出土しているが、破片であるため時期比定は困難である。ただ、出土遺物・遺構の形態上の特徴から縄文時代の落とし穴であった可能性がある。（岩井）

SK16（第170図、PL.48）

A区H11グリッド北西側、標高66.0mの平坦面に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸0.95m、短軸0.7m、深さは0.27mを測る。

埋土に炭化米を含む。炭化米を含む層は３層に分層できた。各層とも含まれる量が少量であるが、中でも第③層が多く、焼土も多量に含んでいるため全体が赤く見える。土坑内に被熱硬化面は見られない。炭化米総量は40gになる。他に遺物は出土していないが、SK１と同様放射性炭素14年代測定法の結果、古墳時代中期後葉から後期前半頃のものであるという測定結果が得られている。（岩井）





①明黄褐色土
②黄褐色土　径2cmの上のホーキブロック少量含む
③明赤褐色土　しまり弱

S＝1：40
0　1m

第172図　SK14

0　S＝1：4　10cm

第173図
SK14出土遺物

第70表　SK14出土土器観察表

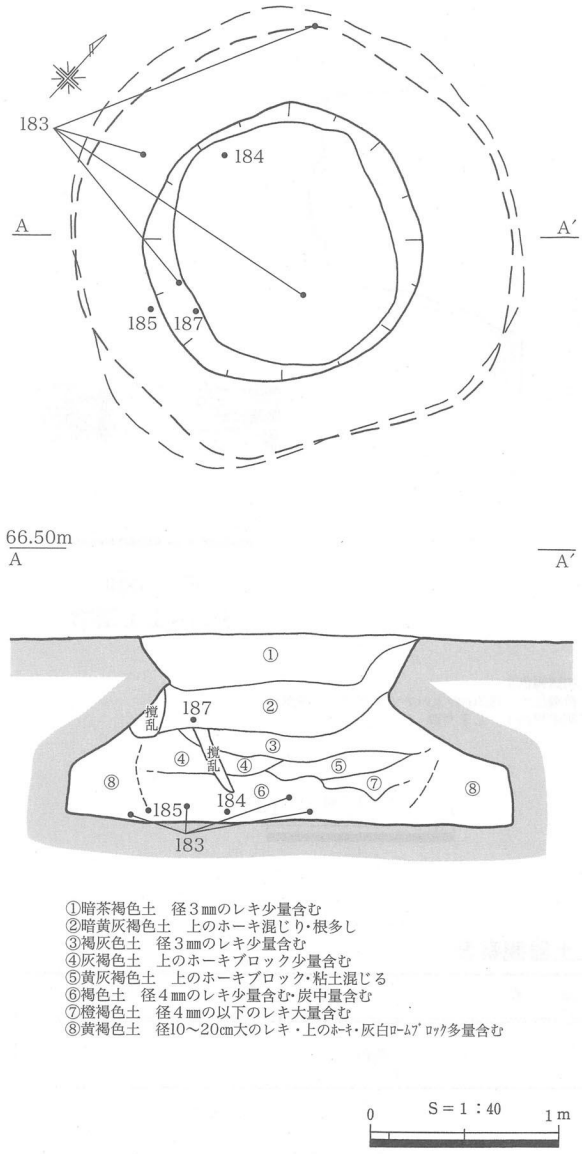
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
182	SK14 第2層中	第173図 PL.72	縄文土器 胴部片	器高△3.8cm	1/8以下	外面：粗いナデ 内面：ナデ	橙色	密	

SK17（第171図、PL.50）

A区I11グリッド中央東寄り、標高66.0mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸１m、短軸0.94mを測る。検出面からの深さは最大で0.46mである。断面はほぼ垂直に掘りこんでおり、底面は平坦である。底面上に、ブロック状の炭化材を検出した。埋土は自然堆積であると思われる。遺物は出土していない。

（岩井）

写真14　考古学実習（鳥取短期大学）



第174図　SK18

SK18（第174～176図・第71・72表、PL.51・71・72・79）

A区H12グリッド南東側、標高66.0mの平坦面に位置する。SI５の北側に位置する。平面形は上縁部・底面部ともに円形である。

規模は上縁部で長軸1.52m、短軸1.41m、底面で長軸2.48m、短軸2.26mを測る。AT層まで掘り込まず、「上のホーキ」層との間の漸位層内で床面を形成している。断面形はくびれが目立つ袋状を呈し、底面は平坦である。上縁部から最大0.55m底面縁辺部が壁際に入り込む。検出面からの深さは最大で１mである。

埋土は基本的には自然堆積であると考えられる。ただ底面周縁をぐるりと埋めていた埋土のみに、約10～20㎝程の小児頭大の石とともに、「上のホーキ」やその他のロームブロックが比較的大きな塊で混入している様子が見られた。それらを取り除くと遺物が出土し、壁がさらに奥へと続くことが分かった。

これらが自然堆積であるとは考えにくく、人為的に埋められたものと考えれるが、その理由は不明である。

遺物は、底面直上から、弥生土器の甕（183・185）、壷（186）、底部（188）、鉈（F15）などが出土している。

これら遺物から弥生時代後期後葉・清水編年Ⅴ-３様式期頃が想定される。（岩井）

SK19（第177図）

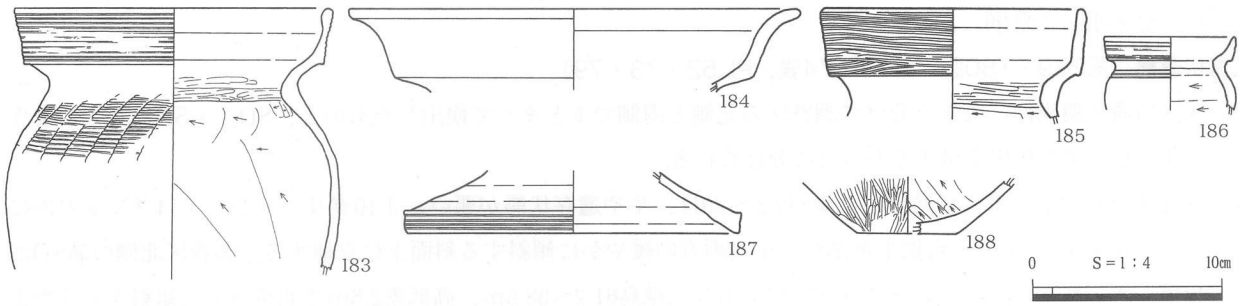
A区E８グリッド中央西寄り、標高63.8～63.5mのゆるやかな斜面上に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.4m、短軸1.05mを測る。検出面からの深さは最大で1.64mである。

第71表　SK18出土土器観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
183	SK18 第6・8層中	第175図 PL.71	弥生　甕 口縁～胴部	器高△14cm 口径：17.1cm	口縁部 ほぼ完存	外面：口縁沈線→一部ナデ、頸部ナデ→一部ミガキ、頸部以下ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部ミガキ、頸部以下ケズリ	黄橙色	密	外面煤付着 肩部に押し引き沈線文あり
184	SK18 第6層中	第175図 PL.72	高坏　受部	器高△4.4cm 口径※24.2cm	1/4以下	外面：ナデ 内面：ケズリ→ナデ	橙色	1～2㎜の砂粒含む	
185	SK18 第6層中	第175図 PL.71	弥生　甕 口縁～頸部	器高△5.7cm 口径：14.2cm	口縁部2/3	外面：口縁沈穿、頸部ナデ 内面：口縁ナデ、頸部ミガキ、頸部下ケズリ	にぶい黄橙色	0.5㎜大の砂粒を含む	
186	SK18 埋土中	第175図 PL.72	弥生 小型壷 口縁～胴部	器高△3.9cm 口径※7cm	1/2以下	外面：口縁沈線→ナデ、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	密 砂粒多く含む	外面肩部に平行沈線文あり
187	SK18 第2層中	第175図 PL.72	脚部	器高△3.1cm 底径※18cm	底部1/4以下	外面：脚部ナデ、端部沈線 内面：ケズリ→ナデ	橙色	1～2㎜の砂粒含む	
188	SK18 埋土中	第175図 PL.72	底部	器高△2.6cm 底径※5.3cm	底部1/4以下	外面：ミガキ、底面ナデ	暗灰黄色	密 砂粒多く含む	

第72表　SK18出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F15	SK18 埋土中	第176図 PL..79	鉈	刃部は反り、断面はやや湾曲する	8.1	1.1～1.8	0.4	16.8	



第175図　SK18出土遺物（1）

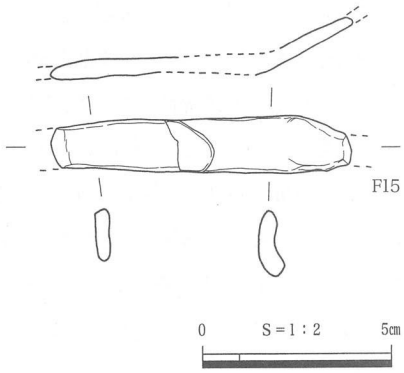
埋土は上層で炭が混じるが、自然堆積によるものと考えられる。落とし穴状遺構かと思われたが、底面にピットなどは見られなかった。

遺物は出土しておらず、この遺構の時期・性格とも不明である。（岩井）

SK26（第178図・PL.51）

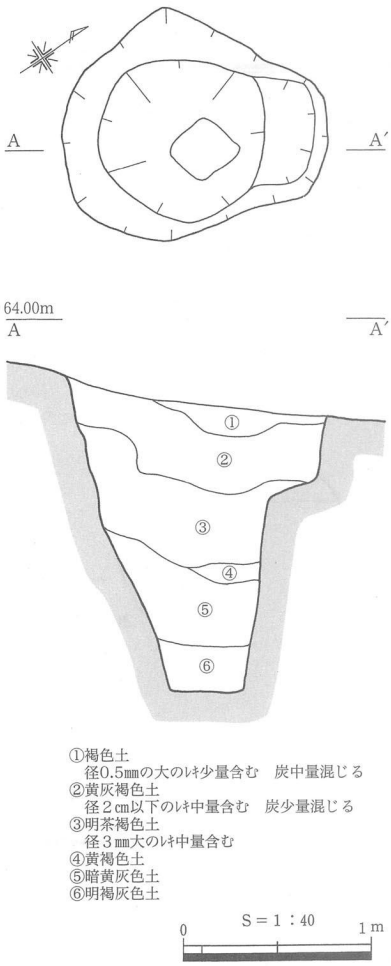
A区B10グリッド中央やや南寄り、標高61.5～61.1mの緩やかな斜面上に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.84m、短軸1.65mを測る。検出面からの深さは最大で0.47mである。

遺構確認時は上面に多量の礫（安山岩）が検出されたため、集石遺構と考えていたが、集石下に土坑を確認し、集石は土坑に伴うものと認識したものである。礫石には、炭化物が付着したものや、被熱による赤化した部分が見られるものが多く認められた。しかし礫石を覆う埋土には炭化物や焼土はほとんど見られなかったため、これらの礫は他の場所で被熱したものと考えられる。その下位の土坑でも、埋土上層に少量の炭化物が見られたのみであった。

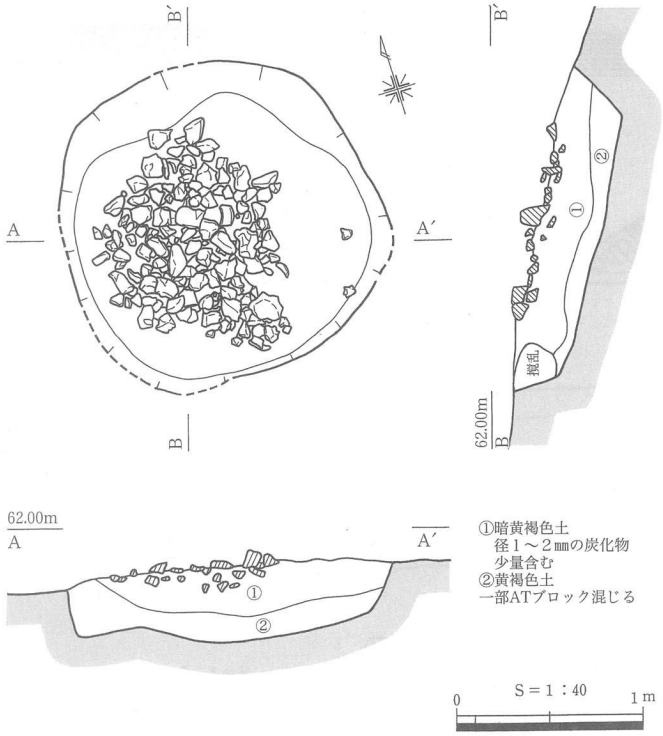


第176図　SK18出土遺物（2）

出土遺物としては、図化に耐えるものは出土しなかったが、A区南側で検出された竪穴建物と同時期である弥生時代後期後葉のものと思われる土器小片が、礫上より出土している。しかし、遺構の年代決定の根拠になるような出土状況ではなかったため、この遺構の年代・性格とも不明である。（岩井）



第177図　SK19



第178図　SK26

（5）その他の遺構

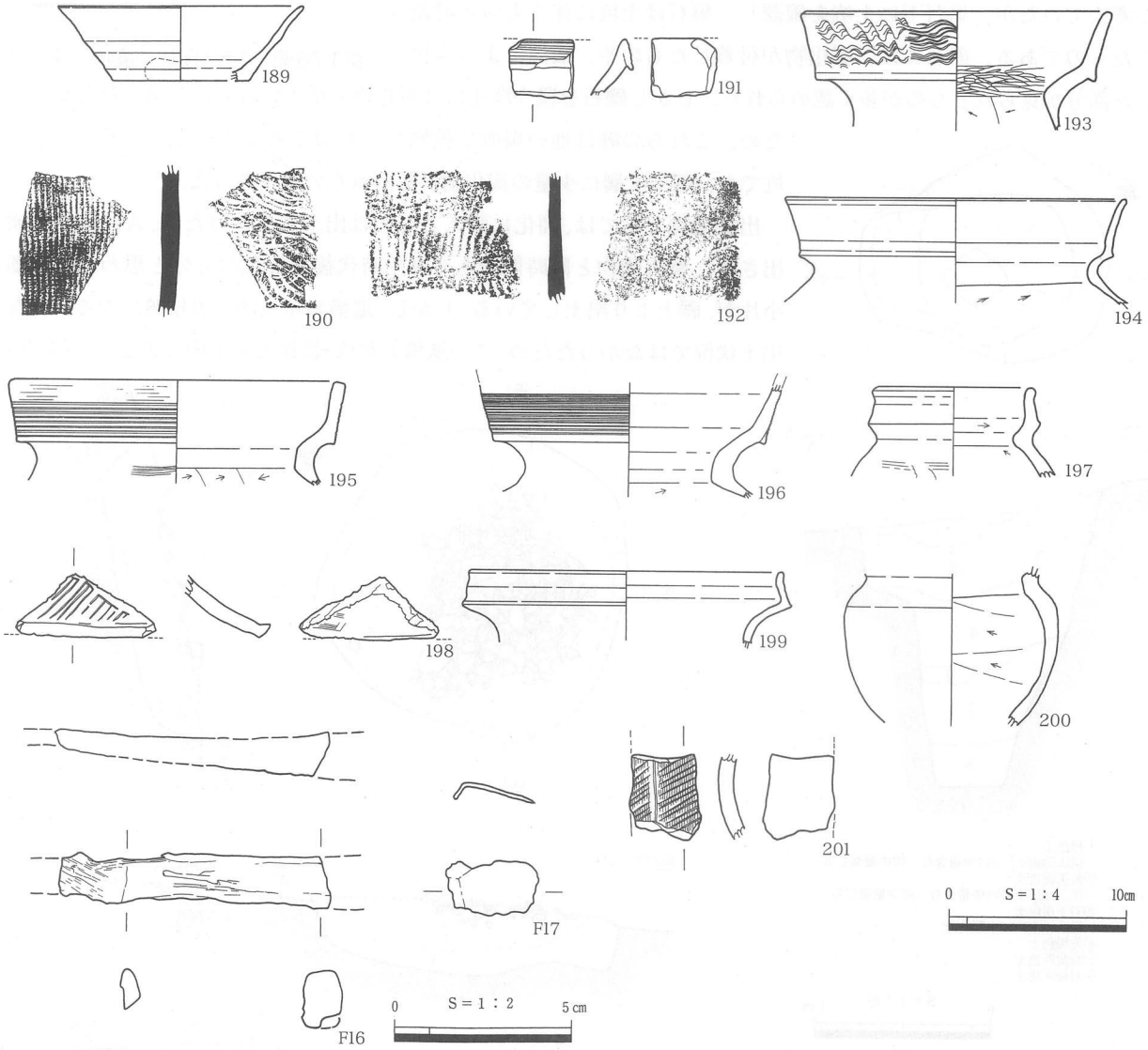
溝状遺構（第179・180図、第73・74表、PL.52・73・79）

Ａ区の溝状遺構は、大きく分けて調査区の北側と南側でまとまって検出したものと、SD１・SD21などのように、独立して走る様相を呈するものとに分けられる。

調査区南側でまとまって検出した溝SD２～20は、やや遺存状態が悪い。Ｊ10グリッドからＪ14グリッド内にあり、標高66.4～65.8m、台地平坦部から東西両方向緩やかに傾斜する斜面上に立地する。調査区北側の溝SD22～29は、Ａ７グリッドからＣ９グリッド内にあり、標高61.2～58.6m、高低差2.6mで北東方向に傾斜するややきつい勾配を持つ斜面上に立地する。溝の北側部分は撹乱により削平されているものが多い。遺構の特徴として、等高線に沿って走っているものはなく、東西に横断するもの、南北に縦断するものとに分けられる。溝内の深さは、斜面に至るとやや深めに掘り込まれているが、平坦面を走るものにそれほど高低差はない。

南側で検出された溝について、そのほとんどが竪穴建物と切り合っており、竪穴建物の埋土ごと掘りこまれている。溝同士の切り合いもあるが、埋土が単層の黄褐色土による自然堆積であり、その先後関係の判断は困難であった。断面は「U」字から逆台形状を呈し、幅は0.2～1.0m、深さは10～20cm程で比較的浅い溝である。ほとんどが同一方向で直線状に走っているが、中には「く」の字に折れているものや二股に分かれるものなどがある。雨水などの浸食により削られたものという可能性も考えられるものであるが、性格・時期とも不明である。

北側で検出された溝については、北東方向に傾斜する斜面上を直線状に走り、形状はほぼ同じである。断面は



第179図　SD1～27出土遺物

第73表　SD出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
189	SD1 埋土中	第179図 PL.73	口縁部	器高△4.3cm 口径※14cm	1/4以下	内外面：ナデ	橙色 淡赤橙色	密	
190	SD1 埋土中	第179図 PL.73	須恵器 胴部片	残存長 △7.9cm	1/4以下	外面：平行タタキ 内面：当て具痕あり	淡青灰色	密	
191	SD２ 埋土中	第179図	口縁部	器高△3.1cm	口縁部1/4 以下	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：ナデ	淡橙色 灰色	密 砂粒多く 含む	
192	SD3 埋土中	第179図 PL.73	須恵器 胴部片	残存長 △ 6.9cm	1/4以下	外面：平行タタキ 内面：当て具痕あり	青灰色	やや粗い 砂粒含む	摩滅著しい
193	SD16 埋土中	第179図 PL.73	甕 口縁～頸部	器高△6.5cm 口径※17.8cm	口縁部1/4	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ　頸部ミガキ 以下ケズリ	橙色	1mm以下の 砂粒含む	口縁外面に波状文
194	SD24 埋土中	第179図 PL.73	甕　口縁部	器高△6cm 口径※19.9cm	口縁部1/4 以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密	
195	SD24 埋土中	第179図 PL.73	甕　口縁部	器高△5.8cm 口径※19cm	口縁部1/5	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄橙色	密 粗い砂粒 含む	
196	SD24 埋土中	第179図 PL.73	弥生　甕 口縁部	器高△6.3cm 口径※17cm	口縁部1/5	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙 浅黄橙色	密	
197	SD24 埋土中	第179図 PL.73	土師器 甕 口縁～肩部	器高△5.1cm 口径※9.2cm	1/5以下	内外面ナデ	浅黄橙色	密	内外面摩滅
198	SD24 埋土中	第179図 PL.73	脚部	残存長 △ 3.5cm	1/6以下	外面：裾部ナデ 内面：ハケ→ナデ	にぶい黄橙色	1～2mm大 の砂粒 含む	外面に鋸歯文（篦） あり
199	SD27 埋土中	第179図 PL.73	壷 口縁部	器高△4.1cm 口径※17.9cm	口縁部1/4 以下	内外面ナデ	淡橙色	密	
200	SD27 埋土中	第179図	小型壷 胴部	器高△8.5cm 胴径※12.1cm	胴部1/4 以下	内外面ナデ	にぶい橙色	1～2mmの 砂粒含む	
201	SD27 埋土中	第179図 PL.73	脚部	残存長 △3.8cm	1/4以下	外面：ハケ 内面：ナデ	浅黄橙色	密	透孔穿孔痕あり 斜方向の刻み目文 あり

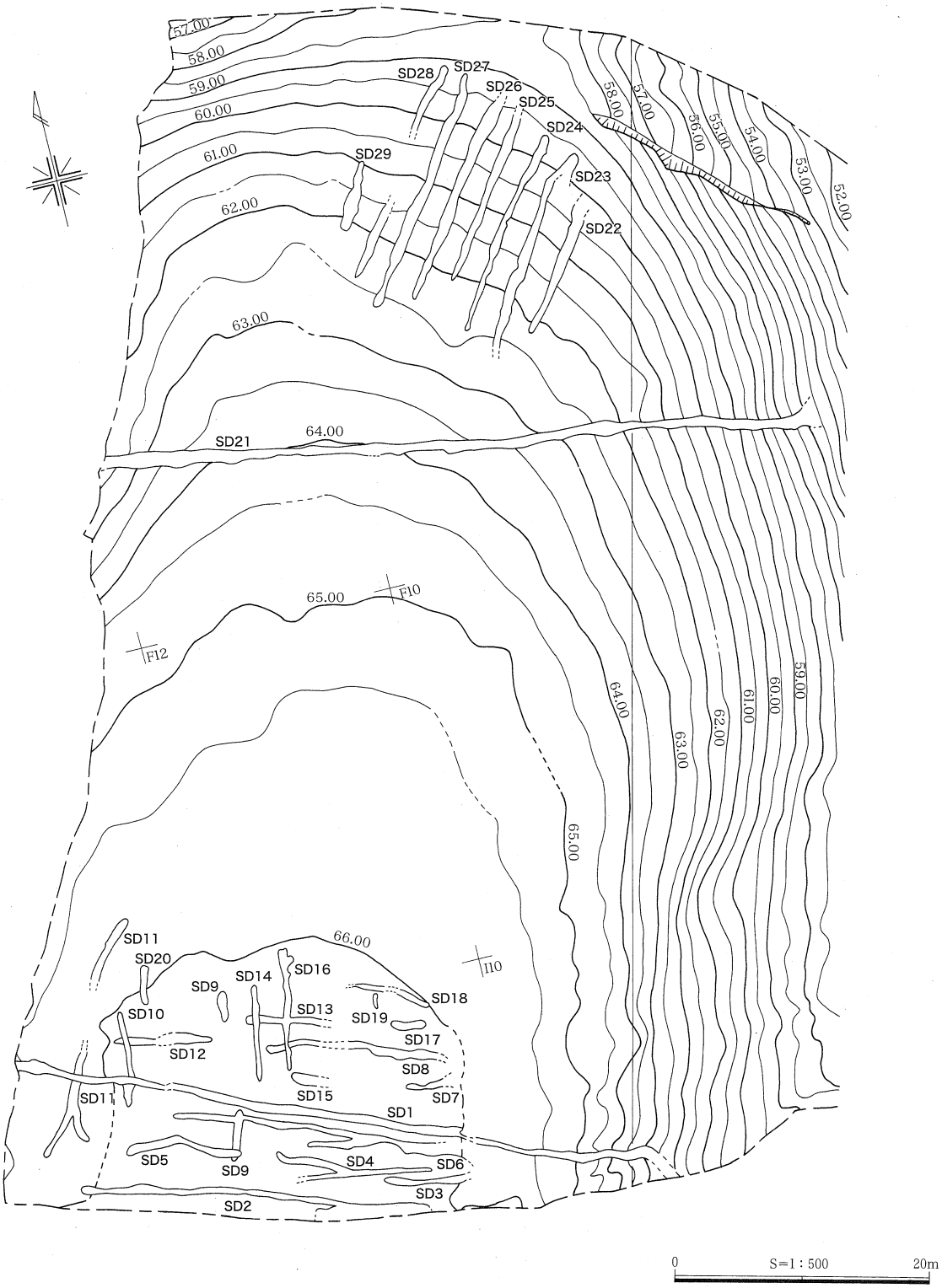
第74表　SD出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　　考
F16	SD4 埋土中	第179図 PL.79	棒状鉄製品	断面は方形を呈する	7.6	0.9～1.4	0.4～1.1	20.5	
F17	SD5 埋土中	第179図 PL.79	鉄片	不定形	2.5	1.4	0.1	2.7	

南側と同じく「U」字状から逆台形状を呈し、幅は0.2～1.2m、深さは10～40cm程で南側と比べるとやや深めである。SD23は、SK８により切られている。埋土は２層程度に分層でき、茶褐色土を主とした自然堆積土で、周辺遺構として墓孔の埋土と比べると、明らかに新しい様相を呈している。

SD１・21について、断面は「V」字状で、長さは残存長50～56m程、幅は0.3～1.5m、深さは40～70cm程で遺

写真15　SD21と調査区西側植林状況（東から）



第180図　溝状遺構配置図

存状態は良い。２本とも溝の西側は調査区外に延びている。SD１の東側も、調査区Ｂ区へ渡りさらに南側調査区外へ続いている様相が確認できた。SD21の東側は斜面下へと走るが、端は途切れていた。また、溝中央部で土坑２に切られている。SD１の埋土は３層に分層でき、ロームブロックを含んだ暗黄褐色土を主としている。SD21は５層に分層でき、黄褐色土を主としている。ともに自然堆積と考えられる。

遺物（189～201、Ｆ16・17）は弥生土器、土師質の甕、須恵器片、鉄などが出土している。切り合い関係などから明らかに竪穴建物や土坑群よりは新しいものであり、遺物はそれらからの流入であると考えられる。性格は、ほとんどが自然流路のみで形成されたものではないと考えているが、よくわからなかった。SD21に関しては、調査区西側の植林状況を観察すると、SD21を境として木の成長度合いに差が認められる（写真15）。時代は不明であるが、植林の際地割りに関わる境界線を溝によって区画したものとも推測される。（岩井）

ピット（第181図、第85・86表）

調査区北側Ｃ８グリッドから南側I12グリッド内にかけて分布し、標高66.3～60.0mの北側に傾斜する斜面上に立地する。総数107個のピットが検出された。直径は17～55cm程、深さは４～82cm程と様々である。ほとんどが単層である。

ピットの掘方の深さは25～50cm未満のものが大半であるが、50cmを越え深くなるものも見られる。

配置の傾向であるが、竪穴建物の密集地や土壙墓群とは離れた場所に立地していることと、傾斜の少ないほぼ平坦な地に広がっていることが言える。

遺物において、掘方埋土中に土器を包含していたものはほとんどなく、出土しても図化するまでに至らない破片のみで、時期は不明である。

ただし、P12・P13に関しては、SK13に切られており、SK13より古いことが分かっている。しかも、SK13は埋土に多量の炭を含む土坑で、周辺に近似した遺構としてSK８・９・10・11の土坑が挙げられる。また、SK８はSD23を切っており、SD23の方が古いことが分かっている。P12・13とSD23の埋土を比べて見ると、溝の埋土の方が新しい様相を呈しており、SDよりは古い時期のものであることが言える。

その他のピットすべてに関してそれが当てはまるかどうかは断言できないが、その他のピットの埋土にほとんど差異がなく、切り合いなどみられなかった。（岩井）

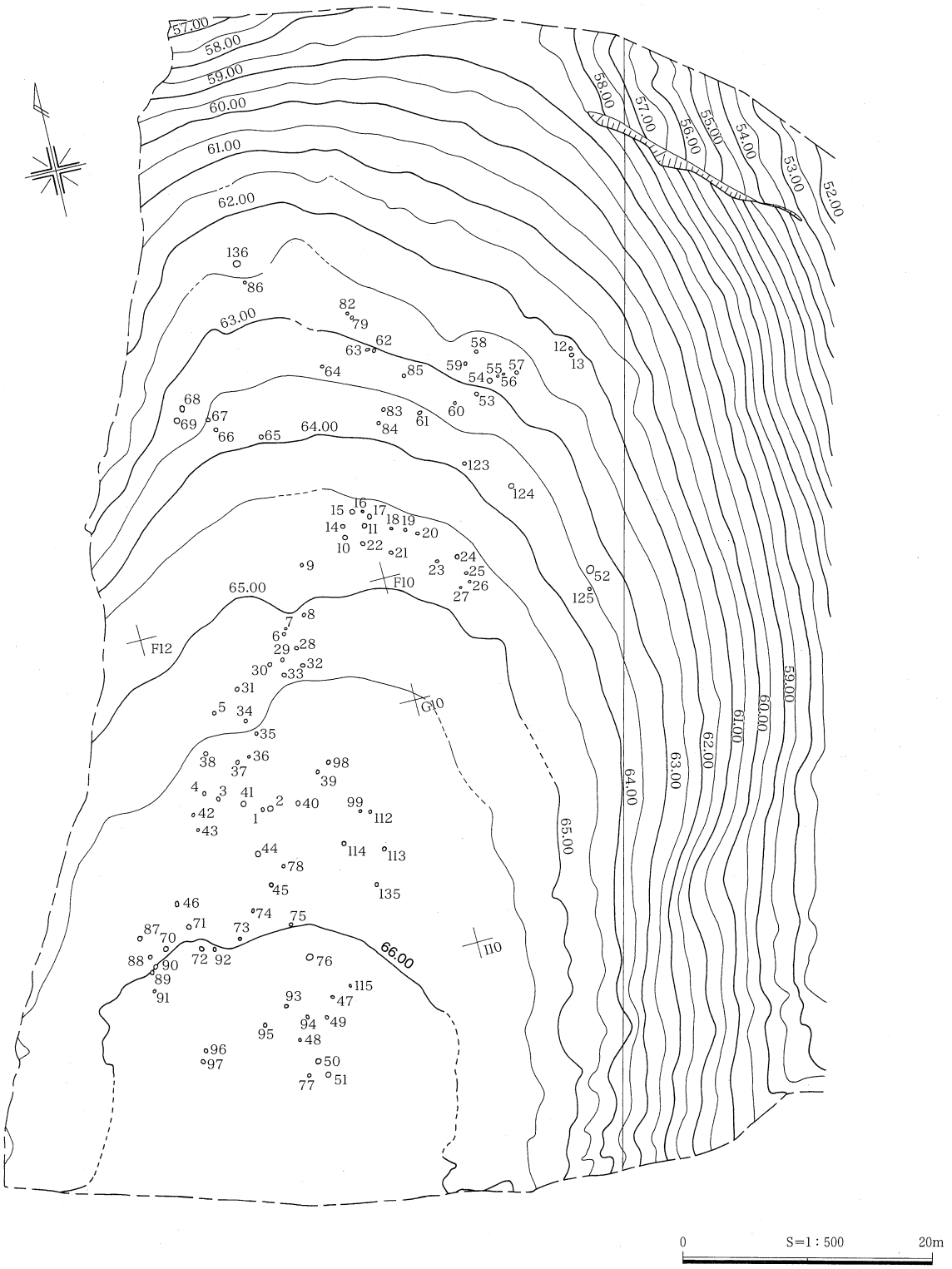
（６）遺構外出土遺物

Ａ区遺構外出土遺物については調査区をグリッド杭東西AラインからJラインまでを北から３群に区分けしてその概略を述べる。

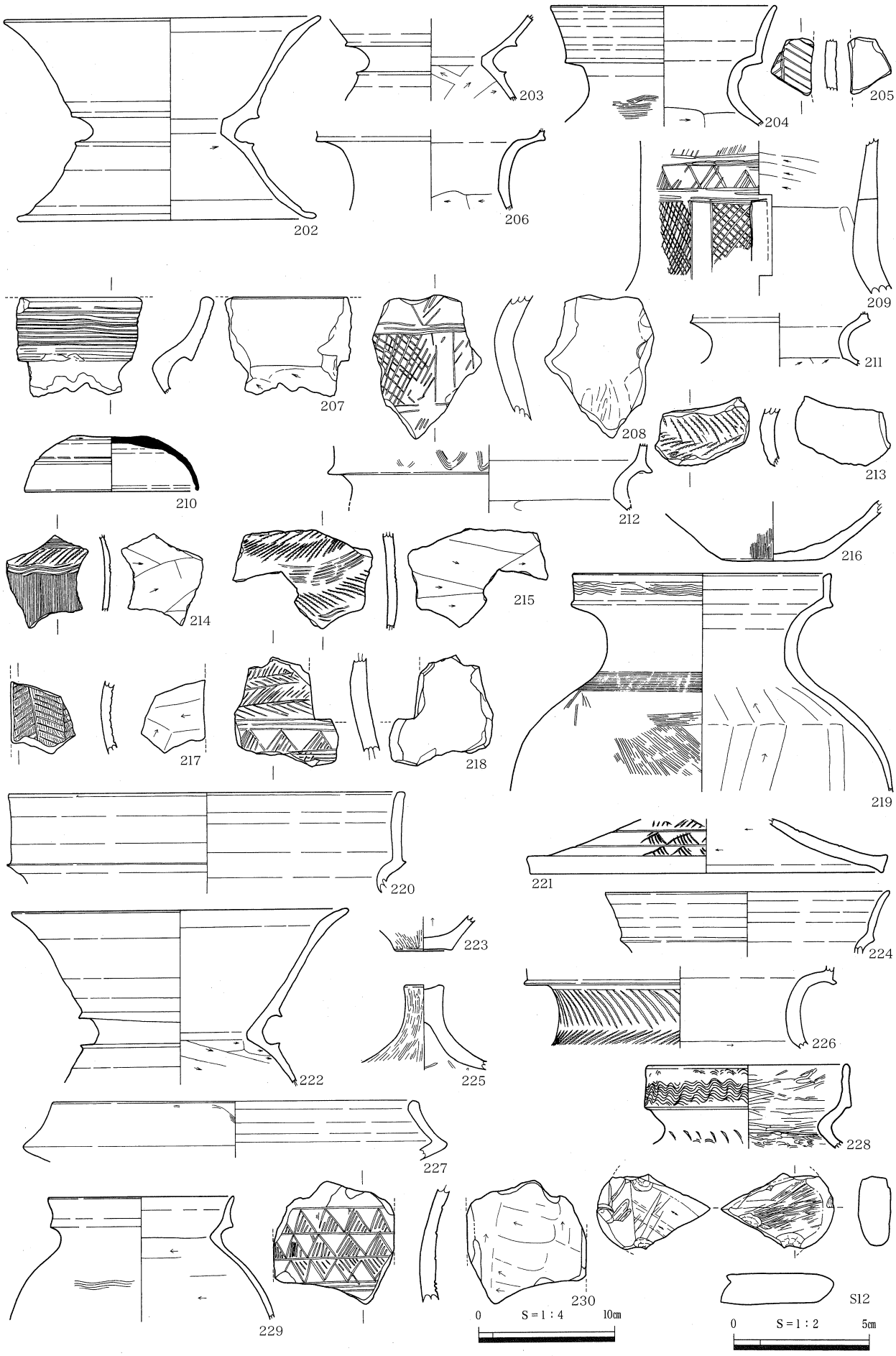
A区北側遺物（第182図、第75・76表、PL.73～76・79）

AラインからCライン内で出土した遺物を北側出土遺物とする。遺構は北側溝状遺構、土壙墓群、土坑などが検出されている。土壙墓群集中域を中心とするＣ９・10グリッド内で出土した遺物は、口縁部や頸部に箆や貝殻などで装飾を施した甕（212）や壷（213・226）、器台脚部（230）などが見られる。弥生土器甕（228）も見られる。墓域外から北側斜面にかけて出土した遺物では、屈曲部の短い鼓形器台（202・203・222）や、壷（204・206）・甕（220・227）、大型のもの（219）も見られる。器台の一部と思われる土器（205・208・209・218）も多数出土し、装飾性が高く、透かしを持つ。その他、器種は不明だが施文された土器（214・215・217）、弥生土器甕（207）・蓋（225）、砥石として使用されたと考えられる石（S12）なども出土している。

これら遺物から、墓域を中心とする遺物と斜面にかけて出土している遺物とに時間的な差異があまり認められないことから、墓域で使用された土器が斜面下へと流入したものと考えられる。時期は、弥生土器は清水編年第Ｖ様式に相当し、土師器は天神川編年Ｉ期に相当すると考えられる。概ね弥生時代終末～古墳初頭にあたり、周辺遺構との時期矛盾はないと考えられる。（岩井）



第181図　ピット配置図



第182図　Ａ区北側遺構外出土遺物

第75表　A区北側遺構外出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
202	試掘9 トレンチ	第182図	鼓形器台	口径：23.6cm 器高：15.0cm 底径：22.3cm	1/8以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、脚部ケズリ、脚端部ナデ	黄橙色	密	
203	試掘10 トレンチ	第182図 PL.76	土師器　器台 受部～脚部	器高△6cm	1/8以下	外面：ナデ→平行沈線、斜格子文 内面：ナデ	浅黄橙色	密	
204	試掘9 トレンチ	第182図 PL.75	土師器 甕 口縁～肩部	口径16.8cm	口縁～ 肩部1/6	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	1㎜以下 の石英 など含む	内面風化により 調整判別困難
205	試掘10 トレンチ	第182図	土師器 器台	器高△3.7cm	筒部1/8 以下	外面：ナデ→綾杉文 内面：ナデ	黄橙色	密	透孔痕あり
206	試掘9 トレンチ	第182図	壷 口縁～頸部	器高△5.5cm	頸部　1/3	外面：ナデ 内面：頸部上半ナデ、下半ケズリ	にぶい黄橙色	密	内面摩滅著しい
207	試掘10 トレンチ	第182図	弥生　甕 口縁部	器高△7.4cm	口縁部1/8 以下	外面：口縁沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁ナデ、頸部以下ケズリ	黄橙色	密 砂粒含む	
208	試掘10 トレンチ	第182図 PL.76	脚部	器高△10.7cm	1/8以下	内外面ナデ	浅黄橙色	密	透孔あり、 筒部斜格子文
209	試掘10 トレンチ	第182図 PL.76	土師器 器台　筒部	器高△10.7cm 胴径※17.5cm	筒部1/4	外面：ナデ→鋸歯文、斜格子文 内面：ナデ	浅黄橙色	密　細砂 多く含む	透孔２カ所残存、 復元透孔数５
210	C10グリッド 包含層	第182図	須恵器 坏蓋	口径：13.0cm	1/8以下	外面：天井部ケズリ、立ち上りナデ 内面：ナデ	青灰色	密	
211	C10グリッド 包含層	第182図	土師器　甕	器高△3.5cm	1/6以下	外面：ナデ 内面：ナデ、肩部以下ケズリ	浅黄橙色	密	
212	C10グリッド 包含層	第182図	土師器　甕 口縁～頸部	器高△4cm	1/6以下	外面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色 黄	密 砂粒あり	内面煤付着 外面摩滅気味
213	B9グリッド 包含層	第182図	土師器 頸部	器高△5.1cm	1/8以下	内外面ナデ	明黄褐色	密 砂粒あり	外面貝殻復縁に よる刺突文あり
214	B9グリッド 包含層	第182図	土師器 不明	器高△6.8cm	1/8以下	外面：ハケメ 内面：ケズリ→ナデ	明黄褐色 灰黄褐色	密	外面貝殻復縁による 刺突文・篦描き文あり
215	B９グリッド 包含層	第182図	土師器 不明	器高△7.3cm	1/8以下	外面：ナデ 内面：ケズリ	明黄褐色 浅黄色	密	外面貝殻復縁による 刺突文・篦描き文あり
216	B９グリッド 包含層	第182図 PL.76	底部	器高△4.4cm 口径※7.5cm	3/4以下	外面：ハケ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	密 砂粒含む	内面摩滅著しい
217	B8グリッド 包含層	第182図	土師器 脚部	器高△5.3cm	1/8以下	外面：ナデ 外面：ケズリ	浅黄橙色	密	外面篦描き文・透 かしあり
218	B8グリッド 包含層	第182図 PL.76	土師器 器台　脚部	器高△6.9cm	1/8以下	内外面ナデ	明黄褐色	密	外面綾杉文・沈線 ・鋸歯文めぐる 透かしアリ
219	B９グリッド 包含層	第182図 PL.74・75	土師器　壷 口縁～胴部	器高△16.1cm 口径※18.8cm	全体の1/5	外面：口縁波状文→ナデ、頸部ナデ、胴部ハケ→ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密	肩部平行沈線 外面黒斑あり
220	B8グリッド 包含層	第182図 PL.75	土師器　甕 口縁部	器高△7.4cm 口径※29.4cm	1/8以下	内外面ナデ	浅黄橙色	密	外面口縁端部に 黒斑あり
221	B９グリッド 包含層	第182図 PL.76	土師器 脚部	器高△4cm 底径※26.2cm	1/8以下	外面：ナデ 内面：裾部ケズリ、裾端部ナデ	明黄褐色	密	外面裾部に沈線・ 鋸歯文あり
222	B９グリッド 包含層	第182図 PL.73・74	鼓形器台	器高△17.8cm 口径：25.0cm	受部1/3 脚部1/6	外面：ナデ 内面：受部～屈曲部ナデ、脚部ケズリ	黄橙色	1～5㎜の 砂粒少し 含む	
223	B10グリッド 包含層	第182図	底部	器高△2.1cm 底径※2.2cm	1/8以下	外面：ミガキ 内面：ケズリ	浅黄色	密	外面煤付着
224	C9グリッド 包含層	第182図 PL.75	土師器　甕 口縁部	器高△4.6cm 口径※21cm	口縁部1/8 以下	内外面ナデ	にぶい黄色	密	
225	C８グリッド 包含層	第182図 PL.76	弥生　蓋 把手部	器高△7.3cm	全体の1/3	内外面ミガキ	にぶい橙色	密	外面黒斑あり
226	C9グリッド 包含層	第182図 PL.76	土師器　壷 頸部	器高△6.1cm	頸部1/3	外面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密	外面頸部に貝殻復縁 による刻み目文あり
227	C9グリッド 包含層	第182図 PL.75	土師器　甕 口縁部	器高△4.4cm 口径※26.4cm	口縁部1/8 以下	内外面ナデ	にぶい橙色	密	外面摩滅著しい
228	C9グリッド 包含層	第182図 PL.75	甕 口縁部	器高△5.8cm 口径※15.2cm	口縁部1/4 以下	外面：口縁波状文、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ケズリ	明赤褐色	密	外面肩部に刻み目 文あり
229	C9グリッド 包含層	第182図 PL.75	甕 口縁～胴部	器高△9.2cm 口径※13.7cm	1/8以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄色	密	外面煤付着
230	C9グリッド 包含層	第182図 PL.76	器台 脚部	器高△8.8cm	1/8以下	内外面ナデ	にぶい浅黄色	密	側面に透孔２ヶ所あり 外面篦描き鋸歯文あり

第76表　A区北側遺構外出土石器観察表

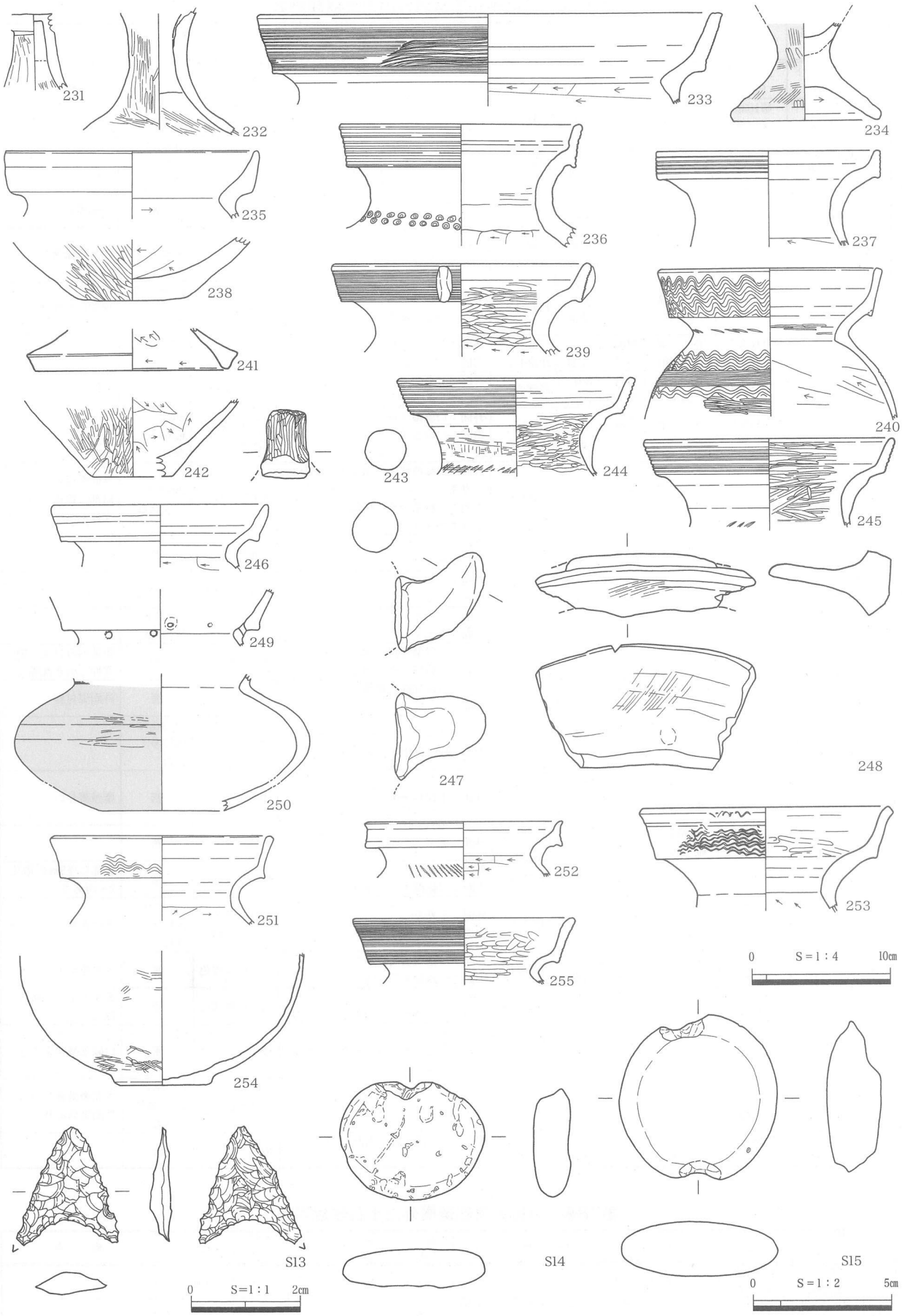
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S12	A区北側	第182図 PL.79	石	片側表面に浅い「V」字状の擦痕あり	8.4	5.1	2.3	102		砥石か？

A区中央部出土遺物（第183図、第77・78表、PL.73～76・79）

Ｄラインから Ｇライン内で出土した遺物を中央部出土遺物とした。遺構は、北からSI17、SI16、SI９～13、土坑、ピット群などが検出されている。

遺物の時期としては清水編年第Ｖ-３期に相当する弥生時代後期後葉の土器を中心として出土している。大型甕（233）なども含まれるが基本的に中型の甕や壷が出土している。

また、その他の時期のものとして調査区東側斜面Ｇ８グリッド内で、甑の一部（247）とカマドの一部（248）



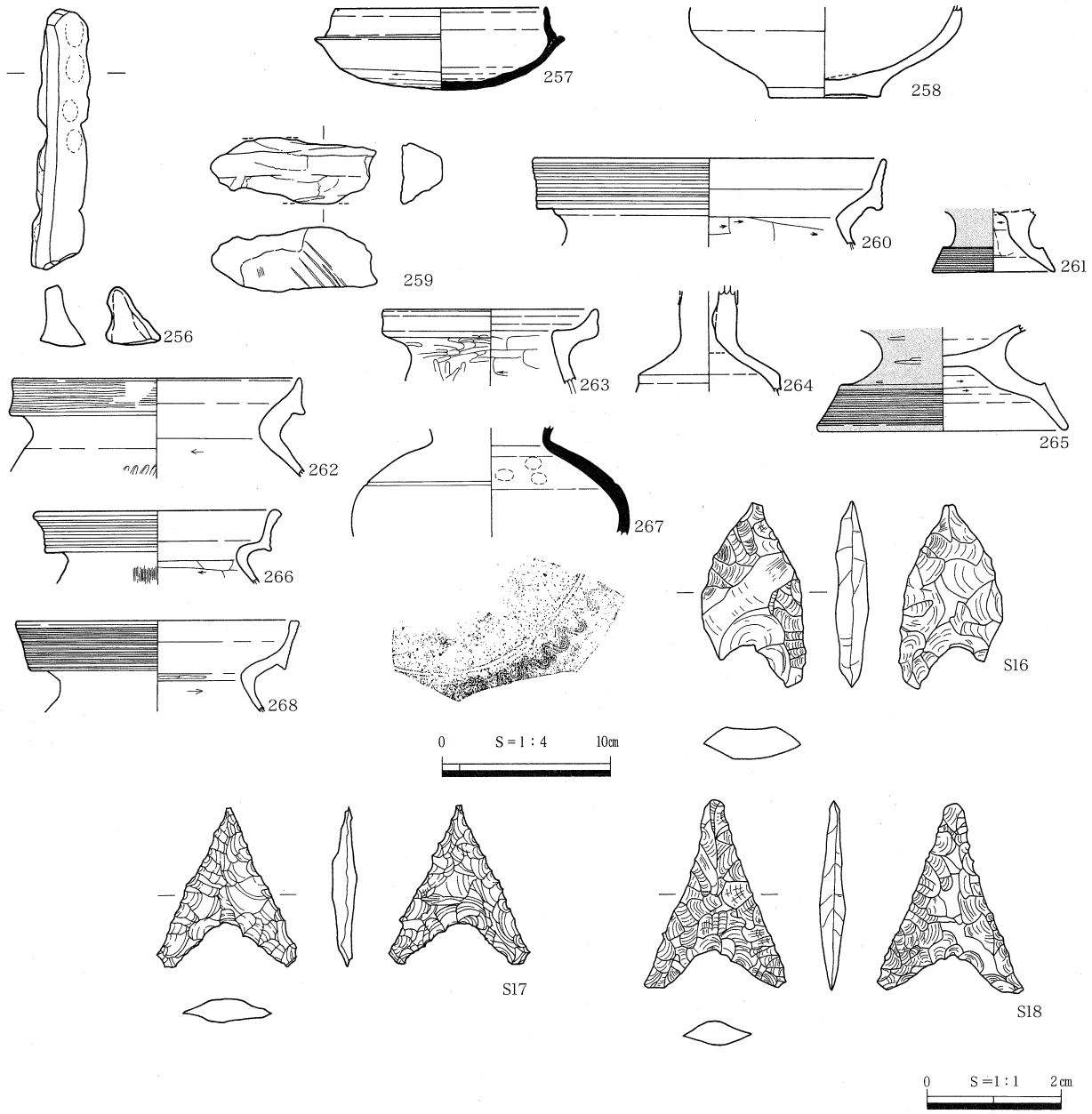
第183図　Ａ区中央部遺構外出土遺物

第77表　A区中央部遺構外出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
231	D8グリッド 包含層	第183図 PL.76	高坏 脚部	器高△5.6cm	筒部のみ	外面：ハケ→ミガキ 内面：ケズリ→ナデ	橙色	密	
232	D10グリッド 包含層	第183図 PL.76	高坏 脚部	器高△8.4cm	1/4以下	外面：ミガキ 内面：筒部ケズリ→ナデ、裾部ミガキ	淡黄色	密 砂粒含む	
233	E11グリッド 包含層	第183図 PL.75	弥生　甕 口縁部	器高△6.5cm 口径※33.6cm	口縁部1/8	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	灰黄褐色	1mm以下の 砂粒少し 含む	
234	E11グリッド 包含層	第183図	弥生 高坏　脚部	器高△7cm 底径※11cm	1/3以下	外面：ミガキ 内面：ケズリ	浅黄橙色	密	外面赤彩
235	E11グリッド 包含層	第183図 PL.74	甕　口縁部	器高△4.8cm 口径※18.3cm	口縁部1/8 以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	明橙色	1mm大の 砂粒多く 含む	内外摩滅著しい
236	E11グリッド 包含層	第183図 PL.74	弥生　甕 口縁～頸部	器高△7.6cm 口径※17.8cm	口縁部1/2	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	淡明褐色	0.1mm大の 砂粒を 含む	肩部に竹管文
237	E11グリッド 包含層	第183図 PL.74	弥生　壷 口縁～頸部	器高△7cm 口径※16.2cm	口縁～ 頸部4/5	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：ナデ、頸部下半ケズリ	橙色	密	
238	E11グリッド 包含層	第183図	弥生土器 底部	器高△4.3cm 底径：8.2cm	底部のみ	外面：ミガキ 内面：ケズリ→ナデ	にぶい黄橙	密	底面にもミガキ
239	F8グリッド 包含層	第183図 PL.75	弥生　甕 口縁～肩部	器高△6.7cm 口径※18.6cm	口縁～ 肩部1/8	外面：口縁部沈線　肩部ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部ミガキ　肩部ケズリ	にぶい黄褐色 褐灰色	3mm以下の 砂粒多く 含む	外面煤付着 口縁部に 貼り付け文アリ
240	F8グリッド 包含層	第183図 PL.74	弥生　甕 口縁～胴部	器高△11.1cm 口径※14.8cm	2/3以下	外面：口縁波状文、頸部ナデ、胴部ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部ミガキ、頸部以下ケズリ	明橙色	2mm大の レキ含む	外面煤付着 肩部に篦描きの 文様あり
241	F8グリッド 包含層	第183図	脚部	器高△3cm 底部※14.2cm	底部1/5	外面：ナデ 内面：ケズリ	黄橙色	密	
242	F9グリッド 包含層	第183図	弥生土器 底部	器高△5.5cm 底径※5.9cm	底部　1/2	外面：ミガキ 内面：ケズリ	にぶい黄褐色	密	
243	F11グリッド 包含層	第183図 PL.76	弥生　蓋 把手部	器高△5.1cm 径：3cm	蓋部　1/3	外面：ミガキ 外面頂部ナデ	灰黄色	2mm以下の 砂粒含む	
244	F12グリッド 包含層	第183図 PL.74	弥生　壷 口縁～頸部	器高△7cm 口径※17.4cm	口縁部3/4	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ミガキ	明赤褐色	密	頸部刻み目文、肩部押し引き沈線文
245	F12グリッド 包含層	第183図	弥生　壷 口縁部	器高△6.4cm 口径※18.4cm	口縁部1/4 以下	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：ミガキ	橙色	密	外面煤付着
246	G12グリッド 包含層	第183図 PL.75	弥生　甕 口縁部	器高△4.8cm 口径：15.9cm		外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	橙色	1～3mmの 砂粒多く 含む	
247	G8グリッド 包含層	第183図 PL.76	土師器 甑　把手	器高△6.6cm 幅△5.4cm 厚さ△3.2cm	把手（片 側）のみ	外面：手捏ね→ナデ	浅黄橙色	密	摩滅著しい
248	G8グリッド 包含層	第183図 PL.76	土師器 竈　庇部	器高△4.6cm	1/8以下	外面：ナデ	橙色	密	
249	G8グリッド 包含層	第183図	甕　頸部	器高△3.8cm	頸部1/5	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密	頸部に径5mmの透孔 2ヶ所あり
250	G8グリッド 包含層	第183図 PL.74	弥生　壷 胴部	器高△9.9cm 胴径※21.5cm	胴部1/4	外面：ミガキ 内面：ナデ、一部ミガキ	明赤褐色 にぶい黄橙色	1mm大の 砂粒多く 含む	外面赤彩
251	G8グリッド 包含層	第183図 PL.74	弥生　甕 口縁～肩部	器高△6.5cm 口径※15.4cm	口縁部2/3	外面：口縁波状文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	にぶい黄橙色	密	内外摩滅著しい
252	G9グリッド 包含層	第183図 PL.75	弥生　甕 口縁～頸部	器高△4.1cm 口径※14.4cm	口縁部1/3	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄褐色	密	頸部下半に貝殻沈線文
253	G13グリッド 包含層	第183図 PL.75	弥生　壷 口縁～頸部	器高△8.1cm 口径※18.6cm	口縁～ 頸部1/8	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ→一部タテミガキ 頸部ケズリ	橙色	密	口縁部波状文アリ
254	G12グリッド 包含層	第183図 PL.73	底部	器高△9.8cm 底径：7cm	底部のみ	外面：ミガキ 内面：ケズリ	明黄褐色	1～3mmの 石英・砂粒 を含む	内面摩滅著しい 外面黒斑あり
255	G9グリッド 包含層	第183図 PL.75	弥生　甕 口縁～頸部	器高△4.8cm 口径※16.2cm	口縁部1/5	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：ミガキ	橙色	密	

第78表　A区中央部遺構外出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　　考
S13	E11グリッド 包含層	第183図 PL.79	石鏃	凹基式	2.2	1.8	0.4	0.9	黒曜石	
S14	G9グリッド 包含層	第183図 PL.79	石錘	片側の打ち欠きを欠く、未製品か？	4.3	5.1	1.3	30.9	安山岩	
S15	F12グリッド 包含層	第183図 PL.79	石錘	長軸方向を打ち欠く	6	5.6	2	89.1	安山岩	表面が摩耗し滑らか



第184図　Ａ区南側遺構外出土遺物

が出土している。Ｇライン上平坦地でSI13が検出されていることなどから同時代（古墳時代中期後葉）の遺物である可能性が高い。

土器以外の遺物としては黒曜石製石鏃（S13）や石錘（S14・15）が出土している。　（岩井）

Ａ区南側遺物（第184図、第79・80表、PL.73～76・79）

ＨラインからＪライン内で出土した遺物を南側出土遺物とした。遺構は南側溝状遺構、SI１～８・14・15、土坑、ピットなどが検出されており、概ね中央部と同じような遺構が検出されているが、遺構密度は南側のほうが高い。

遺物はカマドの一部（256・259）、須恵器坏身（257）・壷（267）、弥生土器、黒曜石製石鏃（Ｓ16～18）などが出土しており、中央部で出土した遺物とほぼ同じような様相をしている。弥生土器は清水編年第Ｖ-３期に相当し、土師器、須恵器などは天神川編年第Ⅶ期に相当すると考えられる。

以上のことから、Ａ区北側に関しては弥生時代終末期にかけての遺物が中心に検出され、中央部・南側にかけては、弥生時代後期後葉から終末期にかけてと、古墳時代中期後葉の遺物が出土していた。これらは時期幅が限られており、周辺遺構と併行する時期の遺物であることから、各遺構からの流入物と判断される。

（岩井）

第79表　A区南側遺構外出土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
256	H8グリッド 包含層	第184図 PL.76	土師器　竈 庇部	器高△2.7cm	1/4以下	外面：ナデ	橙色	密 砂粒含む	外面指頭圧痕あり
257	H8グリッド 包含層	第184図	須恵器 坏身	器高：5cm 口径：12.8cm	全体の4/5	外面：ナデ、底部ケズリ 内面：ナデ	灰色	密	
258	H13グリッド 包含層	第184図	鉢？底部	器高△5.4cm 底径：6.7cm	底部3/4 以上	内外面ナデ	明橙色	1mm大の 砂粒多く 含む	内面やや摩滅気味
259	H12グリッド 包含層	第184図 PL.76	土師器　竈 庇部	器高△3.5cm	1/4以下	外面：ナデ	明橙色	密	外面指頭圧痕あり
260	H13グリッド 包含層	第184図 PL.75	弥生土器 甕 口縁～頸部	器高△5.2cm 口径※21.3cm	口縁1/3	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	黄橙色 橙	1mm以下 砂粒少し 含む	
261	I9グリッド 包含層	第184図 PL.74	台付壷 脚部	器高△3.8cm 底径※7.2cm	脚部完形	外面：脚部ミガキ、端部ナデ→沈線 内面：脚部ケズリ、端部ナデ	にぶい黄橙色	密	外面赤彩
262	試掘1 トレンチ	第184図 PL.75	弥生　甕 口縁部	器高△5.8cm 口径※17.2cm	口縁1/4	外面：口縁沈線→一部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	にぶい黄橙色	1～3mmの 砂粒多く 含む	外面摩滅著しい
263	H13グリッド 包含層	第184図 PL.75	土師器　甕 口縁～頸部	器高△4.5cm 口径※13.0cm	口縁　1/6	外面：口縁部ナデ、頸部ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	にぶい黄橙色	密	口縁部に煤付着
264	I8グリッド 包含層	第184図 PL.76	脚部	器高△6cm	1/4以下	内外面：ナデ	橙色	密	
265	J12グリッド 包含層	第184図 PL.74	弥生　脚部	器高△6.2cm 底径※14.8cm	脚部3/4	外面：脚部ミガキ→ナデ、端部沈線 内面：坏部ナデ、脚部ケズリ、端部ナデ	明赤褐色	密	外面赤彩あり
266	I13グリッド 包含層	第184図 PL.75	弥生　甕 口縁部	器高△4.4cm 口径※15.0cm	口縁部1/4	外面：口縁部沈線、頸部上半ナデ 下半ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	橙色	0.5mm以下 の砂粒 含む	内面やや摩滅気味
267	I13グリッド 包含層	第184図 PL.76	須恵器　壷 頸～胴部	器高△7.2cm 胴径△15cm	肩部　1/3	内外面：ナデ	青灰色	密	外面頸部波状文・ 胴部一条沈線、波 状文 自然釉アリ 内面指頭圧痕アリ
268	試掘1 トレンチ	第184図 PL.75	弥生　甕 口縁部	器高△5.4cm 口径※17cm	口縁部1/3	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：ミガキ、頸部以下ケズリ	橙色	密	

第80表　A区南側遺構外出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石　材	備　考
S16	J10グリッド 包含層	第184図 PL.79	石鏃	凹基式	2.8	2.2	0.37	1.2	黒曜石	
S17	J11グリッド 包含層	第184図 PL.79	石鏃	凹基式	2.4	2.1	0.35	0.9	黒曜石	
S18	J11グリッド 包含層	第184図 PL.79	石鏃	凹基式	2.7	1.6	0.48	1.6	黒曜石	

第81表　A区竪穴建物計測表

遺構番号	地区	平面形	規模（m）長径/短径	床面積（㎡）	主柱数（本）	柱間距離（m）長軸/短軸（平均）	壁際から主柱まで（約m）	中央土坑				床溝有無	焼土有無	周壁溝	壁高（m）
								形　態	二段堀	土堤持ち	焼土・炭				
SI1	A	円形	6.4	24.8	5	2.7	0.85	不整円形	○			○	床面	B	0.52
SI2	A	隅丸方形	5.3/5.1	18.5	4	3.2/3	0.75	不整方形	○		○	○	床面	B	0.56
SI3	A	円形	7.2	21.8	5	3.15	0.9	不整円形			○	○	床面	C	0.2
SI4	A	だ円形	3.7	6	2+	1.28	1	不整円形	○		○	○		B	0.54
SI5	A	隅丸五角形	6.4/6.2	24.9	5	2.9	0.7	不整方形	○	○			床面	B	0.42
SI6	A	円形	7.5	32.3	6	3	0.62	円形	○		○	○	床面	B	0.8
SI7	A	不整方形	5.1	20.8↑	4	2.3/2.1	1.45	楕円形			○			C	0.48
SI8	A	方形	3.8/3.7	9.3↑	2+	2.4	0.7						床面	B	0.15
SI9	A	隅丸方形	6.9/6.1	26.6	4	3.8	0.7	不整方形	○		○	○	床面	A	0.45
SI10	A	隅丸方形	4.6	13.3	4	3.5/2.7	0.5	円形	○	○	○		床面	C	0.36
SI11	A	隅丸方形	4.5/4.4	12.7	4	2.6/2.5	0.7	円形		○		○	床面	B	0.63
SI12	A	隅丸長方形	6.1/5.2	23.2	4	4.07/2.9	0.85	円形		○	○	○	床面	B	0.56
SI13	A	正方形	4.9/4.8	18.3	4	2.2/2.1	1.4	楕円形					中央土坑上	A	0.4
SI14	A	推定方形	2.9↑	2.10↑										C	0.33
SI15	A	隅丸方形	4.8/4.7	15.1	4	2.5/2.4	1	円形		○	○	○	床面	B	0.7
SI16	A	隅丸方形	5.6	20.5	4	3.1/2.9	1.1	楕円形	○	○	○		床面	B	0.73
SI17	A	隅丸方形	4/3.7	9.8	4	2.3/2.05	0.63	不整円形	○		○	○	中央土坑上	A	0.45
SI18	C	長方形	4.8/4.3	16.1	4	3.1/1.9	0.8	不整楕円形	○		○	○		A	0.24

＊～以上は「↑」で
＊中央土坑－二段掘・・・土坑内にﾌﾗｯﾄな段を持つもの　　土堤持ち・・・土坑周囲に土堤を持つもの　　焼土・炭・・・土坑内埋土に焼土または炭が混じるもの
＊周壁溝の残存率は、全周－A　3/4未満－B　1/2未満－C　全くなし－D

第82表　土壙墓計測表

遺構名	主軸	長さ〔m〕	幅〔m〕	深さ〔m〕	底面小口幅	直上遺物	石	備　考
SX2	N－61°－W	上段：2.34	1.28	0.27	北西：0.33	×	×	底面溝状に棺痕跡
		下段：1.99	0.64	0.25	南東：0.23			2段墓壙
SX3	N－63°－W	上段：2.34	0.94	0.36	北西：0.37	○	○	2段墓壙
		下段：1.80	0.42	0.34	南東：0.26			
SX4	N－62°－W	上段：2.97	1.69	0.66	北西：0.57	○	×	3段墓壙か？
		中段：2.40	1.26	0.09	南東：0.33			2段目平坦面に灰白色土を貼る
		下段：2.07	0.54	0.3				
SX5	N－57°－W	上段：2.28	1.1	0.38	北西：0.43	○	○	2段墓壙
		下段：1.84	0.51	0.24	南東：0.22			
SX6	N－65°－W	2.82	0.79	0.56	北西：0.55	○	○	
					南東：※0.33			
SX7	N－71°－W	※1.94	0.72	0.76	北西：0.53	○	○	
					南東：0.49			
SX8	N－62°－W	2.16	1.08	0.34	北西：0.6	○	○	小口に溝
					南東：0.62			
SX9	N－83°－W	上段：2.4	0.92	0.78	不　明	×	×	2段墓壙
		下段：不明	不明	0.12	不　明			2段目は一部残存
SX15	N－67°－W	上段：2.45	1.22	0.3	北西：0.49	○	×	2段墓壙？
		下段：1.96	0.6	0.1	南東：※0.78			東側残り悪し
SX24	N－67°－W	1.1	0.76	0.5	北西：0.46	×	×	墓？
					南東：0.59			
SX28	N－56°－W	0.92	0.41	0.51	北西：0.26	○	×	直上に直立した甕出土
					南東：0.16			

※は推定値

第83表　Ａ区土坑計測表

№.	地区	グリッド番号	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	その他
SK1	A	I13グリッド	不整楕円形	1.77	1.48	0.37	炭化米出土
SK2	A	D9グリッド	楕円形	1.1	0.9	0.51	
SK3	A	G11グリッド	円形	1.87	1.74	1.4	袋状を呈する
SK4	A	H9グリッド	楕円形	1.12	0.74	0.21	炭化米出土
SK5	A	H9グリッド	不整円形	1.24	0.86	0.23	炭化米出土
SK6	A	G12グリッド	円形	1.33	1.25	0.9	袋状を呈する
SK7	A	G12グリッド	円形	1.38	1.21	0.95	袋状を呈する
SK8	A	D8グリッド	円形	1.4	1.22	0.3	底面に被熱硬化面あり
SK9	A	C9グリッド	不整楕円形	1.62	1.18	0.32	
SK10	A	E8グリッド	不整円形	1	0.74	0.39	
SK11	A	E8グリッド	円形	1.4	1.2	0.17	
SK12	A	H9グリッド	隅丸長方形	3.84	2.1	0.29	
SK13	A	D8グリッド	円形	0.9	0.85	0.15	
SK14	A	C10グリッド	隅丸長方形	2.44	1.41	1.09	落とし穴の可能性あり
SK15	A	B9グリッド					土壙墓計測表に記載
SK16	A	H11グリッド	楕円形	1.08	0.7	0.27	炭化米出土
SK17	A	H11グリッド	円形	1	0.94	0.46	底面に炭化材あり
SK18	A	H12グリッド	円形	1.52	1.41	1	袋状を呈する
SK19	A	E8グリッド	不整楕円形	1.4	1.05	1.64	
SK24	A	C9グリッド					土壙墓計測表に記載
SK26	A	B10グリッド	円形	1.84	1.65	0.47	埋土上位に集石
SK28	A	C10グリッド					土壙墓計測表に記載

第84表　Ａ区溝状遺構計測表

№.	地区	長さ（m）	幅（m）短幅/長幅	深さ（m）	土　　色	その他
SD1	A	51.6	0.3/1.25	0.4	①暗褐色土粘性弱・ロームブロック多量含む②暗黄褐色土粘性弱・ロームブロック少量含む③暗黄褐色土・ロームブロック多量含む	
SD2	A	27.5	0.26/0.75	0.19	①明黄褐色土しまり強 ②暗黄褐色土しまり中	
SD3	A	6.5	0.3/0.6	0.15	①黄褐色土　径5mmのレキ少量含む ②暗黄褐色土しまり弱	
SD4	A	12.4	0.25/0.47	0.13	①明黄褐色土 ②暗黄褐色土	
SD5	A	9.3	0.35/0.7	0.12	①暗黄褐色土しまり強	
SD6	A	20.8	0.3/0.95	0.15	①暗黄褐色土　径1cmのレキ含む	
SD7	A	3	0.3/0.87	0.08	①暗黄褐色土　径2～3mmのレキ少量含む	一部途切れる
SD8	A	14	0.35/0.8	0.08	①暗黄褐色土しまり弱	一部途切れる
SD9	A	13	0.5/0.65	0.07	①暗黄褐色土	
SD10	A	7.4	0.4/0.9	0.1	①黄褐色土	一部途切れる
SD11	A	19.8	0.28/0.7	0.07	①黄褐色土しまり弱	一部途切れる
SD12	A	7.8	0.45/0.85	0.17	①暗黄褐色土	
SD13	A	6	0.4/0.68	0.06	①黄褐色土 ロームブロック多量に含む	
SD14	A	7.5	0.35/0.55	0.09	①暗黄褐色土しまり強	
SD15	A	2.1	0.35/0.6	0.1	①暗黄褐色土	
SD16	A	9.5	0.25/0.65	0.08	①暗黄褐色土	
SD17	A	2.7	0.5/0.63	0.16	①暗黄褐色土 ②黄褐色土	一部途切れる
SD18	A	6.5	0.2/0.65	0.26	①暗黄褐色土 ②黄褐色土	
SD19	A	1.2	0.12	0.08	①暗黄褐色土	
SD20	A	3	0.43/0.6	0.08	①黄褐色土	
SD21	A	56	0.45/1.55	0.67	①黄灰褐色土 ②黄灰褐色土 ③暗黄褐色土　径1cmの黒色粘土ブロック多量に含む ④黄褐色土粘性あり ⑤暗黄褐色土	
SD22	A	12	0.35/0.9	0.13	①黒褐色土　②暗茶褐色土	
SD23	A	16.5	0.43/1	0.25	①黒褐色土　②暗茶褐色土	
SD24	A	16.6	0.17/0.85	0.2	①黒褐色土　②暗茶褐色土	
SD25	A	14.1	0.45/0.8	0.23	①暗茶褐色土	一部途切れる
SD26	A	17	0.36/1.13	0.36	①暗茶褐色土　②明茶褐色土	
SD27	A	19.6	0.3/1.05	0.24	①黒褐色土　②明茶褐色土　③明茶色土	
SD28	A	15.8	0.46/0.75	1.15	①黒褐色土　②明茶褐色土	
SD29	A	5.7	0.35/1.2	0.3	①黒褐色土　②明茶褐色土	

第85表　Ａ区ピット計測表（１）

No.	地区	直径(cm)	深さ(cm)	土　　色	その他
P1	A	38	58	①黄褐色土②黄褐色土やや暗しまり弱　③黄灰褐色土　径1cmのロームブロック含む	
P2	A	30	60	①黄褐色土　②黄褐色土しまりなし　③黄灰褐色土　径2cmのロームブロック含む	
P3	A	30	32	①黄褐色土　②黄灰褐色土　③黄褐色土粘性強	
P4	A	38	58	①暗黄褐色土粘性あり　径2～3cmの黄褐色ロームブロック含む	撹乱の可能性あり
P5	A	27	20	①暗黄灰褐色土　②黄灰色土	
P6	A	32	25	①黄灰褐色土粘性あり	
P7	A	24	27	①暗黄灰褐色土	
P8	A	29	8.5	①黄灰褐色土	
P9	A	23	17	①黄灰色土	
P10	A	39	24	①黄灰褐色土	
P11	A	44	18	①黄灰褐色土	
P12	A	30	42	①黒褐色土　径５㎜以下のレキ少量・炭多量含む　②明茶褐～褐色土　径２㎜以下のレキ・炭少量含む　④黄灰色土	土器あり
P13	A	28	56	①茶褐色土　径２㎜以下のレキ少量含む	P12･13はSK13の下位部分
P14	A	40	30	①茶褐色土　径２㎜以下のレキ少量含む	
P15	A	36	70	①暗茶褐色土　②黄灰色土粘性あり	
P16	A	22	27	①黄灰褐色土	
P17	A	65×41	24	①黄灰褐色土	
P18	A	25	29	①暗茶褐色土	
P19	A	25	79	①暗茶褐色土	
P20	A	32×15	10	①褐灰色土②暗黄灰褐色土	
P21	A	26	67	①暗褐灰色土②暗黄灰褐色土	
P22	A	33	74	①茶褐色土　②黄灰褐色土	
P23	A	23	56	①褐灰色土	
P24	A	32	20	①褐灰色土	
P25	A	21	13	①褐灰色土	
P26	A	20	20	①暗黄灰褐色土	
P27	A	25	34	①茶褐色土	
P28	A	27	20	①暗茶褐色土粘性あり	土器あり
P29	A	21	13	①暗茶褐色土	
P30	A	24	18	①暗茶褐色土	
P31	A	24	30	①暗黄褐色土	土器あり
P32	A	27	20	①暗黄褐色土粘性あり	土器あり
P33	A	45	32	①暗灰褐色土粘性あり	土器あり
P34	A	32	29	①褐色土　ロームブロック含む	
P35	A	21	20	①黄褐色土粘性あり	
P36	A	29×24	27	①暗黄褐色土粘性あり	
P37	A	32	49	①暗黄灰褐色土	
P38	A	29	35	①暗黄褐色土粘性あり	土器あり
P39	A	28	62	①暗黄褐色土粘性あり	
P40	A	20	33	①暗黄褐色土粘性あり	
P41	A	40	61	①暗灰褐色土粘性あり	
P42	A	22	4	①暗黄褐色土粘性あり	撹乱の可能性あり
P43	A	20	17	①暗褐色土粘性あり	
P44	A	41	12	①暗褐色土粘性あり	撹乱の可能性あり
P45	A	31	23	①褐色土粘性あり　②淡黄褐色土粘性あり	
P46	A	33	70	①暗茶褐色土	
P47	A	31	49	①黄灰褐色土粘性あり	
P48	A	26	35	①褐色土	
P49	A	22	75	①暗褐色土	
P50	A	48	26	①茶褐色土	根撹乱あり
P51	A	31	61	①暗褐色土	
P52	A	55	38	①明茶褐色土	
P53	A	30	30	①暗黄褐色土	
P54	A	28	28	①茶褐色土	

第86表　Ａ区ピット計測表（２）

No.	地区	直径(cm)	深さ(cm)	土　　色	その他
P55	A	26	32	①暗茶褐色土	
P56	A	20	26	①茶褐色土	
P57	A	31	22	①暗褐色土	炭化物中量含む
P58	A	20	17	①黄灰褐色土	
P59	A	20	15	①褐色土　径５㎜以下のレキ多量含む	撹乱の可能性あり
P60	A	17	31	①暗茶褐色土	
P61	A	26	42	①褐色土	
P62	A	30	11	①褐色土	
P63	A	24	33	①黄灰褐色土	
P64	A	26	25	①黄灰褐色土	
P65	A	18	25	①黄灰褐色土	
P66	A	26	36	①黄灰褐色土	
P67	A	24	30	①黄灰褐色土	
P68	A	37	14	①黄灰褐色土	
P69	A	33	37	①黄灰褐色土	
P70	A	29	24	①茶褐色土	土器あり
P71	A	43	19	①黄灰褐色土	
P72	A	41	17	①暗褐色土　②黄灰褐色土	
P73	A	25	16	①暗褐色土	
P74	A	24	35	①黄灰褐色土	
P75	A	24	58	①黄灰褐色土	
P76	A	55×50	82	①明茶褐色土②黄灰色土	
P77	A	31	62	①暗褐色土	
P78	A	22	34	①黄灰茶色土	
P79	A	28	22	①黄灰色土	
P82	A	27	21	①黄灰土粘性あり	
P83	A	30	34	①暗黄灰色土	
P84	A	23	34	①黄灰色土粘性あり	
P85	A	27	26	①黄灰色土粘性あり	
P86	A	23	40	①黄灰褐色土	
P87	A	29	22	①暗黄褐色土	
P88	A	23	24	①暗黄褐色土	
P89	A	27	24	①黄褐色土	
P90	A	26	28	①黄褐色土	
P91	A	24	14	①黄褐色土　ロームブロック混じり	
P92	A	27	66	①黄褐色土	
P93	A	33	13	①黄褐色土	
P94	A	26	62	①暗黄褐色土	
P95	A	30	19	①暗黄褐色土	
P96	A	20	9	①暗黄褐色土	撹乱の可能性あり
P97	A	27	26	①黄灰褐色土	
P98	A	31	12	①黄灰褐色土	
P99	A	23	32	①黄灰褐色土	
P112	A	26	42	①褐色土	
P113	A	26	63	①褐色土	
P114	A	25	53	①褐色土	炭少量混じる
P115	A	30	77	①褐色土	
P123	A	31	54	①暗黄灰色土	炭化物少量混じる
P124	A	33	36	①暗黄褐色土	炭化物中量混じる
P125	A	23	33	①褐色土	
P135	A	30	57	①褐色土	
P136	A	35	43	①黄灰色土　ロームブロック含む　②黄灰褐色土	

第３節　Ｂ区の調査

（１）概要（第185図）

Ａ区及びＣ区の尾根に挟まれた谷部である。谷底部は調査区北端部で標高48.72m、南端部で58.03mと、南西から緩やかに湾曲しながら北側へ傾斜していく地形を形成している。両側斜面の傾斜は比較的急で、最も低いＢ区北側谷底部とＡ区との比高差は約17.6m、Ｃ区との比高差は約16.8mとなる。

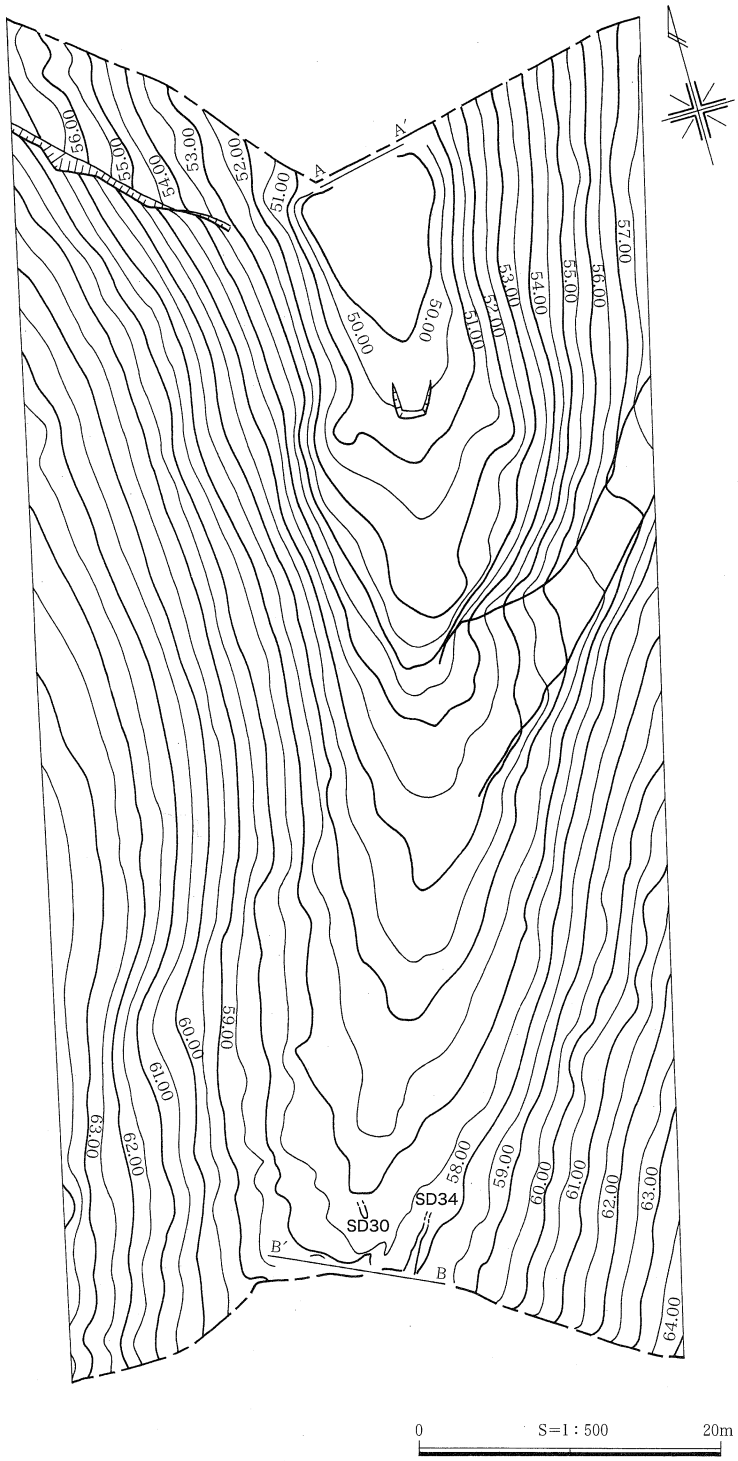
谷底部を除く急斜面部は表土が薄く堆積しており、表土を剥ぐとすぐ地山が露出した。出土遺物としては表土中に尾根状から流れ込んだと考えられる遺物が出土したが、遺構の存在は確認されなかった。

（２）溝状遺構（第185図、第89表）

谷底部は遺物包含層が北側で約80㎝、南側で約70㎝堆積している状況がみられた。その他に谷底部南側より自然流路と考えられる溝の痕跡が確認された。SD30は残存長5.6m、幅0.35m、深さ0.17mである。SD30の東側に位置するSD34は、残存長3.9m、幅0.26～0.7m、深さ0.24m、両遺構とも埋土は暗褐色粘質土の単層で自然堆積によるものである。これらの溝は、Ａ区やＣ区で検出された溝状遺構とは異なり、等高線を縦断・横断するようなものではなく、地形に沿って流下する雨水などによって削られた痕跡と判断した。

（３）遺物包含層

（第186・187図、PL.53）

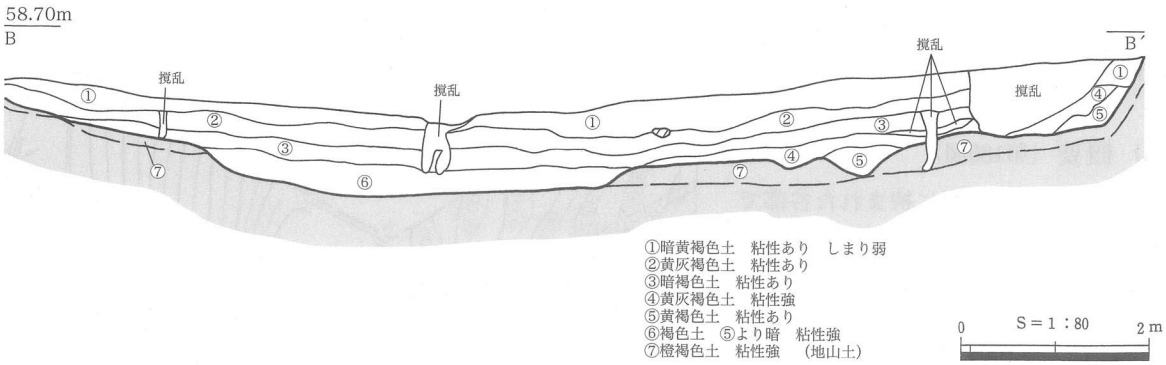


第185図　Ｂ区全体図

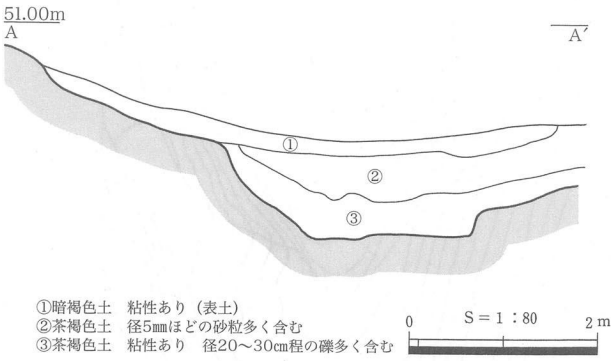
谷底部北側（第187図）は表土である①層の下に、遺物を含む層が２層堆積していた。それより下層は、遺物を包含しない地山層で、腐植土壌である黒褐色粘質土や、人頭大の礫石を多く含むしまりのよい茶褐色土層などが見られた。遺物はいずれも小片で、図化するに至らないものであった。

谷底部南側（第186図）は表土である①層下に、遺物包含層５層が確認された。褐色粘質土を主とし、北側で見られた礫石などは含んでいなかった。遺構は検出されなかったが、最終的にその包含最下層である⑥層を追いかけたところ、中央部付近で消失していることが分かった。

北側と南側の土層を比較すると、対応する土層が確認できないことが分かる。また、北側の土層のみに礫石の堆積が見られた。流下による堆積なのか、Ａ・Ｃ区の斜面より流れてきたものかは分からない。



第186図　B区南側土層断面図



第187図　B区北側土層断面図

（４）出土遺物（第188図、第87・88表、PL.77・79）

遺物は、ＧラインからＪラインまで一括して取り上げた。出土した遺物は、弥生時代後期から終末にかけてと、古墳時代中期後葉頃の遺物とに分けられる。遺物の時期がＡ区やＣ区の遺構と併行していることから、Ａ区・Ｃ区の丘陵上からの流れ込みであると考えられる。

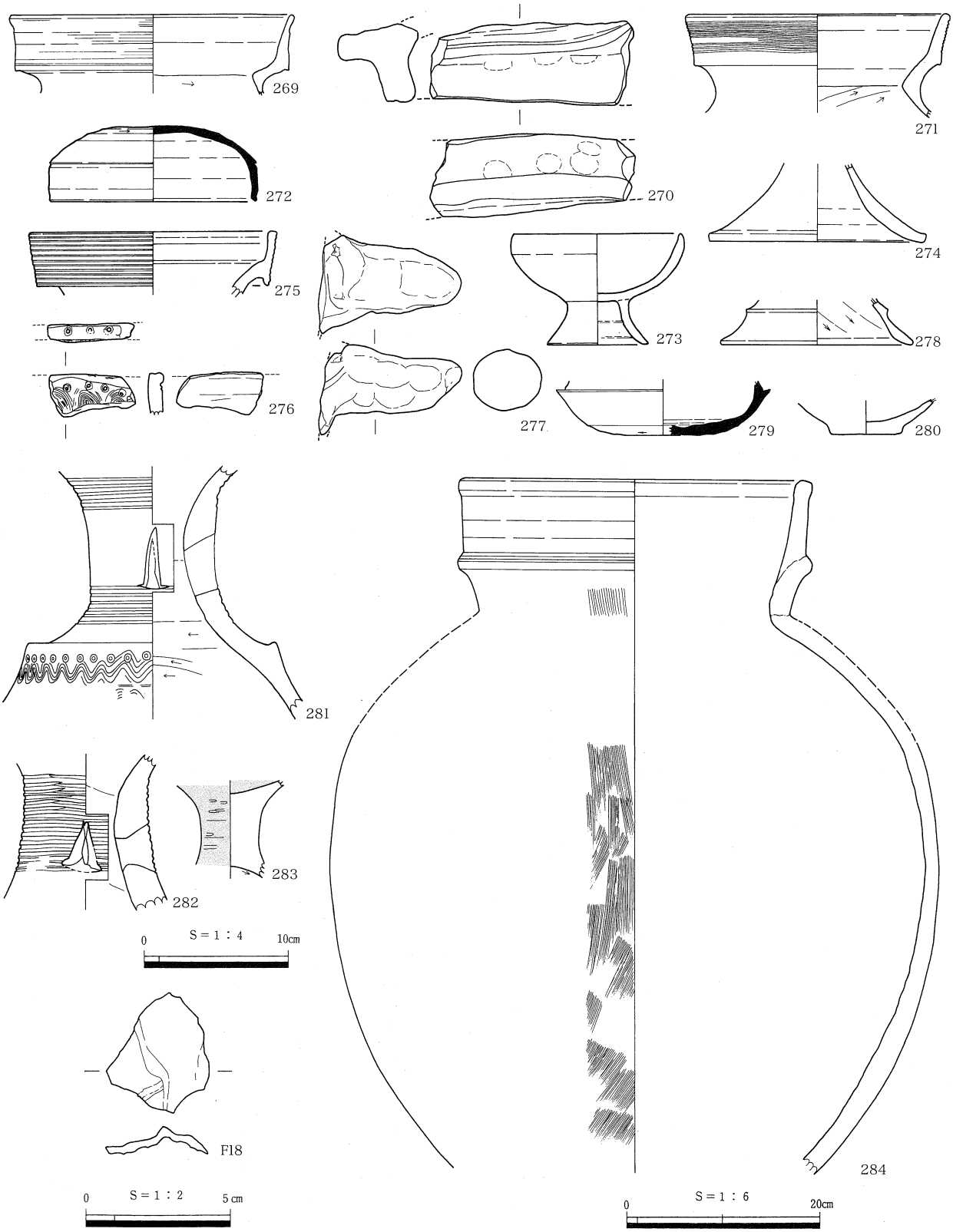
（岩井）

第87表　B区遺構外出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
269	G7グリッド 包含層	第188図 PL.77	弥生　甕 口縁部	器高△5.4㎝ 口径※19.6㎝	口縁部1/4	外面：口縁沈線→ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	密	外面少量の煤付着
270	G7グリッド 包含層	第188図 PL.77	土師器 カマド　廂部	器高△14㎝	全体の1/8 以下	内外面ナデ	橙色	やや粗い	摩滅著しい
271	G8グリッド 包含層	第188図	弥生　甕 口縁部	器高△7.2㎝ 口径※17.7㎝	口縁1/3	外面：口縁沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙色	密	外面口縁下端部に 煤付着
272	H8グリッド 包含層	第188図	須恵器 坏　蓋	器高：5.3㎝ 口径※14.2㎝	1/3以下	外面：天井部ケズリ、口縁部ナデ 内面：ナデ	灰白色	2㎜大の 砂粒含む	「×」印のヘラ記号 あり
273	J７グリッド 包含層	第188図 PL.77	土師器 脚付椀	器高△7.8㎝ 口径※11.6㎝	全体の1/4 以下	内外面ナデ	橙色	3㎜大の 砂粒含む	外面摩滅気味
274	J7グリッド 包含層	第188図	土師器 高坏　脚部	器高△5.4㎝ 底径※14.8㎝	底部1/2	内外面ナデ	明黄橙色	1㎜大の 砂粒含む	外面煤付着
275	J7グリッド 包含層	第188図	弥生土器 甕　口縁部	器高△4.6㎝ 口径※17.2㎝	口縁1/8	外面：口縁部沈線、頸部ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色	1㎜以下 砂粒少し 含む	
276	J7グリッド 包含層	第188図	弥生　器台 口縁部	器高△2.7㎝	口縁1/8 以下	内外面ナデ	浅黄橙色	密	外面口縁～端部に波 状文と竹管文あり
277	試掘17 トレンチ	第188図 PL.77	土師器 甑　把手	器高：4.3㎝	把手 片側	手捏ね→ナデ	浅黄橙色	密	粘土継ぎ目見られる
278	試掘17 トレンチ	第188図 PL.76	土師器 脚部	器高△3.2㎝ 底径※13.4㎝	底部1/4 以下	外面：ナデ 内面：ケズリ	橙色	1㎜大の 石英など 砂粒含む	
279	包含層	第188図 PL.77	須恵器 坏身	器高△3.7㎝ 受部径：14.8㎝	受部以下 1/3	外面：ナデ　底部ケズリ 内面：ナデ	青灰色	3㎜大の 砂粒含む	
280	包含層	第188図	弥生　底部	器高△2.4㎝ 底径：4.9㎝	底部のみ	内外面ナデ	浅黄橙色	3㎜大の 砂粒含む	内外面摩滅気味
281	J７グリッド 包含層	第188図 PL.77	弥生　器台 筒～脚部	器高△17.5㎝	脚部1/2	外面：ナデ 内面：ケズリ	黄橙色	2㎜大の 砂粒含む	側面透かしあり 外面胴部沈線文、脚 端部竹管文・波状文
282	J7グリッド 包含層	第188図 PL.77	弥生　器台 筒　部	器高△10.8㎝ 脚部径※10.1㎝	脚部1/4	外面：ナデ→平行沈線 内面：ナデ	淡明褐色	密	三角形の透かしあり
283	J7グリッド 包含層	第188図 PL.77	土師器 高坏　脚部	器高△6.4㎝	脚部　1/3	外面：ミガキ 内面：坏底部ナデ　脚部ケズリ	にぶい黄橙色	1㎜大の 石英など 砂粒含む	内外面赤彩あり やや摩滅気味
284	J5グリッド 包含層	第188図 PL.77	土師器 大型甕	器高△72.6㎝ 口径※37.2㎝	全体の1/4 以下	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	にぶい黄橙色 浅黄色	1～4㎜大 の砂粒 含む	外面黒斑あり

第88表　B区遺構外出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	種　類	特　徴	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	備　考
F18	B区遺構外 埋土中	第188図 PL.79	鉄片	不定形	4.1	3.5	0.2	7.4	



第188図　Ｂ区遺構外出土遺物

第89表　Ｂ区溝状遺構計測表

No.	地区	長さ (m)	幅 (m) 長幅/短幅	深さ (m)	土　色	その他
SD30	B	5.6	0.35/0.28	0.17	①暗褐色粘質土	南側に続く可能性大
SD34	B	3.9	0.7/0.26	0.24	①黒褐色土　粘性あり　②暗褐色粘質土	

第４節　Ｃ区の調査

（１）概要

遺構の密度はＡ区に比して希薄で、竪穴建物跡１棟・土坑６基・溝３条・ピット30基が検出された。

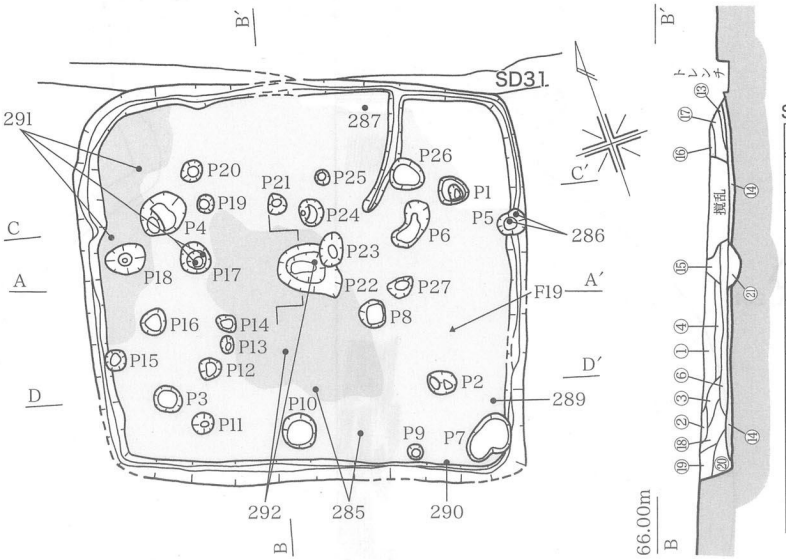
（２）竪穴建物跡

SI18（第189・190図、第90表、PL.54・78）

Ｃ区Ｌ３グリッド、標高65.6～65.3mの緩い傾斜面に位置する。平面形は長方形で、長辺4.8m、短辺4.3m、床面積16.1㎡を測る。壁高は、検出面から床面までで、最大26㎝（南西側）、最小４㎝（北側）を測る。

周壁溝（側溝）は全周を巡っている。この溝は幅10～30㎝、床面からの深さは７㎝程で断面は「U」字状である。内側の床溝は、北辺から１条、住居中央に向けて伸びている。

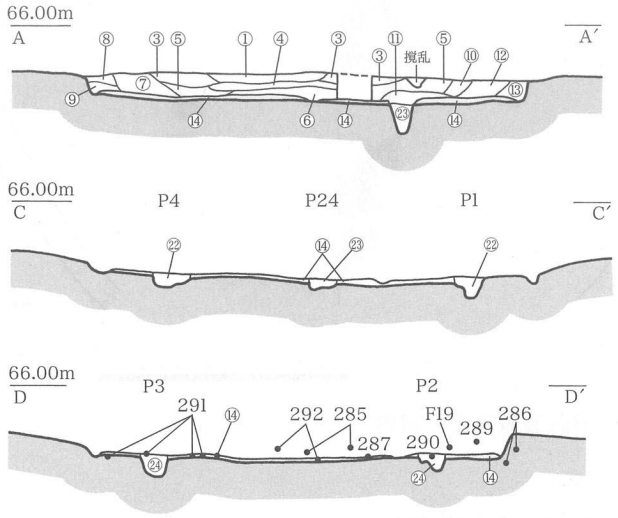
ピットは27個検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からP４の４本で、４本柱の建物となる。各柱穴の大きさはＰ１（34×23－21）、Ｐ２（31×23－20）、Ｐ３（32×27－24）、Ｐ４（51×33－16）㎝を測る。柱穴間距離はP１－P２間より順に2.02、3.02、1.84、3.27mを測る。P22（74×48－15）㎝は中央ピットと考えられ、平面形は不整楕円形で、浅い窪み状を呈する。埋土に焼土ブロックを含んでいる。主柱以外のピットに関して、深さが近



SI18

ピット番号	径(cm)長径×短径	深さ(cm)	土色
P5	29	10.4	①暗黄褐色土
P6	53×20	10.2	①暗黄褐色土
P7	57×34	4.6	①暗黄褐色土
P8	27	8.2	①暗黄褐色土
P9	15	2	①暗黄褐色土
P10	37	18.6	①暗黄褐色土　炭化物微量混じる
P11	23	26.7	①暗黄褐色土　ホーキブロック混じる
P12	24.5	10.5	①暗黄褐色土　炭化物微量混じる
P13	18×13	7.9	①暗黄褐色土
P14	19	5	①暗黄褐色土
P15	22	13	①暗黄褐色土
P16	30	2.9	①暗黄褐色土
P17	33	46.6	①暗黄褐色土
P18	43×32	23.9	①暗黄褐色土　小レキ混じる
P19	18	22.1	①暗黄褐色土
P20	22.5	21.8	①暗黄褐色土
P21	22	15	①暗黄褐色土
P23	34×25	21.8	①暗黄褐色土　黒褐色のブロック混じる
P25	16	6.8	①暗黄褐色土
P26	38×31	12	①暗黄褐色土
P27	27×18	36	①暗黄褐色土

※楕円形のものは長軸×短軸



①暗黄褐色土　径2㎜以下の灰白色砂礫・ローム小ブロック混じる
②暗褐色土
③暗褐色土　砂礫やや多く混じる
④暗褐色土　炭化物混じる
⑤暗褐色土　白色砂礫・ホーキブロック混じる
⑥暗褐色土　炭化物・ロームブロックやや多く混じる
⑦暗褐色土
⑧暗黄褐色土　黄白色砂礫混じる
⑨暗黄褐色土　灰白色砂礫・炭化物混じる
⑩暗黄褐色土　白色砂礫混じる
⑪黄褐色土　ホーキブロック混じる
⑫暗黄褐色土　ロームブロック混じる
⑬黄褐色土　灰白色砂礫混じる
⑭黄褐色土　（貼り床）
⑮暗褐色土　ロームブロック斑に混じる・炭化物混じる
⑯暗黄褐色土
⑰暗褐色土　径5㎜以下の灰色砂礫混じる
⑱暗黄褐色土　灰色・灰色・黄灰色砂礫混じる
⑲暗茶褐色土　径5㎜以下の砂礫混じる
⑳暗褐色土　灰白色砂礫混じる・炭化物混じる
㉑黒褐色土　ロームブロック・焼土ブロック混じる
㉒暗黄褐色土
㉓暗褐色土
㉔暗黄褐色土　ホーキブロック混じる

0　S＝1：80　2m

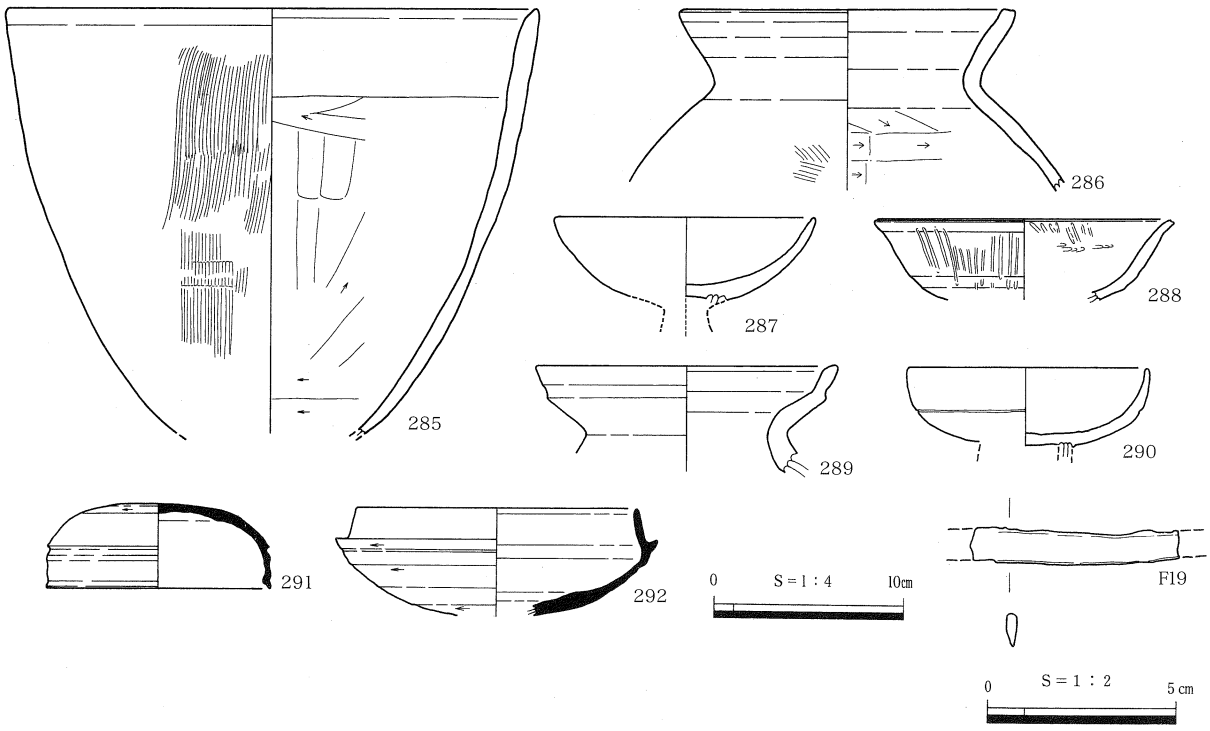
第189図　SI18

似するものでも並ぶものはなく、上屋を支える補助的な役割を果たした柱穴であったかは分からなかった。

またこの住居は、北西隅を除きほぼ床面全体に、比較的良好な状態の貼り床を検出した。これは、この建物がＡ区で多くの竪穴建物が床面としていた「上のホーキ層」まで掘り込んでおらず、その上層の床として適さない比較的柔らかな基本層序第Ⅲ層までしか掘り込まなかったため、貼床を貼ったものと思われる。おそらくＡ区に比してこの第Ⅲ層が厚く堆積しているため、建物の掘り込みが「上のホーキ層」まで達しなかったためであろう。貼床中央部では踏み締まりによると考えられる硬化面を確認した。

出土遺物は、土師器として甑（285）・甕（286）・高坏（287・290）が、須恵器として蓋坏の蓋（291）及び身（292）が、いずれも床面に近い埋土中から出土している。また、その他の遺物として、不明鉄製品（Ｆ19）も床面に近い位置から出土している。

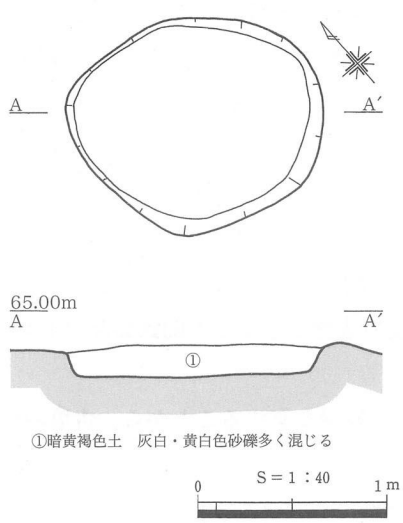
この遺構の年代として、出土した須恵器が田辺編年のほぼTK47からMT15の特徴を有することから、古墳時代中期後葉～後期初頭の時期が想定される。（岩井）



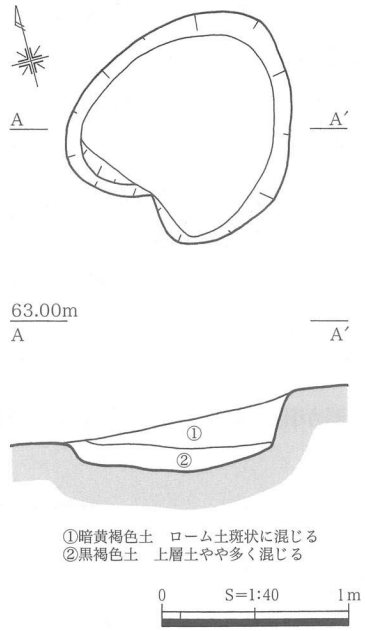
第190図　SI18出土遺物

第90表　SI18出土土器観察表

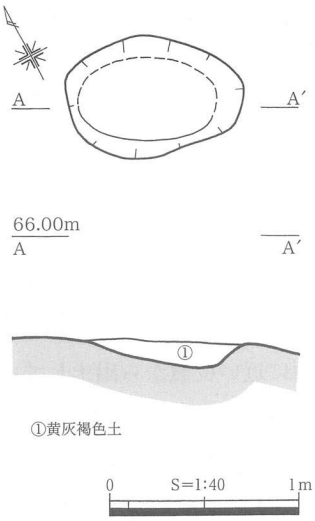
No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　整	色　調	胎　土	備　考
285	SI18 埋土中	第190図	土師器　甑 口縁～胴部	器高△22.7cm 口径※28.4cm	全体の2/5	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	浅黄橙色	密	
286	SI18 埋土・床面 直上	第190図 PL.78	土師器　甕 口縁～肩部	器高△9.6cm 口径※17.2cm	口縁部1/4	外面：口縁部ナデ、肩部一部ハケ痕残る 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明黄橙色	密	
287	SI18 床面直上	第190図	土師器 高坏　坏部	器高△4.4cm 口径※14cm	坏部4/5	外面：ナデ 内面：ケズリ→ナデ	黄橙色	5mm大の 砂粒含む	外面黒斑・煤付着
288	SI18 埋土中	第190図 PL.78	土師器 高坏　坏部	器高△4.3cm 口径：16.0cm	口縁1/6	外面：ナデ→上半のみタテミガキ 内面：ヨコミガキ	橙色	密	
289	SI18 埋土中	第190図 PL.78	土師器　壷 口縁部	器高△5.7cm 口径：16.2cm	口縁1/8 以下	内外面：ナデ	黄橙色	密	
290	SI18 床面直上	第190図	土師器 高坏　坏部	器高△4.3cm 口径：13cm	坏部4/5	内外面：ナデ	明赤褐色	5mm大の 砂粒含む	外面一条の沈線 見られる摩滅気味
291	SI18 床面直上	第190図	須恵器 坏蓋	器高：4.5cm 口径：12cm	全体の2/3	外面：天井部ケズリ、口縁部ナデ 内面：ナデ	灰色	1～2mmの 砂粒多く 含む	
292	SI18 埋土・床面 直上	第190図	須恵器 坏身	器高△5.8cm 口径※15cm	全体の1/3	外面：口縁部ナデ、底部ケズリ	青灰色	5mm大の 砂粒含む	



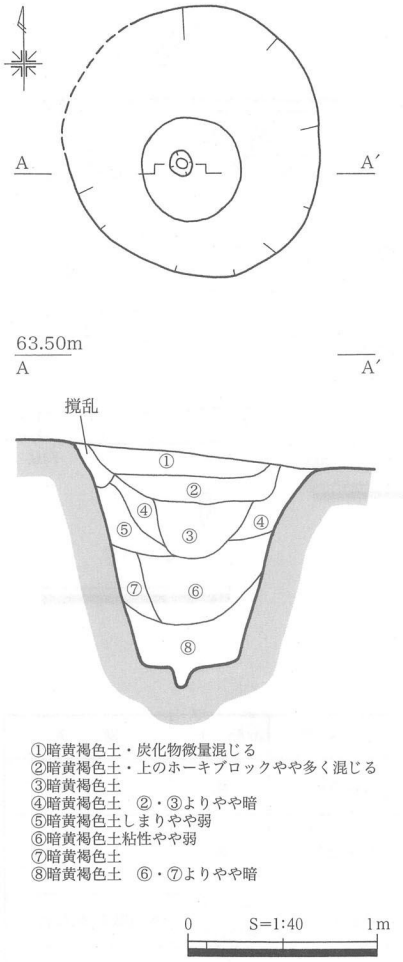
第191図　SK20



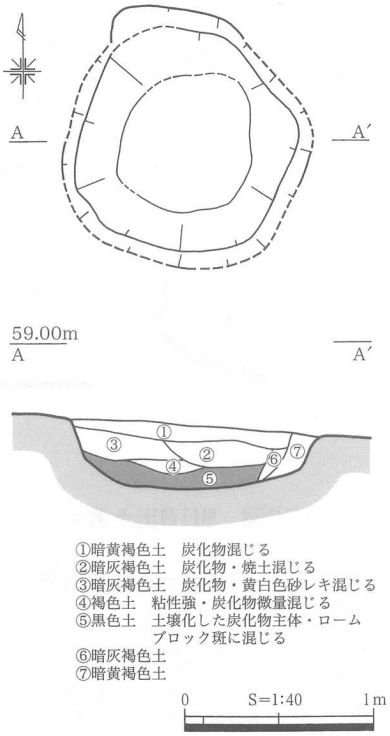
第192図　SK21



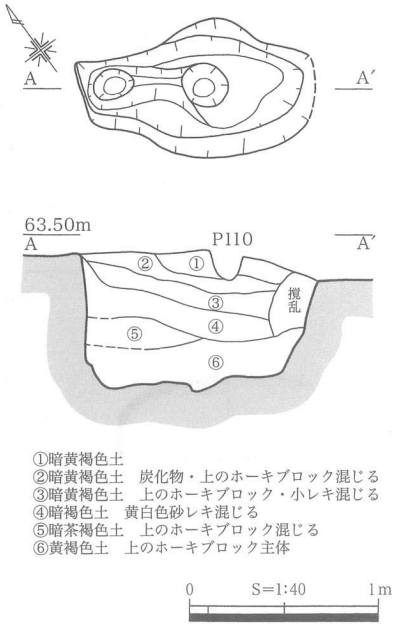
第193図　SK22



第194図　SK25



第195図　SK27



第196図　SK23

（2）土坑

C区では６基の土坑を確認できた。しかし、落とし穴と考えられる１基以外は目立った出土遺物もみられず、時期・性格とも判断できる状況ではなかった。

SK20（第191図）

C区K３グリッド北側、標高64.8mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.37m、短軸1.06mを測る。検出面からの深さは最大で0.15mである。埋土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土しておらず、時期･性格とも不明である。（岩井）

SK21（第192図）

C区I４グリッド中央東寄り、標高62.6mの平坦面に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.25m、

短軸1.05mを測る。検出面からの深さは最大で0.42mである。埋土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土しておらず、時期･性格とも不明である。（岩井）

SK22（第193図）

C区Ｌ３グリッド南東側、標高65.5mの平坦面に位置する。SI18の東側に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸0.94m、短軸0.57mを測る。検出面からの深さは最大で0.24mである。埋土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土しておらず、時期･性格とも不明である。（岩井）

SK23（第196図）

C区Ｉ２グリッド南西側、標高63.4mの平坦面に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.27m、短軸0.7mを測る。検出面からの深さは最大で0.64mである。底面にピット状の窪みが２箇所見られた。埋土は自然堆積によるものと考えられる。上層でP110に壊されている。

遺物は出土しておらず、時期･性格とも不明である。（岩井）

SK25（第194図・PL.54）

C区I3グリッド北東側、標高63.0mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.46m、短軸1.32mを測る。検出面からの深さは最大で1.18mである。底面は平坦で、中央部分に直径12cm程のピットを検出した。落とし穴状遺構であると思われる。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、遺構外出土遺物中に縄文時代中期の土器がみられるので、なんらかの関係があるのではないかと思われる。（岩井）

SK27（第195図）

C区Ｆ２グリッド南西側、標高58.6mの平坦面に位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.5m、短軸1.31mを測る。検出面からの深さは最大で0.46mである。埋土中に炭化物および焼土を含み、最下層で特に炭化物を多量に含む。底面に被熱硬化面は見られなかった。

遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。（岩井）

（４）その他の遺構

溝状遺構（第197図）

Ｃ区の溝状遺構は、調査区南側で検出した。遺存状態はやや悪い。Ａ区南側で検出した溝と同じ様相を呈している。検出された溝SD31～33は、Ｋ３グリッドからＬ４グリッド内にあり、標高65.4～64.7m、台地平坦部からやや西に傾斜する斜面上に立地する。Ａ区南側の溝と同様に、等高線に沿って走っているものはなく、調査区を東西方向直線状に横断している。

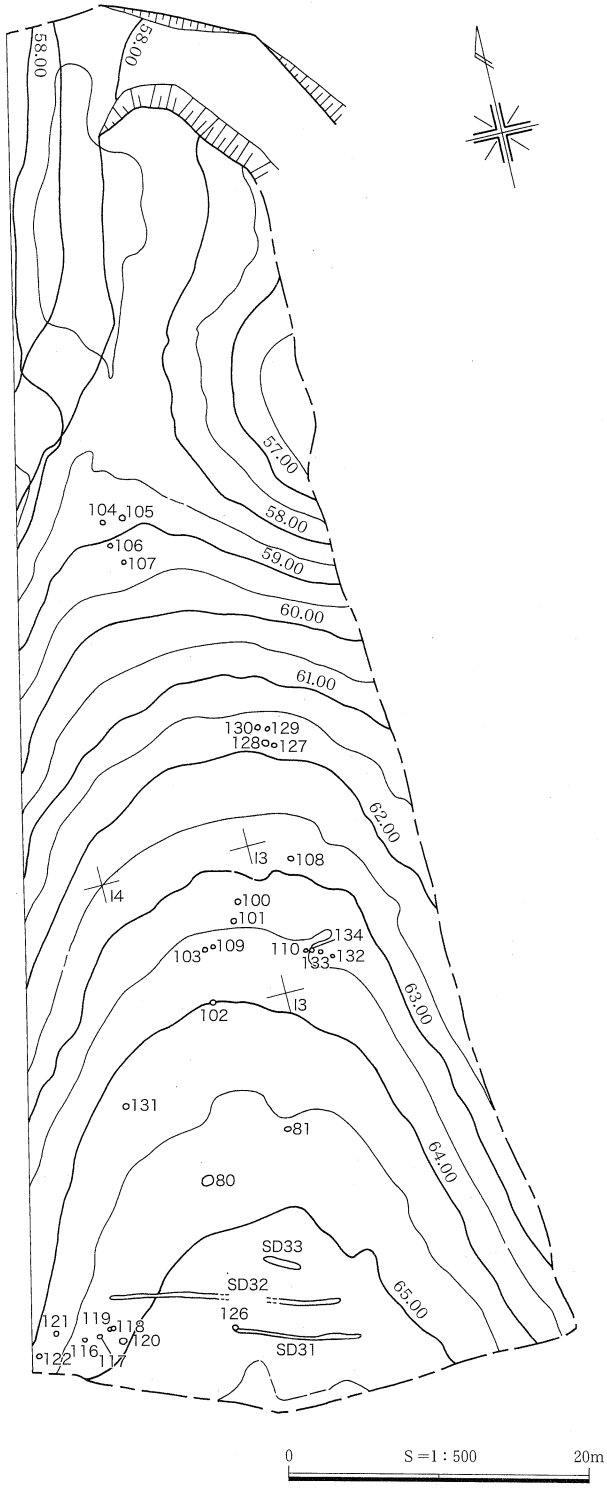
SD31は最も南の平坦面に位置し、長さ8.6m、幅20～30㎝、深さ10㎝程で、SI18の北壁を壊している。溝内の高低差はほとんどない。断面は逆台形状を呈する。埋土は単層で自然堆積であると考えられる。

SD32はSD31とSD33の間に位置し、一部途切れるが、元々一本の溝であったとおもわれる。東側は平坦面上にあり、西側は北西方向に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。長さ15.2m、幅20～40㎝、深さは、東側で５㎝ほど、西側が12㎝程で、斜面に至るにつれやや深くなる。断面は「U」字状から逆台形状を呈する。埋土は２層に分層でき、自然堆積であると考えられる。

SD33は最も北側の平坦面に位置し、長さ2.4m、幅38㎝、深さは17㎝程である。溝内高低差はほとんどなく、断面は「U」字状を呈する。埋土は単層で自然堆積であると考えられる。

遺物は、破片のみで図化できるものがほとんどなかったため、時期は確定できないが、SI18との関係から、少なくとも古墳時代中期より新しい時期のものであることはいえる。

A区で確認された溝状遺構同様、性格も不明である。ただ、A区で見られたSD１やSD21のような単独で東西を横断する「V」字状の溝は見られなかった。（岩井）



第197図　C区溝状遺構・ピット全体図

ピット（第197図、第93表）

調査区北側Ｇ２グリッドから南側Ｋ５グリッド内にかけて分布し、標高65.4～58.5mの北側に傾斜する斜面上に分布する総数30基のピットが検出された。直径は16～75cm程、深さは11～53cm程と様々である。ほとんどが単層である。ピットは不規則に点在しており、建物として成立するような並びを持つものはない。

その他の竪穴建物や土坑などの遺構との関わりもないと考えられる。

ピット埋土からの遺物は見られなかった。

切り合いが認められるP118・119に関しては、P119がP118を壊している。また、P126はSD31を壊して掘られており、埋土は暗褐色土でその他のピットの埋土より新しい様相を呈しているものもある。しかし、ほぼ形態、配置、埋土は、A区のピットと同じような様相を呈しており、同時代の可能性が高い。

時期に関しては、A区と同様溝状遺構よりは古いと考えられるが、それ以上のことは不明であり、性格も不明である。　(岩井)

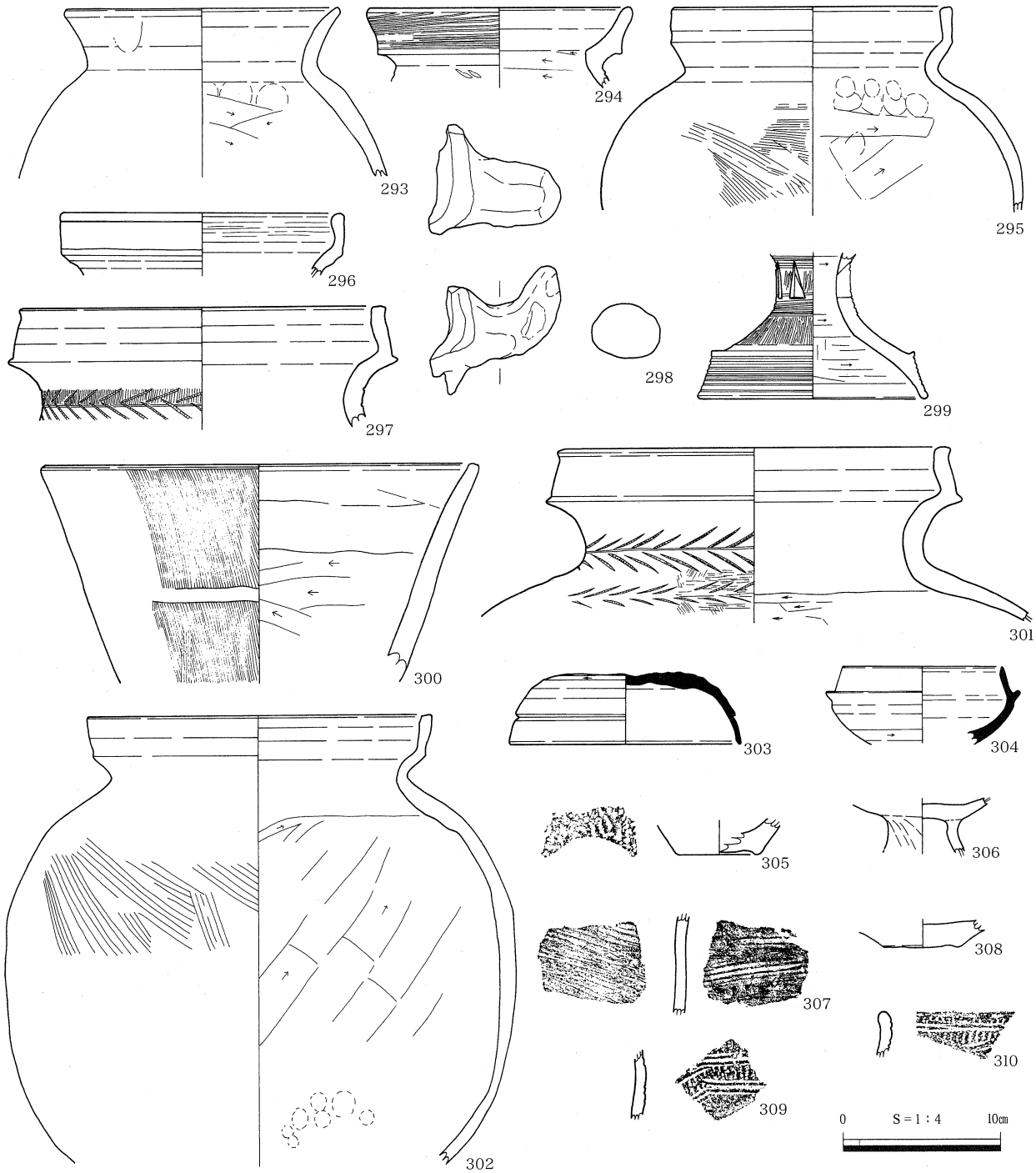
（５）遺構外出土遺物

（第198図、第92表、PL.77・78）

Ｃ区遺構外遺物は、ＤラインからＬラインまで一括して取り上げた。Ａ区同様限られた時期幅で雑多な土器が見られる。Ｌ２～３グリッド内東方向に傾斜する斜面上で破片ではあるが、大型壷（297・301）大型甕（302）など、Ａ区北側墓域で見られたような土器のほか、弥生時代後期後葉（清水編年Ｖ-３様式）にあたると思われる甕の破片（294）も出土している。

Ｃ区で時期の判明している遺構として、古墳時代中期後葉頃の竪穴建物跡１棟（SI18)が検出されたのみである。Ａ区とＣ区とは谷を挟んだ地形環境にあることから、Ａ区からの流入とは考え難い。よってＡ区同様Ｃ区も調査区外南側に集落が広がる可能性があると考えられ、これらの遺物は、南側に存在するであろう遺構からの流入であると思われる。

また、Ｈ２グリッド内とＪ３グリッド内から縄文土器（305・307・309・310）が出土している。縄文時代中期頃（船元Ⅳ式）に比定される。Ａ区のSK14でも縄文土器が出土しているが、破片であり時期が不明であるので、Ｃ区の遺物との関係は分からなかった。出土量も少量であり、遺構からではなく包含層中からの出土であるため、混入経緯は不明である。しかし、Ｃ区から落とし穴と考えられる土坑（SK25）が検出されており、隣接する井図地頭遺跡でも当該期の遺物が出土していることから、縄文時代中期の人々もこの周辺の土地に出入りしていたことが想像されるものである。　(岩井)



第198図　C区遺構外出土遺物

第91表　C区土坑計測表

No.	地区	グリッド番号	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	その他
SK20	C	K3グリッド	円形	1.37	1.06	0.15	
SK21	C	I4 グリッド	不整楕円形	1.25	1.05	0.42	
SK22	C	L3グリッド	楕円形	0.94	0.57	0.24	
SK23	C	I2グリッド	不整楕円形	1.27	0.7	0.64	
SK25	C	I3グリッド	円形	1.46	1.32	1.18	落とし穴の可能性あり
SK27	C	F2グリッド	円形	1.5	1.31	0.46	

第92表　C区遺構外出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図　PL	器　種	法量〔cm〕	残存率	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
293	K3グリッド 包含層	第198図	土師器　甕 口縁～胴部	器高△10.7cm 口径※17.4cm	全体1/8 以下	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケ→ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明橙色	密	内面頸部に指頭圧痕あり
294	K3グリッド 包含層	第198図 PL.78	弥生　甕 口縁部	器高△5.1cm 口径※16.2cm	口縁部1/4 以下	外面：口縁部沈線→一部ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙色	1mm大の 砂粒含む	外面刻み目文あり、摩滅気味
295	K4グリッド 包含層	第198図	土師器　甕 口縁～胴部	器高△13cm 口径※17.4cm	全体の1/6	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ 内面：口縁部ナデ、肩部ナデ、胴部ケズリ	明黄橙色	密	内面肩部指頭圧痕あり
296	K4グリッド 包含層	第198図	甕 口縁部	器高△3.9cm 口径※18.2cm	1/4以下	内外面ナデ	淡黄色	密	
297	L1グリッド 包含層	第198図 PL.78	土師器　壷 口縁部	器高△7.7cm 口径※22.8cm	1/8以下	外面：口縁部ナデ、頸部ハケ→ナデ 内面：ナデ	浅黄橙色	密	内面一部煤付着　外面頸部に沈線と羽状文
298	K4グリッド 包含層	第198図	土師器　甑 把手部	器高：8cm 厚さ：3.4cm	把手 片側のみ	手捏ね→ナデ	明黄橙色	密	粘土継ぎ目見られる
299	L2グリッド 包含層	第198図 PL.77	弥生　器台 脚　部	器高：9.3cm 底径※14.3cm	2/3以下	外面：脚部沈線、ミガキ、端部沈線 内面：ケズリ	浅黄橙色	密	側面に二等辺三角形状の透かしあり
300	L2グリッド 包含層	第198図 PL.78	甑 口縁～胴部	器高△13.9cm 口径※27.4cm	1/8以下	外面：胴部上半ハケ→ナデ、下半ハケ 内面：上半ハケ→ナデ、下半ケズリ	黄橙色	4mm大の 砂粒含む	内外面指頭圧痕あり
301	L3グリッド 包含層	第198図 PL.77	壷 口縁～肩部	器高△10.7cm 口径※25.1cm	口縁部1/8 以下	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密	頸部・肩部に綾杉文・羽状文あり
302	L3グリッド 包含層	第198図 PL.78	土師器　甕 口縁～胴部	器高△28.5cm 口径※22cm	1/2以下	外面：口縁～肩・胴部下半ナデ、肩部ハケ→ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ケズリ	浅黄色	密	外面胴部下半煤付着 内面胴部下半指頭圧痕あり
303	L3グリッド 包含層	第198図	須恵器 坏　蓋	器高：4.6cm 口径：14.8cm	3/4	外面：天井部上半ケズリ、下半ナデ 内面：ナデ	青灰色	1mm大の砂 粒多く含む	天井部ロクロ切り離し後未調整
304	L3グリッド 包含層	第198図	須恵器 坏　身	器高△4.9cm 口径※10.2cm	1/8以下	外面：ナデ、底部ケズリ 内面；ナデ	灰白色	密	口縁端部内面に沈線あり
305	G3グリッド 包含層	第198図 PL.78	縄　文 底　部	器高△2cm 底径※5.2cm	1/8以下	外面：縄文 内面：粗いナデ	明黄褐色 にぶい黄橙色	2mm大の砂 粒多く含む	
306	L3グリッド 包含層	第198図 PL.78	土師器 高　坏	器高△3.8cm	1/8以下	内外面：ナデ	黄橙色	密	外面一部剥離
307	H2グリッド 包含層	第198図 PL.78	縄　文 胴　部	器高△6.1cm	1/8以下	内外面貝殻による条痕あり	にぶい黄橙色	密	外面煤付着
308	H2グリッド 包含層	第198図	底　部	器高△1.7cm 底径：5cm	底部4/5 以上	内外面ナデ	にぶい橙色	密	全体的に摩滅気味
309	J3グリッド 包含層	第198図 PL.78	縄　文	器高△4.4cm	1/8以下	外面：無文地に竹管による文様あり	赤褐色	1mm以下の 砂粒含む	
310	J3グリッド 包含層	第198図 PL.78	縄　文 口縁部	器高△2.6cm	1/8以下	外面：無文地に竹管による文様あり	赤褐色	2mm以下の 砂粒含む	

第93表　C区ピット計測表

No.	地区	直径 (cm)	深さ (cm)	土　　色	その他
P80	C	75	24	①暗黄褐色土	
P81	C	40	24	①暗黄褐色土	
P100	C	40	20	①暗黄褐色土粘性あり	
P101	C	23	35	①暗黄褐色土	
P102	C	20	35	①暗黄褐色土粘性あり	
P103	C	27	15	①黄灰褐色土粘性あり	
P104	C	20	11	①黄灰褐色土粘性あり	
P105	C	32	37	①黄褐色土粘性あり	
P106	C	27	22	①黄灰褐色土粘性あり	
P107	C	17	37	①暗黄褐色土粘性あり	
P108	C	22	35	①黄灰褐色土粘性あり	
P109	C	30	48	①暗黄褐色土粘性あり　②黄褐色土粘性あり	
P110	C	19	42	①暗黄褐色土粘性あり	撹乱の可能性あり
P111	C	22	30	①暗褐色土粘性あり	
P116	C	21	22	①暗黄褐色土	
P117	C	28	13	①黄灰褐色土粘性あり	
P118	C	29	20	①黄褐色土粘性あり ②明黄褐色土粘性強　③暗黄褐色土	
P119	C	28	24	①黄灰褐色土　②黄褐色土粘性あり	P118に切られている
P120	C	22	36	①黄灰褐色土	
P121	C	16	42	①黄灰褐色土	
P122	C	23	21	①黄灰褐色土	
P126	C	40	19	①暗黄褐色土	
P127	C	20	37	①黄灰褐色土粘性あり	
P128	C	41	20	①黄灰褐色土粘性あり	
P129	C	26	23	①黄灰褐色土粘性あり	
P130	C	30	8	①黄灰褐色土粘性あり	
P131	C	34	31	①黄灰褐色土	
P132	C	17	42	①黄灰褐色土	
P133	C	18	53	①黄灰褐色土	
P134	C	22	27	①明黄灰褐色土粘性あり	

第94表　C区溝状遺構計測表

No.	地区	長さ (m)	幅（m） 短幅/長幅	深さ (m)	土　　色	その他
SD31	C	8.6	0.2/0.3	0.1	①黄灰褐色土　粘性あり	
SD32	C	15.2	0.2/0.4	0.12	①黄灰褐色土　粘性あり　②明黄褐色土　粘性あり	一部途切れる
SD33	C	2.4	0.38	0.17	①黄灰褐色土　粘性あり	